

伊号潜水艦

―頭上の敵を撃沈せよ

井上淳(著)

第1章 戦雲

第2章 出航

第3章 反転

第4章 暗雲

第5章 溶暗



もくじ

第5章	第4章	第3章	第2章	第1章
溶暗	暗雲	反転	出航	戦雲
115	80	55	29	3

そろそろ陽が中天にさしかかろうというころなのに、空が重い。どんよりとした灰色の雲が、すぐそこまで垂れこめている。

かすかに湿り気を帯びた風が、かろうじて枝に繋がっている枯れ色をしたちいさな葉を揺らして吹きぬけていく。また、雨がくるのだろうか。

眼下に展る海は、空をうつして鈍く、しかし波立つたびにきらきらと輝く。諏訪俊一はその風を避けるように、思わず背広の襟をたてた。

穏やかな春は、まだ遠い。

軍港には、修理を待ついくつかの艦船が停泊している。

もつともおおきな艦影は、さきのセベレス島沖海戦で傷ついた巡洋艦「神城」だろう。排水量五一七〇トンの「長良」級高速軽巡洋艦で、全長はおよそ一六〇メートルある。

「まったく……、あんたも、とんだ貧乏籤を引いてしまったようだな」

と、諏訪の隣で、海軍中佐の制服に身を包んだ江藤勇作は、いっばいに腕をのばしてそちらを指さした。苦笑とも同情ともつかぬ表情を、頬のあたりに浮かべている。

「空母か戦艦にでも乗り組むことができたなら、給与もよかったのだが」

軽した革のような顔を歪めて、江藤はこんどはほんとうに笑った。

海軍の食事が陸軍のそれに比べて、質量ともに遥かに優れていることは諏訪も聴き知っていた。内地では近頃めつきりと入手が困難になった牛肉などの料理も、しばしば食膳に供されるほどだという。

さすがにたらふく肉を喰うまではできなかったが、海軍の食事の良さはこの基地に到着してからの数日間、諏訪も実感していた。

いったん基地を離れてしまえば、あとは広大無辺の海のなかを長い旅がつづく。兵士たちの愉しみといえば、食事ぐらいのものだ。そのあたりから培われてきた伝統なのだろうが、江藤はそのことをいう。

「あいにく、大型艦はすべて作戦展開中だ。なにしろ急なことだったし、報道要員の空席となるとあれしか捜せなかった。まあ、むこうに着くまでの辛抱だ」

江藤はそういうと、おおきく掀げた掌で力まかせに諏訪の肩を叩きつけた。

ふたりとも、背丈はさほど変わらない。

どちらも、この時代の男にしては高いほうだろう。しかし、いまでこそ参謀本部付きで陸にあがったが、それ以前の十数年間を艦隊勤務で過ごした江藤と、大学を卒てから三年余のあいだ地方都市の新聞社で文化部記者としてのんびんだらりと暮らしてきた諏訪とでは、からだの鍛えかたがまるでちがう。

思いきり背中を叩きつけられた諏訪は、呼吸が止まるほどの痛みを顔をしかるた。

よろめいた諏訪を気にするそぶりもなく、江藤はいった。

「ごつらも、昔さんざん世話になった艦長のたつての要請ということで、いささかきわどい橋をわたって書類をでっちあげたのだ。あんたも、すこしは我慢することだな。だが、それもそう長いことではない。むこうの基地に着いてしまえば、あとはのんびりと遊んでいることだ。報道班員のひとりぐらい、なにをしようとも誰にも気にはしない」

諏訪はぼんやりとした眼で海を眺めたまま、頭を掻いた。

「ああ……、あれだ。あそこまで来れば、あんたももう見えるだろう」

のびをするような格好で、いきなり江藤が声をあげた。諏訪はそちらをふりかえった。

「あんたは、あれに乗るんだ。「神城」に較べると、やっぱりちいさいな」

暗褐色の海面を割って、それは巡洋艦「神城」の背後からゆっくりと諏訪の視界に姿を顕わした。

たしかに、江藤がいうように、おおきさは巡洋艦の半分ほどしかない。それよりなにより、海を切つて静かに進むそのかたちはとても船とは思われなかった。中央部につきだした矩形の司令塔がなければ、まるで丸太がばかりと浮かんでいるようだ。

諏訪はそちらに眼をやったまま、そんなことを考えていた。

その胸の裡をみすかしたように、

「あれが、伊一二六七。いわゆる海大五型一等潜水艦というやつだ。ここから見降ろすと、いかにもちっぽけに映るかもしれない。しかし、若干旧式ではあるが、あれでも我が海軍主力大型艦だ。いうまでもないことだろうが、潜水艦の本領は海にもぐってからの勝負になる。だから、浮かんた恰好などどんなに不細工でもかまわん。要は水中性能と操艦技術だ」

と、江藤がうしろからいった。

海大五型は艦首四、艦尾二門の五三センチ魚雷発射管を持つ。その一発が急所的中すれば、倍以上の規模をもつ空母さえまっぴらつにへし折ることができる。あたかも彼がそれをつくりあげたかのように、誇らしげにそういつてから、

「ともかく、あんたはあれで南方にむかこうことになる」

と、江藤はつけくわえた。

そのとおりであった。巡洋艦「神城」とならぶと全長九八メートル弱、全幅八・二メートルのそれは、ひとときわちいさが際立ち、なんとも頼りなげに見える。しかし、諏訪は好むとこのまどるとに関わらず、これから数カ月生命をあの鉄筒に託さなければならぬ。

江藤の説明がまともに耳にはいつているものかどうか、

「潜水艦の食事は、そんなにひどいのですか」

無然とした顔つきでそちらを見つめたまま、諏訪はそんなつまらぬことを訊いた。

江藤はいったん呆れたような眼になったが、すぐに背を反らして、大声で笑った。

「そんなことが気になるようなら、まず大丈夫だな。まあ、実際のところ、潜水艦の飯は味よりも栄養優先だ。あれを、よく見てみる」

と、あらためて江藤は遠くの艦影をのぼした指でさし示した。

「あれだけの艦体内部に、二機二軸の大型改良ズルザー式三号ディーゼル・エンジンを搭載し、八〇〇トンあまりの燃料を積みこんでいるんだ。ただ海上を走るだけなら、ここからアメリカまで太平洋を充分二往復できる。乗員の居住性など、あとまわしにならざるを得ん」

つきはなしたようないかたを、江藤はした。

その限られた空間を最大に利用して、艦内には乗員が百日近く生活できるだけの食料、飲料水が積みこまれるが、それももつぱら栄養価重視の乾物ばかりで、生鮮食品は冷蔵庫いっぱい詰めてこんでも二日ともたない。江藤は、そう諏訪に教えた。

「とにかく栄養価最重要だから、味はともかく、肉缶やバター、チーズといった陸では滅多と味わえんようなものをふんだんに食べられることだけは保証する。甘いものやビタミン剤の豊富だ。だがな、よく一般の水兵が、潜水艦は給与がいいと羨むが、実際喰ってみれば三日で悲鳴があがる。いくら白米があっても、バタをたっぷり載せた脂まみれの飯なんて、とてもつづくものではない。いまさら後悔しても遅いが、食事にしろなんにせよ、潜水艦での生活は不便ことだらけだ。脅すつもりはないが、それは、ちゃんと覚悟しておけ。しかし、考えようによっては、これも貴重な体験だ。そう観念して、航海をせいっぱい愉しむことだな」

諏訪の顔を奔った不安の翳りを、江藤はみのがさなかった。

ことさらに快活な声で、彼はつづけた。

「そう心配するな。我が国の潜水艦技術は、公平に見て世界の海軍のなかでもトップ・レベルにある。それに、伊一二六七の楢垣艦長は、五ヶ月前の真珠湾攻撃にこそ参加しなかったが、なかなか優秀で部下の信頼もあつい男だ。しかもだいいち、まだ詳しい説明はできんが、あんたの目的地は陸海ともに敵勢力はほとんど掃討されてしまっている。したがって、よほどのことがないかぎり、戦闘は起こり得ない。さすがに大船に乗ったつもりにはなれないだろうが、銀座の並木通りを歩く程度には安全だと思ってい」

慰められているのか、それともからかわれているのか、江藤の口調からは判然としなかった。諏訪はただ俯いて、鼻柱のあたりを指の腹でごしごしとこすった。

「どうやら降つてきそそうな雲行きた。そろそろ戻ろう」

江藤は諏訪を促して、軍用車のほうへ歩きだした。

諏訪はもう一度うしろをふりかえった。風が、頬をうった。けれども、運命を委ねるべき艦影は、幾艘かの駆逐艦のむこうに隠れて、もう見えなかった。

ハワイ真珠湾基地への奇襲攻撃によって日米が開戦してから、すでに半年近くがすぎようとしていた。

もちろん、それを遵守するものなどどこにもおらず、ルールを破ったことで罰せられるのはいつもきまって敗者の側だけだった。たぶんそうすることで、彼らは同族を殺すことのうしろめたさを、すこしもやわらげようとしていたのだろう。

その星の歴史は、そのまま戦争の歴史であるといいかえることさえできる。

彼らの愚かさは、その舐れた悲惨な歴史からなにひとつ学びとろうとしなかったことに、如実に顕われているだろう。彼らは飽きることも懲りることもなく、数え切れぬほどの建設と破壊をくりかえしてきた。

とほうもない歳月を費やして営々と築きあげてきたものを、ほんの一瞬で叩き毀すその虚しさから、彼らはなんの教訓も得ようとしなかった。

いや、実際のところ、彼らは多くのものをそこから学びとっていた。

より多数の敵を、さらに迅く確実に殲滅するための技術や兵器が、それだった。彼らは敵を葬るためにつぎつぎと新しい兵器を開発し、武器をつくりだした。

そして彼らは、その技術を日常のいたるところへと応用し、弛むことのない「進歩」を遂げていった。もちろんそれは、つまるところまっすぐに破壊へと繋がる進歩だった。

あるいは彼らは、平和であることに慣れなかったのかもしれない。

人類と称ばれるいきものがこの星の支配者たる地位を占めてより数千年にわたるあいだ、この狭い星のなかでひとひとが牙を剥き噛みあつて闘うことがなかったときなど、ただの一刹那たりともなかった。それが、この星の歴史だった。ひとはそのときの積み重ねから、いくつかのものを学びとり、けれどももつとも必要ななにごとかを学び忘れてきたのだ。

彼らはきつと、そんなふうにいるだろう。諏訪は鼻を啜りあげた。

思つてそして、たぶんこの星に棲む生き物の愚かさを嗤うだろう。

車の揺れにからだをあずけたまま、諏訪はそんな益体もないことを漠然と考えつづけた。あるいはそれは、すぐそこに迫っている得体のしれぬ不安を、そうすることでなんとか払いのけようともがいていたのかもしれない。

どす黒いその不安は、こと呼吸ごとに膨れあがつて、彼を圧しつぶそうとしている。抵抗できぬ運命のうねりの前に佇んで、彼にできるのはそんなことだけだった。

結局のところ、この星そのものが誰にもせきとめることのできぬうねりに翻弄され、のたうちまわっているのだろう。

そのなかで彼ひとりの存在など、象の背を這う蟻ほどの意味さえない。ただ、この車のように、流れにすべてをまかせてしまうことしかないのだ。

車は軍港にむかつて、坂道を降りつづけていく。

おおきめの雨粒が、ぼつりと落ちてきた。それは、諏訪の額にあたつて、砕けた。

一九四二年、早春――。

世界はまた、幾度めかの戦争の渦中にあつた。それは、かつて彼らが体験したどの戦争よりも規模がおおきく、激しいものだった。世界じゅうの国々が、文字どおりまっふたつにわかれて闘っていた。アドルフ・ヒトラーに率いられたナチス・ドイツ第三帝国の電撃的ポーランド侵攻によって世界を舞台とした戦いの火蓋がきつておとされてからおよそ二年余、戦況は依然、独伊日の三国を中心とする枢軸国側の圧倒的な優勢にあつた。

オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、さらにはパリをも含むフランスの大部分を支配下におきヨーロッパ全域をほぼ掌中におさめたドイツは、尽きることのない征服欲をもって狭い海峡を隔てて孤立するイギリスを脅かし、ロシアにまで襲いかかっていた。

いっぽう背後を鉄壁のドイツに護られたムソリーニのイタリアは北アフリカへ踏みこみ、アルバニアを経てエチオピアを捻じ伏せ、エジプトをも蹂躪する勢いだった。

すでに中国大陸沿海部の広大な地域を占領し、内陸を窺っていくつかの拠点を築きあげていた日本は、ハワイ真珠湾への奇襲攻撃を敢行してアメリカにも挑みかかり、奮迅の戦いをつづけていた。

とりわけ対米開戦によって一挙に無辺の太平洋へも戦線を拡大した日本の進撃は、ぎりぎりまで撓められたバネがはじけるように、まさにとどまるところを知らなかった。

ハワイ攻撃からわずか数カ月あいだに、日本は敵拠点覆滅のためにマレー、フィリピン、インドネシアなどへ矢継ぎ早の大規模侵攻作戦をつぎつぎに展開し、そのいずれをも成功させていた。

マレー侵攻においては第三飛行集団および海軍南遣艦隊マレー部隊の協力を得た山下泰文中将麾下の

陸軍第二十五軍が、上陸後二ヶ月あまりでイギリス極東軍を撃滅し、シンガポールを陥落させた。

また、マックアーサー將軍指揮下のアメリカ陸軍主力がかためるフィリピン攻略にむけて昨十二月八日台湾を出撃した陸軍第十四軍（司令官・本間雅晴中将）は、まさしく無人の野を往くがごとくに敵拠点を一蹴し、はやくも翌四二年正月二日にはマニラを占領してバターン半島に展開、いまやマックアーサーのこもるコレヒドール島要塞へと迫っていた。

香港は昨年のクリスマスに陥ち、インドネシアにおいても陸軍第十六軍（司令官・今村均中将）は瞬く間にボルネオ、セレベス両島を占領、原油をはじめとする戦争遂行に不可欠な物資の供給線を確保したうえ、なおもバリ、チモール、アンボン島と進み、ジャワ、スマトラ島の攻略ももはや時間の問題だった。くわえて、ほぼときをおなじくして大陸戦線援護作戦がビルマ方面に展開され、米艦隊迎撃に備える南方諸島およびビスマルク諸島作戦がおこなわれた。

援蔣ルート分断のためのタイ・ビルマ作戦には飯田祥二郎中将指揮下の陸軍第十五軍があたり、タイに対しては外交交渉をもって無血進駐をなしだけ、ビルマに対してもタイ南部から侵攻した主力はすでに首都ラングーンに包囲していた。

陸軍南海支隊および海軍南洋部隊を中軸におこなわれた南洋方面作戦については、もはや昨年のうちにグアム島をはじめギルバート諸島のマキン・タワラ両島ならびにウェーキ島の占領を完了しており、つづいて展開されたビスマルク諸島攻略作戦においても、ニューブリテン島のラバウル、スルミ、ニューアイランド島のカビエンを占領していた。

まさに鎧袖一触の勢いとは、このことだろう。

欧州戦線における開戦劈頭のナチス・ドイツの侵攻も電撃的速度をもっておこなわれたが、それに優るとも劣らず、奇蹟とさえいえそうな、華々しい勝利の連続だった。

しかも、日本は陸続きのヨーロッパとはちがって、すべての戦いを海の外でおこなっている。大量の兵力をまとめあげてそれを派遣し、目的地を囲む防壁を撃破するや否やすかさず上陸戦を敢行、一気に敵主力を叩き潰す。兵の錬成や武器の能力はいうまでもなく、陸海両軍の綿密な連携にいささかでも齟齬があれば、到底成功を望み得ない、きわどい綱渡りのな作戦ばかりだった。

それを日本は、つづけざまに、いともた易くやってのけたのだ。

この輝かしい戦果を端的にあらわすには、それこそやはり奇蹟という陳腐な表現をもってするよりほかにないのかもしれない。

国民はこの信じられぬような勝利の連続に歓喜し、酔いしれた。強引な満州国の建立などに端を発する大陸での中国との戦いが予想に反してずるずると長期化し、膠着状況さえ呈してきていたところだっただけに、ひとびとの昂奮はひとしおだった。

やはりこの国は、八百万の神々の加護をうけ、祝福されているのだ。彼らは、それを確信した。神国は不滅であり、世界の支配者たることを運命づけられている。

勝利をもたらした兵士たちの精強さが賞賛され、將軍は英雄に奉りあげられた。あつけないほどの敵の弱さは、侮蔑と嘲笑の的だった。少年たちは銃を担いで行進する軍服姿の兵士に憧れ、いくつもの勳章が己の胸を飾る光景を夢見た。

著しく物資に乏しい島国の日本がそれだけおおがかりな戦いを遂行するためには、国民生産のほとんどすべてをそこに傾注しなければならず、ひとびとは日常生活のあらゆる面で不便と苦勞とを強いられるが、それもあたりまえのことだった。兵士たちが海のむこうで生命を賭けて闘っているとき、贅沢な暮らしやとるにたらぬ娯楽で貴重な時間を費消することなど許されるはずはなかった。そうして耐え抜くことも、また戦いだった。

むろん、ごくわずかではあったが、そうした神かがりのな進撃に懸念を覚えるひとたちもいた。たとえば、常識としてアメリカの強大さを知っているひとびとは、この戦いの前途に暗澹たるものを感じとり、ひそかに怯えていた。彼我の国力の絶対的格差を正確に把握さえできれば、それも当然のことだった。

その不安を胸底深く抱くひとびとは、民間、政府をとわず軍部の最上層部にすらすくなくからずいたが、彼らが公にそれを主張することはなかった。

不用意にそんなことをすれば、彼らは周囲から徹底した弾圧をうけ、悪くすれば生命の危険にさえ曝されかねなかった。現に、開戦直前の微妙な時期において、この国にはテロが横行した。どんなかたちであれ、またどんな立場の人物であれ、国家の戦争方針を批判する存在は認められなかった。彼らはたちまち手荒い報復をうけ、みずからの思想の殉教者となった。

時代の狂奔が、なにかも呑み込んでしまっていた。

ひとびとは熱にうかされたように、我を忘れて踊り狂っている。

不幸なことに、ほんのひと掴みの常識と先見力をもちあわせてしまったひとたちは、狂信者の踊りの輪のなかで茫然と立ち尽くし、ただひたすら口を箝しているだけだった。彼らにできることは、沈黙だけだった。凍った視線で気違い祭を眺める傍観者に、彼らはなった。

しかし、彼らが惧れるように、戦局の転換点は確実に近づいていた。

この規模の戦争で、いつまでも一方的な勝利がつづくことなどあり得ない。

日本は持てる戦力のほとんどすべてを投入して、限界ぎりぎりにまで戦場を拡大した。いや、すでにその支配能力を越えてしまっていたかもしれない。その反動は、かならず訪れる。

しかも、勝利が華々しいものであればあるほど、その揺り戻しはおおきい。

事実、日本軍の進攻に圧されつづけているようには見えても、桁違いの国力に恵まれたアメリカは着々と反撃の準備を整えていた。この時期からほんの数カ月で、日本はB二五ドゥーリットル戦略航空隊の空襲を浴び、真珠湾での勝利の再現を期したミッドウェイでの総力艦隊決戦で海軍は壊滅的打撃をこうむることになる。

踊りくるうひとびとのなかに、そのことを予測していた者はいなかった。

彼らがその加護を信じ、すがりついていた神は、つい目先のことを見通す程度の力さえ持つてはいなかったのだろう。祭の昂奮は、まだ絶頂にあった。

2

軋むような音をたてて、諏訪俊一の人生の歯車が回転しはじめたのは、真珠湾への奇襲攻撃成功が派手なマーチの響きによつてつたえられるよりも、二週間ほど前のことだった。

あらゆる変動がそうであるように、予兆は、たしかにそれ以前からあった。

けれども、諏訪はそのことに気づかなかった。

きっかけは、それよりまた一月ほど先立つ、父親の急死だった。

諏訪の父親はその地方都市でも、屈指の実力者だった。かなりおおきな縫製工場を経営しており、軍部の優先納入業者の指定をうけて、そうとうの資産を蓄えていた。もちろんそれは、父親がさまざまな手段を弄して議員や軍首脳に働きかけた結果だ。

ひとり息子の俊一は、いずれは工場を継ぐという約束のもとで、東京の私立大学へと進んだ。卒業後故郷にもどつたが、すんなり父親の会社にはいる気になれず、いったんその都市に本社を持つ新聞社に職を求めた。

いうまでもなく、その就職には父親の顔が役にたった。

入社後は文化部に配属された。遠からず父親のあとを継ぐことが決まっているのだ、彼自身新聞社への就職は腰掛けのつもりだったし、会社側もそれを知っていたのだろう。

有能な記者でも勤務態度の真面目な社員でもなかったが、それでいてどこからも文句はでなかった。大陸での戦況は激しさを増していたが、遅く生まれた俊一を溺愛する父親の強力な庇護があるかぎり、徴兵の心配もなかった。

ゆっくりと出社して、街をぶらぶら歩きまわり、適当なネタを見つけてほんの埋め草程度の短い記事を書く。そんな毎日を、彼は送っていた。

どこに不足のある生活ではなかった。タバコやビールの配給制が施行されたことが不満だったが、それもうまくたちまわって必要なボタンさえ押せばさして難儀せずに入手できた。いつしか、そういうことも覚えていた。刺戟もなければ苦勞もない生活だった。

ただ、父親との仲は疎遠になっていた。

二年前に、父親が再婚したことが原因だった。

新しい母親はまだ若く、芸者あがりだけに豊かな肉体と妖艶な美しさをもっていた。どことはつきり指摘できるわけではなかったが、その女性のなにかが彼の神経をささくれだたせた。諍いあったこともなかったし、彼女はいつも後添えであることをちゃんと自覚しているように控えめな態度を崩さなかった

が、どうしてだか俊一はその女に逢うたびに落ち着かぬ気分になった。

そんなこともあって、つい父親のもとを訪れる機会も減っていった。

毎晩五合の晩酌をかかさず、還暦を越えてもなお地元の子供たちに相撲を教えるほどに遅かったその父親が、突如死亡した。睡眠中の心筋梗塞とかで、あつけない最期だった。だから俊一は、その死に目に逢うことはできなかった。

葬儀ののち、遺された会社の運営を巡って親族会議のような場が設けられた。

俊一が後継にたつことがもつとも妥当だったが、彼はその気になれなかった。

縫製工場の経営についてなどなんの知識もなかったし、なによりいまの暢気な暮らしを、もうすこし愉しみたかった。少ない親戚たちも、緊張感もなく毎日を遊び暮らしているような若僧にいきなりすべてをまかせてしまうことには、躊躇があるようだった。

結局、新しい母親の兄、つまりは俊一にとって叔父にあたる人物が、彼までの繋ぎのかたちで会社の経営をひきうけることになった。その叔父は父親の再婚と同時に、それまで勤めていた東京の中堅商社を辞めて、こちらに移ってきた。父親の会社に、役員として迎えられたのだ。それから二年、彼は片腕のごとき存在として、父親に協力してきた。

東京での仕事のせいだろうか、彼は軍に対してもしつかりしたコネクションを持っており、このところの業績の急成長も、その力に負う部分がおおきかった。

経営を委ねるには、申し分のない人物だった。

親戚たちはむろん、俊一もそれに賛成した。彼はしばらく迷ったあげく、その要請を承諾したが、交換条件のように俊一を役員に就任させることを提案した。もとよりただの名義にすぎぬ役員で、つまりは会社の利益のいくばくかを報酬のかたちで俊一にも分けようということだった。

俊一は喜んで、その願ってもない提案をうけ入れた。

それが、つい先々週のことだった。

その日、俊一は対中国戦の必勝を祈念して開催された将棋大会を取材するために、朝から街の中心部にある県立武道館に詰めきっていた。普段は相撲の土俵がつくられたり、柔道場の畳が敷きつめられる武道館の広い床に幾面かの将棋盤が置かれ、県内から集まったアマチュア棋士がトーナメント形式で腕を競いあっている。収益はそのまま軍に寄付されるというふれこみだが、めっきり娯楽がすくなくなったころでもあり、館内はほぼ満員の盛況だった。

正面にすつらえられた役員席のなかには、大会開催に協力した叔父の顔もある。

どのくらいの金を散蒔いたのだろう、彼は市長の隣に坐り、肥った頬をだらしなく弛ませて笑っていた。その横で姿勢をびんとのびし、厳めしい髭のかたちを指で整えながら棋士たちの闘いを睨み据えているのは、特に招待されたこの地にある陸軍師団の司令官だ。その將軍の招聘も、おそらくは叔父の線で実現したのだろう。

彼の存在は、会場に微妙な緊張をもたらしていた。

観客たちはそれぞれが応援する棋士の背後に陣取って、背伸びするようにして盤面をのぞきこむのだが、彼らもまた表情をひどく硬くして、思いもよらぬ奇手が打たれても笑い声ひとつ漏れない。駒の動きを愉しむどころか、そうすることがまるで不謹慎であるとも考えているかのようだった。ひとりの軍人の存在と、華々しく中国戦必勝祈願を唱った看板が、その場の雰囲気や戦場のそれにかえてしまったのかもしれない。

さして将棋に興味のない俊一にとっては、なおさらに退屈きわまりない催しだった。こんなときはきまっつてそうだが、時間の流れがもどかしいほどに遅くなる。

取材といっても、棋譜を追う程度のことでは最低限のルールさえ覚えれば誰にもできるが、それ専門の書き手のような技術は俊一にはない。だいいち、その手が好いのか悪いのか、次にどう繋がっていくのか、さっぱり読めない。

勝利者へのインタヴューにしても、なにしろ質問の抽斗がからっぽにひとしいのだから、かえってくるのは決まりきった応えだけだった。

ついには、俊一のほうが取材に飽きた。勝負のほうは、すでに予選ともいふべき試合を了えて、準決勝の段階にはいっていた。

ここまでくると、さすがに会場も空間が広くなる。置かれた棋盤は四面。おのおのに大型の掲示棋面が用意され、駒の動きが係員によって即座に再現され、観客につたえられるようになっていく。

さらに準決勝からは、その大型棋面を使って専門プロ棋士による解説がおこなわれる。

この県出身の八段で、棋界ではかなりの重鎮ということだった。さすがにいまでは年齢的な衰えもあって実戦から遠ざかっているが、かつては名人の呼び声も高かったという。

こういう仕事に慣れているだろう、四つの盤面を順に移動して、ときには冗談をまじえながら一手ごとにその好悪を的確に指摘していく。

東京で何人もの弟子を抱えているその棋士の招聘折衝は俊一の新聞社が担当したが、俊一は参考資料にざっと眼を通した程度の知識しかない。

どうやらいささか神経の粗雑さがあるのか、肝腎の局面でしばしばポカをくりかえし、ついに名人位に届かなかったということだが、ひたすら攻めつづける豪快な棋風で、現在でもそうとうの人気があるようだ。

実際、観客の多くはその有名棋士の解説がお目当てのひとつだったらしく、彼がなにかいうたびにどよめきが起こる。

だが、俊一はその冗談にも笑うことができず、退屈を噛み殺している。

将棋がどうというより、勝ち負けそのものにさして興味を持たないのだろう。ぼんやりとあたりをみまわしながら、時間が過ぎてゆくのを待つばかりだった。

役員席の叔父の隣には、母親の姿もある。

父親が生きているあいだは、出自に対するうしろめたさもあったのか、万事に控えめで地味な女性だったが、このごろでは遭うたびごとになまめかしさが増していくのを感じる。どことははっきりいきれないが、全身から発散する女の脂臭さのようなものが、離れていてもつたわってくる。うっすらとはあるが、化粧もしているようだ。

一種、妖艶な美しさがあった。

しばらくのあいだ、俊一はそこから視線を動かすことができなかった。

それに気づいたように、彼女がすこし顔を傾げた。そのとき一瞬、ふたりの眼があった。俊一はわけもなく戸惑い、頬を朱奔らせてかるく会釈した。

傍らで師団司令官が腕組みしたまま、ひとつわざとらしい咳払いをくれた。彼女は、笑顔をそちらにむけた。俊一は視線を盤面にもどした。

勝負はその後、決勝へと移った。

下馬評どおり、初老の歯科医と県立高校の教諭の対戦になった。

双方がっぷりと組みあい、力のこもった熱戦になったが、中盤から持ち駒で優勢を保っていた歯科医が、詰めで致命的な失着をおかし、高校教諭がまるで絵に描いたような逆転を遂げた。解説の老棋士は両者の激戦を讃えつつ、歯科医の失手について己の体験をからめて巧みに批判し、観客をおおいに沸かせた。

招聘にかかった費用は安くはないが、老棋士はあたえられた時間のあいだ、大勢の観客の手綱をしつかりと掴み、自在に操った。支払った費用だけの価値は、充分にある。勝負師として峠を超えた老棋士が、生き残るために磨きあげた話術に、俊一は感心した。

しかし、その芸をいつまでも愉しんでいるわけらもいかず、俊一は慌てて勝利者のインタビューにむかった。いくら埋め草記事とはいえ、優勝者の声がなくては話にならない。もっとも、応援者に囲まれて思わぬ勝利に上気した教師に、いくつかありきたりの質問をぶつけただけで取材は終わった。どれも予測どおりの応答しかかえってこなかったが、それで充分だった。俊一は彼の写真を数枚撮って、その混雑から離れた。

取材メモを整理し、まきとったフィルムをカメラからはずしていると、

「俊一君、忙しいかね」

と、背中を男の声がした。

腰を屈めた不自然な姿勢のままふりかえると、叔父の姿があった。

「これから、関係者だけで慰労会をするのだが、よかったらきみもどうかな」

叔父は市内でも有名な高級料亭の名をあげて、俊一を誘った。

すこしうしろに、市長と師団指令に挟まれて母親がいた。彼女は計算したように、左右両方に笑顔を均等にふりむけ、ふたりをうまくあしらっていた。どちらにも媚びるようできて、それで決して卑しさは感じさせない。それも、昔の商売で身につけた技術なのだろう。

解説に招いた老棋士とおなじように、彼女もまたプロだった。

俊一はけれども、叔父の誘いを断った。
苦勞する記事ではないし、つくろうと思えば時間の都合をつけるのは簡単だったが、市長や將軍といっしょに呑む酒が旨かろうはずはない。

叔父も、あっさりとそれを承知した。彼にしても、本気で俊一の同席を望んだわけではなかった。いちおう義理で声をかけてみた、というところだったのだろう。

それでも叔父は、別れ際に市長と將軍を紹介してくれた。

市長とは仕事を通じてたびたび面識があったが、もちろん將軍とは初対面だった。

俊一の正面に立った將軍は、

「なかなか立派な体格をしているな」

と、値踏みするような眼で、彼を全身を眺めわたした。

そしてそれから、

「くだらぬとはいわんが、きみのようないい若者が、こんな仕事に甘んじている時勢ではないぞ」

そう、釘を刺すような口調でつけくわえた。

俊一はなにもいわず、直立の姿勢のままおおきく肘を張って敬礼した。

背が高いだけあって、そうした俊一の恰好は映える。軍事教練の時間にも、教師としてやってきた退役軍人は、かならず彼の敬礼姿勢を褒めたものだ。

將軍はすこしのあいだじっとそれを見つめると、怒るでもなく、冷やかな笑いをその眼にのぞかせただけで、彼のことなど忘れてしまったかのように背中をむけた。どうしてだか、母親が奇妙に硬い表情になつてそれにつづいた。

彼らとわかれたあとも、將軍の見せた冷たい眼が、奥歯に挟まった食べ滓のように俊一の神経にこびりついて離れなかった。

3

軍港にむかう無蓋車の助手席で、俊一は胸のポケットからタバコをとりだした。

吸い口つきの朝日だった。気取りもあつて記者時代には英国製のチェスタフィールドを好んでいた俊一の舌に、ふんだんに屑葉を使ったただ辛いだけの安煙草があうはずもなかったが、いまはそれを手にいれるにも苦勞する時代になつている。

「タバコは好きか」

と、ステイアリングを握つた江藤が訊いた。

たつぷりと煙を吐きだしながら、俊一はうなずいた。

「気の毒だがな、潜水艦に乗るつもりだったら、タバコはあきらめたほうがいい」

江藤は苦笑をのぞかせた。

俊一は指先でタバコを揉み消し、はじきとばすようにして捨てた。

「いや、おれはいいんだ。喫いたければいくらでも喫うといひ」

江藤はいった。

「しかし、潜水艦のなかではやめておいたほうがいい」

「そうですね……」

と、俊一もうなずいた。たしかに、それは理解できる。

潜水艦は完全に密閉された鉄の函であり、海面上の空気を取りこむためのシュノーケル設備を持たぬ日本本の潜水艦にとつて、潜行時における艦内空気の浄化は不可能に近かつた。したがつて、居住区の空気は常にエンジンの排気ガスと潜水航行時用の蓄電池から発生する硫酸蒸気とによつて汚染されているといつていい。

それに、発汗や呼吸によつて自然に人体から発散する炭酸ガスが加わり、とりわけ潜行時の艦内空気はきわめて劣悪な状態に置かれる。通常、空中の炭酸ガス濃度が三パーセントを越えると思考能力の著しい減退などの影響があらわれ、四パーセントに近づけば生命維持に危険が生ずるといふ。

潜行時の艦内空気は、その炭酸ガス濃度がゆうに一パーセントを越す。

むろん、浄化器もとりつけられてはいるが、それは非常に小型のもので——大型化すると空気循環時の発熱に乗員が耐えきれない——、たいして役にはたさない。

しかも湿度は一〇〇パーセント、海水の暖かいフィリピンあたりでは冬でも艦内温度は三十度に達する。江藤は、そんなふうの説明した。

そんな条件のなかで暮らすのであり、浮上時ともかく、タバコなど許されるはずもない。

「艦内で喫煙が許されるのは、副官格の水雷長が使用している予備室程度だろう。艦長の松垣中佐も水雷長の狩野小佐も、どちらもタバコは喫わん。とくに狩野さんは、喫煙者を唾棄するほど嫌っている。彼の前では、絶対にタバコは見せんことだな」

海大五型の伊一二六七の場合、艦内で個室があたえられるのは艦長と司令のみで、司令乗艦時に個室とされる予備室を、狩野副官が使っていた。ほかの士官はすべて士官室を公室と寢室に兼用しており、食事や事務に使われる准士官以下の公室は、わずかに一部屋あるだけだった。

大型艦でさえそれであり、中型以下になると個室は艦長室だけになるという。

「湿度一〇〇パーセントで、室温三十度ですか……」

諏訪俊一は無然とした顔つきで、

「それでいったい、どれくらい潜っていられるのですか」

「おまえは、なにも知らんのだな。もうすこし、勉強してこいよ」

と、江藤はあきれたようにいった。

「おれだからいいようなものの、狩野少佐あたりにそんなことを訊くと、以後相手にしてもらえなくなるぞ。いちおう軍令部指導では、五十時間の連続潜行も可能ということだ」

「五十時間——」

硫黄の臭いが充満する蒸し風呂のなかに、それだけの長時間果たして普通の人間がいて、活動できるものかどうか、俊一には疑わしかった。

江藤はいった。

「これは軍事機密だが、現実には真珠湾攻撃前の敵情偵察では、四十時間あまり潜りつづけた艦もある。しかし、これは例外中の例外だ。五十時間というのは、予備の食料や弾薬も積まずに、がらんどうのまま潜ればという前提での机上の計算にすぎない。常識的には、十四、五時間が限度と考えておいていいだろう。それ以上になると、いくら頑健な乗員でも頭が曇ってくるぞうだ」

それでも大変なものだと、俊一は思った。

到底その環境のなかで、十時間も耐えぬく自身は、彼にはない。

「何度もいうようだが、今度の航海ではそんな危険はない」

笑いながら、江藤はきっぱりといききった。

「それよりも、快適にすごしたいと思うのなら、艦内での人間関係に気をつかうことだ。松垣さんや狩野さんは立派な軍人だが、なにしろ潜水艦乗りには一癖も二癖もある人物が多い」

雨足が少し強くなり、江藤は暗い空を見上げて舌打ちした。

その任務の特殊性から、潜水艦乗務員は海軍のなかでも、ある種特別の位置におかれている。

だいいちに、潜水艦の乗員に一般の兵卒はほとんどいなかった。いたとしても、それは勤務の長いヴェラン兵長が数名程度というところだった。のこりはすべて、下士官以上で構成されている。

複雑な機器操作を要する潜水艦に乗務する場合、水雷学校や潜水学校でのそれなりの専門教育がまず必要であり、その時間と教育内容の濃度を踏まえれば、一般艦船の乗員よりも階級が上昇するのは当然でもあった。

「だからたとえば、おれが明日から潜水艦に載りたいと希望してみても、とても無理なんだ。いってみれば乗員はそれぞれ、その専門分野でみっちり教育をうけ、実戦でひとすじに叩きあげてきた職人ばかりなんだ。つきあいかたも、なにかと難しい」

陸にあがっても、潜水艦の乗員はほかの艦船の乗員とあまりつきあおうとしないと、江藤はいう。彼らは独特の閉鎖性を持っている。

「一般の兵にとって、潜水艦乗りはなんとなく近寄りにくい存在なんだ。任務が苛酷であることは誰もが知っている。軍のほうもそれを勘案して、潜水艦の乗員にはたつぷりと休養をとらせるために、熱海や別府の温泉に専用の保養所を設けている。しかし、そうした優遇策を妬むわけでもあるまいが、潜水艦乗りを特別扱いする雰囲気はある。きみも、それを頭に置いておくことだな。でないと、なんの気なしにいっ

た一言で、辛いめに陥ることにもなりかねない」

「どうやら、厄介なことがまっついでいそうだ。」

俊一は暗い予感を覚えて、頬をこすった。我しらず、胸のタバコに指がのびる。吸い口を潰して、唇にくわえたところで気づいた。

雨粒を避けるため、掌で覆って擦ったマッチが、中途半端なところでとまった。

江藤はいった。

「遠慮するな。狩野さんに逢うまでに、心置きなく喫っておけ」

俊一はマッチの焰をタバコの先端に近づけた。指に熱を感じた。

坂を降りきったあたりで、だしぬけに雨が熄んだ。

けれども、空はあいかわらず、墨を流したような色をして低い。やがてくる嵐の前のほんのひとときの休息なのかもしれない。

ゆったりとした調子で、江藤がいった。

「ひとつ尋ねておきたいが、きみは陸軍と海軍のもっとも基本的なちがいは、どこにあると思う」

「え……」

いきなりそんなことを訊かれて、俊一は当惑した。

「まあ、いい」

江藤は宥めるようにいった。

「きみが報道班員として急遽採用された裏の事情も、うっすらとではあるがわたしの聴いているよ。だが、事情がどうあれ、きみはこれからの数カ月を狭い潜水艦のなかで、難しい個性の持ち主たちと暮らすことになる。つまり摩擦を起さぬためにも、根本的なところだけはずめて把握しておくほうがいい」

「はあ——」

俊一は不得要領な応えかたをした。

「端的にいえば、陸軍は人間が闘うが、海軍は兵器と兵器がぶつかりあうということだ」

江藤はできの悪い生徒に、一たす一が二になることを教える先生のように、

「人間が闘う戦争には、どんなことも起こり得る。銃弾が尽きれば剣で、剣の刃が折れば素手で、相手の喉頭に噛みついてでも闘う。陸軍では、そう教えられる。生きているかぎり、兵は闘うことができる。だから、隊からはぐれて敵陣のど真ん中にとりのこされた兵が、ひとりで戦況を逆転させることもあり得るのだ」

きのう召集されたばかりの二等兵も、大将も裸になって一対一でむかいあえば、なおなじ人間どうしなのだ。二等兵が大将を斃してしまうこともある。

「そう、噛んでふくめるように江藤はいう。」

「だからこそ、前線でも大将はもつとも奥の、安全な位置に据える。戦局がどんなに有利でも、たったひとりの敵兵に大将が討たれてしまうこともないとはいえないからだ。けれども、海での闘いはそうではない。艦を失って海に投げだされた兵が、ただひとりで戦況を逆転させることなど、絶対にあり得ない。艦を失ってしまえば、兵にはなんの力もない。人間の喉とちがって、敵艦の装甲にかじりついてみても、歯が砕けるだけのことだ」

戦艦という兵器、潜水艦という兵器が闘いあうのが、海戦なのだ、と江藤はいった。

「艦を沈めれば勝ち、沈められれば負けという単純な世界だ。艦隊の主戦力を失ってから、起死回生の一撃を願うことは、奇跡を祈るに等しい。勝負は一度きりだからこそ、勝つためにぎりぎりまで戦術を考えぬき、兵器が円滑に機能するように兵を訓練する。兵みずからが銃をとって闘うことは必要ない。兵は戦艦という武器、潜水艦という武器を指揮官の意志どおり動かすための歯車にならなければならないのだ」

ステイアリングを操る江藤の横顔が陰しさを増す。

「おそらくきみもそうだろうが、世間の教育水準の高い人間のなかでは、陸軍よりも海軍のほうが組織としての風通しがよく、自由な雰囲気があると思いきいこんでいるむきが多いそうだ。たしかに、それはある一面で正しいかもしれない。海軍の高級士官はイギリス式のマナーを教えられ、なにより柔軟な思考を持つてと説かれる。しかし、下士官や兵卒はそうではない。彼らに要求されるのは、規律に従って確実に動く機械の歯車になることだ。そうしなければ、艦という兵器は動かない。その意味で、海軍の兵は陸軍のそれよりずっと厳しい環境のなかにもいえる」といえる」

「車は平坦な道を走り、二度ほどおおきくカーヴをきって灌木の茂みをぬけ、基地の敷地にはいった。枯

れかけた樹が揺れ、雨の飛沫が散って俊一の顔を濡らす。

頑丈なゲイトの前に設置された門衛所を越えたあたりで、江藤は車を止めた。

江藤にかつて兵士たちが銃を掲げた。それにちいさく答礼をかえした江藤は、

「ともかく、おれが教えられるのはこれだけだ」

そういつて俊一を促し、車を降りた。

広大な軍港基地のなかを、散歩でもするようにゆったりと脚を進めながら、

「もしきみが、海軍について世間同様の甘ったるい幻想を持っているなら、いますぐそれを捨ててしまふことだ。いろいろな艦船のうちで、潜水艦はとくに必要最低限のぎりぎりの人員で行動している。すこしでも余裕があれば、そこに糧秣を置き、一本でも多くの魚雷を搭載しようとする。それが、潜水艦載りの考え方だ。乗員ひとりひとりがそれぞれの部署を責任を持って担当し、彼らが欠ければたちまち艦の運航に支障をきたす。そのなかで、きみはただひとりの余剰人員になる。それをいつも忘れないことだ」

と、江藤はつづけた。

知る者もないこのだだっびろい軍港のなかで、江藤はひとりきりの味方だった。その味方とも、もうすぐ訣れなければならない。俊一は急に、ひどく心細い気分になった。

二階建ての白塗りの建物にむかつて歩きだした江藤のあとを、俊一は小走りに追った。

途中でたちどまった彼は、胸ポケットからとりだしたタバコを箱ごと握り潰し、未練を断ち切るようにひと捻りしてまたぼけっともどした。

玄関のところまで、こちらをふりかえった江藤が笑っていた。

「本降りになる前に辿り着けてよかった。これからきみを、松垣さんや狩野さんに紹介する。おれの役割は、そこまでだ。実をいうと、おれはどうもあの狩野という男が苦手だ。だからあまり長居はしたくない」

松垣と狩野は二階の隅にある広い部屋で、書類を眺めていた。

会議にでも使われるのだろう、おおきな机といくつかの椅子が置かれただけの殺風景な部屋だった。松垣は小柄だがすこし肥り気味の男で、狩野のほうはがっしりした体格で、背丈は俊一よりもありそうだった。

江藤はふたりに俊一をひきあわせると、さきほどの言葉どおりさっさと部屋を出ていった。

ふたりは一度ちらりと俊一のほうに眼をむけたきりで、また書類のほうに視線をもどした。俊一はただぼんやりとそこに立ちつづけるしかなかった。

どれくらいそうしていただろうか。実際には十分とかからなかったのだろうが、ひどくそれを長い時間に、俊一は感じた。

居心地が悪かった。胃袋のあたりが、きゅんと痠めてくるようだった。

いきなり、松垣が顔をあげて、真正面から俊一を見つめた。

感情の動きをうかがわせぬ鈍い光を湛えた眼だった。

頬のあたりがすこし弛んだ皮膚は、鞣した革のような江藤の顔や、基地を行き交う兵士たちのそれを見たあとでは、病人かと思われるほどに白い。ずっと艦のなかに閉じこめられた生活であれば、そうならざるを得ないのだろう。髪は薄く、額が張り出したように広い。がっしりとした顎を、赤茶けた髭が覆っていた。

俊一は視線をはずすきっかけを失い、ふたりはまとも睨みあう恰好になった。

「きみの方は聴いている」

と、やっと松垣がいった。低くかすれた声だった。

分厚い唇は、ほとんど動かない。

どうしたものか、それで救われたようにほっとした。途端に、ちいさくよろけた。背筋を、冷たく粘っこい汗がつたって落ちていく。

それきり松垣はなにもいわず、書類を丁寧に折り畳むと、脇に抱えてたちあがった。

もう俊一が存在など意識がない、そんな態度だった。

それにつづいて狩野が椅子を鳴らしてたちあがった。

たちあがると、俊一よりも頭ひとつ高い。おのずと見降ろされるかたちになった。

やはり肌はさほどに焼けておらず、むしろ蒼白い。短く刈りこんだ髪が、大仏のように丸く縮んでいる。白目がちの眼は、松垣のそれよりも遙かに鋭い。

心の底の髪まで、見透かされるような眼だった。

「南方まで短いあいだが、よろしく頼む」
狩野はいった。

「特別に協力するようなことはできませんが、そのかわり行動を制限するつもりもない。こちらの邪魔にならないかぎり、艦内では好きなように動いてくれてかまわない」

「あ……、ありがとうございます」

と、もつれたような声で、俊一はやっとそれだけいった。

「出航は明朝の予定だったが、きみのほかに急遽もうひとり客がくることになった。だから、出航は早くとも明晩になる。それまでに乗員たちとひととおりを顔をあわせておくといいな」

すでに扉の近くまで歩いてきた松垣が、なにかを想い出したようにふりかえって、

「中原君をつけてやるといい。おなじ年頃だから、気もあうだろう」

と、狩野にいった。

「それがいいでしょう」

狩野はうなずきかえずと、

「もうすこし待っていてくれ。いま、見習い士官の中原少尉を呼ぶ。学校を卒たばかりの男だから、きみも気楽に話しやすいだろう。とりあえず、彼にいろいろ案内させる」

と、俊一にそういって、松垣のほうに歩きだした。

俊一はふたりにむかって、あのとぎのように大袈裟な敬礼をした。

松垣はにこりともしなかった。狩野の顔が、わずかに不快そうに歪んだ。

ふたりが出ていくと、俊一は崩れ落ちるように椅子に腰を降ろし、安堵の吐息をついた。

たとえば数カ月とはいえ、あふたりとこれからうまくつきあっていくことは、たしかに大変な難行になりそうだった。

抵抗できぬまま、運命のバネというやつにはじかれつづけたあげく、とてつもない厄介事に類までどつ

ぷりと浸かりこんだようだ。

なにかから庇うように両腕で頭を抱えたまま、俊一は短く呻きを漏らした。

中原少尉はそれからしばらくして、勢いのいいノックと同時に部屋にはいつてきた。

痩せてはいるが、筋肉質のからだつきの快活そうな若者だった。

俊一はほっとしたように笑みをこぼした。

中原も、いかにもひととなつこそうな笑顔をかえしてよこした。

「顔見せは疲れたでしょう」

部屋を横切った中原は、隅に置かれた小机に載った菓缶をとりあげ、

「ほんとうはあふたりともいいひとなんだけど、どうも第一印象というのが悪すぎる。誰でもはじめは、

あふたりに睨まれると緊張で縮みあがってしまう。とりわけ、狩野さんの三白眼はひどすぎる。前世じゃ

あ、きつと岡つ引きかなんかだったにちがいない。そういえば、狩野さんが玩具の人形のような敬礼をさ

れたと笑っていましたよ」

ふたつの茶碗にお茶を注ぎこみながらいった。

別れ際にした、あの敬礼のことだろう。

「ただ、いまは笑い話ですみませんが、艦内でそんな陸軍式の敬礼をしたら、まちがいに殴られますよ。海軍じゃあ、相手の邪魔にならないように、ほんの軽く顔の前に掌をあげる敬礼をするんです」

とりわけ窮屈な潜水艦の通路で、肘を張った敬礼をされては、動きがとれなくなる。

「でも、その敬礼でもこつも強い印象をうけたようだから、顔見せとしては成功かもしれませんね。それにしても、ねえ……、なにがあったのです」

いっぽうの茶碗を諏訪の前に置いて、中原はのぞきこむようにしていった。

俊一は訝しげに眼をあげた。新しい悪戯を思いついた少年のような顔が、そこにあった。

「どついついことですか」

茶碗に手をのばすともなく、尋ねた。

「とぼけちゃいけないな、いまさう」

中原は意味ありげな笑いを漏らして、

「あなたが、報道班員になった背景ですよ。いったい、どんな事情があったのです」

「事情といつても、べつになにも……」

と、俊一は口ごもった。
中原はいった。

「電文を受け取ってから、あなたのことは士官のあいだでちょっとした話題になっていたんですよ。この時期に、潜水艦まで使って急遽報道班員を南方に運ぶなんて、どうしたって変ですからね。しかも、基地に問い合わせるとあなた——、推薦人が山室中将で保証人が江藤高級参謀というんでしょう。失礼ながら、毎日や朝日といった中央の大新聞の記者ならまだしも、あなたは聴いたこともない田舎の新聞記者だ。そのために、こんな錚々たる面々が名を連ねるなんて、やつぱり尋常なことじゃありません」

通常、報道班員は新聞社などの要請をうけて、軍からの委嘱というかたちで選ばれる。前線の状況を報告し、国民の意識を鼓舞することが目的であるため、新聞記者だけではなく文筆家や画家が報道班員になる例も多かった。むろん彼らは、軍からさまざまな便宜をあたえられるが、同時にそれ以上の制約もうけた。結果として、彼らの報告は事実よりもむしろ、軍の要求を優先させたものにならざるを得なかった。それもまた巧妙な報道管制の一環であり、国民意識はそうして歪んだ方向と導かれていった。

「だいたい、地方の小新聞じゃ、あなたがいくらいいい記事を書いたって、読む人間の数はたかが知れているじゃないませんか。そんな人物を、わざわざ南方に送るなんて」

と、中原はからかうようないいかたをした。

「それも、あなたの背後には山室中将や江藤参謀がいる。軍縮パージで退役されたとはいえ、山室さんはいまでも巡洋艦の戦略運用については第一人者です。彼の所謂“山室法典”は現在でも海軍大学の教科書として使われているはずですよ。軍のなかに信奉者も多い、たいへんな大物だ。江藤参謀のほうもあのおりの切れ者で、将来が約束されているひとだ。そんなひとびとがふたりならんで、ひとりの田舎記者を大慌てで南方に送ろうとしている。これは、なにかあると勘ぐりたくなるのがあたりまえじゃありませんか」

「そんな……」

俊一はちいさく頷を振った。

「特別な理由なんて、ありませんよ」

好奇心を剥きだしにした中原は、容赦なくつづけた。

「白状しちやいなさいよ。これから長い間、厭でもいっしょに暮らすことになるんだから。なにか日本国内にはいられなくなるような理由でもできたんですか」

4

そう……。そのとおりだった。

自分でも到底信じられなかったが、彼のまったく知らないところで、突然その日本にいられなくなる事情ができあがっていた。彼がそれに気づいたとき、すでにどうにも動きのとれぬ状況になっていた。抵抗する術もなかった。強大な力が、彼をがっしりと羽交い締めにして、押し潰そうとしていた。

将棋大会の取材を終え、まっすぐ社にもどった。

運命がはつきりと軌みをあげて回りはじめたのは、そこからだった。

広い編集部室だが、社会部や政治部はともかく、部屋の隅を占める文化部にはさすがにこの時間まで残っている記者はほとんどいない。文化部長は社会部長の机の傍らに立って、なにやら話こんでいたが、俊一の姿を認めるとちいさく声をあげた。

フィルムを現像に出し、記事を書くべく机につくと、文化部長が小走りに近づいてきた。

「社長が呼んでいるぞ。記事はあとでいいから、すぐいってくれ」

と、彼は肩越しに俊一にいった。

椅子から腰をもちあげながら、俊一は不思議そうな表情で彼を見かえた。

社長から直に呼ばれることなど、これまで一度もなかった。ちいさな会社だが、社長と顔をあわせることは一年のあいだに数えるほどしかない。

「なんですか」

「さあな」

部長も不審そうに頸を捻った。

「おれにもわからん。しかし、編集長もいっしょだから、難しい話らしいぞ」

俊一は手頃の時計にちらりと眼をやった。明日の朝刊の最終締め切りまでには、まだ三時間あまりある。短い記事だから、一時間もあれば充分だろう。

部長が、急かすようにいった。

「いそいでくれ。記事のほうは、おれがなんとかする」

その声を背中で聴いて、俊一は部屋を出た。得体の知れぬ不安が、胸をかすめた。記者たちの視線が、いっせいにその背中に集まるのを感じた。

社長室はビルの最上階にある。

部屋にはいると、社長と編集長がいっせいに妙に緊張した顔をこちらにむけた。

テーブルのうえには、新聞が幾部かならべられている。

「ああ、諏訪君」

と、編集長の武田が、ソファを掌で示した。

遠慮がちにソファに坐ると、

「ちょっと困ったことになった」

社長の村上がいった。もともと肝臓が悪く、漢方薬を煎じたどす黒い液体をひっきりなしに呑んでいるが、その渋皮のような顔色がいつもよりすこし濃い。

それが判断に悩んだときの癖だが、武田はポマードで固めた髪をしきりと指で掻きあげている。机に載った新聞と俊一の顔を、視線が忙しく交互に移動する。

「きみの連載記事に、軍からクレイムがきた」

「は……」

わけがわからず、俊一は腑抜けたような声をかえした。

「いや、こちらも困惑しているのだ。軍の真意が、まるで掴めない」

このところ報道機関に対する軍の干渉が強くなっていることは、俊一も知っている。その度合いはもはや完全な報道規制といってよく、軍の指示によっていくつかの出版物が発禁処分をうけ、再三の処分によってついには廃刊に追いこまれた地方新聞もある。

「これまでの例では、軍の方針を批判したり、戦争の拡大に反対したものはばかりなのだが……、どうも納得できない。政治面や社会面ならともかく——」

と、武田は当惑げにいった。

「きみの連載は文化面だし、それも非常に短いものだ」

俊一の記事は、毎週日曜日に掲載される。話題の映画紹介や欧米の芸能雑誌のトピックスをそのまま訳した記事で、詰め将棋やクイズなどとともに載るのだから、たしかに娯楽色は強い。そこを捉えて時勢に不都合だと非難されてしまえば否定はできないが、その程度の内容の息抜き記事は記事はこの新聞にもあるものだ。

軍の干渉が厳しくなってきたからは、俊一もそれなりに気を配っていたし、社内でもかなり神経を使って自主検閲をおこなってきたが、実際内容について問題点が指摘されたことはいままでもなかった。

武田は唸るようにいった。

「いちおうきみの記事を読みかえしてみたのだが、なんでこれに文句がついたのかさっぱり見当がつかん。これにクレイムがつくのでは、日本じゅうどの新聞もまともに発行できなくなる。いくらなんでも、無茶苦茶ないがかりだ」

俊一も不愉快な気分だ、

「いったい、どこが気にいらぬというのですか」

「それが……、むこうもいまひとつはつきりしないのだが、どうも先々週の記事あたりに問題があるらしい。アメリカ映画の“風とともに去りぬ”をとりあげたものだ」

それは欧州で戦火が拡大している時期に、膨大な費用を惜しげもなく投下して総天然色の超大作をつくりあげたハリウッドと、わずかな銀を採取するために名作駄作おかまいなしに旧作のフィルムを洗ってだいなしにしてしまう日本映画界とを対比したもので、俊一自身はたいした意識もなく書きあげた記事だ。もうすこし分量が許されれば皮肉のひとつも加えたところだろうが、結局はさまざまデータの羅列で終わってしまった。

だから、軍から責められるような部分は思いあたらない。

「風とともに去りぬ」が歴史的な当たりをとったことも、日本の映画会社が旧作のフィルムを供出していることもちよっと詳しい者なら誰でも知っている事実だ。べつだん、驚くほど新しい内容ではない。文化保護という立場から、もっと真正面から日本の映画会社の姿勢を批判したのも、これまでにくらもある。いってみれば、きみの記事はそうしたものの要約にすぎん。それなのに、いまさらなんできみの記事だけが問題になるのか……」

そういつて村上は、皺だらけの顔をしかめた。

「むこうにいわせるよ、きみの連載すべてがいかにとこうくるんだ。問題があるのなら、あらためるにはどうすればいいのか、それを指摘してくれと抗弁したが、とりつく島もない」

まだ事態がはつきりと把握しきれなかったが、

「申し訳ありません、わたしのためにとんだご迷惑をかけてしまつて」

と、とりあえず俊一はふたりに深く頭を下げた。

しかし村上は、かたほうに掌をかざして俊一を制し、

「謝ることはない。これはならず者とおなじいいがかりで、弾圧だよ。こんな不当な攻撃に屈しては新聞などやる意味はない。こちらも、いろいろの手を尽くしてみるつもりだがな、それよりわれわれが心配しているのは、きみのことなのだ」

「わたしの……」

俊一は戸惑った表情になった。

「連載は中止しますし、社に影響があるなら、どのような処分でも——」

「慌てるな」

厳しい口調で、武田は俊一を遮った。

「社長もおっしゃっているが、必要であればわれわれは社の命運を賭しても闘う。だがな、むこうの話を聴いていると、狙いはわれわれではなくきみ個人にあるようなのだ」

「そうなのだよ。軍は、きみを標的にしているらしい」

と、村上は細い溜息をついた。俊一の胸裡を探るような眼つきになった。

「きみはなにか、軍から睨まれるような心当たりがあるのか」

「いいえ、そんなものはまったくありません」

あの將軍の刺し貫くような鋭い視線がふと意識の底に甦ったが、俊一はそう応えた。どう考えてみても、軍部から敵視されるような憶えはない。

「だいたい軍人には知り合ひもすくないし、彼らと接触したこともほとんどない。

村上はひとつうなずくと、

「そうだろうな。きみのことは子供のころから知っているが、軍と悶着を起こすような性格ではない。しかし、この件に関しては、そう考えざるを得ないのだ」

それを捕捉するように、武田はいう。

「軍はわれわれを呼びつけ、きみの記事を公然と非難した。これがさらに強硬になってくれば、こちらとしてもやはりなんらかの措置をとらなければならなくなるだろう。むろん連載は中断され、軍が眼を光らせているとなると、きみの記事は極端に制限される。社内的にもきみは難しい局面に追いこまれる。むこうの真意は、おそらくそのへんにあると思われる」

「待つてくださる」

俊一は茫然としていった。

「そんなふうにしてわたしを叩いて、なんの得があるというのですか」

「それはわからんが、そんな状態がつづけば、普通ならきみは社にとつてもきわめて迷惑な存在になってくる。こちらが餓首するか、あるいはそんな立場に耐えきれずきみが辞表を提出するか——。どちらにせよ、きみは社を離れることになる」

「そうでしょうね。そんなふうになつてまづ、とつてもいられませんよ」

俊一は武田にむかつてうなずきかえした。

「いまでもわたしは、さつさと辞表を書くべきかどうか迷っています」

だが村上は、俊一をまっすぐに見据えて叱りつけるようにいった。

「馬鹿をいうな。それこそ、むこうの思う壺だ。たぶん軍は、きみがわれわれの手許から離れた段階で微

兵をかけてくる。あいつら得意の、懲罰的召集という卑劣なやりかただ。わたしは親父さんとの約束で、きみをあずかったのだ。この会社にいるあいだは、どんなことをしてもきみをこんな不条理な暴力から護る責任が、わたしにはある。だが、きみが社から離れてしまつては、わたしも迅速に対応しにくくなる」「でも、なんだつてわたしが……」

「徴兵権を握っている陸軍は、しばしばその方針への反抗者に対する懲罰として召集を利用した。その懲罰的召集によつて入隊させられた者は、内務班の凄惨な私的制裁の対象にされ、たいいていはもつとも危険な最前線へと送られた。

いふなれば、それは軍による合法的な殺人にほからならなかつた。

軍はそうした手段を駆使して、反体制分子を蚤のごとく捻り潰した。

恐怖がおおきな雲のように、俊一の胸に沸きあがつた。それはたちまちのうちに、彼の意識のすべてを埋め尽くした。俊一はごくりと音をたてて口にたまった唾を飲みくだし、ひりついた喉を湿らせた。

それにしても、なぜ自分が――。肝腎のそのことが、どうにもわからない。

それが、黒い恐怖をまたいつそう膨れあがらせる。

蟬のような色になった俊一の顔をみつめて、村上はいった。

「それはまだなんともいえんが、わたしの推測はまず、当たらずといえども遠からずというところだ。そうでなければ、いまこの時期に軍が無茶な難癖をつけてきた理由がわからん。とにかく、むこうの狙いはわたしのとあいだを引き裂いて、きみを孤立させることだ。武田君とも話しあつたが、そう考えておいたほうがよさそうだ」

「しかし、それならかえつて、わたしが社に残ることは――」

もし村上の言葉が正鵠を射ているとすれば、この会社そのものが軍を敵にまわしてむきあうことになる。とても勝ち目はなさそうだった。

しかし、そんな懸念を振り払うように、むしろ村上は闘志に満ちた口調でいった。

「軍がわれわれにむかつて狂犬のように牙を剥いてくるのなら、相手にとつて不足はない。わたしは、全力で闘う。勝つ自信はある。だが、社を離れてひとりぼっちになったきみに、なにができるのだ。わたしや武田君がいれば、軍の横暴に対してもさまざま手段を講じることができる。わたしだつて、軍の首脳や政治家に何人も知己がいる。そのなかには、きみの親父さんの親友だつているのだ」

村上はなにかを決意するように、きつく表情をひきしめた。

「彼らだつて、きみのことは心配してくれている。いざとなれば、わたしは彼らになにもかもうちあけてやるつもりだ。そうすれば、こんな田舎にいる軍人なんてひとたまりもない。だから、きみはどんなことがあつても、この社を離れてはならん」

「もちろん、まともに軍と喧嘩するわけにもいかんから、しばらく記事を書くことはひかえてもらう。それは承知しておいてもらいたい」

と、武田は俊一の肩を乱暴に掴んで、からだを揺さぶりながらいった。

「直接に召集をかけるのではなく、きみの連載に根拠のない曖昧ないがかりをつけるなんて、搦め手から責めてきたのは、この一件の糸を操っている人間が、きみと社長の関係を知っているからだ。社長を巻き込んでしまえば、事態は複雑化し思わぬ方向に紛糾する。それを嫌つて、彼らはきみと社長を切り離し、孤立させようとしたのだ。むこうが目的を達するには、社長が最大の邪魔者になる。きみに召集令状を送りつけることは簡単だろうが、社長はそれをあっさり反故にしてしまう力を持っている。現実には、いろいろな手をまわして、うちの社員の召集を最小限に抑えている。うちからは、家族持ちや親の面倒を看ている長男がひとりも召集されていないことは、きみも知っているだろう。だからこそ、きみと社長を離反させるために、こんなあからさまな方法をとつてきた」

「どういふことです、それは……。糸を操る人物つて――」

「だからな、きみにとつては不本意ないいかたかもしれないが、この程度の記事を――」

と、武田は机のうえの新聞を掌で叩きつけた。

「いちいち細かく検閲し、クレイムをつけるほど軍は暇ではない。しかも、そのクレイムもどこから見ても無理で、強引きわまりもないものだ。だが、それを承知で軍は動いてきた。それはつまり、軍に対して強い影響力を持つ者が、なんらかの意図できみを社会から抹殺してしまおうと謀らんだのだ。その要望をうけて、軍が動いた。そういうことなのだろう。懲罰召集されていったん前線に送られてしまえば、それはもう死んだも同然だ」

「ただひとつ誤算があるとすれば、わたしときみの親父との繋がりを読み違えたことだ。きみが己の力だけではどうにもならぬ窮地にあることがわかった以上、黙っている眺めているようなわけにはいかん。わたしは親父さんとの約束どおり、全力できみを護る。わたしには、それだけの義理と恩がある。これを座視するようでは、人間ではない」

と、村上はきつぱりといきった。

「あきらかに、村上は本気だった。それがどれほど巨大な敵であれ、いったん覚悟を固めた彼が、途中で挫けることはない。数十年にわたって彼につき従い、いまではその右腕ともいえる存在の武田は、それを知っていた。」

村上と諏訪の父親とのあいだにどのような関係があったのか、それについては彼はなにも語らない。しかし、その友人のひとり息子を護るためなら、彼は宮々と築きあげた会社のすべてを躊躇なく賭して、すこしも悔やまないだろう。

「ともかく、きみはしばらくのあいだおとなしくしていることだ。こちらが動かなければ、むこうからならんらかの手を打ってくるだろう。時間を稼ぎ、そのあいだにわたしもできるかぎり背景を調べあげてみる。かならず、状況を打破する糸口が見つかるはずだ」

力強い村上の言葉に励まされ、俊一は社長室をあとにした。

村上がこんなときに適当な言辭を弄するような男でないことは、彼にもわかっていて。けれども、それもわずかな救いにしかなくてくれなかった。

衝撃があまりにおおきすぎたのだろう、混乱はすこもおさまらなかつた。

この時代の青年のひとりとして、いつかは戦場で敵弾に倒れるであろう運命を、意識のどこかで予感している。

いまでもこそ戦火は大陸に限定されているが、この状態がいつまでもつづくものでないことは白痴にも理解できた。アメリカとの衝突はもはや、避けようのない段階に到達している。むろん政府はさまざまな方策で事態の逆転を図っているが、対米平和論者へのあいつぐテロを見ても、すでに軍のみならず社会の空気そのものがそちらにむけて奔りはじめてしまっていた。この勢いは、おそらくもう止めることはできない。

対米開戦となれば日本は世界を相手に闘うことになり、徴兵の規模も現在とは比較にならぬほどおおがかりなものになるだろう。俊一ひとりが、そのなかで例外でいられるはずはない。

戦場での死が、ついそこまで迫ってきている。

そのことは納得しているものの、いざ徴兵の網がみずからの頭上に投げかけられたことを知ると、狼狽せずにはいられなかつた。

しかも、軍は彼を懲罰召集の対象にしようとしているらしい。まったく、身に覚えのないことだった。

いざれ兵隊にとられることはやむを得ないが、こんなふうは無実の罪で絞首台にあげられるようなかたちで徴兵され、戦場でぼろ布のごとく殺されるのではやりきれない。

恐怖がいつぱいに両腕を拡げて、骨も折れ砕けんばかりに彼を抱きしめていた。その夜は、とても寝つかれなかつた。払暁にほんのすこしまどろんだが、すぐに悪夢に魘されて跳ね起きてしまった。全身が、べつとりと粘った汗に濡れていた。

なにひとつわからぬままに、そんな日々がつづいた。

ほとんど睡眠がとれず、食べ物の味がまるで判然としなかつた。なにを口にしても砂のような味しかせず、食欲が湧かなかつた。その数日で、事情を知らぬ同僚や文化部長が、真剣な顔で病院での診察を勧めるところに、げっそりと痩せた。

そんなとき、俊一はふたたび社長室に呼ばれた。

このあいだのふたりだけでなく、もうひとり白髪を端正に撫でつけた老人がそこにいた。節くれだつた竹のステッキを両掌で軽く持ち、背筋をびんと伸ばしてソファに坐っている。

誰であるのか、名前すらわからぬのに、おかしなことにその顔にはかすかな記憶があった。

「ひどく痩せたな」

と、その老人を紹介しようともせず、村上が哀れむようにいった。

「無理もなからう。普通の神経では耐えられるようなことではない。だがな、その苦勞も今日で終わりだ。わたしもあれだけの見栄を切つたのだから、ただ漫然とときをすごしていたわけではない。この問題のおおかたの事情は、把握することができた」

「あ……」

なんといいていいものかわからず、俊一は村上を見つめた。
穏やかなくちぶりで、村上はいった。

「順を追って話そう。実はな、きみにはあえて報らせなかったが、二日前に武田君がこの地区の軍司令官に逢った。むこうから、面会の要請があったのだ」

将棋大会で逢った、あの厳めしい髭面の男だ。

彼を追いつめようとしている敵は、この地区の陸軍を掌握する最高指揮官までを味方につけているということなのだろうか。しかも、むこうはその最高指揮官さえひとつの駒のように動かす能力を持っていた。不安を隠しようもなく、俊一はゆっくりと武田に顔をむけた。

「内容自体は、たいした話ではなかった。率直にいつてしまえば、連載は中断したものの、きみは者を辞めないし、こちらもきみを処分する気配がない。それで、こちらの意向に探りをいれてきたのだろう。さすがに地区司令ともなると、直接的にきみをどろしろとはいわない。ただ、話のなかでそれとなくきみの名前を持ち出したり、時勢を鑑みて新聞への検閲も強化せざるを得なくなるだろうなどと、やんわり脅迫してきた」

と、武田は苦笑をのぞかせて、

「要は、早く臆首してしまえということだ。そうすれば、多少検閲に手心を加えてやる——。もちろん、曖昧にぼかしてはいたが、むこうの真意はそんなところだ。まあ、地区司令までがこのこ舞台上で登場してきたのにはいささか驚いたが、まともにつきまう気はなかったので適当にはぐかせて帰ってきた。しかし、彼と逢ったことは、まんざら無駄ではなかった。たぶん事態が進展しないことに焦ったのだろうが、むこうの中核がみずから姿をあらわしたことで、われわれの推測がある程度裏付けられたからだ」

「きみにつたえなかつたのは、余計な心配をさせたくなかつたからだ」
村上も柔らかな表情になって、

「それでなくとも、きみは充分に苦しんだ。さて……、ここから肝腎の話になるが、なにを聴いても混乱せぬよう、おちついてくれ。きみに逢った夜から、さつそくわれわれはさまざまな方面に情報を求めた。わたしも武田君も、もとは社会部や経済部で訓練を積んだ新聞記者だ。秘密の裏をさぐるのは、おてのみのだよ」

「そうして得た情報を総合してみると、おのずとひとつの絵図が浮かびあがってきた」

そこで武田は間をとるように机のうえの煙草入れを開け、俊一にも一本すすめた。

「きみには聴き辛い話になるだろうが、結論をいつてしまえば、この謀みの糸をひいていたのは、きみの母親とその兄という人物だ」

「なんですって……、そんな馬鹿な」

と、俊一は声を詰まらせ、タバコに噎せかえった。

武田はひときわ語気を強めて、

「おちついてくれ。残念だが、これは事実だ」

「冷静になって考えれば、きみにも思いあたってくるはずだ」
腹のあたりで掌を組んで、村上はソファにもたれかかった。

「すべての原因は、きみの親父の遺した財産なのだ。端的にいえば、会社の経営権だよ」

そんなことはあり得ない——。俊一は、大声でそう否定したかった。

会社の経営権といわれても、そんなものに俊一はこれっぽっちも関心がない。だから、会社の運営はそっくり叔父に託し、利益配分をうけとるかたちにしたのだ。

その利益配分の額についても、同様にたいした興味はなかった。

「会社の経営権は、現実には叔父が握っているではありませんか」

「それはあくまで形式的なものにすぎない。親父さんの遺言状をもう一度つぶさに読んでみる。彼は資産の大部分を会社の株に変え、きみに遺している。きみはいまも、あの会社における圧倒的な筆頭株主だ。それに対し、母親にあたえられたのはいくばくかの預金と、あの家屋だけだ。株といっても、ほんのひと摘みだし、その兄という人物に至っては吹けば飛ぶような株しか保有していない。彼は雇われ社長にすぎないし、それを雇っているのはきみだ」

俊一は呻くような声を漏らして、こめかみのあたりを指で压えた。重い痛みを感じた。

それは、鼓動ひとつごとに、すこしずつ強くなっていく。

「あとからじっくりと考えてみるがいい。きみはいい、大学でなにを勉強してきたのだ」
困惑した俊一のようすに、村上はあきれたような顔をした。

「たしかに母親の兄は社長だが、その地位はきわめて脆いものだ。きみの意志で、彼の頭はいつでもすげ替えることができる。その権能をきみは持っているし、保有株式比率をみれば誰もその決定に逆らえないともかく、これだけは理解しておいてくれ」

俊一は頼りなく、こくりとうなずいた。

村上の言葉どおり、彼にはその権限があたえられているのだろうが、しかしそれを実際に使ってみようという気はすこしもない。面倒な会社経営にかかわりあうことなく、それなりの利益配分を貰ういまの境遇で、充分満足だった。

俊一の反応の鈍さに、村上は吐息をまじえながら説明した。

「きみはそうやって暢気に構えているが、彼らにしてみればその立場の弱さは、放置しておけるようなものではなかった。その日の風の吹きようで、きみの気分がちよつと変化すれば、彼らはその地位から追放される。しかも、そうなると思慮なく背任横領が明るみに出てしまふとなると、なおさらだ」

「まさか……、あの叔父がそんなことをしているなんて。利益はちゃんとあがっていますし」

「きみは、とことんおひとよしらしいな。その利益は、本来計上されるべきものの半分程度にすぎないのだ。彼らは会社の金を遣って、軍事物資の横流しで私服を肥やしている。もちろん、軍の内部にもその協力者はいらる。いうまでもなく、地区司令もそのひとりだ」

「地区司令がわざわざ動いたのも当然だ。自分の尻にまで、火がつくのだからな」
と、武田がいった。

「背任はまだしも、軍備物資の横流しとなると重罪だ。とくに、軍側の責任者は死刑もあり得る。彼らにとつてきみの存在は、頭のうえでぶらぶら揺れている大岩なのだ」

「でも……、たとえ叔父がそんなことをしていたとしても、わたしはそれを追及しようなんて思つてはいませんよ。会社が倒産するようなことでもなればわかりませんが……」

俊一は不服げに唇を尖らせた。

「そうなつたら、きみは負債の整理でそれどころではなくなる」

俊一の愚かさを咎めるように、村上は冷ややかにいった。

「経営者のやりかたによつては、きみが責任を問われて刑務所にはいるようなことにもなりかねない。ともかく、きみの母親とその兄は、軍部と結託し、きみの会社を利用して汚れた金を稼いできた。こうした悪事は、終点がない。その甘い汁をもっと多く、より安全に吸いつづけるためには、どうしてもきみという人間が邪魔になる」

俊一の一言で、彼らの天地はまさにその足許から真逆さまにひっくりかえってしまう。その懸念は、俊一が生きて社会にいるかぎり彼らにつきまとうのだ。

「わかるかね、彼らが枕を高くして眠るためには、きみを仲間ひきこむか、それともこの世界から消滅させてしまうしかない。それで、彼らはあとのほうの手段を選んだわけだ」

「信じられません。叔父のことを疑つてみたこともなかったのに——」

「あるいは、彼らがきみの能力を過大評価しすぎたのかもしれない。けれども、そんなきみだつていずれば彼らの動きの怪しさに気づいたはずだ。たとえば、もしきみが母親とその兄の関係が、たんなる兄妹のそれではないことを知つたとしたら、どうなるだろうか」

と、村上は謎めかしたいいかたをした。

いくら鈍感でも、その言葉の意味するところは、俊一にも理解できた。

「それは、ちよつとひどすぎますよ。そこまで勘ぐってしまうのは——」

俊一は抗議するよういった。なんといつても、その母親は父が愛し、新たな妻に択んだ女なのだ。その言葉は、父親への侮辱のようにも響いた。

村上は宥めるように、

「昂奮せずに聴け。そんなふうに思いたいのはあたりまえだが、真実は残酷なものだ。われわれはきみの母親の戸籍を、徹底して洗いあげた。たしかにふたりは兄妹だったが、血の繋がりはまったくなくない。彼女の両親はそれぞれにひとりずつ子供を連れて再婚している。母方の子供が年上だったので兄になり、父方の子供が彼女だ。彼女はこの街に腰を据えるまで、芸者としてあちこちの色町や温泉を転々としているが、つねに兄という人物がその傍らにいた。ふたりがそこで、いくつか詐欺めいた行為をはたらいたこともわ

かっている」

「さぞシヨククだろうが、これはつくりごとではないのだ」

短くなったタバコを灰皿で潰し、武田がさらにいった。

「証拠を見せろというのなら、それも用意できる。軍部をまきこんで彼らが恥ずべき背任と横領行為をつづけていたことも、きみの母親とその兄が、世間一般の兄妹関係ではないことも、みな立証できるのだ。とりわけ、ふたりの関係については、われわれでさえ、戸籍をざっとあたるだけで確信を得た。きみはまだ耳にしたことはないだろうが、彼女がいたある温泉街の置屋ではそれに関しての噂も囁かれていたほどだ。こんなことは、長くは隠しておけんものだ。近くにいたきみも、きっとそれに気づいただろう」

「厭な話だから、あまり詳しくはいわんが、ふたりの犯した詐欺行為で、彼女の肉体が有効な武器になったらしいこともわかっている。今度の軍との一件でも、やはり積極的に司令と接触したのは、彼女のほうだったようだ」

両掌で顔を覆うようにして、村上はようやくとこちらに届くほどの低い声でいった。

5

将棋大会での光景が、一瞬俊一の脳裡をよぎった。こぼれるほどの豊満なからだをくねらせ、笑顔とともに司令に近づいていく母。それを、蛇のような眼で一瞥する叔父。

まだすんなりと納得できるものではなかったが、しかし、村上の言葉は嘘ではなさそうだ。そう考えれば、たしかにすべての辻褄はうまくあつてくる。また、村上がここまで強く断言する以上、彼らは母や叔父の陰謀について確固たる証拠を握っているだろう。

再婚以来、彼の眼からは、父と母の仲はとても睦まじいものに見えた。

父はだらしなないほど頬を緩めて母を愛しぬいていたし、母はその幅広い背中に隠れるふうにして、いつも物静かにうつむいているような女だった。

その姿は、偽りの仮面でしかなかったのだろうか。彼女がはじめからその財産だけをめあてに父を騙すつもりで接近したのだとしたら、それでは父がすこし哀れすぎる。

「おまえの父親も、あの女の武器には眼が眩んだということだな。だからわたしは、ふたりの再婚には反対したのだ。だが、おまえの親父はわれわれの言葉など耳にはいらぬほどのぼせあがってしまったていた。あれだけの男でも、女には盲目になる」

と、吐き棄てるように村上はいった。しかし、その口調にはどこか寂しげな響きがあった。

おなじ生き物として、そうした男の愚かさを心の底から責めきることはできないのだろう。

「けれど、さすがにしまいにはおまえの親父も、あの女の本性に気づいていたらしい。それで、ああいう遺言をつくり、財産の大半を株にしておまえにのこし、会社を護つたのだ。彼女たちにすれば、とんだ計算違いだ。あの女の取り分は、意外なほどすくなかった。だからこんどは、おひとよのきみをなんとか誑かそうとした。だが、彼女としても、さすがにその強力な武器をきみに使うことははばかられたのだろう。それでは、ほんとうの畜生だ。しかし、きみはさほど金銭欲は強くない、となると仲間にはひきこむことは難しい。そこで、彼らはきみを抹殺する途を採った。もちろん、実際に殺すわけではない」

都合のいいことに、地区の軍司令官が彼らの一味だった。その力があれば、俊一ひとりを徴兵することなど雑作もない。いったん軍という巨大な組織のなかに蹴りおとしてしまえば、そこから這い逃れることは絶対に不可能だったし、たかが兵卒一匹煮ようと焼こうと彼らの思うがままだ。けれども、その深い陥穽の瀬戸際で、俊一は村上から襟首を掴まれた。

「それひ……」

俊一はかすれた声でいった。

「社長はどうされるつもりなのですか。彼らを訴えるのですか」

「いや……、そこが迷うところなのだ。彼らを訴えることは簡単だし、完璧な証拠も揃っている。しかし、これが公になったら、軍は收拾のつかぬ混乱に陥る。それは、火を見るより明らかだ。醜聞によって軍の威信は泥にまみれ、きみの会社も無事ではすまない」

村上は鼻翼を指先で摘むようにして、武田のほうを見やった。

武田が、その後をひきとった。

「胆を割ってしまえば、社長はこの件をなるべく穏便に処置してしまいたいと考えておられる。事件を公表してしまえば、きみの会社だけではない、わが社もまた陸軍全体から深い怨みを買ひ、傷だらけになるだろう。大勢の社員の前途を踏まえれば、それはあまり望ましいことではない。軍からともに攻撃目標にされては、いくら社長の人脈があっても、ひとたまりもない。そこでだ、われわれは彼らとの取引を考慮している」

「おっしゃることはわかります」

と、俊一はうなずいた。おそろくそれが、もっとも妥当な解決策なのだろう。

村上はいった。

「取引という印象が悪いが、ともあれきみを彼らの陰謀から救うという目的は達したのだ。それだけでも、充分としておいたほうがいいのではなからうか。これ以上事態を荒立てるのは、むしろ利口なことではないようにわたしには思われる。アメリカとの開戦がいよいよ不可避なこの時期に軍を混乱させ、そのうえきみの会社にもおおきな打撃をあたえることに、いったいなんの意義があるのか――。きみの親父の名誉ということも、考えなければならぬ。誤解されては困るが、わたし個人やこの新聞社が返り血を浴びることを惧れているわけではない。ときには硬直に正義を貫くばかりが、ものごとの収拾策ではないということだ」

「わたしとしても、一度は母と呼んだ女性を、あえて司直に委ねることは気がすみません」

それは、俊一の正直な気持ちだった。

村上は満足そうにうなずいた。

「芸者だったあの女を座敷に招いて、きみの親父と最初にひきあわせたのはわたしだ。したがって、彼女についてはわたしも若干の責任はあるからな、きみがそうした考えかたになってくれたのはありがたい。彼女とその兄には、多少の金をくれてやってこの土地から去らせる。そのあたりが、おとしどころだと思う。軍のほうも、東京のわたしの知人を動かせば、地区司令の病氣退役程度で処理することが可能だ。それなら、誰も致命傷はうけない」

「わたしなどがどうこういうより、社長のお考えどおりになさってくださいたほうが……」

そうやって下駄をまるごと村上にあずけてしまったほうが、俊一にとっても気楽だった。

「それで、なにもかも丸くおさまるだろう。今後の会社については、きみにはまるでその気がなさそうだから、わたしが然るべき人物を見つけて経営をまかせる。もともと優良な企業だから、それでまたぐんと成績は伸びるだろう」

そこで村上は、話にひと区切りつけるように、ぱんと音を鳴らして両掌を叩きあわせた。

「そこで――、残るのは、きみの扱いからだ。きみにはやはり、しばらくのあいだ社を離れてもらわなければならぬ。きみにとっては、そのほうが無難だ」

この言葉には、俊一自身よりもむしろ武田のほうが驚いたようだった。

「どういうことですか、それは。たしかに世間の口に戸はたてられないといいますが、彼の母親やその兄のことについて、さまざまな憶測が流れるでしょう。その点諏訪君にとっても多少は辛い状況に置かれるかもしれませんが、なにも社を……」

と、いささか不審そうな表情で、武田は訊いた。

村上はいった。

「もちろん、諏訪君にはなんの罪も責任もない。母親の兄という人物を不用意に信用してしまったことは失点だろうが、彼の若さを考えれば無理もない。問題はまずまちがいなく、われわれの予測しているかたちで決着がつく。わたしには、その確信がある。しかし、諏訪君の母親とその兄、そして軍の地区司令の首謀者三人を追放してしまうだけで、今後の彼の安全を保証できるだろうか。わたしの懸念は、そこにあるのだ。この件には、地区司令という軍の最高権力者までが絡んでいたのだ、その周囲にはまだ何人もの仲間が潜んでいると考えておかなければならない。むしろ、指揮者を失った彼らにはもうたいした力はない。だが、それでも闇夜に諏訪君の背中を斬りつけることはできる。とんでもない逆恨みというやつだが、その危険は否定できない。この際、適当な期間諏訪君にこの街を離れてもらうことが、彼の安全を担保する意味でも、もっともいい方法だとわたしは思う」

心外そうな顔のまま、武田は抵抗するように、

「社長の考えはわかりますが、ここで諏訪君をひとりきりで抛りだしてしまうのは……」

「いや……」

村上はかたほうの掌をかざして、武田を遮った。

「そんなことをするつもりはない。諏訪君の今後に関しては、わたしも考慮している。そのためにわたしは、このかたを頼んだ」

と、村上はたちあがって、隣の老人をふたりに紹介した。

「いまは退役されてしているが、海軍中将の山室哲大氏だ。氏は、わたしや諏訪君の父親の共通の友人でもある。独断だったが、彼にはわたしからすべてをうちあげた」

ステッキを両掌でささえたまま、山室はかろく会釈した。

「憶えてはいないだろうが、俊一君とはもう二十年以上前に逢ったことがある。まだ、きみが学校にあがる前のことだ。この膝に抱いてやったこともある。立派になったな」

記憶の片隅に、彼の膝に載ったときに嗅いだかすかな潮の香りが甦った。

俊一はいった。

「ぼんやりとですが、憶えています。膝に抱かれたとき、海の臭いがしました」

「あのときは重巡の艦長をしていたからな。一年の大半を海暮らしだった。からだに海の香がしみついてしまったのだろう。あの匂いは、なかなかとれてくれない」

と、山室は俊一にむかって、優しいげに微笑んだ。

「わたしも村上君から突然相談をもちかけられたが、詳しい話を聴いて愕然としたよ。最初はあり得ないことだと思ったが、いろいろと証拠を示されるに至って、どうにもこれは否定しようのない事実だと認めざるを得なかった。民間と結託した地方軍の腐敗については、なにかと聴き及んでいたこともないではなかったが、実態がここまで腐っているとは信じ難かった。ましてや司令官までが連座しているなど、言語道断、絶対にあつてはならぬことだ」

一罰百戒の意味をこめ、断固として事実を公表すべきだと、そのとき山室は村上にいった。軍事法廷にひきずりだし、銃殺刑に処しても、まだ足らぬぐらいだ。山室の怒りは沸点を越え、彼はその場で陸軍の最高首脳部にいる知人に電話をかけようときえした。

「さすがにそこで村上君に止められてやむなく思いとどまったが、こんな田舎の地区司令などただ年功だけで出世してきたいわば飾り物だ。替わりはいくらでもいるのだから、軍規粛正のためにもこんな層は厳罰をもって処断すべきだと、いまでも思っている」

あらためてそのときの怒りを想い出したのか、山室はステッキの柄を強く握りしめた。

ステッキがちいさく、左右に揺れた。

「お互い、年齢をとると頑固になってくる。この爺さんを説得するのに苦労させられたが、なんとかこちらの狙いを理解してもらった。われわれとしては、気づかぬうちに彼らの罠に片脚をおとししまった諏訪君を救うことが先決なのだ。それさえ確保できれば、あとはなるべく穏便に処置してしまいたい。爺さんにいわせれば、卑怯な智恵かもしれないが――」

すこし渋い表情で、村上はタバコをくわえ、銀張りのライターを鳴らした。

山室はそんな村上をちらりと眺めて、山室はいった。

「われわれとちがって、現実の社会で生きていくには、こうした臆病さも必要なかもしれない。完全に納得できたわけではないが、冷静に考えてみれば、俊一君を救うことが先という彼の意見も、もつともだ。俊一君は大切な親友の遺したひとり息子だし、そのためになら、わたしも喜んで協力させてもらうことにした」

「退役したとはいっても、彼はまだ海軍に強い影響力を持っている。そこで、わたしは彼に頼んで、諏訪君を海軍の報道班員に採用してもらうことにした」

「その程度のことなら、いまのわたしにもなんとかなる」と、山室はいった。

「しばらくのあいだ、報道班員として南方の空気を吸ってくるのも、俊一君にはいい経験になるだろう。村上が耄碌した頭を懸命に捻って考えたにしては、なかなかうまい手段だよ。南方なら安全だし、なにより報道班員ならまず徴兵の心配はない。アメリカとの開戦はもはやどうにも避けがたい情勢にあるが、きみのような壮健が若者がそんなくだらぬ闘いで死ぬのは、あまりにもつたいなすぎ。きみたちのほんとうの闘いは、そのさきにある」

報道班員として南方に赴くそのことよりも、あっさりと対米戦をくだらぬといいい放つ山室に、俊一はす

くなからぬ衝撃を感じた。それは、武田もおなじだったようだ。

そうしたふたりの顔を見やって、山室はうなずいた。

「意外かね。しかし、茶番とはいわぬが、アメリカとの戦争はきみたちが考えているようなものにはならない。本音をいえば、戦わずにすむものならそうしたい。だが、どうもそうはいかん雲行きだ。近衛らの政治家どもは、はじめはさんざんに軍人を煽っておきながらいまになって必死に対米開戦を回避しようともがいているが、勢いづいてしまった世間の流れはもう止められん。だから、アメリカとはすぐに戦わざるを得なくなるが、これは勝てん」

山室は斬って捨てるような、にべもないいかたをした。

それが、ほんの数年前まで、日本海軍を統率すべき立場にあつた將軍の言葉だった。

「きみたちは狂信的な右翼でもなさそうだし、それなりに正常な判断力を持っているだろうから簡単に話すがね、太平洋を舞台にアメリカと戦うことは、畢竟これは海軍主体の戦争になる。ところが、陸とちがつて、海の場合は、国力、経済力の格差がそのまま戦力差になるのだ。これは、きみたちにもわかるだろう。陸での戦いは、六十の老人でも片輪者でも銃を担がせて扱ひ方を教えれば、それでいちおう兵卒として戦力になるが、海では艦船をつくらぬかぎりひとをいくら集めてもなんにもならん。戦闘で艦を失えばすぐさまそれを補充し、戦場に投下していかなければ、対等の戦力を維持することはできない」

圧倒的に国力に優るアメリカは、豊富な自国の物資と労働力で新艦の補充が容易にできる。いっぽう日本は、肝腎の鉄も燃料もすべてを海外からの輸入に依存しなければならぬ。

「むこうはなにもかも自分でまかなえるが、こちらはその原材料物資の供給地を海外でまず確保し、それを日本にまで運んでからでなければ、汚穢樽を積むポンポン蒸気さえ造れない。これでは艦の消耗を覚悟しなければならぬ。到底できるものではない。ロシアとの日本海海戦はひとつの奇跡で、あれは前例にはならん。しかもアメリカは当時のロシアより遙かに強大で、国情も安定している。こんな相手に消耗戦を挑めば、敗北は必死なのだ。つまり、相手は双葉山なみの大横綱、こちらはせいぜい小兵の閑脇といったところだな、土俵中央でがつぶり四つに組んだら勝負にはならん」

だからこそ、丸い土俵を高麗鼠のごとく縦横に動きまわり、卑劣と誇られようと蹴たぐりでも猫騙しでも、どんな技を繰り出してでもひたすら戦いつづけなければならない、と山室はいう。禪を掴まれてひきつけられては、力任せに捻じ伏せられて負ける。そういう戦いかたしかないのだ。そういつて山室は、すこし悔しげに唇を舐めた。

「戦う以上は勝つことが唯一の目的だが、しかしそれは不可能に近い難事だ。そういうかたちをとればわれわれはむろん疲弊するが、むこうもまたこちらを捉えきれぬままにあちこち蹴られて、しまいにはただっぴろい太平洋での追いかけっこに飽きてくる。こういう我慢比べのような戦いは、どちらもひどく疲れるものだ。厭戦気分というやつが、国民のあいだに蔓延してくる。そうなったら、戦意はもう持続できない」

日本が草臥れ果てて動きを止める前に、アメリカ国民を戦意喪失状態に追い込む。どうにもならぬ彼我の体力差を踏まえれば、そのほかに戦いかたはない、と山室はつづける。

「その機を逃さず、こちらがかるうじて優勢を保ったかたちで講和を結ぶ。アメリカと戦うのであれば、これしかない。最初の半年、長くて一年間を、なんとか息切れせずに動きまわる。そうできれば、勝機はある。ともかく、アメリカとの戦いでは、われわれはつきにくるほんとうの激烈な最終決戦のために、できるかぎり戦力を温存しなければならぬ」

「なんですって——。ほんとうの敵は、アメリカにあらずといわれるのですか」と、どうにも納得ゆかぬげに、武田が頷を傾げた。

「時勢に棹さすことはできないのだから、もちろん、アメリカとは戦わなければならないが、それは世界新秩序を創るための一段階にすぎない。最期の大戦争は、その後にくる。ヨーロッパ戦線は、おそらくこの半年一年でおちついてくるはずだ。すでに西欧の大部分を占領したヒトラーがその緒戦の大勝に酔い狂ってしまっていないければ、これからナチス・ドイツの戦いは英米の逆襲から獲得した版図を護りぬくためのものになる。護るのは攻めるよりも遙かに難しい。あいつぐ勝利に沸きかえっている軍や国民の意識を制御するのはたやすいことではないが、しかし、それをおろそかにして、勝利はない。たとえば昂奮と欲とにひきずられたまま、ソヴィエト・ロシアにまで本格的に侵攻するような真似をしてみれば、欧州戦線はまるで先の読めぬ混乱に陥り、勝利がどちらに転ぶかわからなくなってしまうが、ドイツもそれは承知しているだろうし、そこまで愚かではないと信じている」

超大国アメリカは戦況を一举に逆転させるだけの能力を有しているが、けれどもその力は太平洋で暴れまわる日本のためにふたつに分割されざるを得ない。ふたつに割ったひとつずつをそれぞれに相手にする

のだからこそ、英国と連携されてもドイツは充分戦えるし、また日本も広大な海で彼らを翻弄することができる。

その間にドイツが欧州で、そして日本がアジアで、その地盤を揺るぎないほどに固めてしまえば、戦争の行方はおのずと見えてくる。

「われわれのためにアメリカの戦意が衰えれば、英国は孤立し、破滅を賭けて戦わざるを得なくなる。ヒトラーが賢明でドイツの繁栄を第一義に考えているのなら、そのあたりで講和の意志を示せば、彼らは交渉の主導権を握り、圧倒的に有利な条件をむこうに吞ませることが出来るだろう。日本もおなじだ。中国はなお大陸の一部に残るだろうが、われわれはアジアの過半を抑えこみ、もはや懼れるにたる敵ではなくなっている」

その結果、世界は西欧から北アフリカを制圧した独・伊、アジアの覇者たる地歩を築いた日本、さらに米・英の三大勢力圏が鼎立する状態になる。

「それこそが、新しい世界の秩序なのだ。そしてそれが成立してはじめて、われわれには真の敵の姿がくつきりと見えてくる。いうまでもない——」

そこで山室は言葉を切り、ステッキの先端で床を衝いた。金属冠が、澄んだ音をたてた。

「この戦争をほとんど無傷で生き延びる共産ロシアだ。まだしもアメリカやイギリスの考え方とは共通の認識があり理解しあうこともできるが、共産主義とわれわれは拠つてたつ思考の根本がまったく異なっている。おなじ世界に、共存できる相手ではない」

ソヴィエト・ロシアはアメリカに匹敵する力を持つ強国だが、日本とのあいだには相互不可侵の条約が締結されている。それがあからこそ、日本は背後を襲われる危惧を持つことなく、中国正面に兵力を投入展開していきけるのだ。

「そんなものは、われわれにとつても彼らにとつても、ほんの一時の方便にすぎない。赤色革命によって国を奪いとつた時点から、彼らは東では東欧、西においては中国北東部、つまり現在の満州、朝鮮半島への南下を狙っている。すこしでも弱みを見れば得たりとばかりに、彼らはそんな条約など一顧だにせず踏み躪り、ソ満国境を越えて雪崩れこんでくるだろう。彼らの最終目的は、全世界の共産主義化にある。イデオロギイというやつは、現実の戦争よりも厄介だ。これはベストやコレラみたいなもので、知らぬうちに国民の意識を蝕み、気づいたときには燎原の火のごとく燃え広がって、手のつけようがなくなる。共産主義のアジアへの波及——、これだけは、絶対に避けなければならぬ」

今度の戦争が長引けば、それに参加した国の力はおおきく衰弱していく。相対的に、がちりと防御姿勢をかため、沈黙を貫くロシアの勢力は、戦後飛躍的に増大する。

「どちらが勝つにせよ、全力を尽くしてへとへとになったところへ、じっと力をためこんでいたロシアに攻めかかられたのでは、抵抗のしようもない。彼らのやりかたはきわめて狡猾だ。イデオロギイを武器に国をかきまわし、おなじ民族同士を争わせる。おなじ民族がふたつにわかれて存分に血を流しあつたあとでやってきて、武力ですべてを抑えつける。こんな惨劇が日本で起こることなど考えたくもない。けれども、戦争の推移によっては、その可能性は多分にある。だから、われわれは戦いを速やかに終結させ、つきにくる共産主義の卑劣な攻撃に備えなければならぬのだ」

山室はみずからにいきかせるようにきつい調子で、

「わたしや村上みたいに末の知れた老い耄れはともかく、きみたちのごとく将来有為な若い人材までが共産主義の赤い鎖に繋がれるような事態は、あつてはならない。きみたちが死ななければならぬときがあるとしたら、それは共産ロシアを滅亡させるための戦いだ。猫と鼠の駆けつこのような、アメリカとの戦争ではない。地理的にいっても、先手をうってロシアを叩き潰す闘いには、日本とドイツが最前線を担当することになる。英米の協力をうけて、東西からロシアを挟撃するのだ。それでなければ、完璧な勝利はかちとれない。ロシアの強さを侮ってはならない。現状で、ドイツの独走によるロシア侵略をわたしが懸念する理由も、そこにある。この戦争の直後になる全世界と共産主義の正面衝突、それは恒久平和を実現するために避けては通れない途なのだ。強国ロシアとの闘いは、生半可なものではない。陸も海もすべてを注ぎこんだ総力戦になり、とくに最前線に立つ日本の損耗は、かつてないほど激しいものになるだろう。兵も死ぬ。しかし、それで死ぬのなら、けつして惜しい生命ではないはずだ。きみたちはその時期を待つためにも、いまは生き延びなければならぬ」

「そういうと、いっばいに腕を伸ばして、俊一の肩を強く掴んだ。

真の敵はアメリカではなく共産ロシアだという山室の言葉を、すべて理解できたわけではなかった。むしろ、その恐怖の深さが不思議でさえあつた。

このさき半年、一年と山室はいうが、アメリカのおおきな影が目前に迫っているいま、それは遥かに遠い将来のように思われた。

しかし、肩を掴んだ山室の指の感触は、まだ憶えている。

そうして彼は、わけもわからぬままに山室や村上の敷いてくれた線路に載せられ、南方に派遣されることになった。あがらうことのできぬ、なにかとてつもなく巨大なうねりに弄ばれ、気づいたときにはこの基地にいたというのが、正直なところだった。

「どっしたんですか、いきなり考えこんでしまつて——」

顔をあげると、中原士官の明るい表情がそこにあった。

「ぐくりと喉を鳴らして、冷えてしまったお茶を呑みこんだ中原は、

「やっぱり、どうもなにか、複雑な事象がありそうですね。いいですよ、いま話したくなければ、それで。時間はたっぷりありますから、いづれ聴きだしてみせますよ。こんないかたをすると怒られるかもしれませんが、海の上では刺戟がすくないんです。なんだか、あなたに白状させることが、絶好の暇潰しになりそうだな。とにかく、みんなに紹介しましょう」

と、いかにも愉しげにいつてたちあがった。

空になった茶碗をふたつ重ねて持ちあげた中原は、こちらをふりかえっていった。

「どんな事情があつても、あまり悩むことはありませんよ。もうあなたは、逃げることもあととどりすることもできないところまで来てしまつたんです。海に出てしまつてから、潜水艦を降りるわけにはいきませんからね」

出航

1

どんな船でも出航前は慌ただしいものだが、潜水艦の場合はなおさらだった。

すこし遅く起きた諏訪俊一は、着替えもそこそこに宿舎を出ると、昨夜の約束どおりまっすぐ港にむかった。前にも述べたように、潜水艦内で個室があたえられるのは、艦長以下数名の最高士官のみにすぎない。むろん、一報道班員のために個室を割く余裕はどこにもなかった。そのため、彼には四名一室の士官室に、ベッドが用意されていた。

いうまでもなく中原祐介少尉も同室だった。

彼らと同室になるあのふたりは、機関長の井関聡大尉と通信士官の植草忠義大尉だった。どちらもウェテランの叩きあげ士官で、ゆうに十年を越える潜水艦勤務のキャリアを持っていた。あれから中原は、ふたりに諏訪を紹介してまわった。

井関は相撲とりのような体格の大男で、頭をきれいに剃りあげていた。室町時代からつづくという岡山の名刹の出身で、辛気くさい坊主を継ぐのを嫌って海軍にはいったと、豪快に笑った。

それでも頭を剃りあげているのは、いつときとはいえ仏門にあったことを忘れず、己を戒めるためだと彼はいった。しかし、それも中原にいわせれば、

「なに、床屋で頭を他人にいじられるのが厭なだけですよ」

ということになり、どうやらそちらがほんとうのところであるらしい。

この中原はみずから、

「家業のようなものだから、しかたありません」

と、自嘲的によくように、海軍士官のひとり息子で、父親は大正の末期に潜水艦司令——潜水艦は通常三隻でひとつの編隊を組む。司令は編隊の所轄指揮官で軍艦の艦長に相当し、普通は大佐クラスがその任に就く。おのおのの艦長はその指揮下に属し、職制上は大型戦闘艦の航海長あるいは砲術長と同格に処遇される。なお、日本海軍は駆逐艦や水雷艇などの中・小型戦闘艦についても編隊制を敷いているが、そこらは四隻で一組になる——までつとめていた。物心ついたころから、父親に潜水艦載りになれといわれつけ、それがあたりまえのように潜水学校を選んでいったという。

井関大尉はかつて長期にわたって中原司令のもとで勤務についた経験があり、その人柄に心酔していた。中原少尉の配属が決まったとき、それをもっとも喜んだのは井関だった。以来彼は、中原の父親代わりをもつて任じている。

見た目どおり、神経の編みかたにはいささか粗雑なところもあるようだが、性格は生一本で竹を割ったようにさっぱりしている。若い中原を一人前の潜水艦載りに鍛えあげようと懸命で、二十四時間監視して叱りつけるから、彼にとってはなんとも煙たい存在であるようだ。

「親父が頼んだわけでもないんですが、あの厳しさは正直ありがた迷惑です」

と、中原は顔をしかめ、井関に聴こえぬようにちいさな声で囁いた。

いっぽうの植草は、大学の医学生でありながら、当時新兵器として脚光を浴びていた潜水艦に憧れて進路を転じたという変わり種だった。その経験と学識を生かして、艦内では軍医役も兼務している。航海中に虫垂炎に罹った兵士を緊急手術で救ったこともあったそうだ。もともと医学生といっても、基礎課程を学び終える前に中退してしまっており、手術の成功は技術よりもむしろその度胸のたまものだったらしい。

格幅のいい、中国の大人風な雰囲気をもった人物で、笑うと眼が糸のように細くなった。

どちらもたしかに癖はあるが、とくにつきあいにくいタイプの人間ではない。

同年代の中原はともかく、わざわざ士官居室の配置替えをおこなって、ふたりを同室者を選んだのは桧垣かあるいは狩野の諏訪に対する配慮なのだろう。山室退役中将の墨付きをもらった影響は、こんなところにもあらわれている。

それから四人は植草の発案で、宿舎内の士官専用の酒保にむかった。

もっぱらビールのやりとりになったが、いちばん飲んだのは植草だった。まさに水のごとく、グラスの

空く暇がないほどの飲みっぷりだった。

それでいて、まったく顔色も変わらない。そうとうに強いのだろう。

いっぽう井関のほうは、意外なことにビール瓶半分ほどでつるつるに反った頭の先端まで赤黒くなってしまった。グラスいっぱい注がれた泡立つ液体に辟易しているようだったが、それでも愉しげに頭を撫であげながら、他愛のない話柄にもおおきな笑い声をあげた。

ただ、おなじ海軍のなかでも、潜水艦乗員がある種特別視され敬遠されているのは、事実であるらしかった。彼らはかなりの時間酒保にいたが、ほかの士官は誰ひとりそのテーブルに近づいてこようとしなかった。彼らが潜水艦乗りであることは、その生白い肌の色で一目でわかる。ほかの士官の皮膚は、潮に焼けていた。彼らのほうもまた、他の士官をまったく無視していた。

中原たちはさかんにビールを勧めてくれたが、いくら飲んでも酔うことはできなかった。しかし、彼らの話は知らないことばかりでそれなりに面白く、こんな同室者といっしょならなんとかやっていけそうだと、はじめのころの張り詰めた緊張感はずこしやわらいだ。

潜水艦載りの最大の難敵が虫歯であるということも、そのときはじめて聴いた。教えてくれたのは、軍医兼務の植草大尉だった。

人間の生存に絶対不可欠な真水だが、きわめて狭い潜水艦の艦内に積みこむ量は制限される。そのために、乗員の真水使用は厳格に規制されている。

飲用、炊事が当然のことながら優先され、無駄に使うことは許されない。

「とにかく辛いのは、洗顔用に海水しか使えないことだ」

と、いかにも情けなさそうに、植草はいった。

「塩辛い海水で顔を洗い、髪を濯ぎ、歯を磨く。そのうちに髪の毛が縮れて変色してくるが、そんなものは痛くも痒くもない。ところが、濃度の高い塩水で歯を磨きつづけると、かならずエナメル質が溶け、歯がひどく脆くなってくる。たちまちのうちに、虫歯だらけだ。この歯の痛みというやつは、大人でも耐えられない。だからみんな鎮痛剤を欲しがるが、あれは消化器をやられたり思考能力が低下するので、そう簡単にはあたえられない。勤務の辛さには泣かぬ潜水艦載りも、虫歯が疼きはじめるとだらしなくべそをかく」植草はおおげさな身ぶりをまじえて、そう話してくれた。

中原は意味ありげな表情で井関を眺めながら、

「痛みを堪えきれず、つぎつぎに虫に喰われた歯を自分で抜いていったあげく、八十の爺さんみたいな歯抜けになってしまった兵もいます。わたしも、はじめて見たときには驚きましたよ。もっと大胆なひとは、健康な歯までわざわざ歯医者で抜いて、総入れ歯にしてしまうほどですよ。さすがにそこまでする心理は、ちよつと理解できませんね」

そういう中原の視線にはじめて気づいたように、井関はにやりと頬を歪めると、

「なんだ、おれの隠し芸を見たいというのか」

と、おおきく口を開け、太い指をさしいれて顎から入れ歯をはずすと、それをグラスのビールのなかに乱暴に落とした。

笑い声ははじけ、諏訪は唾然としたまま三人を見やった。

むこうのテーブルを囲んだ士官たちが、あきれた顔をこちらにむけていた。

つづげさまに五、六本のビールを空けたはずなのに、中原はそれからしつかりした脚どりで諏訪を宿舍まで案内してくれた。

「わたしは主計担当なので、明朝六時すぎから物資積み込みのために港にいつています」

と、俊一の赤ら顔をからかうように、

「最後の内地の夜ですから、どうぞゆつくりと寝てください。あなたの荷物は、居室のほうに積みこんでおきます」

「いや」

諏訪は顔を振った。

「わたしもいきますよ。あなたの仕事ぶりも、見ておきたいし——」

「たいしたことをするわけじゃありませんよ」

と、中原は照れたようにいった。

「ただ、積み込みの監督をするだけです。きつと退屈しますよ」

中原とわかれてベッドに横になっても、なかなか寝つかれなかったが、疲れのうえにひさしぶりに摂取したアルコールの作用もあったのだろう。いつしか心地よい眠りのなかにひきこまれていった。

眼醒めたときには、枕元の机に置いた時計の針は六時をかなりまわっていた。昨日の雨が嘘のように晴れあがった空は高く、雲ひとつなかった。

中原はおおきな書類挟みを抱えて、物資の搬入作業を指揮していた。水兵が荷物を運びこむたびに、その書類をチェックし、忙しく鉛筆を走らせてなにやら計算している。

近づいてくる諏訪を認めた彼は、掌をとめてこちらに笑いかけた。

「案外、早かったですね。ちゃんと眠れたのですか」

腕時計に眼をやった諏訪は、

「寝心地がよすぎて、すこし遅刻してしまっただけです」

「かまいませんよ。あなたには、なにか格別の仕事があるわけじゃない」

中原はこともなげにいうと、また書類の端に細かい数字を書き並べはじめた。

「狩野さんから聴いているでしょう。急にもうひとり、お客さんが載ることになりましたね。ですから、出航は早くても今夜半になります。それまでは、基地を離れないかぎりなにをしてもいいんですよ。あなたの荷物は居室に運んでありますし、時刻になったら呼んであげますよ。のんびりしていなさいよ、こんな仕事眺めていても、退屈なだけなんだから」

「そつでもありませんよ」

諏訪は中原の抱えた書類をのぞきこんで、

「なにを書いているのですか」

中原はちよつと苦い顔になって、鉛筆の端で髪を掻いた。

「実をいいますとね、こんなところを入道さんに見つかつたら、怒鳴りつけられます」

入道さんというのは、もちろん井関大尉のことだろう。彼がなぜそんな渾名を進呈されたのかは、その姿をちらりと見れば子供にも理解できるだろう。

「はじめに主計担当を命ぜられたときは、艦船の経理なんて楽だろうと思っていたんですが、とんでもない。とりわけ潜水艦の場合は、ほんとうに大変なんです。弾薬類はまだいいんです、収納場所がちゃんと決まっていますから、重量バランスさえ計算しておけば問題ありません。ところが、厄介なのは糧秣のほうでね、これは重さとおきさをきちんと計って、そのうえ収納の順番まであらかじめ計画しておかないと、どうにもならなくなってしまうんです」

今回の航海は、太平洋を南西方面に直下し、およそ三週間の行程になる。

中原は詳しく説明してくれなかったが、途中どこかに寄り道をする必要があるらしく、まっすぐ諏訪の目的とする某南方基地にむかうよりは、数日間長くなるという。

また、今回の任務は作戦上のもではなく、当然伊一二六七単艦で遂行されるが、航海中敵と遭遇する可能性は皆無といってよく、その乗員も七十名あまりと最低限の人員によって構成されている。松垣艦長はこの機会を利用して、疲労の著しい乗員や錬成度の低い新兵を南方基地に残留させ、その休養と再訓練にあてていた。

「戦闘はあり得ないし、したがって長時間の潜水行動を要求されるような局面はまず考えられない。艦に残ったのはヴェテランばかりだし、通常の運航にはこれでも充分なんです」

と、中原はいった。

「でも、食料はその七十数名を三週間養うだけの量が必要になる。これがまた、生半可な量じゃないんです。なにしろ、六十キロの米一俵が二日ともたないのですから」

編隊による作戦行動なら、潜水母艦——潜水母艦は普通一万トン級の外洋商船を改造したもので、乗員の休養や日用品補給などのために、潜水艦訓練にはかならず同行した。けれども、こうした母艦はほとんど武装を施されておらず、敵に制海権を奪われた戦争後半になると、その存在意味はきわめて稀薄なものになった。艦装の軽い母艦は、敵にとつて絶好の標的になったし、またなにより、その付近に潜水艦がひそんでいることを示す旗印になりかねなかったからだ——による洋上補給などの支援もあるが、単艦での要員輸送任務では、むろんそれは望むべくもない。伊一二六七は乗員の生活に必要な物資を、すべて己で運ばなければならなかった。

主食たる米は大量に積みこまなければならないが、毎日使うものだけにすぐとりだせる場所に収納しなければならぬ。生鮮食品は冷蔵されるが、缶詰等に加工された副食物は、その使用頻度を踏まえて積みかたを考慮する必要があった。

そうした差配は、主計担当の中原の裁量に委ねられている。

物資を担いだ兵士たちの動きを眼で追いながら、中原はいった。

「重量バランスを考えれば、嵩のある米なんか収納庫の底に押し込んでしまったほうがいい。しかし、潜水艦の余裕空間はきわめて狭いわけですから、いったん物資をぎっしりと詰めこんでしまった収納庫を浚えて、底から米を取り出すようなことはできません。副食物についても、食事のヴァラエティということがありますからね、重い肉缶の箱をまとめていちばん下に積んでしまったら、もうただではすみません。航海の最後の一週間ずっと、朝昼晩と肉料理がつづいたら、それこそ暴動が起こってわたしなんか殺されてしまいます」

そこで中原はおおきな布袋を肩に担いだ兵士に歩みより、なにかを命じた。

「たとえば、あれは乾燥豆の袋です」

諏訪の隣にもどってきた中原は、

「あんなものは、いつまで経っても腐りませんから、通風管のなかに突っ込んでおけばいいわけです。厳密にいえば軍規違反ですが、どうせ今度の航海では長時間潜水なんてあり得ないんだから、多少艦内の通気が悪くなってもいい。空間にかぎりがあるのですから、そうやってぎりぎりまで物資を詰めこまないとね……。どうも、悪知恵ばかり発達する仕事です」

と、笑いかけた。

たしかにそれは、ばらばらになつてしまったパズルの駒をもう一度もとにもどすような、緻密な計算と経験による勘が要求される作業であるようだった。物理的にも、やりなおしは許されない。航海中の乗員の生活をできるかぎり快適なものにする、その責任が中原の肩にかかっているといつていい。だが、口ではそうやってなにかと不平を漏らしながらも、中原の顔はその困難をむしろ愉しんでいるかのように、澁刺と輝いている。

「でも、そうはいってもあなたは随分生き生きとしている」

と、諏訪はその思いを素直に中原につたえた。

「大変な責任であることはわかりますが、なんだかそれを愉しんでいるように見える。まさか遺伝というわけではないでしょうが、潜水艦載りにむいているのかもしれないね」

「え……、そんなふうに見えましたか」

しかし中原は、そこで表情を引き締めた。

「でも、決して遊び半分でやっているわけじゃありませんよ。潜水艦勤務というのはね、精神的にも肉体的にも非常にきつい仕事なんです。洋上航海のときも潜水時も、大変な緊張の連続なんです。兵ひとりひとりにかかる負担も重い。誰かひとりがあたえられた責任を全うできないと、艤面にほかの兵に迷惑がかかり、結果として艦の運航に支障をきたしますから、要領で楽ができるような世界じゃない」

潜水艦は海底深くにひそんでこそ、はじめてその武器としての機能を十分に発揮することができる。戦闘艦船とはいえ、その洋上における戦闘力はきわめて低く——海大五型の場合、その備砲は一〇センチ高角砲と一二ミリ機銃がそれぞれ一機ずつにすぎない。多種戦闘艦船との遭遇戦において、この程度の装備はほとんどなんの意味も持たなかった——、裸同然といつてさえない。したがって、洋上においては、敵に見見されることが即ち破滅に繋がる。

また、潜水時には地球の重力という自然の法則が、強大な敵になる。

通常、水深一〇メートルで、潜水艦は一立方センチあたり一〇キロにのぼる水圧を、その全身にうけとめなければならぬ。そのため、船体の製造には、最高水準の技術が集約されている。当然、機器の操縦や保全にも、また最高の技術が要求される。

水中での操艦ミスや機器の不調は、そのまま死に直結した。

乗員にはつねに、ぎりぎりの緊張が強いられた。

「よほど神経の強靱な者でなければ、耐えられる任務ではありません。けれども、みずから望んだ勤務ですから、逃げるわけにはいきません」

と、中原はいった。

「失敗も弁解も許されず、いつも完全でなければならぬ仕事なんです。だったらわたしは、どんな仕事をあたえられても、できるかぎり愉しくやろうと決めたんです。歯をくいしばって、眼を血走らせながらやっても、にこにこしながらやっても、おなじ結果しかないので、そちらのほうが気分もいいじゃありませんか。もつとも、入道さんあたりは不愉快みたいですけれどもね。どうもああいう年寄り連中は、若者の気持ちを理解してくれないから困ります。実をいいますとね、あなたが来てくれて、わたしはほんとうにたすかっているんです。この艦は入道さんみたいに古参兵が多く、若い士官はわたしひとりですから、なにかと軽視されてしまうんです。狩野さんや入道さんはとにかく厳しいですし、なにしろ話があいません。

しかし、あなたとなら年齢も近いし、うまくやっていけそうな気がする。ともかく短いあいだですが、お互い仲良くやって、すこしでも愉しくいきましようよ」

「ごちそう。あなたがいないと、右も左もわかりませんから」
と、諏訪はうなずいた。

ヴェテランの兵士たちは長い経験によって、己の背負わされた職分について確固とした自分なりのやりかたを培っている。それが複雑に絡みあい、円滑に動くひとつの機械ができあがるのだ。たしかに中原は、古参兵たち知らぬ知識と技術とを学んできてきているだろう。しかし、いかに指揮官の地位にあるとはいえ、ヴェテランたちの築きあげた秩序の壁をこじ開けて、新しい風を吹きこむことは容易ではない。

熟達の職人たちに囲まれた中原が、どんな雰囲気を感じているか。それは、諏訪にも理解できる。むしろ諏訪自身が、職人たちにとってはやはり厄介者なのだが、それでも彼はたんなる荷物にすぎない。そのなかで中原は彼らとずっといっしょに暮らし、指揮をとっていかねばならないのだ。なんとも難しい立場だ。

けれども、それを承知しながら、その環境と任務とを愉しもうとする中原もまた、鋼のようにしなやかに逞しい神経の持ち主のひとりなのだろう。

物資の搬入が終わるまでには、それから一時間あまりかかった。

中原は書類と兵士たちの動きを交互に眺めながら、的確に指示を下していった。

「どうです、たいして面白くはなかったでしょう」

と、計算どおりに物資搬入を了えた中原は、ただぼんやりとその作業を見つづけていた諏訪に声をかけ、「地味で面倒なだけの仕事ですがね、こいつが終わらないと船は港から一步も離れられない。でも、これも米さえなければずっと簡単になるんですがね」

そう、意外なことを話しはじめた。

「いくら邪魔でも、米を積まないわけにはいかないでしょう」

「そうなんです。米は糧秣重量の大半を占める。これがなければ、もっといろいろなものを積めるし、作業もぐっと楽になるんですが。だいたい、米を喰わなければ闘えないような民族は、海外へ出て戦争するなんて無理なんです。あ、これはもちろん——」

と、悪戯っぽく笑った中原は、秘密ですよというように立てた指を唇にあてた。

米はまさに一粒万倍の増殖力を持つうえに食味も良く、大量の人口を養うには最適の農作物である。しかし、それ自体の栄養価は低く、食べるためには多くの水を使って炊きあげ、澱粉質の構造を変化させなければならなかった。

つまり飯を主食に戦うためには、米以外に大量の水と燃料の確保運搬をつねに考慮しなければならない。「アメリカ軍の標準食を知っていますか。主食のパンは、ひとりあたり二枚程度ですよ。小麦粉は嵩の張る米より遥かに楽に運搬できますし、彼らは必要な栄養を肉や豆の副食物から採るんです。ところが、日本人というやつは困ったもので、とりあえず飯を腹一杯詰めこまないと動けない。主食の米を鱈腹喰うことですべての栄養素をまかなうのは、江戸時代以降の日本人の悪癖ですよ」

と、いまいまげに中原はいう。

「海軍でも主に運搬の問題から、献立の改善を幾度か考えたそうですが、結局は米から離れることはできなかった。洋式献立では、兵隊が嫌うのです。昨日まで山奥で畑を耕していた連中に、フランス風の肉料理を喰わせても喜びはしません。たとえあとと漬け物と汁だけでも、暖かい銀飯をだしてやれば、彼らは満足します。要するに、日本人は大飯を喰って大糞を垂れながら戦うしかありません。誰もはずきりとはいいませんが、これは大変な欠陥ですよ。こうやって物資搬入を指揮していると、そのことを痛切に実感しますね」
中原は冗談めかしていったが、連合軍は日本人のこうした特質を見逃さなかった。のちの東南アジア戦線において、連合軍は日本兵の残した排泄物の量と内容を分析し、密林の奥深く隠れひそんだ彼らの位置と勢力を正確に把握して追いつめていった。

そこまですぐと中原は急にまた表情を変え、

「ああ……、狩野さんがこっちに来る。いまの話は、絶対に内緒ですよ」

諏訪の耳許に顔を近づけ、早口に囁きかけた。

そちらをふりかえると、いかにも眠そうな顔で狩野少佐がゆっくりと歩いてくる。

「終わったのか」

と、狩野は低い声で中原に訊いた。

中原のさしだした書類にぎっと眼を通した狩野は、

「まあ、こんなところだろうな」

さして関心もなさそうな調子でいうと、その頬に苦い笑いを刻んだ。

「昨夜は、入道さんたちと呑んだようだな。そのあとで植草さんに襲われたのだ。まだ呑み足りないとかで、一升瓶を抱えてやってきて、夜明け近くまでつきあわされた」

「災難でしたね」

と、中原も笑った。

「先生は底なしだから」

普段の植草は、軍医という立場もあるのか、自制してほとんど酒を口にしない。しかし、一月、あるいは二月に一度、そうした抑圧から己を解き放つように、一晩かけて徹底的に呑む。まんじりともせずに一升瓶の二本程度は軽く空にし、すこしも乱れない。

肴もなく、なにをいうでもなく、じつくりと腰を据えてただひたすら呑みつつける。

その相手には、狩野が選ばれることが多かった。

狩野も酒は決して嫌いなほうではないが、どちらかといえば幾皿も肴をならべて味わうほうだ。だから、どうしても植草をもてあますことになる。昨夜もそうだったのだろう。狩野の眼が、すこし赤みを帯びている。

「まったく、とんだ災難だ。だいたい、おまえたちが中途半端に植草さんを帰したのが悪い。あのひとと呑むのなら、ちゃんと覚悟しておけ。しかし、植草さんもいつていたが、どうやらおまえたち、子供同士でけっこう気があったようだな。それは、結構なことだ」

と、満足そうな顔で、狩野にふたりにむかつてうなずきかけた。

2

もうひとりの乗客という馬淵参謀中佐が到着し、艦に乗りこんだとき、時計の針はすでに午後八時をかなりまわっていた。

夕方からまた黒く厚い雲が空を被いはじめ、月はなかった。

ひと雨きそうなあんばいだったが、それでもどうにかもちこたえた。

夕食がすむとすぐに乗艦命令がたえられ、諏訪たちは艦内に待機して馬淵を待つことになった。

潜水艦の内部は、思っていたよりも遙かに狭く、ひどく蒸し暑かった。

中原が糧秣を詰めこんで通風孔を塞いでしまったせいかもしれないが、室内にはいつてしばらくすると、汗が全身に噴きだしてきた。それに、あたりに漂う強い硫黄臭もたまらなかった。さんざん中原たちから聴かされて覚悟はしていたが、実際経験してみるとやはりそうとうにきつい。けれども、この環境のなかでこれからの二十日あまりをすぎさなければならぬ。そう思うと、気分が沈んでくる。

さすがにヴェテランの井関や植草は、この状況でも平然として汗ひとつかかず、陸にいるときとすこしもかわらない。

しかし、若い中原はまだ慣れきっていないのだろう、シャツのボタンをふたつはずして胸をはだけ、井関にぎろりと睨みつけられて頸を竦めた。

馬淵が乗りこむと、すぐに出港することになった。

港内は艦船で混みあっており、衝突や座礁の危険を避けるため、緊急時以外の夜間出航はおこなわれない。だが、桟垣はかまわずに艦を発進させた。

馬淵の任務が、それだけ重要なものなのだろう。

港を出て三十分ほどすると、連絡があり、士官全員が作戦室に召集された。

シャツのボタンをはずしたまま部屋を出ようとした中原は、井関の肘で脇腹をこづかれ、ちいさく呻きを漏らした。それで慌てて中原はボタンをはめた。

狩野は兵のうえにたつ士官たちに厳格な規律を要求し、こうした服装の乱れを嫌う。面とむかって難詰するようなことはなかったが、そんな失態が幾度も重なれば、中原に対する狩野の評価は下落していく。

いったん狩野から失格の烙印を押されてしまつては、この艦における将来はない。

そのことを、いささか手荒いやりかたで、中原に教えていた。

中原たちが出ていくと、諏訪は居室にひとりきりになった。

所在なさげにベッドに腰を降ろし、諏訪はあたりを見まわした。

おのおのの整理棚には、各自の私物が置かれている。私物はぎりぎりまで省略され、それがきわめて機能的にならべられていた。無駄なものは、ひとつもない。それでなければ、かぎられた潜水艦の空間のなかでは暮らしていけないのだろう。

ベッドの下には、諏訪の荷物が圧しこまれている。

袋ははちきれそうなほどに膨れあがっていた。中原あたりに整理を任せたら、中身の半分以上があつさり捨てられてしまったところだろう。

十五分と経たぬうちに、中原と植草がもどってきた。

「もう、会議は終わったのですか」

と、諏訪は中原に訊いた。いくらなんでも、帰ってくるのがはやすぎる。

中原は顔をしかめて頷を振った。

「子供は部屋にもどっている、ということですよ」

どうやら、馬淵参謀との顔合わせがすむと、狩野に部屋を追いだされたようだ。

「いいチャンスだから、わたしもいっしょにもどってきた」

そういつて、植草がベッドに坐った。

「あんなところにいたら、息が詰まってくる。肝腎の話がはじまる前に、もう一触即発状態だからな。松垣さんはつまらなそうにそっぽをむいてしまっているし、狩野さんは眉根に皺を寄せてぴりぴりしている」「なにがあったのです」

「どういふつもりかは知りませんがね、会議にはいる前に、馬淵参謀が潜水艦用法について演説をぶちはじめたんです。いつていることは軍令部の石頭連中とおなじで、別段耳に新しい内容ではないんですが……、艦長や狩野さんにすれば、これまでにみさんぐりかえしてうえとやりあってきた問題ですよ。それをいまさら蒸し返されても……」

「ふたりとも、気持ちよく拝聴することはできんわな」

と、植草は苦笑した。

従来、潜水艦の基本用法に関しては、軍首脳部と現場指揮官とのあいだに微妙な対立があった、と植草は説明した。端的にいつてしまえば、軍上層部の思考は、あくまでも潜水艦の実戦投下にある。

実戦において、海中深くひそんで敵艦、空母を狙い撃つ。

そこにこそ、潜水艦本来の意義がある——。彼らはそう考えていた。

たしかに、それは華々しい戦果となるし、現実には潜水艦にはその能力があった。的確に魚雷が横腹を抉れば、一発で大型空母を撃沈することも可能だった。

しかし、現場をあずかる指揮官たちは、それがきわめて困難であることを、経験によって学んでいた。

なぜなら、潜水艦の攻撃が成功するためには、それは完全なる奇襲によっておこなわなければならない。その存在を敵に察知されてしまえば、とたんに潜水艦の能力は半減する。そして、それにはつまり、敵の動きを正確かつ迅速に把握する必要がある。

広大無辺な太平洋である。むこうの動きを確実に掴むことができなければ、一生走りまわっていても敵と遭遇できない。

問題はここで、彼我の策敵能力には、否定しようのないおおきな格差があった。

アメリカはその潤沢な国力にものをいわせ、レーダや高性能哨戒機などをはじめとする新鋭兵器をつぎつぎに開発、投入していた。だが、日本の場合は昭和一桁台に竣工した潜水艦が依然として主力であるように——海大五型伊一二七六は、昭和七年に製造されている——、一時代前の装備に頼らざるを得なかった。「いつができて、すでに八年が経った」

と、植草は鈍い金属音を鳴らして、拳で壁叩いた。

「日進月歩の兵器の世界では、やはり時代遅れであることは否めない。同等の能力を持って、はじめて艦長の戦術眼や乗員の技量の勝負になる。それなら、松垣さんはどんな敵と闘っても、絶対に負けないよ。しかし、われわれは出発点からむこうにおおきく引き離されている。これを承知しておれば、おのずと戦いかたも変わってくる」

それを認めたくえで、現場の指揮官たちは、ドイツのUボートの跳梁が島国である英国を破局寸前にまで追いつめたように、通商破壊や敵勢攪乱などの後方支援に潜水艦用法の主軸を置くべきだと主張した。

輸送船を狙って敵の補給ルート寸断し、通商網をずたずたに切り裂く。

そこにこそ、潜水艦の能力を存分に發揮する舞台を求めなければならぬ。

指揮官たちはそう唱えて、主力艦攻撃に拘泥する上層部と対立した。

平面上の移動しかできぬ他の艦船とちがい、潜水艦は水深の高低を使った三次元運動が可能になる。そうしたまったく新しいタイプの兵器に、後方の参謀たちが過剰な期待を抱くのももつともだったが、しかし現実それを扱う者たちは、冷静にその限界を見極めていた。

実際のところ、真珠湾攻撃に参加した潜水艦部隊はさしたる戦果をあげることができなかったが、同時に僚艦とともに南太平洋諸島における敵補給ルートに分断にあたった松垣の伊一二七六は、幾艘かの輸送船を葬り去り、日本軍の進駐作戦を背後からささえた。また、これはのちの話になるが、太平洋戦争の全期間を通じて日本の潜水艦が米空母に命中させた魚雷数は、わずかに総計六弾にすぎなかった。この事実をみても、やはり潜水艦の直接的実戦投入は、さほどの効果をあげることができなかったといわざるを得ない。

ともかく、後方にいる参謀と現場の指揮官のあいだには、そうした温度差があった。

中原は不服そうに頬をふくらませて、

「現実に入れわれれば南方進駐支援作戦では、いくつもの成果をあげているじゃありませんか。それを知りながら、なんだっていまさらあんな話をはじめるんですか。狩野さんが怒るのもあたりまえです。おかげで、おまえのようなさつさと餓鬼は出ていけなんて、とんだ八つ当たりを喰ってしまいましたよ」

「あれは、おまえがいまにも嘔みつきそうな顔をして、馬淵参謀を睨みつけていたからだ」

と、植草は笑った。

「ほおつておけば、胸倉を掴んでいたところだろう」

「そうでしたかね」

すこしきまり悪そうに、中原は視線をはずした。

植草はいった。

「どうも参謀というやつは、自分の頭のよさをなにかとひけらかしたがる癖がある。鼻っ柱が高すぎるんだ。まあ、自分に絶対の自信が持てなければ、作戦なんてたてられるものではないが……。それにしても、あんなふうには露骨にされるとな——」

植草はあおむけにベッドに寝転がって、溜息をついた。

「しかし、彼はこれから狩野さんと同居ということになるのだろうか……。あの調子で喋りつづけると、狩野さんに絞め殺されてしまうかもしれない」

諏訪が載りこんでいるため、士官用のベッドは狩野が使っている予備室のもの——予備室は必要に応じて医療室としても使用できるだけの機能が備えられており、重篤な病人のためにベッドもひとつ用意されていた。こうやって、ひとつの空間に複数の用途を持たせるのも、潜水艦ならではの智慧だろう——しか空いていない。必然的に、しばらくのあいだ狩野は馬淵参謀と同居せざるを得ない。

そうしたふたりの衝突を、むしろ期待しているような植草のくちぶりだった。

それからまた一時間ほどして、会議を終えた井関がひとりの軍人をもたってもどってきた。いうまでもなく、それが馬淵参謀中佐だった。

「あなたに逢いたいといわれるので、お連れした」

と、井関は諏訪に馬淵をひきあわせた。

いかにも頭の良さそうな、怜悯な眼をした男だった。

おなじ立場の江藤はいつも眠そうな眼で、なんともんびりした印象をあたえる男だったが、それとはまるでちがう。

馬淵は探るように諏訪を見まわし、

「きみのことは江藤中佐から聴かされたので、ちょっと気になった。たいして時間はとれなかったが、江藤とは大学の同期だね、ひさしぶりに逢えて懐かしかった」

「重要な任務を帯びておられるようですね」

「いや、たいしたものではないが……。しかし、まだ詳しくは話せないが、きみは実に運がいい。まさに歴史が転換するその一瞬を、いずれきみは最前列で見ることになるだろう。報道班員として、願ってもない幸運がこのさき、きみを待っている」

と、馬淵は謎めかしている。

「それともかく、きみは江藤と懇意のようだが、やはり彼とおなじように対米戦慎重論のほうだったのかね」

そう、なんとも応えにくい質問を投げかけてきた。

真珠湾攻撃のぎりぎり直前まで、軍令部内部は対米戦について慎重論と積極推進論のまっぴらつにわかれて揺れていた。

そのことは、諏訪も江藤や山室の口から聴かされていた。

山室や江藤は、どちらかといえば慎重派だった。もともと、おなじような立場をとりながら、ふたりの考え方には、若干の差異があった。

山室は対米開戦不可避の前提をとり、一刻も早い講和を睨んで戦うべきだという。戦争はもはや避けられないが、しかしはじめからの時点で講和に臨むか、それをはっきりと決めたうえで戦わなければならないというのが、山室の主張だった。

そのためにはアメリカ国民を刺戟するような、大規模な作戦展開はおこなうべきではないと、山室はいつた。そのような大作戦を敢行してしまえば、勝ったとしてもあるいは負けたとしても、早急な講和は困難になるからだ。

たとえ勝ったとしても、アメリカ国民の戦意は、まさしく火に油を注ぎこむように一気に燃えあがり、士気は昂揚する。逆に、乾坤一擲の勝負に敗れば、国力の乏しい日本はその後の戦争をまともにつづけることができず、一方的に追いこまれて土俵を割らざるを得ない。

どちらにしても、将来を展望すれば、得はない。

いっぽう江藤たちは、対米戦そのものを是が非でも回避しようという立場にあった。

彼らは近衛内閣の政治工作に一縷の希望を繋ぎ、もしワシントンとの交渉に進捗があれば、たとえ攻撃機動部隊が真珠湾をその視界に捉えていたとしても、なにもすることなく引き返さなければならぬと、強硬に主張していた。

慎重派のなかでも山室たちの意見は現実妥協論であり、江藤たちのそれは純粹理想論であるといえたが、そのいずれも対米戦で完璧な勝利を得ることは不可能であるという点で一致していた。そのため積極派は、彼らの臆病さを語り嘲笑を浴びせた。

「江藤があんな臆病者だとは知らなかったよ」

と、意地悪い微笑を、馬淵は浮かべた。

あきらかに彼は、対米戦積極推進派であるようだった。

結果として、真珠湾奇襲攻撃の劇的な成功は、慎重派を一挙に押し潰した。

「戦争がはじまる前には、いろんな意見が出てくるものだ。しかし、危険をおかすことをいたずらに惧れていては、なにものをも得られない。虎兇を獲るためには、虎穴にはいらなければならぬのだ。これは、歴史の真実なのだ。戦場を拡大せず、まず国力の充実をはかるべきだという江藤たちの主張も、聴きようによっては一理あるが、いまはもうそんな時期ではない。欧米の横暴と圧迫をひたすら堪え忍んでいるばかりでは、日本の未来はない。たつべきときには、前途にどんな危険があろうと断固としてたつ。その覚悟がなければ、国は栄えない。彼らの意見は、つまるところ日本を亡国へと導くものだ」

こちらの犠牲は皆無にひとしく、敵主力を壊滅した真珠湾攻撃は、近代戦においては希有のほとんど完全な勝利だった。早期の講和締結を唱える慎重論者でさえ、その勝利に酔った。積極派の意気がおおいに盛り上がったのも当然だった。

慎重派の講和論、戦争回避論は、たちまちのうちに意味のない空理空論になった。

「たしかにアメリカは強大な国だが、戦いかたによつては勝てぬ敵ではない。実際、真珠湾での圧勝によつて彼らの戦意は挫かれ、彼らの海軍力を撃滅した結果、太平洋の制海、制空権はわれわれの掌中におちた。これ以上、完璧な勝ちはあるまい」

と、馬淵は誇るようにいった。

「ときには慎重論も結構だが、敵の力を畏れるあまり及び腰になっては、あの勝利を得る千載一遇の機会を逃してしまったかもしれない。あの機を逃してしまえば、日本とアメリカの国力差はいっそう広がり、それこそわれわれはどうあがいてみても勝てなくなる。この場合の慎重論は、忌憚なくいつてしまえば敗北主義だな」

軍令部は積極論者が主導権を握り、慎重派は排斥された。

この時期に江藤が、東京から地方基地に籍を転じた背景にも、あるいはそのあたりの事情が絡んでいるのかもしれない。

「江藤はいい友人のひとりだが、あの臆病さはわたしには認められん。きみも報道班員たることをしっかりと自覚して、あまり彼らの考えには染まらぬことだな。どっちにしろ、その種の慎重論は、遠からず陰もかたちもなくなるだろうが——」

それだけというと、馬淵は背中を扉を閉め、部屋を出ていった。

「どうも、つきあい難い男だな」

と、扉のほうを見つめたまま、植草がつぶやいた。
「真珠湾攻撃をひとりで計画して実行したような勢いだ。あの種の連中がうようよあつまって、作戦を考えているんだらうな」

「いま鼻息が荒いのは、しかたないでしょう」

中原がいった。

「真珠湾では、ほんとうに完勝でしたからね」

「だがな、あの勝利に浮かっていると大変なことになるぞ」

と、植草はベッドに坐りなおして、

「アメリカの潜在能力を甘くみてみると、とんでもないことになる。しかも、あの攻撃はどう見ても不意打ちというやつだ。アメリカの国民は怒り狂っている」

のちに、アメリカ側は日本の機密通信の暗号を完全に解読しており、真珠湾奇襲についてもあらかじめその全貌を察知していたながら、国民の意識を対日戦にむけて統一するために、あえてその攻撃を誘いこんだのではないかという疑惑が語られる。しかし、それが真実であるか否かはともかく、宣戦布告と前後するきわめて微妙な瞬間におこなわれた奇襲攻撃を、アメリカ市民は卑劣なルール違反と捉えた。

ルーズヴェルトのうちだした大胆なニュー・ディール政策が奏功し、ちょうどアメリカが未曾有の恐慌からたちなおりかけた時期に、植草は二年近くボストンに留学した。その経験から、彼はアメリカ人の国民性やその経済的底力を知悉していた。

「彼らは、生活を悦しむことばかり考えているとか、個人主義とかいわれる。たしかにそういう面はあるが、眼の前に敵があらわれたときには、その力をひとつにして本気で立ちむかう。直面する困難がおおきければおおいほど、彼らの挑戦心は燃えあがるのだ。彼らが英国と戦い、みずからの血で独立をかちとったことを忘れてはならない」

「しかし、戦艦のほとんどを含む太平洋艦隊の主力を真珠湾で喪ったことは、大打撃でしょう。いくら国力があっても、簡単にたちなおれるような被害ではありませんよ」

と、諏訪は日本国民の意識を代弁するように、植草にいった。

真珠湾に停泊していた米艦隊の被害は、まさにすぎましいほどのものだった。

日本軍の雷撃によって、戦艦ウエストヴァージニア(ウエストヴァージニア級、排水量三万一千五百トン)、カリフォルニア(テネシー級、三万二千三百トン)、ネヴァダ(ネヴァダ級、二万九千トン)、オクラホマ(ネヴァダ級)が沈没着底、戦艦アリゾナ(ペンシルヴァニア級、三万三千一百トン)が船体を切断され転覆した。また、ほかに戦艦数隻を撃破した。壊滅的打撃といいいい。すくなくとも、日本側はそう見た。

「いや……、案外そうでもないかもしれんぞ」

植草がこちらにむきなおった。

「戦艦数隻、それも旧式の低速艦を撃沈した程度では、とても彼らの主力に致命傷をあたえたとはいえない。アメリカにはそれを即座に補充する余力がある。だいいち、レキシントンやエンタープライズといった空母は、まったくの無傷で残っている。空母が生きているかぎり、機動力は衰えない」

そういつて植草は、いくつかの具体的なデータをあげはじめた。

たとえば、開戦当時の製鋼総量を比較すれば、アメリカの七千五百万トンに対して日本はその十分の一以下の七百万トン。石油生産高はアメリカの一億九千万トンに対して、日本はわずかに二十六、七百万トン。あまりに惨めな差だが、日本は国家総動員体制を敷き、懸命に増産につとめた結果が、その数字だった。「鉄鋼と石油、艦船にとっては肉と血だ。それを単純に較べただけでも、日本とアメリカとのあいだにはこれだけの差がある。これが現実なのだ」

開戦時における米国海軍の主要戦艦船の総トン数は、およそ百四十万トン。それをアメリカはキング大将指揮下の大西洋艦隊、キンメル大将指揮下の太平洋艦隊、さらにハート大将指揮下のアジア艦隊の三編成にわけていた。このうち日本が相手にしなければならぬ太平洋艦隊とアジア艦隊は合計百六十近い艦数を有し、その総トン数は七十六万三千。

いっぽう日本の連合艦隊は、二百五隻、九十五万三千トン。

ワシントン・ロンドン両国際軍縮条約が一九三六年に期限切れを迎えると、日本はそれを待ちかねたように大幅な海軍力の増強に踏みきる。それは「海軍軍備拡充計画」(○三計画)と呼ばれ、はつきりとアメリカを仮想敵にさだめ、目標の一九四二年に対米比八〇パーセントの艦隊戦力を達成するというものだった。

た。

すでに大陸において支那事変が勃発しており、戦争をつづけながら同時にこれだけの増強計画を推進することはきわめて困難だった。しかし、来るべき将来の対米戦を見据えれば、この計画は是非とも実現させなければならず、日本は国民生活のあらゆる面に多大な犠牲を強いるかたちで軍備拡充にとりこんでいった。

「むろんアメリカも黙ってはいなかった。

彼らは日本の軍拡計画に、すぐさま敏感に反応した。彼らは日本の動きにあわせて再三臨時立法を成立させ、最終的には一九四〇年の両洋艦隊法案によって、最長七年以内に海軍戦力を七〇パーセント増強するという目標を掲げた。常識を越えた超大型の拡張計画だった。

これに愕然とした日本は、急遽さらなる増強計画を策定するが、もはや国力は限界点を踏みこんでおり、どこをどう切り詰めてもそこに投ずる予算は捻出できず、結局は実現到底不可能の机上の空論たらざるを得なかった。

ところがアメリカは、その無謀ともいえる増強計画を着々と実現していった。おそるべきアメリカの底力を、日本はまざまざと見せつけられることになった。

つまるどころ、日本は悲願でもあったアメリカとの海軍力格差を埋めることができぬまま、戦いの火蓋をきつておとさなければならなかったのだ。

植草はいう。

「太平洋艦隊とアジア艦隊を全滅させても、なおアメリカは連合艦隊に匹敵する能力を持つ大西洋艦隊を残している。しかも、日本の新艦建造能力はもう限界に達してしまっているが、アメリカは数年前に策定した計画に沿ってつぎつぎに新造艦をつくりだしている。要するにこれは、日本は連合艦隊を失ったらもうあとはないが、アメリカは無尽蔵に新しい艦船を投入してこれるといふことだ。わたしは対米戦について慎重派でも積極的でもなく、ただ命令に従うだけだが、緒戦の勝利に小躍りして彼らの実力を侮ったら、とりかえしのつかぬことになる。それだけは、わかっている」

日本とアメリカは互いに十枚ずつのティップを持って、ゲームをはじめた。日本にとっては、その十枚がすべてだった。使いきってしまったら、それきりである。懐の財布をとりだして新しいティップを買い取るにも、財布のなかには小銭が残っているきりだ。

アメリカはちがう。二枚のティップをなくせば、三枚、三枚失えばあらためて四枚買うことができるだけの資力がある。

つまりは、そういうかたちでの戦争だった。それが、国家総力戦ということなのだ。

その後日本とアメリカの両海軍は、オーストラリアへの航空機攻撃を見据えたポートモレスビー攻略作戦に絡んで、珊瑚海において激突している。伊二七六が基地を出港する、ほん二週間ほど前のことだった。

この戦いは、海戦史上はじめての空母戦闘、機動力の決戦になった。

結果として珊瑚海海戦は、痛みわけのような格好で終わる。日本側は海戦に参加した三隻の空母のうち祥鳳（一万一千二百トン）が沈没し、翔鶴（二万六千五百七十五トン）が甲板に直撃弾をうけて航空母艦としての機能を喪った。

アメリカ側は珊瑚海に派遣した空母二隻がともにおおきな被害をうけ、レキシントン（三万六千トン）が大破——のち、自軍魚雷による沈没処分——、ヨークタウン（一万九千八百トン）も被弾、戦線離脱した——当初、日本側はその戦闘結果を、敵空母二隻撃沈と発表した。これはのちの大本営発表式の捏造情報ではなく、誤認に基づくものであった——。

ともに空母一隻ずつを喪い、被弾した空母の損傷も同程度のものだった。公平にみて、勝敗はつけられない。

しかし、その後の対応は、日本とアメリカでおおきく異なった。

翔鶴は修理に数カ月を要し、その間ドックに釘づけにならざるを得なかったが、アメリカは被弾して真珠湾にもどったヨークタウンの改修に、陸軍工兵部隊まで動員した突貫工事であったり、わずか三日でそれを終了させた。そうした技術や工具、機器のちがいは、そのまま国力の差であるといつてよかった。ヨークタウンは一月後のミドウェイ海戦に参加、おおきな戦力となるが、むろん日本側はその事実を知るよしもなかった。

ともにティップをすこしずつ減らしながら、そうして戦いはつづいていた。しかし、あらためていうまでもないことだろうが、おなじペースでティップを使っていくのでは、すでに持ち金の底が見えている日本がどうしても不利になる。

上原は、そのことを婉曲ないいまわしで指摘していた。
中原は壁にもたれかかって、

「あの参謀さんたちは、ちゃんとそのことを知っているのでしょね」と、吐息まじりにいった。

「もちろん、知っているさ。しかし、知識として数字だけを頭に詰め込んでいるのと、その差を具体的に実感することはちがう」

自分のベッドに横たわった井関が、こちらに背中をむけて腕を組んだ。

井関は作戦会議にも参加しており、その内容も知っている。だが、さすがにそのことにはいつさい触れようとせず、

「あれは、軍令部に多い博才型の度胸参謀というやつだな」

と、懈げな口調でいった。

井関にいわせれば、陸海問わず、司令部の参謀はふたつのタイプに大別できるのだそうだ。剃刀のように頭が切れて、あらゆる不確定要素を計算し尽くして作戦を練る英才型と、難問に直面すると、悩むよりさきに当たって砕けろとばかりぶつかっていく博才型のふたつだ。

英才型の作戦は、どうしても消極的にならざるを得ず、ときには大勝を掴みそこねるが、こちらも被害もすくない。逆に博才型は、大胆に有り金のすべてを張るような作戦をたてがちで、勝つときはおおきいが、万が一負ければ、なにもかも失うことになる。

そうした博打的側面は、真珠湾攻撃には如実にうかがえる。

全財産を張ったほうの眼に賽が転がったからこそ、史上類を見ないほどの大勝利を掴むことができたけれども、それがもし反対の方向にひと転がりしていたら――。たとえば、奇襲作戦を察知したアメリカが、機動戦力を展開して待ちかまえていたとしたら、日本の頼る連合艦隊は瞬時に消滅していたところだろう。「要するに、どちらも参謀にはむいていないということだな」

と、眼を瞑じた井関は、存外に穿ったことをいう。

3

しかし、それからなにごともなく五日がすぎた。

人間はもともと環境に順応しやすい動物だというが、たしかにそのとおりで、諏訪もいつしか潜水艦での生活に慣れてきた。はじめは嘔吐感を覚えたほどだった硫黄臭も、気にならなくなっていた。

もともと、このあたりはまったくの安全水域なので、まだ一度も潜水航行は体験していない。潜水時には、きつと感覚もまるでちがってくるのだろう。

それにしても、通風孔のなかの糧秣袋も一例だが、さまざまな制約や不自由さを、工夫によってのりこえていく乗員たちの智慧と柔軟な発想には驚かされるばかりだった。

馬淵参謀といえば、意識的に乗員との接触を避けているのもあるまいが、予備室に閉じこもったきり、ほとんど外に出ようとしなかった。

そのせいで、狩野は就寝時以外居室に近づかなくなった。

風と桶屋式の関係で、そのためにいちばんの迷惑をこうむったのが、中原だった。

暇ができる、狩野は中原や諏訪の居室を訪れ、そこで時間を潰すようになった。

艦内にはもうひとつ士官居室があり、そこには砲術指揮官の武藤大尉や航海と気象分析を担当する仁科中尉などがいたが、そちらに行くことは滅多になかった。

これは決して好悪の問題ではなく、狩野の目的はあきらかに彼が子供たちと呼ぶ、若い中原と諏訪にあつた。

中原に対しては、しばしば練艦技術や策敵法についての難問をいきなり投げかけ、その学識を試した。狩野はそうやって中原を教育すると同時に、応えに窮して困惑する姿を眺めて、みずから愉しんでいるようでもあった。

それに飽きると、今度は諏訪を相手にして、体験談や兵士の失敗談を話しはじめる。

そうして狩野は、もてあました時間を消費していた。

これには質問責めにされる中原よりもさきに、井関が音をあげた。「ほんとつに、おまえたちのおかげでとんだとばっちりだ。狩野さんのあの眼で睨まれているのは、のんびりベッドに寝転がっているわけにもいかん」と、井関は不機嫌な声でいった。

もちろん狩野自身にはなんの責任もないことだが、白い部分の多い彼の眼つきは、いささか鋭すぎる。そのうえ狩野には、眼を細めて相手をぎろりと睨みあげる癖があった。そんなとき彼の眼は、獲物を狙う爬虫類のそのように怪しく光る。

悪気があってしているわけではなかったし、狩野もそれがひとに威圧感や恐怖心を抱かせることを知っていた。だから彼は、つとめてそれを隠そうとしていたが、話に興がのり熱を帯びてくると、ついついそんな眼つきが出てしまう。

その視線に射竦められると、諏訪も皮膚が粟だつてくる。

「まったく、なんとかしてもらいたいものだな」

井関はほんとうに困ったようにいった。

隣で植草が笑った。

「とはいっても、あの厄介な荷物を海に捨ててしまうわけにもいくまい」

本来なら彼も、医務室兼務の予備室にしなければならぬのだが、やはり馬淵が苦手であるらしい。てもちぶさたに通信室と居室を往復し、こちらで過ごす時間が多くなっている。

どつしりとおちついて構えているのは、松垣艦長だけだった。

赤髭さんと渾名される彼は、なにがあっても動じることがないという評判どおり、馬淵の存在にもすこしも変化を感じさせなかった。だからこそ松垣は、乗員たちから慕われ、全幅の信頼を寄せられているのだ。海のうえでは、文字どおり、乗員は艦とその生死をともにしなければならぬ。

とりわけ潜水艦においては、艦が沈めばまちがいなくすべての乗員が死ぬ。陸での戦いのように、ほんの数センチで生と死がわかたれるようなことは、まず起こり得なかった。

したがって、乗員たちのあいだには、生死一条の強靱な連帯感が生まれ、それを要石のごとき松垣がしっかりと統率し、ひとつの方向にまとめあげている。

諏訪が松垣と顔をあわせる機会は、あまりない。

だが、あうたびごとに松垣は優しい微笑をたたえて、軽い会釈をこちらにおくってくれた。なにもかも包みこんでしまうような、ゆつたりとした笑顔だった。

このひとが見ていてくれるからこそ、乗員たちは苛烈な激務を平然とこなしていけるのだ。諏訪はそのことを、痛切に感じた。

事態がはじけるように転回しはじめるのは、それからまた一週間ほどが過ぎたころだった。

六月にはいつて、数日を経っていた。

艦は予定どおり、順調に海を進んでいる。

旅程も半分を越え、さすがにこのあたりまで到達すると前線が近く、いくら日本が制海権を握っているとはいえ、これまでのように安閑としてばかりはいられない。

希ではあるが、輸送船団を狙って敵の潜水艦が出没することもあるという。

しかし、潜水艦どうしの対決となれば絶対の自信があるのだろう、乗員の顔に緊張の色はすこしもない。

実際、この当時のアメリカ海軍の潜水艦は、第一次大戦直後に建造されたものが主力で、基本能力では日本のそれに遥かに劣っていた。また隻数もすくなく、そのためきちんと確立した運用もできなかった。

アメリカが南方戦線に投入したその旧式艦は、水中速度が極度に低く、戦闘艦船を直接攻撃するには難がありすぎた。戦闘艦船相手では発見される危険性が高く、発見された場合、追撃をふりきって逃げるだけの脚が、彼女たちにはなかった。

そうして幾度か苦い経験を重ねたあげく、アメリカ軍はやむなく南方方面における潜水艦運用を、輸送船を狙う通商破壊と日本艦隊の監視任務に固定せざるを得なかった。皮肉なことだったが、アメリカの潜水艦はその能力の低さから、日本の現場指揮官たちが理想と考えるかたちで運用され、脚の鈍い輸送船相手にそれなりの成果をあげた。

けれども、アメリカはその程度の成果で満足することはなかった。

すでに彼らは開戦前から潜水艦性能の遅れを認め、優れた水中能力と強烈な攻撃力をあわせもつ新型艦の開発に、積極的に取り組んできた。

開戦後、その新型精鋭艦は竣工を待って続々と戦線に投下された。

それが、大戦を通じて実に二百隻余が建造され、主力たる地位をたちつづけたガトー級大型潜水艦だった。

新型ディーゼル・エレクトリック・エンジン二軸を搭載したガトー級潜水艦は、全長九五メートル。五三・三センチ魚雷発射管を艦首六門、艦尾四門持ち、排水量は水上千五百二十五トン、水中二千四百十五トン。水上を毎時二〇・三Kn、水中を一〇Knで走る。

艦内の居住性にも十分な配慮がなされ、八十名の乗員は旧式艦とは比較にならぬ快適な環境のなかで、長期間の航海にのぞむことができた。

ガトー級潜水艦の投入は、結果として南方戦線の状況を一変させるひとつの要因になった。

圧倒的な性能を持つ新型艦を投入したにもかかわらず、やはりアメリカは通商破壊を潜水艦の主要任務に置きつづけた。彼らは兵士の血を代償に学びとった教訓を忘れず、実践に生かしていた。

一万トンの重巡も、一万トンの輸送船も、戦略価値はひとしいという理屈である。たとえば、一万トン級の商船なら、三千名の兵士を輸送することができる。一個連隊である。潜水艦はたった一発の魚雷攻撃で、その三千名をあっというまに葬り去ることも可能だった。

陸戦において、一個師団を撃滅するためには、いったいどれほどの犠牲が必要になるか――。アメリカはそこに、潜水艦運用の本質を見いだしていた。

現実には彼らは、南洋を航海する日本商船隊の六〇パーセント以上をその餌食にした。

太平洋にちらばった各前線は兵員の補充もままならず孤立し、崩壊した。そして日本自体が資源の補給路を寸断され、ついには国家的餓死状況にまで追いこまれる。

また同時にアメリカは、対潜、対空戦闘能力を飛躍的に高めた高速大型駆逐艦の建造をすすめ、日本潜水艦の抑えこみをはかった。

排水量二千五十トン、速力三七Knのこのフレッチャー級駆逐艦は、なんと百七十五隻が大戦中に就役し、日本潜水艦隊の天敵となった。

けれども、伊二二七六は、フレッチャー級駆逐艦はもちろん、まだ新型ガトー級潜水艦と遭遇していない。ともあれ伊二二七六は、その海域で一通の暗号電をうけとった。

そこから、事態は急転した。

慌ただしく廊下を走る聲音が、艦内に響く。壁に設置されたスピーカから、全士官に中央指揮室への集合を命じる松垣の乾いた声が流れる。

なにが起こったのかわからずに、諏訪はその声を居室で聴いた。

扉が短くつづけざまにノックされ、中原が顔をのぞかせた。

「あなたも来てください。狩野さんの命令です」

そういう中原の類は、硬くこわばって蒼ざめていた。

集合命令の対象が全士官であれば、諏訪もそこに含まれる。しかし彼は、士官待遇であるとはいえ、ただの報道班員にすぎない。のこのこと指揮室にいくのとはばかられた。

中原はいらついた口調で促す。

「急いでください」

しかたなく、諏訪は中原のあとを追って駆けはじめた。

すでに八名の士官全員が集まっていた。真ん中に、松垣と馬淵参謀がならんでいる。

中原の背中に隠れるように立った諏訪の姿を認めると、馬淵が咎めるような眼になった。「わたしが呼んだのだ」

と、それを見逃さず、松垣がいった。

「彼は民間人だが、この艦の乗員のひとりであり、士官待遇をうけている。したがって、彼にもここに同席する資格があると、わたしは考えるが――」

馬淵は不服げになにかいいかけたが、

「どうぞ。いずれ彼にもわかることですから」

と、ちいさくうなずいた。

松垣は無表情なままの顔を、狩野のほうにむけた。

狩野は一枚の電文用紙を握っており、

「これから話すことは最重要機密であり、軽々に他言してもらって困る」

そう、おちついた口調で前置きして、

「我が海軍連合艦隊は、一昨六月五日、北緯三十度西経百八十度のミドウェイ島環礁近海において、敵機動

部隊との戦闘を開始した」

と、事実だけを端的にまとめてつたえはじめた。

所謂、ミドウェイ海戦である。

「戦闘はもはや終了」しており、敵の損害はヨークタウン級空母一隻、大破——」

この空母こそがさきの珊瑚海海戦で被弾し、それをわずか三日間の突貫工事で修復した「ヨークタウン」であった。彼女はミドウェイ海戦において日本軍の雷爆をうけて大破、ふたたび修理のため真珠湾基地に曳航帰投する途中の六月七日、日本軍潜水艦——伊一一六八——の魚雷攻撃によって沈没した。しかし、この時点ではまだ、彼女は瀕死の状態なかん、らも生きている。

そこで狩野は間をとるように、深く息を吸った。

「我がほうの被害、旗艦空母「赤城」は大破炎上、おなじく「加賀」ならびに「蒼龍」沈没。空母「飛龍」大破。なお「赤城」「飛龍」は航行不能のため、雷撃処分がとられた」

心臓破りの丘を降りるマラソン・ランナーのように、一気にそこまで話し終えた。

どこからか、

「おっ」

と、詰まったような声が聴こえた。

「もう一度、もう一度お願いします」

切迫した口調で、井関がいった。喉になにかが絡みついているような声だった。

狩野は眼を伏せて、

「要するに、我がほうは「赤城」「加賀」「飛龍」「蒼龍」の四空母を喪った」

「まさか……」

武藤大尉が放心したように天を仰いだ。

それが事実であるとすれば、完敗、惨敗、どんな表現も愚かなほどの負けようであった。

ここにおいて、日本海軍は壊滅したといつてさえ過言ではない。

ミドウェイ海戦時において、連合艦隊は「赤城」以下七艦の正規空母を保有していた——ほかに、小型の補助空母が三隻——。しかし、そのうち「翔鶴」はさきの珊瑚海海戦で被弾し、戦闘能力を喪失している。残った六隻のうち、四艦がただ一度の戦闘で消滅した。

衝撃のおおきさは、真珠湾でアメリカがうけたその比ではなかった。

アメリカが失った戦艦は数こそ多いが、いずれも時代遅れの低速艦で、そのままでは近代潜においてさしたる役にはたたない。いっぽう日本の四空母は、海軍戦力の中核だった。

とりわけ、大型空母「赤城」（一九二七年竣工、三万六千五百トン）と「加賀」（一九二八年竣工、三万八千二百トン）は、超弩級戦艦「大和」「武蔵」とならぶ日本海軍の象徴でもあった。

いや、現実的には、航空機の発達によって大艦巨砲主義は過去の幻想にすぎなくなっている。巨大戦艦はいまや飾り物としてだけの意味より持たず——実際に、巨艦「大和」「武蔵」は戦場において、ほとんど活躍の機会を得られなかった。懐の奥に温存されるかたちで戦争末期まで生き残ってしまった「大和」について、軍はその死に場所を探すことに苦慮しなければならなかった——、むしろ空母「赤城」「加賀」こそが日本海軍の支柱であった。

それを失った。

諏訪は己のからだがかまかく震えているのを感じた。

隣にたたずむ中原も、狩野のほうをじっと見つめたまま、表情をなくしている。

「——以上だ」

と、狩野はいった。

「なお、当艦については、命令変更はない。したがって当艦は、所期の目的どおり、マーシャル諸島クエゼリン基地を経由してラバウル基地にむかう」

そこではじめて、諏訪は自分がラバウルに運ばれることを知った。オーストラリアを指呼の間にのぞむ最前線基地だ。だが、ミドウェイ海戦のショックがおおきすぎるのか、どうという感慨はなかった。というより、なにかを考慮するだけの余裕がなかった。

おそらくクエゼリン基地が、馬淵参謀の目的地なのだろう。

日本を出た伊一二七六はまっすぐ南西を指して、クエゼリンにむかう。そこで進路を南東にむけて、あらためてラバウルの基地をめざす。わざわざ三角形の二辺を移動するような航海になるが、ふたりの乗客をべつべつの目的地に運ぶとなれば、そういう旅程にならざるを得ない。諏訪は、ぼんやりとそんなこと

を思った。

「ほんとどうに……、ミドウェイでの海戦には、負けたのですね」

仁科中尉が、あらためて確認するように訊いた。

「敵は空母一が大破し、こちらは四隻の空母を沈められた。到底ひきあいにはならない」

つきはなすような冷静な口調で、狩野がこたえた。

どう繕ってみたところで、これを勝利といいかえることはできない。

馬淵はほとんど殺意を感じさせるほどの眼で狩野を睨みつけたが、その事実の重さを背負いきれぬようにうなだれた。

「くそっ」

呻くように、井関がいった。

混乱と不安とがなймаげになつて、士官たちの顔に浮かぶ。

負けるにしても、あまりにその損害がおおきすぎる。くりかえしいうが、日本には失った艦船を即座に補充できるほどの余力はなく、あらかじめ用意した手駒だけで、この戦争を闘いぬかなければならない。そのなかでも、飛車角に相当する大駒を、ごっそりと奪われてしまったのだ。その状態で、これからどう戦えばいいのか、暗い思いが膨れあがつていく。

ミドウェイでのこの惨敗によって、戦争のかたたちがそれまでとは一変してしまったことを、日本はようやく悟った。厭も応もなく、力づくで学ばされたようなものだった。

これからの戦争は、航空戦力の優劣が勝敗に直結する。

どれほど強力な装備をあたえた戦闘艦船も、空からの攻撃には抵抗できない。航空機には航空機をもつて迎え撃つほかに、戦いかたはなかった。

しかし、それを知ったとき、日本は航空戦に不可欠な主力空母を喪失してしまっていた。どうにもとりかえしのつかぬ、とてつもなくおおきな代償だった。

ミドウェイの敗北をうけ、日本はなけなしの力をふり搾るようにして、大型空母の建造をすすめる。それが、「大鳳」「信濃」である。

強力な防衛性能を備えた「大鳳」は、基準排水量二万九千三百トン。機動部隊の最前列に位置し、後方から飛来する艦載機の中継基地となつて、敵の攻撃圏外から先制奇襲をかけるという画期的なアウトレンジ戦術の核となるべく設計された新発想の攻撃型空母であった。だが、この戦術発想と設計技術は卓越したものだつたが、その登場はあまりにも遅すぎた。「大鳳」が竣工したときには、日本はもはやどうあがいても逆転しようのないほどの劣勢に追いこまれていた。新型空母はできあがっても、十分な航空機もなく、それを護衛する戦闘艦船もなかった。まさに宝の持ち腐れで、「大鳳」は竣工からわずか三ヶ月後のマリワナ沖海戦において、アメリカ潜水艦の雷撃をうけ轟沈した。

極限にまで高めた防衛力を誇つたにもかかわらず、彼女はその真価を発揮する以前に、たった一発の魚雷で海中に没した。これは、建造を急いだあまり、強力な外装に比して艦内の防御構造が著しく貧弱なものになったためだといわれている。そのせいで、魚雷よる衝撃で漏出した航空燃料への引火を防ぐことができなかった。

彼女は艦内に充満した気化ガスの誘爆によって、風船のごとくその内側から破裂した。設計思想は優秀でも、それをささえる現場の技術はそこまで低下していた。

しかし、「信濃」の運命は、彼女のそれより遙かに哀れだった。

「信濃」はもともと「大和」級戦艦の第三艦として設計、建造されていたが、ミドウェイでの敗戦によって、急遽空母に設計変更され、一九四四年の一月に完成した。排水量は実に六万トンを越える超大型空母で、戦艦なみに強靱な防衛性能をあたえられていた。

海軍にとつては、戦局逆転を賭ける最後の切り札だった。

けれども、彼女は戦場において、どんな活躍もできなかった。この時点で、日本は本土周辺の安全を確保するだけの力さえもあわせていなかった。

完成した「信濃」は、基地へと回航中、潮岬沖で敵潜水艦の待ち伏せにあった。その攻撃が致命傷となり、彼女は竣工からわずか十日でその生涯をとじた。

厳しくいきつてしまえば、日本はミドウェイでの敗北に狼狽し、泥縄式に大型空母をつくりあげたが、それを使う機会も得られず恥の上塗りをした。これが、国家の総力を傾注して闘う消耗戦の怖さだろう。彼我の国力には絶対的な格差があり、いったん歯車が逆回転しはじめてしまえば、それはもうどんな力をもつてしても止められない。

後手にまわって追われるままにもがくうちに、すべてが悪いほうへと循環していく。

ミドウェイは、日本にとって終わりの始まりだった。

本能的に、誰もがそれを感じとっていた。

どんよりと濁った、重苦しい沈黙があたりを支配していた。

「これから、いったいどうなるのでしょうか」

と、やっと仁科がそれだけいった。

日本じゅう探してみても、正確に答えられる者はどこにもいない質問だった。

「わからん」

狩野はぼそりといった。

「われわれはとにかく命令を遂行するのみだが、ただ……、こちらが機動力の大半を失ったことで、状況は昨日までとまったく変わったと考えておかなければならない。太平洋の制海、制空権はわがほうの掌を離れ、敵はこの機を逃さず大規模な反撃作戦を展開してくるだろう。われわれの目的地であるクエゼリンはハワイに近く、ラバウルはニューギニア、オーストラリアのすぐ北だ。ここはすでに、最前線といっている。それを認識してほしい」

つまり、これまでのようにのんびりとした航海をつづけることはできない——。これからは、敵との遭遇がいつ起こっても不思議ではない。そういうことだった。

それからまたしばらくの沈黙がつづき、松垣が解散を宣した。

諏訪は、中原たちとともに居室にもどった。

「まだ、信じられん」

沈鬱な表情で、植草が呟くようにいった。

「だが、これが事実だとしたら……、われわれはあの参謀がいったように、歴史が転回するその一瞬に遭遇したわけだ。もつとも、意味あいは、まるで逆さまになったが……」

いまになってみれば、馬淵参謀が勿体をつけて謎めかした話の内容が、ミドウェイでの海戦を指していたことは、諏訪にもわかつている。

もちろん、馬淵は勝利を確信しきっていた。

だが、現実はその確信をあっさりと裏切った。しかも、考えられる最悪のかたちで——。

「どうなるのでしょうかね、これから……」

諏訪は阿呆のように、さっきの仁科とおなじことを、誰にともなく訊いた。

しばらくして、井関が溜息をついた。

「日本は、難しいことになる」

それから井関は、そういった。

たしかに、真珠湾につづいてミドウェイで勝っていれば、歴史は動いていただろう。アメリカの海軍戦力は壊滅的な打撃をこうむり、いかに強大な国力をもってしてもその再建には膨大な時間がかかる。それはすなわち、日本が態勢を整備しなすす時間でもあった。そこで太平洋いっぱいには拮据してしまった脚許を、そこでしっかりと堅めあげれば、日本はそれからの戦いを優勢のまますすめていくことができるはずだった。

だが、連合艦隊は対等な戦力でぶつかりあったとは思えぬほどの無惨なまでの敗北を喫した。その結果、日本の実質的な海軍戦力は、開戦時の半減どころか、三分の一あるいは四分の一にまで低下した。連合艦隊が四隻の空母とともにその機動力を根こそぎ削りとられた傷の深さは、はかりしれない。

開戦直後から、日本は太平洋での戦線が無秩序なほどに拡大してきた。

広い海に散乱するすべての島々を占領せずにはおかぬような勢いだった——実際、日本はほとんど戦略的価値のない、とるにたらぬ小島にまでかぎりある兵力を分散して基地を築き、守備隊を置いた。その結果、圧倒的な物量投入による反撃がはじまると、それをくいとめるための拠点を持たず、個々の守備隊は連結を絶たれて孤立していった。彼らは微弱な勢力をもって雪崩のごとき敵軍の攻撃にたちむかわざるを得ず、そこにいくつもの悲劇がうまれた——。なかにはポートモレスビー攻略のように中途半端なまま放置されてしまった作戦もあったが、日本は両腕と両脚をぎりぎりまで伸ばして、まるでしがみつこうふう太平洋を抱えこもうとした。

その無謀ともいえる戦線の拡大は、いうまでもなく抜群の海軍力によってささえられていた。真珠湾圧勝の余勢を駆った日本海軍は、瞬く間にその戦場から敵勢力を駆逐した。

しかし、アメリカもむろん、ただ黙って打たれつづけているわけではなかった。

彼らは防戦体制を整えて攻撃に耐えながら、眈々と反攻のチャンスをうかがっていた。

「焦りすぎたな、すこし……」

と、俯いたままで、植草がつぶやくようにいった。

さいしよの反撃は、まさにおもいもよらぬかたちでおこなわれた。

いまからほんの二月たらず前、東京が空襲をうけたのだ。ありうべからざる出来事だった。

それは空母ホーネットを発艦した十六機のB-25ミッチェル爆撃機によって敢行された。指揮官はジェイムズ・H・ドゥリットル陸軍中佐、頑固でタフな男だった。彼らは航続距離を稼ぐためにぎりぎりまで武装をけずりおとしていたが、それでも攻撃を了えた後は日本上空を横断し、そのまま中国奥地をめざす一方通行の爆撃行だった。

爆撃には千葉県犬吠埼から東京を経て、京浜工業地帯をめざすコースがとられた。

日本側の防衛態勢は、空からの侵入に対してほとんど無力だった。太平洋東部の制海権を完全に掌握したいま、そのような奇襲攻撃が可能であるはずはないという油断が、そこにあった。そのために日本はなかば茫然としたまま、その攻撃を迎えなければならなかった。

奇襲爆撃は成功し——実際の被害はさほどのものではなかったが——、ドゥリットル爆撃隊は日本上空において一機も失うことなく目的を達した。

爆撃後、ドゥリットル隊は燃料系統の故障のためウラジオストックに不時着した一機をのぞいて、すべてが中国大陸に到達している。ただ、夜間の強行着陸に失敗して数機が大破、のこりは落下傘による機外脱出をはかったが、そのうちの幾名かがあやまって日本領土内に着地して捕虜となった。

損害は軽微だったが、この攻撃が日本にあたえた衝撃ははかりしれぬほどおおきなものになった。一秒にも満たぬみじかい時間ではあったが、神聖なる皇居の上空を敵の爆撃機によって汚されたことは、否定しようのない事実だった。

二度とこのようなことがあってはならなかった。

空母を基地として長距離爆撃を敢行する、このまったく新しい戦法に対応するには、さらに占領水域を拡大し、空母そのものの本土への接近を阻止するほかにない。真珠湾で肝腎の空母を沈めそこなつたつけがおおきく膨れあがってまわってきたようなものだった。

だが、距離こそちがうが、日本は真珠湾での奇襲で空母からの爆雷攻撃をめぐりに成功させている。おなじことを敵ができないと考えていたのであれば、その姿勢の甘さこそ責められるべきだろう。

ともかく、敵の主力は、まだ残存している。

真珠湾基地に残るこれを叩いてしまわなければ、安心はできない。

むろん、真珠湾奇襲攻撃の成功直後から、本格的なハワイ攻略作戦はかねてから検討を重ねられており、海軍首脳はその時期を六月以降と想定していた。

六月以降、ミドウェイ、ジョンストン、バルミラを逐次攻略し、航空基地を前進させる。そして、兵力と機動部隊を結集して一挙にハワイ攻略をすめるといのがその骨子だった。

ハワイに残る敵艦隊を撃滅してしまえば、アメリカは太平洋における動きを完全に失う。そして、本土空襲の惧れもなくなる。

けれども、この遠距離作戦には海軍内部でも強硬な反対論があった。

当然のことだが、こちらの誘いに載って敵が動いてくれなければ、たしかに占領は容易になるだろう。だが、それでは敵の戦力は依然としてハワイに残存したままであり、占領基地はつねに爆撃範囲内に置かれることになる。それを防衛するためには、多大な戦力を割かなければならない。

つまるところ真珠湾本格攻撃の拠点が、かえってその後の行動の足枷になってしまふ危険さえ、そこにはあった。

やたらと戦線を拡大して基地を増やしてみても、物資や兵員の輸送力にはおのずとかぎりがある。敵勢力下に出出した最前線基地への遠距離補給が、きわめて困難であることはいまでもない。しかし、補給線が確保できなければ、前線基地は孤立してしまふ。

戦線拡大に反対する勢力はそう訴え、むしろ展開中のビルマ攻略に主力を傾注すべきだと主張した。

軍令部内部でも両者の意見はそうしてまっこうから対立していたが、結局はドゥリットル爆撃隊の本土襲来が決め手となった。

もはや、議論に時間を費やす余裕はなくなっていた。

本土の安全確保のためには、敵機動艦隊の殲滅が至上命題になった。東京空爆という事実を眼前につき

つけられてしまつては、反対論者も口を閉ざすしかなかった。

その結果、敵主力が出てくるという前提のもと、ミドウェイ作戦は慌ただしく準備され、決行された。敵艦隊主力との決戦をおこなうために、大規模な占領作戦を起こす。戦術が戦略を規定する、奇妙な逆転現象だった。本末が転倒しているといつてさえない。

この逆転現象は、第二次大戦をつうじて日本のおおきな特徴になった。

大陸においても、日本はなにかに憑かれたかのようにひたすら前進して戦いつづけ、つぎつぎと都市を攻略占領していった。しかし、それはあくまでおおきな地図のうえでの一点を得たにすぎず、あとはその点と点を繋ぐか細い線があるだけだった。

そのためにいったん彼我の優劣が転ずると、補給線を断ち切られた拠点は敵の進攻をささえきれず、戦線はあつけなく崩壊した。

ともあれ、ミドウェイ作戦はそうした状況下で決行された。

戦争もまたゲームのひとつだろう。とすれば、プレイヤーはなんからの予測のもとに、すべての手を己の勝利に結びつけるためにうつ。あたりまえのことだが、その予測のなかには幾分かの希望が含まれている。問題は、この希望の濃度だった。

日本軍の場合は、その希望の部分がおおすぎたらしい。ミドウェイを狙えば敵機動部隊が出てくるという前提そのものが、すでに自分に都合のいい希望だった。もちろん結果からみれば敵は戦場にあらわれたが、その遭遇は、両者の索敵能力の差違によって、むしろ日本軍が敵に誘きだされたかたちでおこなわれた。予測はあつても、その根拠は曖昧なものだった。

これを敗因のひとつとするならば、もうひとつは目的の混乱にあった。

最終目的が島の占領なのか、それとも敵艦隊の撃滅なのか、日本軍はその意図を徹底することなく作戦に臨んだ。信じられぬことだが、幕僚のあいだでさえ意思の統一がおこなわれていなかった。敵艦隊発見の段階で攻撃機の爆装を急遽変更するなどというあまりに愚かしい行動をとらなければならなかった理由が、そこにある。

そうして日本軍は虎の子の空母をむざむざと喪った。機動力を著しく欠いた連合艦隊は、今後の戦いにおいてもはや有名無実の存在になったとすらいえる。

床の一点を見つめたまま、植草は呻くようにいった。

「たしかに、真珠湾では奇蹟が起こった。だが……、それをもう一度期待するのはあまりに無謀というものだ。奇蹟は一度きりだから、奇蹟というんだ」

そういつてから植草はゆつくりと眼をあげて、

「作戦批判になるかもしれないが、やはり急ぎすぎたよ。主力決戦は、もうすこし足許を固めておいてからでも、遅くはなかったんだ。本土空襲の危険はあるだろうが、防衛体制さえしっかりしていれば、たいした被害はないはずだろう」

「とにかく……、これで厄介なことになったな」

と、井関がいった。

中原が不安そうな表情で訊く。

「どういふことですか」

「簡単なことよ」

井関は吐き捨てるように、

「空母を喪った連合艦隊は、同時に西太平洋の制海権の制海権もなくしたということだ。俊敏な脚がなければ、とてもこの広大な海域を抑えきれない。ところが、むこうには充分それがある。つまり、これからは敵艦隊がこちらの占領海域に怒濤のごとくはいりこんでくる。このあたりも、もう決して安全とはいえなくなつたわけだ。いまやこのへんは最前線なんだ。いつ、敵艦との接触があつてもおかしくはない。それを覚悟しておけということさ」

中原はなにもいわず、諏訪と顔をみあわせた。

連合艦隊の支援はもはや望むべくもなかった。伊一七六はその最前線をたったひとりでききつていかなければならない。

これからなにが起こるか、それはもう誰も予想できなかった。

狩野はそれを教えるために、本来極秘であるはずのミドウェイ惨敗の情報をあえて聴かせてくれたのだ。諏訪は、そう思った。

兵士たちの顔色が変わってきた。

ミドウェイでの悪夢のような敗北が、彼らの意識に重苦しい陰をおとしたことはたしかだった。しかし、そのことよりもこれからは敵との遭遇がいつでも起こりうるという事実が、彼らを緊張させていた。

緊張はあるが、だが不安はない。

彼らの表情は、自信に溢れている。むしろ、戦いを待っているかのようだった。

いうまでもないことだが、開戦以来後方支援任務についていた彼らは、戦闘能力のない輸送船を攻撃した程度で、実戦経験がほとんどない。厳しい訓練をいくら積んでいるとはいっても、生死を賭ける実戦における緊迫感とはまったく違う。訓練を重ねるだけで培われるものではない。現実の戦いでは、人間の想像を超えたあらゆることが起こり得る。

その変化に機敏に対応して、正確に行動できなければ戦場では生き延びられない。

その勘を養うためには、やはり理屈ではなく経験によつて学ぶよりなかった。あたりまえのことだが、彼らはその経験に、著しく乏しい。

また、とりわけ潜水艦は高度精密技術の集積体であり、構造上その防御性能には限界がある。そのため、潜水艦は実戦時における不確定要素にきわめて影響されやすい。たとえば、遠くで炸裂した機雷の振動が、操縦系統に致命的な障害をもたらすことさえある。つまり潜水艦の場合、戦闘での敗北はむしろ日常でありきたりな故障までが、高い確率で乗員すべての死に結びつく。

彼らも当然それを知っており、意識のなかに不安がないはずはなかった。

けれども彼らの眼は、それを覆いつくすほどの自信に輝いている。

それがいったいどこからくるものなのか、諏訪はとまどっていた。

なにが彼らを支えているのだろうか。諏訪といえば、彼自身は到底そんなふうにおちついてどっしりと構えてなどはいられなかった。ミドウェイでの敗戦がたえられてから、彼らは一日の大半を海中で過ごすようになった。

自宅の庭のように安全だと思っていた海域が、あるとき突然地雷原に変わったのだ。

ミドウェイにおいて帝国海軍は、両脚をもぎとられるようなかたちで機動力を失った。いざりに等しい海軍ほど惨めなものはない。真珠湾の勢いに乗ったままで、日本軍が際限なく占領範囲を拡げてしまったことも、こうなると裏目になる。

広大な占領地域の防御態勢を整えなおそうにも、脚がなければ迅速な対応は不可能だし、だいいちやりくりする艦船がない。したがって日本側の防衛網は、穴だらけにならざるを得ない。逆に敵は、完勝に背中を押されるようにして反撃に転ずるだろう。

もともとぎりぎりまで延びきった薄っぺらな網である。ほつれめから圧倒的な物量をもって敵が雪崩れこんでくれば、どうにも防ぎようがない。

もはや最前線ともいえるこの海域で敵との接触を避けるには、潜水運航を中心にするしかなかった。

諏訪にとつては、はじめての体験だった。

敵を警戒する必要はさらさらなかったし、なにより潜水時には運航速度が三分の一程度に低下する。あえて海中を進まなければならぬ意味はなかった。

しかし、状況は一瞬にして逆転した。

いつ敵と遭遇するかもしれないぬ環境のなかに、伊一二六七はぽつんとひとりだけ抛りだされたようなかつこうになった。敵の攻勢をちっぽけな伊一二六七ただ一艦でひきうけるのは、いくらなんでも荷が重すぎる。任務を優先すればひきかえすこともできず、海中深く息を潜めて敵の眼を避けるよりなかった。

全速で至近基地にむかうという方法もあっただろうが、檜垣はその選択をとらなかった。それは、素人である諏訪が考えても、危険がおおきすぎた。

偶然であれなんであれ、敵に発見されれば、その段階で裸に近い伊一二六七の命運は絶たれる。十分な戦闘装備をもった敵艦隊とともに組みあつたのでは、とても勝ち目はない。

檜垣がより危険性のすくない途を選んだのも、当然だった。伊一二六七は、静かに海中を進んだ。万にひとつの奇蹟を期待するほど、彼は楽天主ではなかった。

だが、諏訪にすればそれは、想像していた以上に辛い体験になった。

不思議なことだが、おなじ密閉空間のなかにも、浮上時と潜水時とではからだがうける感触が微妙にちがった。もちろんそれは、心理的なものなかもしれないが、艦が海中に没するととたんにおかしな圧迫感を全身に覚えた。まるで鼓膜を一枚の薄いオブラートが覆ってしまったように、すべての音が奇妙に歪んで聴こえた。圧力の変化なのだろうが、鼻の奥になにか堅い物体が詰まっているようで、呼吸が苦しかった。それでいて、もう慣れていたはずなのに、あたりを漂う蓄電池の硫黄臭が強くなった。虫でも這っているように、胸のあたりがむかついて食欲がなくなった。

口数も減り、居室にいる時間が増えた。

そのときも彼は、ベッドの端に腰を降ろし、ぼんやりと足許を眺めていた。

「顔色がよくないな」

と、むこうから植草大尉がいった。

「気分でも悪いのか、ちょっと診てやろう」

そういうと軍医兼務の植草は諏訪の傍らに坐り、掌をのぼして太い指先で臉を裏返した。

「少し貧血気味だな。このところ食事もすすまんようだが、吐き気でもするのさ」

ひっくりかえった臉をもどすために、諏訪は二三度瞬いて、

「そういうわけではありませんが……」

と、曖昧にいった。

「はじめて潜水を経験すると、誰でも多少は体調に変化をきたすものだ。きみのように、まったく訓練もうけていなければなおさらだ。なかには閉所恐怖というのか、神経に異常があらわれる者もいるが、きみはそこまでやわではなさそうだから、そう心配はいらんだろう」

植草は穏やかに微笑しながら、

「厭でもここにいなければならぬのだから、そのうち慣れてくるさ。電車やバスみたいに、きみひとり途中下車するわけにもいくまい。あきらめて滅多にできぬこの体験を愉しむことだな」

「迷惑をかけてしまいました。こんなつもりではなかったのですが」

「いいんだ」

慰めるように、植草はいった。

「体調を崩すのはごく普通のことだから、恥じることも悩むこともない。きみなんか、まだ軽いほうだ。それより、問題はきみのからだではなく、意識のほうにあるぞうだ」

「え……」

諏訪は怪訝そうに顔をあげた。

「ここだよ」

微笑んだまま、ゆっくりと植草は掌でおれの胸を抑えた。

「怖いんだろう」

「怖い——」

「戦いがはじまるかもしれないということが」

「そんな……。いまは戦争の最中ですよ」

諏訪は不服そうに反論した。臆病者と決めつけられたような気がした。

「たしかにそのとおりが、きみ自身ははかしいままで、戦争とは無縁の場所にいた。自分の耳で銃の響きを聴いたこともなければ、銃弾に射抜かれて死ぬ兵士を見たこともない」

「それはそうですが、でも……」

「いいんだ。誰もきみを責めているわけではない」

と、植草は表情をひきしめ、遮るようにいった。

「そのきみがだしぬけに、いつ戦闘がはじまるともれぬこんな状況に置かれたのだ。恐怖心を抱くのは、あたりまえの反応だよ。だが、それは誰でもいっしょなんだ。おれだって、たぶん中原だって怖がっている。井関のようなヴェテランはべつにして、兵士のほとんどがきつといまはおなじ気持ちでいると思う」

「まさか、そんな」

「そうだよ。人間ならすこしもおかしくない、正常な心理反応だよ」

植草は囁んでふくめるようにいった。

「実際、このおれにしても大尉に昇進した現在まで、海戦の体験は一度もない。中原だって、兵士の多くだったおなじだ。輸送船を沈めたとはいっても、あんなものは戦いじゃない。遠くから魚雷を二三発発射しただけのことだった。敵は反撃するだけの装備も余裕もなかったし、だいいちおれは敵艦船の姿をこの眼で

直接見ていない。こんなものが戦闘体験といえるかね。陸軍の連中が聴いたら、笑いだすだろうよ」
窺うような眼になって、諏訪は訊いた。

「では、あなたも怖いのですか」

「あたりまえだろう。本音をいえば、怖くて堪らない」

植草はわざとらしく両腕でみずからの肩を抱きしめるようにして、
「いろいろ考えると、震えがきそうだ。とくに潜水艦は一撃即離脱の飛び道具だからな、武装した戦闘艦と
まともによつかりあったのではどうしたって不利だ。しかもこちらは、まともに一発食らえはまずおしま
いだろう。きみもわたしも、ここにいる全員が死ぬ。それがわかっていいるのだ、怖がるなというのが無理さ」
と、あっさりいいきった。

「でも、とてもそうは見えませんか」

まるで屈託のない植草のいかたに、諏訪の意識もすこしやわらいでくるようだ。

植草はいった。

「しかしね、震えていたって笑っていたって、どのみち人間皆死ぬときには死ぬんだよ。要は、その死に場
所と死に時を誤らないことだ。戦争なのだから、いづれ敵弾に倒れて死ぬのはやむを得ない。このことは、
いくらきみだつて覚悟しているだろう。だが……、たとえそうであっても、できるものならなんの意味も
ない犬死にだけは、やはり御免こうむりたい。これはこんな時勢に生まれあわせてしまった者の、せめて
もの欲というやつだろう」

誘われたように、諏訪は静かにうなずいた。

「ところが、だ……。存分に闘って闘いき、命運が尽きれば潔く従容として死に臨む。理想は簡単にそうい
うことはできても、この納得できる死所と死に時を得るということが、われわれ凡人にはひどく難しい。
わたしはむろん、井関君にも中原君にも、たぶん狩野さんにだってそれをみつける能力はないだろう。し
かし、檜垣さんだけはちがう」

「艦長が——」

「なんとなくぼんやりとしているように見えるかもしれないが、あのひとはわれわれとは人間のできが根本か
らちがっている。しばらくつきあってみれば、自然にわかってくるがね。とにかく、われわれ凡夫の頭に
あまる難しいこと厄介なことは、すべてあのひとに任せておけばいい——。そんな気分になってくる」

「それはつまり……、死所を探すことも」

「そうだ」

植草は笑った。

「それが結局は、いちばん大切なことなんだ。われわれを率いて戦い、死すべきときはそれを教えてくれる。
艦長はそれができるひとなのだ。だからわれわれは、檜垣さんに全幅の信頼を置き、その指示に従う。艦
長についていけば、われわれは一片の後悔さえ残さず死ぬことができる。われわれには、それがわかって
いる」

諏訪は頸を傾げて、

「いつも静かに坐っておられるところしか見ていませんが……」

「それでいいのさ」

植草はいった。

「作戦なんかの細かいことは、狩野さんに委せておけばいいのだ。その点ではあのひとは、天才的な才能の
持ち主だからな。檜垣さんはただどっしりと構えて、おれたちをみていてくれれば、それで充分なんだ。
おれたちは、黙ってあのひとについていく」

軍人として訓練をうけていない諏訪には、指揮官と兵卒とのそうした繋がりを完全に理解することはで
きなかった。だが、彼らが家族のそれにも似た深い連帯感に結ばれていることだけはわかった。兵士たち
にとつて、檜垣は全幅の信頼とともに己の生命すら預けることができる父親のような存在なのだろう。

「まだ、きみにはわからんだろうが、そういうものなんだよ。しかし……、とはいってもな……」

そこまですうと、植草は苦い表情になって頭を掻いた。

「おれも、死ぬのは怖い。できるものなら、敵と接触せぬように祈りたい気分だがね」

恥ずかしげに、植草はそういつて笑った。

それはおそらく、日常を死と隣りあわせに生きなければならぬ兵士の本音なのだろう。植草はそこに
坐ったまま、苦い微笑をたたえて床をみつめている。諏訪は、その姿から眼をそらした。
けれども、植草の祈りがききとどけられることはなかった。

それから数時間と経ぬうちに、伊一二六七は一通の電信をうけとった。

なにか容易ならぬ事態が起こったことは、通路を行き交う兵士たちの慌ただしい聲音で、諏訪にもわかった。諏訪が落ちつきなくなるとちあがりかけたとき、中原がノックもなく扉をひき開け、

「士官は全員集合です。あなたも、来てください」

と、諏訪たちにむかって檜垣からの命令を告げた。

「やれやれ……」

深い溜息をひとつ吐いた植草がゆっくりとたちあがり、

「こちらの都合どおりに、ものごとは運んでくれないということだな」

と、諏訪をふりかえっていった。

狭い通路を、諏訪は植草につづいて歩きだした。

ふたりはしかし、司令室の手前でその脚をとめた。

いつもとはちがう空気が、そこに漂っているようだった。

あいかわらず檜垣は日向で穏やかな春の風に吹かれているような顔つきだが、狩野の眼はひどく険しい。

狩野は睨み殺すような視線を、まっすぐ馬淵参謀中佐にむけていた。

「ちよつと、厄介なことになりました」

中原が頸だけこちらに捻じまげて、ささやくようにいった。

馬淵もまた、一歩も退かずにまっすぐ狩野を睨み返していた。胸のあたりで握りしめた拳が、ぶるぶるとちいさく震えている。

ほかの兵士たちがいなければ、殴りかかっていたかもしれない。

「マッチを擦ったら、たちまち爆発ですよ」

と、ちいさな声で中原がいった。

「しっ」

叱りつけるように、その背中を植草が肘でうった。

「ともかくだ——」

搾りだすような口調で、馬淵がいった。

「艦長の考えには、賛成できない。当艦の目的はあくまで、わたしを安全にクエゼリン基地まで運ぶことだ。ここでの航路変更は任務逸脱であり、重大な命令違反だ」

「あなたがどんな任務を帯びているかは知らんが、それは結局ミドウェイでの勝利を前提としたものだろう。

ミドウェイで大敗し、制海・制空権を失った現在、あなたをクエゼリン基地に運ぶことにさほどの意味が

あるとは思わない」

狩野はひややかに反論した。

「きみの意見など、訊いてはいない」

馬淵はいった。

「これは、軍令部の命令だ」

「しかし、いったん艦が動きだした以上、艦長には機に臨み変に応じて作戦行動をとる指揮権が認められている。海上では、艦長の決定が絶対なのだ」

「すでに、当初の予定からおおきく遅れている。航路変更によるこれ以上の遅滞は許されるものではない」

「それも、前提がおかしい」

狩野はびしやりといった。

「作戦策定の基本軸となったミドウェイの勝敗が逆転したのだ。当然、今後の作戦も根底から練り直されなければならぬ。ミドウェイでの勝利を基礎に築かれた作戦は、もはや反古にひとしい。端的にいえば、

われわれがそれに縛られる必要はない」

「暴言だな」

馬淵は声を荒らげた。

「作戦批判というより、むしろ抗命だ」

「そうではない」

狩野はいった。

「われわれは、あなたを目的基地まで届ける。なにも、途中で抛りだすといっているわけではない。そうできれば嬉しいが、われわれはあたらされた任務を完遂する」

中原が俯いた。笑いを懸命に噛み殺しているのだろう、背中が細かく揺れている。

馬淵の頸筋が赤黒くなった。

「だ、だから、それを優先すべきだといっているのだ」

「作戦行動順位の裁量権は、ご承知のとおり艦長にあります」

「わたしの基地到着が、これ以上遅れては困る」

「そういわれるが、あなたはいったいクエゼリン基地の現状をどう把握しておられるのだ。なにか、誤解しておられるのではないか」

どうやら狩野の頭脳は、攻撃をうければうけるほど冷静になってくるらしい。

「ミドウェイで破れた現在、あの基地は最前線というより敵陣にぽつりとひとつ突出しているようなかたちだ。機動力を喪失したこちらは、基地への補給線を従来のように維持することはできない。兵員補充、糧秣の運搬もままならず、すでに電信制限もとられている。役にもたためず戦書を抱えてあなたが慌てて駆けつけたところで、なにもはじまらない」

「暴言だ」

怒鳴るように、馬淵はくりかえした。

しかし、それを無視して、なにかを読むような口調で狩野はつづけた。

「逆に、敵の側にたつてみれば、戦線を前進させ本土に迫るためには、ひとつでも多くの飛行場が欲しいはずだ。つまり、クエゼリンなどは絶好の標的になる。クエゼリンだけではない。マキン、タワラ、さらには南のガダルカナル——。どこもみな危ない。こうなってしまった以上、こちらとしては敵の狙いを正確に予測し、防御態勢を整えなおすことが先決だろう」

「戦略構想は、きみの役割ではない。そんなことは……」

馬淵は不快げにそっぽをむいた。

「むろん、こうしたことは参謀たるあなたがたの仕事でしょうが——。わたしはただ、あなたがいまここで一刻を惜しむように急いでみても、事態は変化しないと申し上げている。それよりもまず、危殆に瀕した一艦の生命を救うことこそ重要ではないか。どのみち、たいした時間はかからない」

「いや、危険すぎる」

馬淵は強く頸を振った。

「駆逐艦「春雷」は敵潜の攻撃によって、推進機関にそうとうの打撃を負っているというではないか。まともに進捗することもできず、蛇行と旋回をくり返している状態だ。敵潜がそんな「春雷」をのんびりと見逃すはずはない」

「もちろん、「春雷」の周囲には敵潜水艦がうようよと集まってくるでしょうな」

「そんなところへ、たった一艦で突入しようというのか」

馬淵は呻くようにいった。

「あまりに無謀ではないか。いくらなんでも、危険すぎる」

「孤立した「春雷」を救うには、それしかありません」

「だが……、救出できる可能性は、きわめて低い」

馬淵は吐き捨てるようにいった。

「だいいち、われわれが到着する前に「春雷」が沈んでしまうかもしれない」

「かといって、こうしてその危機を知った以上、黙殺することはできません」

「猪突猛進というものだ、それは。なにより、「春雷」はこちらに救援を要請してきたわけではない。彼らはみずからの置かれた状況をよく理解して、覚悟のうえで最後通報をおこなったのだ。そのために犠牲を増やすことは、彼らの本意ではあるまい」

「二百五十余名の兵と、貴重な駆逐艦を一隻むざむざと喪ってしまうかどうか——。その瀬戸際ではありませんか。多少の危険は、われわれとしても承知のうえです」

「その駆逐艦だけではなく、潜水艦一艦をいっしょになくしてしまうことにもなりかねない。わたしは、そういうっているのだ」

「これは、戦争ではありませんか。勝てるかもしれないし、負けることもある」

狩野はいった。

「しかし、敵との戦闘を懼れていては、なにも得られない」

「わたしが敵との戦闘を懼れているというのか。わたしを臆病者だというのか」

馬淵の表情に、怒りが溢れた。殺気が、その眼に宿った。

それをはぐらかすように、狩野はおもむろに頸のあたりを撫で、

「論点をすりかえられては困る。感情ではなく、理性で話していただきたい」

馬淵は紫色になった唇を噛みしめ、だが一呼吸置いてから、

「正常な判断力をなくすほど感情的になっっているわけではない」

と、つとめて静かな調子でいった。かすかに、語尾が乱れていた。

「それなら結構」

と、狩野は馬淵にむかつてうなずきかえし、

「無傷で「春雷」を救出できる――。すくなくともその可能性が充分にあると判断されたからこそ、艦長は進路変更を決断されたのです」

馬淵はいらだつたようすで舌打ちをくれ、

「どういう秘策があるのかは知らぬが、それが無茶だとわたしはいうのだ。敵潜が戦闘隊形を組んでいるとすれば、最低でも相手は三隻になる。こちらは、ただの一艦。しかも、武装も満足ではない。搭載魚雷も、たった六発にすぎない。そのうえこちらには、脚と眼を失って闇夜を手探りで這いずりまっっているような「春雷」という重荷がある」

そのあたりで諏訪にも、このなりゆきがぼんやりと見えてきた。

敵潜攻撃によって重傷を負った駆逐艦「春雷」からの緊急電信をうけとつた檜垣は、初期の航路を急遽変更して、その救出にむかうことを決断した。だが、馬淵は作戦命令をかざしてそれに真っ向から反対し、檜垣の代弁者たる狩野とのあいだに烈しい論戦が展開されたということだろう。

「位置からみても、われわれ以外に「春雷」を救い得る味方はありません」

つきつけるように、狩野はいった。

「われわれが動かなければ、「春雷」はまちがいなく二百五十余名の兵とともに海中に没します。それを見殺しにすることは、できない」

「わたしは、到底納得できません」

馬淵はいった。

「失礼だが……、檜垣艦長には、実戦経験をお持ちではない。もちろん、敵の眼を眩まして「春雷」を救う奇策をその胸中に秘めておられるとは思いますが、机上の計算と実際の戦闘はしばしばくちがつてくるものです。それを、艦長は――」

「たしかに、非礼ないいかたですな」

馬淵の言葉におしかぶせるように、狩野は語気を強めていった。

「あなたは艦長の手腕を疑っておいでのようなのだが、机上の計算というなら、あなたがたもおなじではないか。あなたがたは現実を無視して、偶数日しかでない賽子を振って作戦を策定した。その結果が、ミドウェイではありませんか」

馬淵がまっすぐ狩野にむかつて歩み寄った。

「まあ、待ちなさい」

いかにも退屈そうな、間延びした声で檜垣がいった。

憤懣やるかたない表情で、馬淵は檜垣にむきなおった。

「狩野君も、あなたを侮辱するつもりでいったわけではなく、ただの言葉の綾というものでしょう」

そういうと檜垣は瘦せた頬に微笑を浮かべ、あたりを見まわした。

「だいたいの話はわかったと思うが、先刻、われわれは駆逐艦「春雷」からの緊急打電をうけとつた」

総排水量一六八五トンの「白露」級駆逐艦「春雷」は、辺境諸島守備隊への物資補給船団の護衛にあたっていた。しかし、ミドウェイでの圧勝をうけて前線に進出した敵潜水艦に捕捉され、その攻撃に晒されることになった。

「春雷」は輸送船を護つてよく戦ったが、ついに敵の魚雷を横腹にうけた。

「輸送船は全艦沈没、「春雷」も推進部の破損により、舵がきかぬ状態だという」

檜垣はいった。

「いま、われわれは「春雷」の至近位置にある。救出にむかうには、ほかの僚艦はいささか遠すぎる。われわれなら、往復約半日の行程で、「春雷」が旋回中の海域に到達できる。われわれが到達するまで、「春雷」がもちこたえてくれるかどうかはわかんないが、その危機を知った以上、座視していることはできない」

当然だというように、井関機関長が深くうなづいた。

檜垣はこともなげにいった。

「それで、わたしは「春雷」救出にむかうことを決意した。もちろん、「春雷」のまわりには、敵潜水艦隊

がいるだろう。たぶん、戦闘は避けられぬだろう」

なにかいいかげな眼つきで、馬淵が檜垣を見やった。

それも知らぬげにも、檜垣はまるで他人事のようにいった。

「しかし、敵にとつての標的は片輪同然の「春雷」一艦だ。たいした数の敵艦は残っていないだろう。うまくやれば、「春雷」を救うこともできるはずだ」

「それは……」

馬淵がいった。

微笑したままそちらをむいた檜垣は、

「わたしは、もう決めたのです」

と、ぴしゃりといった。

茫然としてそれを眺めていた諏訪の肩を、植草が軽く叩くと、

「いよいよ、きみの期待どおりになってきたようだな」

顔をよせて、そう、なんだか愉しげな口調でささやきかけた。

反転

1

どう取り繕ってみても、日本はミドウェイで破れたことによって、この戦争そのものに勝つチャンス——もともとそれは、きわめてかぼそいものでしかなかったが——を喪った。それは、否定しようのない事実だった。

日本はもはや、航空機時代の戦争をたたかいぬく資格をなくした、といってもいい。

ミドウェイでの海戦において、帝国海軍は虎の子ともいうべき四隻の空母を沈められた。そのことは今後の日本が、攻撃面においてはむろん、防御の面でもきわめて厳しい立場を余儀なくされるだろうことを意味していた。

攻撃についていえば、空母とそれにともなう艦載機——零式戦闘機百五を含む搭載機およそ三百——の損失はいわずもがなだが、なによりその戦闘機に搭乗するヴェテラン・パイロットを多数うしなってしまうことが致命的だった。

空母や戦闘機といったハードウェアは、材料と技術、そして労働力さえあれば、失われたものを短期間にとりもどすことも可能だ。事実アメリカは、開戦以後驚異的なスピードで高速空母をはじめとする戦闘艦や航空機の建造を進め、続々と戦線に投入してきている。

まず日本には、それができなかった。

材料も労力もはじめから乏しかったという弁解は、狂人の論理にひとしい。

たとえば、この時代の戦車は、セル・モータを始動させるだけで途方もない燃料を消費した。それは、燃費性能にすぐれた現代の車なら、東京と箱根あたりをゆうに往復できるほどの量だったという。そもそも戦争は、財布の中身を心配しながらはじめられるようなものではなかった。

その程度の準備もなしに、希望的観測を根拠に日本はしかし戦争に踏み切った。

それで圧倒的な経済力を持つアメリカに勝つことは、聾啞者がオペラの Aria を全曲歌いあげることよりも、もつと難しい。

踏み切らざるを得ないところまで追いつめられたという理屈は、外交の無能無策を証明するだけのことにはかなるまい。

ともあれ、日本に失ったものを再度つくりなおす余力はなかった。

もちろん、日本は懸命になって突然ぼっかりとあいてしまった穴を埋めるべくあがきつづけた。できるかぎりの資材をかきあつめて戦闘機をつくり、建造にとりかかっていた戦闘艦船の設計を急遽変更して空母を揃えようとした。

失ったハードウェアの幾分の一かは、そうした血みどろの努力で埋めることもできた。だが、それを操るソフトについてはどうにもならなかった。

ミドウェイで海底に消えたヴェテランたちと同等の能力を持つパイロットを短時日で育てあげることが、不可能だった。

パイロットたちはたった一度の実戦で、数百時間の訓練にもまさる学習をする。その体験を積み重ねて、しかも生き残った者たちだけがヴェテランになれた。彼らは、戦闘機を己の手足のごとく意のままに操ることができた。

つぎつぎに新型機を投入してくる連合軍に対し、スベック面ではもはや劣らざるを得ない零式戦闘機が互角以上の闘いを展開できたのは、そうしたヴェテラン・パイロットの技術と勘によるものだった。強力なエンジンと分厚い防護壁を持つアメリカのグラマンは、いちおうの訓練を経たパイロットなら誰が搭乗してもおなじように闘うことができたが、日本の戦闘機はパイロットの技量次第で鷹にも鳩にもなった。

その貴重なパイロットを、日本は一度の海戦でごっそりとなくしてしまった。どうあがいても、とりかえしのつかぬ損失だった。

その結果、日本は未熟なパイロットを前線に送り出さざるを得なくなった。

操縦者の技術に差がなくなれば、あとは戦闘機本来のスベックの、つまりはハードウェアの勝負になる。

その性能と量において、ここでも日本はアメリカに太刀打ちできなかった。未熟な若いパイロットは、実戦で経験を積む前に、つねに数倍の勢力をもって襲いかかってくる敵機の餌食となり、その愛機とともに空に散った。そしてまた、より若く能力の劣るパイロットたちが旧式の戦闘機とともに前線に送りこまれていった。

泥沼の悪循環のはじまりだった。

進撃の先陣をきるべき戦闘機がかつての力をうしなったのだ。これによって当然、攻撃力は格段に低下した。

防御においてもそれはおなじことで、雪崩れのごとく侵攻してくる敵をよく支えきる能力を彼らに望むのはあまりに酷だった。

いうまでもなく、日本は四囲を海にかこまれた島国である。

数百年の昔なら、その海が外国の侵略を阻む強靱な障壁となった。

だが、航空機主力のいま、海は日本を護ってはくれなかった。

それどころか、その海に浮かぶ空母が、敵の前線基地となった。

むろん日本は、長距離爆撃機の航続距離を踏まえて本土の絶対防衛権——ドゥリットル隊の空襲によって、その計算が甘すぎたことがあつさりと立証されたが——を設定、必死にそれを維持していたが、空母や戦闘機をうしなつたいまとなつてはそれも困難だった。

たった一重にすぎない薄っぺらな防衛網のどこかを錐探むように突破しようとしてくる敵に対処するためには、なによりも俊敏な機動性が必要だったが、日本はミドウェイでその脚と翼をもぎとられてしまったのだ。

ともあれ、歴史はいまこのとき、ひとつの転換点を迎えようとしていた。

伊一二六七はそのなかを、ひたすら東にむかつて進んでいる。

慎重に、そしてできうるかぎり迅速に。

ほんの数日前まで、この海は彼らの庭だった。

危険はこれっぽっちもなく、航海を愉しむことさえできた。けれども、いまはちがう。

情勢はいまや百八十度変化し、ここはもう最前線といっている。

いつなんどき、敵と遭遇するかもしれないなかった。現実には、駆逐艦「春雷」が護衛にしていた輸送船団は、ここからわずか数時間の距離で敵潜水艦に襲われ全滅した。

ミドウェイ以前なら、到底考えられなかったことだ。

敵がそのあたりまで進出してくるにはさうとうの危険を冒さなければならず、だからこそ「春雷」はたった一艦だけで船団護衛にあたっていたのだ。誰もが安全を確信していた。「春雷」はいつてみれば、輸送船団の飾りにすぎなかった。

敵の反攻は、予想外に速い。

ぎりぎりまで撓められた鋼鉄のばねが、ミドウェイを契機に一気にはじけたようだった。

こちらにも、急がなければならなかった。

駆逐艦「春雷」は、敵の魚雷攻撃によって推進機関部におおきな損傷をこうむり、いざり同然の姿で洋上を漂っている。獲物を狙う鮫のように、敵潜はその周囲に集まってくるだろう。一刻の猶予もなかった。

その機関が、完全に動きを止めてしまう前に「春雷」を危険水域から脱出させなければならなかった。

エンジンが動きを停止してしまえば、どうしてやることもできない。二百を越す「春雷」の乗員を伊一二六七だけで救うことは不可能だった。

嬰兒が這う速度よりも遅くとも、彼女がせめてみずからの意志で動けるうちに、血に飢えた鮫の群を追い払ってしまわなければならなかった。

これから歴史がどう変わっていくかと、伊一二六七にとっては「春雷」の救出が先決だった。そのため彼らは、東に急ぐ。

もとより、彼らは歴史のおおきな流れに、なにほどの影響もたらすことはできない。そのうねりに抗うことも、流れからはずれることもできなかった。だが、ぼつんと孤海にとりのこされた二百余の生命を救うことは、彼らにもできるのだ。

しかし、いつの時代でもそうであったように、その転換点の直中に置かれた乗務員たちは、変化の予感——彼らにとつては不吉な——を、本能的に悟っていた。これからの戦いは、ひどく苦しいものになる。誰もが、そう感じとっていた。

結果として、日本はこの戦争をうしなうことになるかもしれない。

ほとんど反射的に、そんな予感を覚えた者すらいる。

諏訪俊一も、そのひとりだった。ミドウェイ敗戦の報せを聴いた彼は、しばらくのあいだ放心状態だったが、それでも落ち着きをとりもどすにしたがって、いつしかかつて退役将軍の山室老人がつぶやくようにいった言葉が耳の奥で甦っていた。

そのとき老人は、アメリカと日本の国力を相撲になぞらえて説明してくれた。

アメリカが鉄壁の備えを誇る無敵の横綱としたら、日本はせいぜい小兵の小結というところだ、と山室は自嘲するような笑いとともいって。

まともに土俵の上で組みあつたのでは、とても勝負にならない。といって、小細工や奇襲が通じる相手でもない。

一か八かの蹴たぐりやとつたりに賭けるのもやむないが、たとえそれがうまく狙いにはまったとしても、むこうの体制をわずかによるめかせる程度だろう。しかも、はじめから組んだら負けることがわかりいつているのだから、いったんは相手をぐらつかせたとしても、こちらとしてはすぐ次の攻め手に窮する。

つまるところ、こちらとしては丸い土俵のうえをさんざんに動きまわり、むこうを疲れさせ、うんざりさせて水入り、そして勝負預かりにもちこむぐらいしか戦いようはない。

山室はそういつた。

日本がまだ、大陸での戦勝に酔っていたころである。

諏訪はかならずしも戦争を肯定する立場をとらず、むしろ当時の若者としては例外的に日本という国家のありかたそのものにいささかの懐疑——ただしそれは、なんらかのイデオロギイを背景にしたものではなく、また自分でもしつかりと理論つけて分析できるようなことからでもなく、たぶん気分によるものだった——を抱いていた。そんな彼にとつても、山室老人の忌憚ない意見は、意外でありすくなくとも愉快に響くものではなかった。

しかし、いまになってみるとその言葉がよく理解できる。

それから間もなく、日本は真珠湾基地を奇襲攻撃することでアメリカと開戦した。あるいは山室はその計画についてすでにある程度まで知っていたのかもしれないが、とにかく彼のいう立ち会いすれちがいさまの蹴たぐりである。

たしかに、それは相手の意表をついた攻撃であつたらしく、不敗の横綱はぐらりと揺れたが、だがそれきりだった。むこうは慌てることなく、己の体制をたちまちのうちにたてなおした。

満場の観客——もし、そんなものがあれば——は、一瞬どよめいたものの、すぐまた静寂をとりもどした。客観的に実況をつたえれば、そんなところだろう。

勝負はそれからしばらくつづき、ちいさな小結はよく頑張っていたが、どうやらすこし焦りすぎた。もう一度ぶちかましにいこうとして、からだを丸めて飛び出した刹那を、カウンター気味に強烈な張り手を喰らった。

今度は小結のほうが意識朦朧としたようすでよろめき、観客からはいつせいに溜息が漏れた。

こうなってしまうえば、勝敗の行方はもうわかっていた。

横綱はその太く逞しい腕を伸ばして、飛びまわる蠅のようにうるさい敵をがっしりと捕まえにかかろう。上手だろうと下手だろうと禰を握って四つに組み、しっかりと腰をおとしまえば、もうお終いだ。筋肉の盛りあがった厚い胸板を押しつけられた敵は、いずれ苦しまぎれに顎をあげる。スタミナは消耗し、いやおうなく不利なかたちに追いこまれていく。

もしかしたら、そんなことになるのかもしれない。

諏訪はそう思った。

もちろん、そのことは中原にも黙っていた。そんな不安をわざわざ口にしてみたところで、どうなるものでもない。

道化めかしてはいるが、中原はあれで意識の底にいつも妙に醒めた部分を残している。だからそんな話を聴かせてみても、無闇に怒りだすようなことはないだろうが、いずれにしても面白い内容ではない。

中原にしても、この戦争の先行きが容易ならぬものになったということぐらいは、とつくに認識しているはずだった。いや、そもそも中原は、最初からこの戦争に日本が勝てるなどとは思っていないかつたようだ。といって、敗北を願っているわけでは、むしろない——ごく一部のシニカルな若者のなかには、いかにもわけしり顔にアメリカと日本の国力を比較し、むしろ将来のためには日本は負けるべきだと口にする者もいた。もちろん、それは絶対に安全の保証された私的な場所にかぎられていたが。彼らは、学生時代に資本論などをききかじって、麻疹程度に共産主義にかぶれた者が多かった。諏訪はそうした連中を、何人か知っ

ている。ところが不思議なことに、実際に真珠湾攻撃によって対米戦争が始まると、彼らは熱烈な愛国主義者になった――。

しかし、あきらかに中原はそういう輩ともちがっていた。

潜水艦に乗り込んで数日経ったころ、諏訪は中原に訊いてみたことがある。

果たして、日本はアメリカに勝てるかどうか――。

ひとところこれは諏訪にとつて、相手の人物を判断するひとつの規準となるべき質問だった。

あたりまえのことだが、こう尋ねられていきなり胸倉に掴みかかってくるような相手には訊かなかったし、現実に対米戦が始まってしまつてからは、一度もこのテストを使ったことはない。それは、あまりに危険すぎた。

諏訪の経験によれば、勝てるかと訊かれて、さまざまな理屈をもちだして肯定する者――それがほとんどだったが――は、意識の奥におおきな不安を抱えているとみて、まずまちがいはなかった。

彼らは、理性と感情の対立に困惑していた。

彼らの知識と教養は、この質問に対してひとつの回答を示す。だが、感情は即座にそれを否定する。単純な愛国心か、それとも敗北への恐怖なのか。

どちらにしても、それがまともな高等教育を受けた普通の人間の反応だった。

一步踏み込んで、

「勝たなければならぬ」

と、応える者たちは、彼らよりもうすこし状況認識力と判断力があつた。

その答えは――彼らが気づいているといはないと関わらず――、つまるところ敗北の可能性を前提にしたものだからだ。

戦争がはじまつてからは、さすがにこの質問は封印してきたが、中原に対しては誘惑を抑えかねた。

数日のつきあいにすぎなかったが、中原という人間もそれなりに掴めてきていた。

怒りだすようなタイプではなかった。

彼がいったい、どんな返辞をするか。それに、興味があつた。

ふたりきりになったとき、それを訊いてみると、中原はいつものように微笑したまましばらく考えてから、

「アメリカに勝つて、どういふことですか」

と、逆にそう訊きかえてきた。

諏訪は黙っていた。中原が答えを望んでいるわけではないことは、わかつていた。

中原はいった。

「艦隊をずらつと連ねて、カリフォルニアあたりに上陸して敵地を占領し、アメリカを無条件降伏させるというのですか。ここだけの話にしてみました、それならばはっきりと答えられますよ」

「勝てますか」

諏訪は訊いた。

「無理です」

中原は、こちらが拍子抜けするような口調で、あっさりとこたえた。

「アメリカ占領なんて、できっこありません。一発でニューヨークやロス・アンゼルスを破壊してしまうような新兵器でもあれば別ですが、いまの戦力でそんなことできるはずはありませんよ。アメリカ合衆国の面積は日本の二十五倍、人口も三倍近い。そんな広大な国を、どうやって占領しろというんです」

「じゃあ、どうなるんです」

「敵本土陸戦といえはいかにも勇ましく響きますが、実際には連合艦隊の全艦船に何十万もの兵士を載せて、太平洋を横断しなければならぬんですよ。秀吉の朝鮮出兵どころじゃありません。そんな兵站計画、誰が策定できるんですか。占領ともなれば、さらにその何倍もの要員がいる」

「不可能でしょうか」

「すくなくとも、大学教育を受けたひとの言葉とは思えませんね。きっと、成績はよくなかつたでしょう」

と、中原は穏やかな表情で、からかうようにいった。

「そのとおりです」

諏訪は素直に認めた。たしかに、どう鼠目にもみても、褒められた成績ではなかった。とりわけ数学は苦手で、いまだに三角関数が理解できない。もつとも、現実の生活では、まったく必要のないことではあつたが。

「とりあえず現実論は無視するとして、上陸戦をおこなうためには、最低ふたつの絶対必要条件があります。

ひとつは、太平洋の安全が確保されること」

それは、当然だろう。上陸要員を満載すれば、艦船の航海速度や戦闘能力は大幅に低下する。その状態で、敵潜水艦がうようよしている海を越えられるものではない。

中原はつづけた。

「中間基地として、ハワイはどうしても抑えておかなければなりませんね。できれば、ハワイとアメリカ本土の間に、もうひとつおおきな島が欲しいけれど……」

いくらなんでも、それは贅沢すぎる要望というのですね、とつけくわえて、中原は笑った。太平洋の真ん中を埋め立てて、島をつくるのでは、何世紀もの時間がかかる。だいいち、そんな奇蹟を起こす技術があるのなら、あえて戦争をはじめるとはなかった。

「で、もうひとつの条件は——」

「中国大陸とアジアでの戦争が、完全に終結していることです」

と、中原はいった。

「もちろん、こちらの損傷は軽微で、圧勝に終わっていないかもしれませんが、そうでないと、必要最小限の上陸要員が集められません。いうまでもありませんが、十五歳以上の男子はすべて徴兵して上陸要員にあてる。彼らに持たせる火器の開発も、急いでおこなわなければなりません。小銃ひとつとっても、むこうとこちらでは性能に大変な格差がありますから、早急にそれを埋めなければなりません。とにかく、こちらが明治以来の歩兵銃を一発撃つうちに、むこうから百発の機銃弾が飛んでくるような状況ではどうにもなりません」

「そして——」

諏訪は中原を促した。

中原はいった。

「物資の補給、兵の補充ですね。あ……、食料も——。その円滑な補給は不可欠です」

アジアの占領地域から原材料をかきあつめ、国内の生産設備をフル稼働させて加工し、それを滞りなく太平洋のむこうの最前線に送りだす。

「国内の労働力はすべて、それに充てられることになるでしょう。いまから新たに工場を建設して——、なんていう悠長なことはいってられませんから、従来の設備を使用して、二十四時間不眠不休体制で兵器を製造しなければなりません。艦隊も太平洋の往復で休む暇なんてありません。その燃料も、どこから集めてこなければなりませんね」

なんだか中原は、愉しそうにいった。

そう、彼は男のからだの秘密について語りあう女学生のように、このふたりきりの会話を愉しんでいた。「だから、アジアや中国における完璧な占領が不可欠なんです。そのあたりがぐらついていたら、とてもじゃない。アメリカ上陸戦なんて、できません。物資や兵員について、絶えず充分以上の補給をおこなう。それで——、せめて敵に対して二倍の兵力を最前線で維持したいですね。勝敗以前に、それ以下ではまともに戦うことさえ難しい」

「それほど兵力差がないと、勝負にならないのですか」

「残念ながら、そうですね」

と、中原はうなずいた。

「なにしろこちらは、つい昨日までそこらの野原でちゃんばらをやっていた漬垂れが中心にならざるを得ないですよ。訓練している時間なんて、ありません。徴兵したら、すぐに前線に配備しないと——。それで戦うんですから、二倍はないと、戦線をもちこたえるところかたちまち全滅ですよ。あなただって、西部劇映画を観たことあるでしょう。なにせ、むこうでは金髪の綺麗なお嬢さんでも、ライフル射撃の名人がたくさんいるんですよ」

最後は、冗談めかしていった。

それから中原は、諏訪にむきなおって、

「やい——」

と、頸を傾げるようにしていった。

「この条件が全部満たされなければ、上陸戦での勝利はおぼつきません。その後の占領ともなれば、もっと厄介な条件がいくつかわかります。ここで、今度はわたしから訊きますがね、あなたは上陸戦が可能だと思いますか」

「無理でしょうね」

すかさず、中原はいった。

「証明終わり、ということだ。」

思わず微笑を誘われて、諏訪はいった。

「だったら、この戦争はどういうかたちで終わるのですか」

中原は悪戯小僧のような眼になって、諏訪を窺った。

「あなたがなにをいわせたいのか、知りませんがね、日本が負けるとは口が腐ってもわたしはいけませんよ。敵本土の占領は到底無理としても、戦争の終わらせかたはいくらだつてあるでしょう。日露戦争のときのように、政治でうやまむに終わらせることだつてできるかもしれません。あのときだつて、日本は勝つたとみんな思っている」

「事実、勝つたじゃありませんか」

「ええ。ロシアからいくつかの譲歩をひきだしたという意味ではね」

と、中原はいった。

「でも……、正直なところ、あのときのロシアは、決して日本との戦争に負けたとは考えてはいなかったはずですよ。たしかに、バルチック艦隊は沈められました。陸軍は大勢力を保持していましたが。あの国は、懐が深い。戦いながらすこしずつ後退し、敵の兵站線が延びきつたところで、全勢力を投入して決戦を挑む。それが、彼らの伝統的な戦い方なのです。ところが、その前にジャッジがリングに上がってきて、勝負を決めてしまった。ロシアにしてみれば、消化不良もいいところでしょう。もっとも、彼らにしても共産主義者の動きが気になって、戦争終結を納得しましたが、負けたとは思っていませんよ」

「もし、あの戦争がながびっていたら……」

「おそらく、アメリカ上陸戦とおなじことになつたでしょうね」

中原はこともなげにいった。

「あのとき日本には、戦争をつづける力はなかった。海軍はともかく、陸では奉天会戦で終わりです。あの戦いでは勝敗は決まらず、ロシアはいつものとおりに軍を後退させて、つぎの衝突にむけて戦力を整えなおした。日本はもう、息が上がっていました。弾薬も兵も補充はままならず、限界だつたんです。あの状態で敵に誘われるまま進んでいたら、つぎの会戦で日本はロシアの大軍に包囲され、ひとたまりもなく叩き潰されていたでしょう」

「しかし、そうはならなかった」

と、諏訪はいった。歴史は、すこしばかりちがった方向に動いた。

「そうです。政治と時代情勢が日本を勝者にしたのです。かろうじて判定勝ちというところでした。戦争が終わってから、あまりに得るものがすくないといって国民が騒いだのは事実ですが、政府としてもあれ以上の要求はできなかつたはずですよ。政府は、日本に戦争持続の能力がないことを、いちばん知っていたわけですからね。あそこでロシアに停戦を拒絶されていたら、日本はきわめて困った立場に追い込まれていたでしょう」

「アメリカとの戦いも、そうしたかたちにもちこむしかない、ということですか」

「戦争の終結を考えるうえで、あくまでも、ひとつの選択肢としてはね。けれど、どちらにしてもこの戦争は長くつづきます。作戦批判ととられるとまずいのですが、真珠湾奇襲へのアメリカ国民の反応を考えれば、半年や一年では終わらない。いまは勝利の連続でうかれています。アメリカはかならずどこかの機会を捉えて反撃にできます。そうなれば、国家総力戦です。果たして、何年がかりになるか、誰にも予測できないでしょう。わたしもあなたも、もしかしたらその終幕を見届けられないかもしれない。したがって、この質問はあまり意味がないようにも思えますが――。そういつてしまえば、身も蓋もないか」

はぐらかすように、中原はいった。

「一年程度太平洋を駆けまわつて、アメリカを疲弊させ戦意を削ぐしかない。対米戦の結末について、そういうひといます」

山室老人の意見だった。

「同意しますね。海軍力についていえば、日本がいまの段階でアメリカにまさっているのは機動性です。そのひとつのいうとおり、戦局を有利に運ぶには、それを最大限に利用するような戦い方をするしかない」

中原は強こうなずいた。

「たぶん、軍司令部もおなじように考えているでしょう。そうやって、見方によってはどうにか優勢というあたりで、対米戦にけりをつけられれば理想なのですが——」

「理想とおりにはいかないといいたげですね」

「そんなことはありませんよ。ただ、戦争ではどんなことでも起こりますから」

そういつてから中原は、

「ともかく、中国かアメリカか、当面の敵をひとつに絞らなければ、日本は苦しくなります。日本にアメリカと中国という超大国ふたつを同時に敵にまわして両面で総力作戦を展開する力なんてありませんから。ついでにいえば、中国戦線の将来だつて、おなじようなもので樂觀は禁物ですよ。あの国は、地方軍閥があちこちに乱立し、そのうえ共産勢力まであつて統一がとれないありさまだったわけです。だから、日本はあの勢いで勝ちつづけられた。もし、強力無比な指導者があらわれて彼らを統一し反攻戦線を築きあげたら、日本はとつてもいまの優勢を維持できませんよ。なにしろ、国家総力戦となつたら、むこうはこちらの五、六倍の人口がありますから」

「すると、中国本土の占領も難しい——」

「あちらは陸軍主力の戦争ですから、どうなるかはわかりませんが、全土の占領なんて幻想というより、妄想でしょう。満州の領土を拡大するぐらいのところであ協することになるのかもしれないね。その線なら、早めに戦争を終わらせることも可能です。とりあえず建前としては、アジアのほうの戦いに早く幕を降ろしてくれないと、こちら国民の希望のようにアメリカと本格的に勝負することはできませんからね」

吐息とともに、中原は話をもどした。

「本音だと、どうなります」

「わたしの場合、建前と本音は完全に一致しているということにしておいてください。あなたの質問に対する答えとしては、このあたりでいいでしょうかね」

「おかしなことを訊いてしまったのかもしれない」

と、諏訪はそついつて頭を掻いた。

「もちろん、これはふたりだけのあいだの話にします」

「そうしてもらわなければ困りますよ」

中原は苦笑していった。

「だいたい、戦争の最中にもちだすべき質問じゃない。まあ、あなたも相手を見て話しているのでしょうか、そこからさきはいいませんが……。そうだ……、もうひとつだけつけくわえておきましょうか。日露戦争のときは、それでもリングの周りで戦いの行方を眺めている審判がいました。彼らがちょうどいいところで試合を止めてくれたから、日本はどうか勝てました。しかし、今度のアメリカとの戦争でもっとも厄介なことは、その審判がどこにもいないということなんです」

それを訊いたのは、ミドウェイの前だった。

ミドウェイの敗北によって、計算の基礎になる要素もいくつか変化を余儀なくされたはずだ。艦隊の機動性というアメリカに対する唯一の優位点が喪われたいま、中原の意見もまた、変わっているだろうか。とりとめもなくそんなことを想い出しながら、諏訪は居室のベッドにぼんやりと坐っている。

伊一・二六七が「春雷」救出にむかうことを決定してから、彼は居場所をなくしていた。

その瞬間から、乗員たちは忙しく己のなすべき任務にむかつて動きだし、誰もが彼の存在を忘れてしまったようだった。あのまま狭い司令室に残っているのは、乗員たちの邪魔になる。そうしろと命じられたわけではなかったが、居室にもどるしかなかった。

薄暗い部屋には、誰も残っていないかった。

いつもならいかにも退屈そうに薬品のチェックをしている植草さえ、そこにはいなかった。軍医としてのそのほかに、彼には仕事がある。

九十名近い乗員すべてが正確にそれぞれの任務を把握し、檣垣艦長がスイッチを押すと同時に行動をはじめたのだ。しかし、諏訪だけにはいまこのときにしなければならぬ仕事はなにもなかった。彼は伊一・二六七をつくりあげている機械のひとつではなく、ただの傍観者にすぎなかった。艦が戦闘機械という本来あるべき姿に変わった瞬間、彼の存在が乗員の意識のなかから消滅したのも当然だった。

しかたなく、諏訪は居室にもどった。

ひとりきりでいると、どうしても不安がつつつてくる。間もなく、戦闘がはじまるだろう。その可能性は、きわめて高い。潜水艦による戦いがいったいどんなかたちになるものか、彼には見当もつかない。

不安を抑えるために、床をみつめたままなにかを考える。

この戦いの行方は、どうなるのだろうか。思考は、結局そこに辿り着く。ほんとうに巨大なアメリカに勝てるのか、どうか――。勝つとすれば、それはどんな状況で終わるのだろうか。

いままで多くの人間におなじ質問を投げかけてきたが、ああして対米戦終結のかたちを具体的に規定したのは中原がはじめてだった。

勝利というのなら、ワシントンD・Cにあるホワイト・ハウスの屋根に翩翻とひるがえる日章旗を想定するのもそうだろうし、中原がいうごとくせいぜい五・五対四・五程度のかろうじての優勢を保った刹那を捉えて停戦にもちこむのもそうであるはずだ。その幅は、とてつもなく広い。

軍の指導者たちは、どの状態をめざして戦争に踏みきったのだろうか。

ほとんど盲目に近い国民への説明のように、真剣にワシントン制圧を目的としているのというのなら、それは狂気としか思われない。発狂状態の指導者にひきずられて、日本という国家はどこへいこうとしているのか――。

ひとつ中原は吐息をついた。

未来には、底なしの暗い絶望だけが展っていた。眼を凝らしても、一筋の光すらそこからはこぼれてこない。

不安を鎮めようとしてはじめた思考が、皮肉なことに却ってそれを増幅させている。そして、いくら悩んでみたところで、どうなるものでもない――、となにもかも抛り捨てて終わる。そのくりかえし。

歴史のうねりのなかで伊一二六七がどう動こうとなんの影響ももたぬように、諏訪俊一というひとりの人間の存在など、国家の将来になんの関係もない。

扉のむこうからノックの音が響いた。

「いいかな」

おかしなことだったが、馬淵はひどく遠慮がちにいった。

「どうも、居場所がない」

諏訪だけではなかった。

動きはじめた伊一二六七のなかで、馬淵もまた無用の存在だった。

馬淵はゆつくりと部屋にはいつてくると、諏訪の正面のベッドに腰を降ろした。

それから、なんともぎこちない調子で、馬淵はいった。

「きみは、タバコを喫うか」

「ええ」

諏訪はうなずいて、

「でも……」

「わかっている。狩野君のせいだ、我慢しているのだろう。この艦のなかでタバコの煙を吐き出したら、彼に絞め殺される。乗艦するとき、まずそれを忠告されたよ」

「タバコがお好きなのですか」

と、諏訪は訊いた。

あまり話したくない相手だったが、ぽつりとひとりきりでどうにもならぬことを考えて、泥沼のような絶望に沈みこんでいくよりは良かったです。

しかし、馬淵はこの艦に乗り合わせた男たちのなかで、もつとも遭いたくない相手だった。いま彼がどんな状況に置かれたいるか、それは諏訪にもわかっていた。

「大好物だな。自分でもあきれるほどだが、大変なヘヴィ・スモーカーだ。内地にいるときには、一日に百本以上灰にすることもあった。チェイン・スモークというやつだ」

馬淵の立場は、微妙だった。彼は参謀として極秘指令を携えてクエゼリン基地にむかっている。通常ならば、その任務はいかなることがらよりも優先されなければならなかった。

彼には、それを檯垣に要求する権限があった。

いや、より正確にいうなら、馬淵の持つ軍令部の指令書にその権能があたえられていた。

伊一二六七が駆逐艦「春雷」の救出のために航路を変更すれば、馬淵の基地到着は最低でも十二時間以上遅れる。

軍という組織のありかたからいえば、彼は指令書をふりかざし断固として檣垣の決定に反対すべきだった。

この場合、形式的な正当性は馬淵のほうにある。彼が徹底して反対を唱えれば、檣垣も逆らうことはできなかつた。

檣垣がどうしても「春雷」救出に拘るのなら、彼は艦長特権をもって強引に馬淵の口を封じなければならなかつた。館内において全能の檣垣は、馬淵の武装を解除し拘禁してしまうこともできた。ただし、その行為は檣垣にとって、おそらく最悪の跳ね返りをもたらすことになるだろう。

いうまでもなく、檣垣の特権は艦内でのみ通用する。

陸にあがってしまえば、階級に差はなくともあたえられた権力は、参謀である馬淵のほうが遙かにおおきい。彼が艦長の不当行為を告発すれば、逆に今度は檣垣が自由を奪われるだろう。軍法上非難されるべきは檣垣であり、馬淵ではない。

檣垣は軍法会議で裁かれ、軽くて軍籍剥奪、馬淵の虫の居所が悪ければ何年もの歳月を刑務所で送らざるを得なくなる。

けれども、馬淵はそうしなかつた。

彼はいちおうの抵抗をしめたものの、おざりな言葉だけで、あっさりといきさがつた。それは、彼の持つ指令書に、もはやなんの意味もなくなつたことを知っていたからだ。

ミドウェイでの勝利を前提に策定された作戦計画など、いまや幼児の落書きにもひとしかつた。そんなものをふりまわしてみたところで、言葉を重ねれば重ねるほど己の愚かさが際だつただけであることを、馬淵は知っていた。

だから彼は、沈黙した。

馬淵はいった。

「わたしはこの艦にも、私物として山ほどタバコを持ち込んだ。だが、まだ一本も喫ってはいない。喫いたくて堪らないことはあるが、どうにか耐えている」

彼は、なにをいいたいのだろう。こんな益体もない話をするために、馬淵は訪れてきたのだろうか。

「喫わないのは、それが艦のルールであるからだ。艦のなかでは、その規則が絶対だ。誰であろうと、逸脱は許されるものではない」

だから彼は、艦長の決定に逆らわなかつた。それを、諏訪につたえたいのだろうか――。

諏訪の気持ちを見透かしたように、馬淵はちいさく笑つた。

「きみが、なにを考えているのかはわかるさ。たしかに、あそこでわたしがあくまで指令に拘泥して、檣垣さんに反対しつづけたら……。わたしは、とんだ間抜けだ。結果がどうなろうと、わたしは狩野君をはじめとする兵たちに白痴視され、軽蔑の対象となるだろう」

「でも、あなたはそうしなかつた」

「海の上では、艦長に絶対の権限がある。それがルールだから、わたしは従つた」

それから馬淵はすこし間を置いて、

「そういえば、弁解にきこえるだろうか。きみは、いまわたしが強い屈辱感に嘖まれていると思つているかもしれない」

「そんなことは……」

慌てて、諏訪は頸を振つた。

「いいんだ。そう思うのが、自然だ」

馬淵はいった。

「鼻っ柱の強い参謀が、真正面からびしゃりと叩き据えられたのだ。さぞかし、面白い見物だつたにちがいない。しかし……。もし、わたしがさきほどの艦長の行動を怨んでいるとすると、彼らは気の毒なことになる」

諏訪ははっきりそれとわかるほど眉をひそめて、馬淵を見やった。

馬淵はさして表情も変えず、

「もともとわたしは執念深い性質だし、いかなるかたちでも侮辱されることは嫌いだ。しかも、わたしは彼らの後悔させるだけの権力に恵まれている。たとえば、わたしは基地に到着次第、檣垣さん以下の士官全員を訴えることができる。軍法会議になれば、理は私の側にある。まちがいなく彼らは、抗命行為で有罪を宣告されるだろう。どの程度の刑になるかは知らぬが、軍人としての彼らの生命は確実にそこで終わる」

この男は、陰湿にそんなことを考えているのだろうか。けれども、なぜそれをわざわざ教えにきたのだろうか。諏訪は真意をはかりかねて、ただ彼を眺めていた。

馬淵はうつすらとした笑みをのぞかせて、いった。

「それほど大袈裟なことにしてなくとも、彼らに復讐する手段はいくらでもある。わたしは一枚の書類で、この伊一二六七を北方勤務に転籍させることもできる。どうしてだか、潜水艦の乗員は北の海での勤務を嫌う。知っているかね」

黙ったまま、諏訪はうなずいた。

そのことについてなら、数日前の夜、ベッドに寝転がったまま井関機関長が話してくれた。

いつもなら井関は、ベッドに横たわるより早く鼾をかきはじめるタイプだったが、その夜は珍しく寝そびれてしまったらしい。彼は中原や諏訪が聴いているかどうかもちょうかもたしかめようともせず——あるいは、その話を聴きたがっているか否か——、大声で話しつづけた。

結局、中原たちの意志にかかわりなく、その声は容赦なく耳に飛びこんできた。

「北の海は、潜水艦にとって鬼門なんだよ。魔物が棲んでいるんだ」と、井関はいった。

まず、北海にはいたるところに氷塊という厄介な障碍が漂っている。

氷塊の水没部分のおおきさは、洋上につきだしたそれからはきわめて判断しにくい。ときには、十倍以上の部分が、水中に潜んでいることさえある。

しかも、この水中に没した氷塊は確認が難しく、しばしば衝突事故の原因になる。

「潜水艦なんてやわなものだな、ごりつと艦底で音がした瞬間にお終いだ」

ひととき声を高めて、井関はいった。

教育というより、中原や諏訪を脅しているとしたか思われない。

「亀裂部分から凍りつくような海水が溢れこんでくる。あつという間に、潜水艦の氷漬けのできあがりだ」

それにくわえ、寒さの問題がある。

寒さは乗員のみならず、潜水艦の精密機器にとっても油断のならぬ敵だった。

限界を超えた寒さは人間の活動を鈍らせるが、深度計や水準器といった器機にもさまざまな影響をあたえる。潜水艦はそれ自体が高度な精密技術の集積といつてよく、器機のちいさな狂いさえも、ときとして艦の致命傷になりかねない。

海中にあるとき、潜水艦は前後左右にくわえて上下にも動くことが可能だ。三次元運動という意味では、航空機とおなじである。そして、航空機とおなじように、重力と浮力、推進力のバランスをとって潜水艦は海中を進む。

あたりまえのことだが、艦がみずからの体内に海水をとりこみ重量を増して潜航するとき、つねに下方向に働く重力は浮力をうわまわっている。そうでなければ、艦は推進力を使って海底と水平に移動することができない。

このとき、深度計や水準器に狂いが生じていれば、艦はほんのわずかに傾斜したまま進んでいくことになる。傾いた艦首は海底にむかっており、進むごとに深度が増していく。

それに気づかぬと、ある瞬間に突然、重力と浮力の均衡が崩れる。

空にエア・ポケットがあるように、海中にも理解できない奇妙な水の流れがある。

水流はいきなり艦をより深い海の底にひきずりこむ。予告もなくつきだした重力の腕が掌をいっばいに拡げて艦を鷲掴みにし、奈落へと引き寄せるのだ。

急速排水によって浮上できれば幸運だったが、たいていの場合、幸運の女神はそう都合よく微笑みかけてはくれない。

重力の掌をひきはなすことは簡単ではなく、艦はまっすぐに沈下していく。

「飛行機でいえば、失速状態だな」

と、井関はいった。

しかし、その降下はあまり長くはつづかない。

すぐに、水圧がすべての処理をつけてくれる。

井関は仰向けに寝転がったまま両腕を掲げ、掌をぴしゃりと鳴らした。

「北の海では、そういう事故が多いんだ。だからみんな、北方勤務を嫌う」

それだけというと井関はなまあくびをひとつして寝返りをうち、枕に顔を埋めるような姿勢で、満足したふうに鼾をかきはじめた。おおきな尻のあたりで、くぐもった音がした。

おかげで、その夜諏訪は十分な睡眠をとることができなかった。ただし、この話には、ちょっとしたつづきがある。

翌朝、充血した眼をこすっていると、肩越しに中原が笑いかけた。

「眠れなかったみたいですね」

諏訪も、苦笑してうなずいた。

「駄目ですよ、あの鮎坊主の与太話なんて本気で聴いていたら——」

中原は井関が居室にいないことを確認してから、そういった。

「与太話……」

「あの鮎坊主はそうやって素人を脅して喜んでるんですから」

「じゃあ……、夕べの話は嘘だったのですか」

と、あきれた表情で、諏訪は訊いた。

「まったくの嘘というわけではありません。北方海域で事故が多いのは事実です」

と、中原はいった。

「でも、それは潜水艦にかぎったものではありません。タイタニックの例もありますが、北方海域で艦船と氷山の衝突事故が目立つのはあたりまえでしょう。赤道付近では、氷山とぶつかりようがない。だいたい、潜水艦は実戦運用されてまだ歴史が浅い。統計分析学上、有効なほどの事故例が集まっているとは考えられませんよ」

「では、あのエア・ポケットの話もつくりものですか」

「あのひとの頭でこしらえたにしては、けっこううまくできていましたが、わたしは信じませんね。水圧で押し潰された潜水艦の事故原因を、誰がどうやって調べられるんですか」

いわれてみれば、そのとおりだった。

「一気に艦を握り潰してしまうほどの圧力がかかる深海の底から、残骸をひきあげることかできるとは考えられない。」

「まいったな」

諏訪は呻くようにいった。

「まんまと井関さんに騙されてしまった」

「いまごろきつと、機関室で笑っていますよ。あのひとだって、たぶんそんなことこれっぽっちも信じてはいないんだから」

中原がいった。

「しかし……、おかしいもので、こうした迷信めいた話は、陸でも海でも数え切れないほどあるんです。兵隊たちはみんな知っているけれど、誰がいいはじめたことかは、まるでわからない。いつの間にか兵隊たちのあいだに拡がって、伝言ゲームのように尾鰭をつけて新人に語り継がれていく」

「まいったな——」

と、苦笑いとともに、諏訪はくりかえした。

と、苦笑いとともに、諏訪はくりかえした。

「せいぜい油断しないことですな。鮎坊主の話は、まず眉に唾をつけて聴くことです。いや……、植草さんだって、安心できないな。あのひとたちにとって、あなたは格好の退屈しのぎの玩具ですから。ただ、潜水艦の乗員が北での勤務を厭がっていることはほんとうです。とくに鮎坊主は、寒さに弱い。きつと、八本の脚が縮こまってしまうでしょう」

そんなことが、つい先日あったばかりだった。

だから、馬淵の質問にうなずきかえした。

馬淵はいった。

「乗艦してまた短いのに、いろいろな話を聴いているようだな。きみは、ここの偏屈者どもにどうやら気に入られているらしい。正直、羨ましいね。わたしは、嫌われている。参謀と憲兵は、どこにいつても嫌われ者だ」

「そんなことはないでしょう」

馬淵がそんなことをいいたすとは、意外だった。

「みんな、あなたを敬遠しているだけですよ」

「いいさ——、嫌われるのは慣れている。それに、わたしにはこの艦を北方へ転籍させるつもりはない。報復する必要はないのだ。檜垣さんの判断は、まったく正しい」

諏訪は戸惑った。馬淵の話は、予測とはちがった方向へ動いている。

馬淵はみずからの軍服の胸のあたりを、掌でおさえて、

「この指令書の手前、わたしは檜垣さんに反対しなければならぬ立場にあった。だから、そうした。それ以上でも、以下でもない。きみも気づいているとおり、この指令書はいまやただの紙切れだ。ここで燃やしてしまつても、これからの戦局になんの支障もない。つまり、その指令をつたえるために基地にむかうわたし自身が、意味のない存在になつた」

「なんで、そんなことをわたしにおっしゃるのですか」

「なぜだろうか——」

つぶやくようにいって、馬淵は天井の薄暗い電灯を見上げた。

「わたしにもわからんが、なんだか誰かと無性に話したい気分になつた。勝手なようだが、その相手にきみのことを想い出した。きみはこの艦のなかでただひとり、なんの責任もあたえられていない。いわば、劇場の観客だ。おそろく、わたしと二度と遭うこともないだろう。わたしがなにを話しても、きみはすぐそれを忘れてしまうことができる。誰かに報告する義務もなければ、わたしの意見に対して異論を唱えたり、修正したりするだけの知識も経験ももちあわせていない。軍人ではない、ただの人間とわたしは話してみたくなくなつた」

「お探しの阿呆が、ここで見つかったわけですね」

「不快だったり、迷惑を感じているのなら、そういつてくれ。わたしは出ていく」

「いいえ」

諏訪は肩をすくめて、

「すくなくとも壁にむかつて話すよりは、いくらかましてしようから」

「きみは皮肉屋だな。ジャーナリストとして、必要な資質のひとつを備えている。断つておくが、わたしは褒めているのだよ」

「お礼をいふべきでしょうか」

と、諏訪は堅い口調でいった。

「怒りたければ、遠慮なくそうしたまえ。きみのいうとおり、わたしは壁よりも豊かな感情をもつた人間と話したい」

そういつたとき、ひどく寂しげな陰が馬淵の表情をかすめた。それはすぐに消えてしまつたが、諏訪は見逃さなかつた。

「おそろくわたしは、混乱して疲れている。思考がまとまらない」

馬淵はいった。

「もちろん、ミドウェイでの結果がその原因だ。つい数時間前までのわたしは、この作戦を滞りなく遂行するにはどうすべきか、そのことで頭がいっぱひだつた。作戦の策定にはわたしも参加し、成功の確信があつた。しかし、ミドウェイの敗北で、なにもかも無に帰つた。わたしも、その瞬間にゼロになつた」

「それで、これからどうされるのですか」

「多少の遅れはあるが、わたしはケゼリンにむかう。この紙切れを大切に抱きかかえて——。それが、わたしは課せられた任務だからだ。しかし、この指令書は誰からも一瞥さえされまいだろう。それでもわたしは、基地のなかで鄭重に扱われるはずだ。この——」

と、馬淵は軍服の襟章を指さした。そのひとさし指の側腹が、タバコの脂で茶色く染まっている。

「ならんだ星が、その待遇を要求しているからだ。腫れ物のように、わたしは扱われる。仕事はなにもない。参謀としては、先任がちゃんといふからな。軍令部がわたしのことを想い出し、新たな命令か帰還指令をつたえてくるまで、そんな状態がつづく。だが、賭けてもいいが、軍令部にわたしのことを考える余裕などない。彼らは、それどころではない。ミドウェイの敗北で、攻撃計画も防衛計画も、各基地への補給計画もすべて一から練り直しだからな」

諏訪は黙つてその話を聴いていた。どんな反応をすべきなのか、わからなかつた。

馬淵はつづけた。

「敵はしかし、こちらが体制をたてなおすのを待っていてはくれない。もつとも、体制をたてなおすとしても、四隻もの大型空母を三日でつくることはできな」

「敵の反撃が開始されるといことですか」

「クエゼリンかマエロラップ、それとも南のマキンカタワラ……。そのあたりが、最初の攻略目標になることは疑いがない」

不思議なほど冷静な口調で、馬淵はいった。

「こちらの制海域で、輸送船団が敵潜に襲われた。これは、反攻が開始されたなよりの証拠だよ。敵はこちらが動きを失ったことを知っている。こちらを圧倒する豊富な戦力を、いつまでもハワイで遊ばせておくはずはない」

「それがわかっているのであれば……」

「むろん、こちらの防衛体制も早急に整えなければならない。クエゼリンを例にとれば、周辺の小島に分散している兵力を集集し、一機でも多くの戦闘機と物資をかきあつめる。いまのように、兵力があちこちに散らばって展開している状況では、どうにもならない」

日本軍は西太平洋への侵攻にあたって、奇妙なほど律儀に、すべての小島に部隊を進駐させた。戦略的には無意味とも思われるようなとるにたらぬ小島にさえ、守備隊を置いた。

その島に平坦な土地があれば、工兵隊が派遣されて滑走路——なかには、距離が不足して飛行機の離発着ができぬ滑走路すらあつたが——をつくつた。設営隊は自給のための畑を耕した。

その結果、限定された兵力が小規模集団にわかたれ、広大な地域にばらまかれた。

兵力の分散配置が、近代戦における最大の禁忌とされているにもかかわらず。

「守備隊が総計百たらず、戦闘機が五機。その程度の戦力しか配置されていない島が、クエゼリンのまわりにもいくつがある」

馬淵はいまいしげに舌打ちした。

「いまさらいってもしまらないが、そんなもの屁のつっぱりにもならん。アメリカは無視するだけだ。そんな島には、挨拶程度に爆撃を一、二度。あとは、全勢力を拠点攻略に集中する」

「しかし、兵力がそんなに分散されているのでは、拠点基地の防衛も——」

と、諏訪はいった。

「そのとおり、どうしたって拠点防衛の戦力は不足せざるを得ない。だからこそ、一刻も早く周辺に分散している兵力を集結させなければならぬのだ。敵の上陸を阻止するためには、兵員の数はいくらあつてもいい。空からの攻撃に備えるために、戦闘機も必要だ」

「拠点を籠城して、敵を迎撃するというわけですね」

「籠城——」

馬淵は諏訪の言葉をそのままくりかえして、

「たしかに、それが適切な表現かもしれん。きみは、歴史が好きか」

と、訊いた。

「それほど好きではありません。年号の暗記に苦労した記憶だけがあります」

「わたしは、歴史家になりたかった。年号の暗記などはくだらぬことだが、歴史は学ぶべきだよ。歴史は、人間の賢さと愚かさを教えてくれる」

そういつてから馬淵は、

「とにかく、拠点をいくつかに絞って、そこを死守する。それ以外に、防衛戦術はない。こんなことはわたし指摘するまでもなく、クエゼリンの将校や参謀もよく理解しているだろう。ただ、問題は、理解と実践とがまったくの別物だということだ」

「どういふことですか」

訝しげに、諏訪は訊いた。

「兵力の集結にも、物資の補給にも、まず必要となるのは輸送手段だ。それを、どう調達する。つぎに、輸送船の護衛だ。直接戦闘機のない輸送船団を敵の待ちかまえる海域に派遣することは、自殺行為にはかならない。では、そのつぎの命題——。多数の戦闘機を前線に送るには、なにが要る」

「空母——」

「正解だ」

馬淵はうなずいた。

「正解だが、同時にこの問題が解決不可能なことを示す答えでもある。われわれには、その空母がない」

「だったら、どうすれば……」

「絶対数が不足しているのだから、補いようがない。せいぜい、拠点基地のあいだで船や戦闘機を融通しあうことしかない。非常に非効率的なやりかただが、それしかない。あとは……、アメリカの進撃速度がなにかの理由でがくりとおちてくれることを、神に祈る」

「なんだか、悲観的な見方ですね。適切な処置なし、とでもいつているみたいだ」

「だから、わたしはきみを選んで話している」

馬淵はゆっくりといった。

「こんなこと、口が腐っても軍人には話せない。いったら最後、わたしはこの襟章を剥ぎ取られて、一生どこか辺鄙な基地で便所掃除だ」

「わたしが壁とおなじだから——」

「そうではない。壁は、きみのように反応してくれない」

「それなら——、あなたはこの戦争そのものの先行きについても、おなじように悲観的なのですか。あなたの見方が正しければ、そしてわたしの耳が狂っていなければ、これからの日本はどんな悪い方角に追いこまれていく。わたしには、そう聴こえました。だったら、もうひとつ教えてください。アメリカとの戦争は、どんなかたちで終わるのですか」

そのつもりはなかったが、つい中原にしたのおなじ質問を投げつけていた。その途端に、後悔した。体験にてらしあわせるまでもなく、それは確実に職業軍人を激怒させる質問だった。握り固めた馬淵の拳が、頬に炸裂することを覚悟した。

しかし、馬淵は怒りも昂奮もしなかった。

「いい質問だな」

馬淵は諏訪の視線から顔をそらせた。すこし哀しげな顔つきだった。

「いい質問だが、わたしには答えられない。戦争を終わらせるのは政治の仕事で、軍人が関与すべきことではないのだ。わたしが考えなければならぬのは、拠点防衛に関して想定されるさまざまな不利を、どうやって打破するかということだけだ。不利はあきらかだが、作戦によっては勝てるかもしれない。勝てるどころまで、作戦を組みあげるのが、わたしの任務だ。ただ、戦争の行方について、これだけはいえる。日本の命運は欧州戦線が握っているし、ナチス・ドイツやイタリアの運命は、日本の手にあるということだ。あたりまえのことだがね」

「欧州の状況は、われわれにはほとんどつたわってきません」

諏訪は抗議するようにいった。

「いつだって、ナチスは快進撃をつづけている。報道されるのは、それだけです」

「客観的にみて、ドイツは欧州で優勢を保っている」

つきはなしたようないいかたを、馬淵はした。

「ロシア戦線での停滞は若干懸念されるが、優勢にあることはまちがいない。イタリアは北アフリカを抑え、ドイツの背後の不安をとりのぞいている。いまのところ、われわれとしても憂うべきところはない」

すでにヒトラーのナチス・ドイツは、昨年の段階でロシアにまで戦線を拡大——山室老人よれば、それは絶対に避けるべき進撃だったが——していた。ヒトラーの計画のように、短期間での制圧はできず、戦況は膠着して一冬を越すことになったが、依然としてドイツは優勢を維持していた。

馬淵はまだなにかいたげだったが、それきりで口をとぎした。

つづくわえておけば、ロシアにおけるナチスの闘いは、この年を過ぎても終わらなかつた。いまも歴史に残るスタリリングラードの悲劇を経て、戦闘は翌年のはいつてようやく決着をみた。ドイツは結局ロシアの冬に勝つことができず、惨敗した。

北アフリカではエル・アラメインでの戦いがあり、歴史の歯車は確実に逆転していった。

あるいは馬淵は、それを予感していたのかもしれない。けれども、たとえそうであったとしても、己の暗い予感を諏訪につたえる気にはなれなかつたのだろう。

しばらくして、馬淵がベッドに坐りなおし、いきなりいった。

「ようやく、わかってきたよ。わたしはついさきほどまでぎっしりと頭に詰まっていたものをすべて消し去って、白紙にもどしたかったのだ」

「なんのことです」

「きみと話したかった理由だよ。こうして胸のうちのをさらけだして話しているうちに、わたしには自分がこれからすべきことが再確認できた。きみには感謝するよ。壁にむかっていたのでは、こうはいかなかった

だろう」

「ずいぶん勝手じゃあ、ありませんか」

「最初にそう断ったはずだが……」

馬淵はひややかにいった。

「わたしだって、きみとおなじ人間だよ。限界を超えるような強烈な打撃にうちのめされれば、たちなおるのに時間がかかる。人間としての弱い部分もある。しかし、参謀としてはそれを兵士の前で露出することは、どんな事情があろうとできない」

「参謀は冷血な機械でなければならぬのですか」

「そうだ……。そうでなければ、作戦に兵士を従わせることはできない。作戦によっては、目的達成のためにあえて何百人もの兵士を犠牲にすることもある。温かい血の通う人間に、できることではない。だが、ときにはわたしも、昔のように人間にもどってみたくなることもある。そうだ……。こう考えてくれるといい。わたしは参謀という機械のなかに、すっぽりはいつているのだ。ミドウェイ敗北によるショックで、その機械のある部分がほんのすこし綻びた。そこから、人間であるわたしがのぞいたのだ」

「その綻びを繕うために、わたしと話したということですか」

「そういうことになるだろうな。きみなら、なんというか……」

馬淵は顔を歪めて言葉を探し、

「安全な相手だったのだ」

「あなたがこんな話をしたことを、わたしは誰かにいつてしまうかもしれない」

「いや、きみはそんなことはしない」

確信に満ちた口調で、馬淵はいった。

「これでもわたしには、ひとを見る眼があるのだ。きみとわたしは今後二度と遭うことはないだろうし、きみは、わたしの話など忘れてしまおう」

「どこまでも自分勝手なひとなんですな。あなたは――」

諏訪は笑った。

どうしたわけか、決して不快な気分ではなかった。

「ほんとうに、きみがいてくれてよかった。あのままでは、わたしは混乱しきって煮詰まってしまうていたにちがいない。そんな状態では、まともな思考はできない。頭のなかにつまっていた層も、全部捨て切れようだ。これからは、勝つための防衛計画策定に全力を尽くすことができそうだ」

どうやら、彼の全身を覆っていた冷たい機械が、ふたたび動きはじめたようだ。

諏訪はしかし、もうすこし人間としての馬淵とつきあってみたかった。

だから、話題を転じた。

「さっき、歴史家になりたかったとおっしゃっていましたね。どうしてそちらに進まず、軍人になったのですか」

馬淵はすこし困ったような表情になった。

「つまらぬことを喋ってしまったな。しかし、きみには世話になったことだし、その程度のことなら答えよう。簡単にいえば、そんなことが許される環境ではなかったということだな。わたしの親父は海軍の軍人だった。中原君もたしかそうだと聞いたが、わたしの父親は三十年あまり軍にいて、下士官どまりだった。わたしをおなじように海軍軍人にすることが、彼のたったひとつの夢だった。子供のころから、うるさいほどそういわれてわたしは育った。父親の敷いた線路に乗って軍人になることは、生まれる前から決まっていたわたしの運命だった」

「逆らってみる気にはならなかったのですか」

「その気になれば、できたのだろうが……」

馬淵の声がかすかに沈む。

「結局は、親父の希望どおりになった。わたしの思いをおすこともできただろうが、父親が嘆くことはわかっていた。彼を、悲しませたくはなかった。だが、後悔はしていないよ。ただし、軍人になるとしても、親父のような下士官で終わるような生きかたはごめんだった。だから、必死に努力してこうなった」

「父上はさぞかし喜ばれたでしょうね」

「少尉に任官したとき、わたしの軍服姿を眩しそうに見ていたあの顔を、つい昨日のこのように憶えている。それからしばらくして、親父は死んだ。満足してくれただろう。家庭では威張りかえって独裁者だった。理不尽な暴力をふるわれたときには憎みましたが、死なれてみると懐かしさしか残らない。親子の関係な

んで、そんなものではないのかね」

と、他人事のような調子で、馬淵はいった。

「たしかに、そんなものかもしれないね」

諏訪はそういった。しかし、馬淵のようにそれを過去の記憶として処理してしまうことは、まだ彼にはできない。父親のことを想い出そうとすれば、否応なく二度目の母の顔や叔父のそれが、鎖に繋がれたように脳裡に浮かびあがってくる。

彼らのために、諏訪は故郷を捨て、逃げだすように日本を離れなければならなかったのだ。その憎悪はいまでもまだ生々しく、風化はしていない。

馬淵は手頸の時計に、ちらりと視線をやって、

「長話をして、きみの時間をかなり浪費させてしまったようだな」

諏訪はいった。

「さしあたって、予定はありませんから」

「わたしもそうだ」

にこりとして、馬淵はうなずいた。

「誰もが忙しく動きまわっているこの艦のなかで、わたしときみのふたりだけが暇をもてあましている」

馬淵がいったとき、いきなり艦体がおおきく揺れた。

急降下をはじめたのだろう、諏訪は咄嗟に手摺の鉄棒を握りしめて、ベッドからずり落ちていくからだとをささえた。

「なにかが、はじまったようだな」

馬淵はしかし、軽々とたちあがって、

「檣垣さんのお手並み拝見というところだな。きみも、くるとい」

と、諏訪にそういって、足早に部屋を出ていった。

艦はかなりの勾配で傾いており、諏訪はまだ腰をベッドから浮かすこともできない。

艦体が水平にももどるのをまって、諏訪は司令室にむかった。

潜望鏡のむこうにいた狩野少佐が、諏訪の姿をみつめて微笑した。ほんのすこし、頬の筋肉を歪めただけだが、こちらに笑いかけていることがわかった。

「だいじょうぶだったようだな。顔色もよさそうだ」

と、狩野はすぐにもとの無表情な顔にもどって、

「ずっと居室に閉じこもりきりだというから、頭を抱えてベッドのうえでのたうちまわっているのではないかと心配していた」

それだけというと、狩野は諏訪に背をむけ、檣垣艦長のほうにむきなおった。

「はじめて長時間潜航を体験すると、からだや神経に変調をきたすひとがあるんです」

中原が近寄ってきて、狩野の言葉を捕捉した。

「吐き気や頭痛程度ならまだましなほうで、なかには全身に鋭い痛みを覚え、痙攣してしまうひともいます」

「いや、彼ならなんの心配ない」

馬淵が、こちらをふりかえっていった。

「頭痛どころか、元気なものだ。案外彼は、潜水艦乗務にむいているのかもしれない」

馬淵の言葉が意外だったのだろう、中原はちよつと訝しそうな眼で諏訪を見た。

諏訪は軽くうなずいただけで、なにもいわなかった。

鉄面皮の参謀殿と長時間いっしょにいた諏訪に、中原らはむずむずするような興味を感じているようだが、居室での出来事を説明してやる気にはなれなかった。だいいち、いまはそんなときではない。

諏訪は低い声でささやくように、

「どうしたのです」

と、中原に訊いた。

「敵潜を発見したのです」

中原はいった。さきほどの急速潜航は、そのためだったのだろう。

「新鋭のガトー型で、距離約七百の北西洋上をゆっくりと移動しています」

「一隻だけですか」

「ええ」

中原はうなずいた。

「付近にはそれだけです」

「むこうはこちらには——」

「気づかれてはいません。上空に低気圧があつて、風と雨で海はかなり荒れています。潜航して背後から近づけば、まず察知される懸念はありません」

ガトー級はアメリカ海軍の中軸潜水艦で、太平洋戦争を通じて実に二百隻を越える膨大な艦数が建造、続々と戦線に投入された。排水量水上一五二五トン、水中二四一五トン。全長九五メートル、全幅八・三メートル。

おおきさは海大五型と、ほとんど変わらない。

「春雷」よりさきに、敵を発見したというわけか」

苛立った口調で、馬淵がいった。

「このあたりまで敵が進出してくるとは、むこうの反撃準備もほぼ整ったと考えておかなければならぬ。それも、さうとう大規模なものだ」

「それにしても、たった一隻で、それも洋上航海とは——」

ほんの数日前までは、日本軍の完全な制圧下にあつた海域である。その度胸のよさに感心するように、諏訪はいった。

馬淵が吐き捨てるように、

「舐めていやがるのさ。ミドウェイの敗戦で、こちらがすべての支配海域を警備するだけの力をなくしたことを、ちゃんと計算しているんだ」

「それに、この悪天候では航空支援も期待できません」

と、中原がいった。

馬淵がそちらに顔をむけた。

「いや、たとえ空が晴れがあつていたとしても、いくら待ってみても飛行機は飛んできてはくれないだろうな」

「どうしてです」

不審そうに、中原が訊いた。

「春雷」からの緊急打電は、各基地でも受信しているはずですよ」

「むろんそうだろうが、しかし飛行機はきてくれない。どうしてかといえば、彼らには「春雷」のために戦闘機を発進させる理由がないからだ。「春雷」は航空機による救出を要請していない」

「え……」

中原は声を詰まらせた。

馬淵が訊いた。

「電文を持っているか」

中原はうなずき、胸ポケットから畳んだ薄茶色の紙片をとりだした。

うけとった馬淵はそれを拵げて、

「ひどい内容だ。だいたい、連絡文のていをなしていない。要するに、このなかで「春雷」がつたえてきたのは、敵潜の攻撃により機関部に重度の損傷を負ったということ。そして、なおも敵潜の追跡をうけているという状況だけだ。敵が追いかけてきているのに、脚がきかない。いつてみれば、泣き叫ぶ悲鳴のようなものだけだ」

たしかに、そこには救援を要請する言葉は一語もない。

「痛いのが苦しいのとわめき散らしてはいるが、だからどうしてほしいとはひとこともいっていない」

そこでいったん言葉を切った馬淵は、潜望鏡のまわりにいる檜垣と狩野にむかって、

「魚雷攻撃をうけて、よほど動転しているのか……。」「春雷」の艦長は、どういう人物ですか。ご存じですか」と、尋ねた。

狩野は頸を傾げた。

かわりに、檜垣がこたえた。

「遠藤康三中佐。わたしより……。八期ほど下だったと思う。優秀な男だと聴いている」

檜垣より八つほど年下となると、まだ三十代の前半だろう。馬淵参謀や狩野副官と、そして変わらぬ年頃だ。

エリート参謀の馬淵はともかく、狩野も昇進は遅いほうではない。それにしても、彼はまだ少佐である。その年齢で駆逐艦の艦長を委ねられるのだから、檜垣のいうように遠藤中佐はそうとうに優秀な軍人であるらしい——同時に、彼よりも八つも年長でありながら、まだ中佐のまま潜水艦暮らしをつづけている檜垣の出世は、かなり遅い——。

「若いな。しかし、それならなおさらだ」

「己のことはさしおいて、馬淵はひとりごちるようになって、

「わたしの記憶では、「春雷」は就任してまだ間もない。たぶん、今回の警護航海が初任務だろう。その年齢で新造駆逐艦の艦長となると、そうとうの抜擢だ。実際に艦長のいわれるような優秀な人材かどうかは措くとして、軍令部あたりに有力な知人がいることはたしからしい。安全確実な輸送船団の護衛航海だ。将来ある若い艦長の初任務には、いかにもふさわしい。ところが、その配慮が裏目にでてしまった」

馬淵がなにをいわんとしているのか、その真意が諷刺にだけはつたわってこない。

要領を得ぬ表情で、諷刺は馬淵を見やった。

「若くて経験はないが、学校での成績は抜群だった。困ったことに、こういうタイプの艦長には、えてして自分の失敗を認めなかったり、他人に救いを求めることを恥辱だと考える人間が多いものだ。できもしないのに、ぎりぎりまで問題を抱えこみ、そのあげくに傷口を拡げ、周囲の混乱を増幅させてしまう輩がいるのだ。もつとも、現在の海軍士官のなかで、現実に敵の魚雷を喰らった経験を持つ者は、多くはない。初航海の遠藤中佐が、被害状況を正確に把握できなくとも無理はない」

アメリカとの戦争がはじまって、まだやっと半歳がすぎたばかりだった。

その間、帝国海軍は連戦連勝をつづけてきた。戦えば勝ち、瞬く間に太平洋のほぼ半分を占拠した。その過程で、敵潜からの魚雷攻撃をまともにうけた艦船など、ほとんどなかった。

若い遠藤には、実戦の体験もないにひとしいはずだ。

彼が、「春雷」の横腹を魚雷に抉られて、ひどく慌てたのも当然だっただろう。

しかし、

「恥辱——」

と、その言葉が、妙に耳にひっかかって諷刺はくりかえした。

「それにしても、この電文ではどうにもならん。だから、こういう曖昧な電文になる。こちらの状況だけをつたえて、あとは察してくれというわけだ。だが、この種の連絡ほど受け取った側で対処に困るものはない」

電文に「春雷」サイドの要請がはつきりと記されていない以上、救援行動をおこなうかどうかは受信した各基地の司令官の判断と責任になる。機関部に損傷とあるが、被害の程度はどれほどのものなのか——。沈没寸前というのなら、乗員救助のためにすぐにも大型艦船を派遣しなければならぬ。あるいは、自力航行は可能だが、追尾してくる敵潜をふりまわることができないというのなら、攻撃機を飛ばすだけだ。

電文だけでは、この判断が難しい。判断を誤り、対潜攻撃の戦闘機を発進させたものの、到着時にはすでに艦はおおきく傾斜し水没しかけていた、というような事態になったら、こんどは下駄を預けられたほうの基地司令官が責任を問われかねない。

「基地での行動は記録に残るから、いい逃れはできん。こうした判断ミスは、司令官の経歴にとって拭いがない汚点になる。とりあえずの処置として偵察機を急行させておくのが無難だが、それにしたって「春雷」が沈没でもすれば、考課上いい点はつけられない」

「お役所仕事みたいですね、まるで——」

「軍というのは、ある側面ではがちがちの官僚組織だからな、どうしてもそうなる」

馬淵はいった。

「それで……、結局いちばんいいのは、なにもしないことだ——。つまりと、そういうことになる。電文には救助要請がないのだから、なんら行動をとらなくても責められるすじあいはない。で、「春雷」からの電文は、司令官の掌のなかで握り潰される。だから、いくら待っていても、航空機はこない。それがわかっていたから、艦長や狩野君はわたしの反対を黙殺して、まず自分の眼で「春雷」の状況を確認するためにこの艦の進路を変更した」

「いくら参謀殿でも、われわれの心理まで深読みされては困りますね」

潜望鏡の取っ手に両腕をあずけ、もたれかかるような姿勢のまま狩野がいった。

「われわれはただ、危機に瀕した僚艦を見殺しするに忍びなかっただけです。基地からの救援があれば、そ

れがいちばんいい」

「そつですか」

馬淵は短く鼻を鳴らして、

「あなたがたがそんなふうに感情で戦争をしているとは思われませんが、まあ、そういうことにしておきましよう」

狩野がかえした。

「理性だけでは、人生が乾きすぎますからね」

馬淵は軽く咳払いして、

「とにかく、被害状況もわからぬまま、遠藤中佐は自力で敵の追尾をふりきり、基地に帰還しようと考えたのかもしれない。たいした傷でもないのにそれを見誤って狼狽して救援を要請すると、とんだ恥をかきかねない。たぶん、そのことも頭にあつたはずだ。だが、それなら救援の必要なしと、はつきり連絡すべきだ。ここには、それすら書かれていない。受け取った側は、困惑するばかりだ。基地のほうが判断にあぐねて手を拱いているうちに、「春雷」の状態は悪化していく。最悪の場合、艦を沈めてしまったら、軍上層部の思惑はどうあれ、遠藤中佐の軍人生命は終わる」

それから諏訪をふりかえって、苦笑した。

「わたしを含めてのことかもしれないが、とかく若い軍人はおかしなプライドに凝り固まっている。たしかに、すぐに泣き言をいって他人の助けを求めるのは恥ずかしいことだが、だからといって、自分の手にあまるほどの大荷物を抱えこんでしまうと、とりかえしのつかぬ失敗を招くことになる。「春雷」が沈めば、二百を越える兵士が死ぬ。不必要な死だ。遠藤中佐には、そのことがわかっていない。恥辱というのなら、すでに彼は輸送船団を護れなかったことだけで、充分に恥をかいている」

辺境守備隊への物資、兵員補給の任務を果たしたあとならまだしも、輸送船団は最初の目的地にむかう途中で、敵潜の待ち伏せをうけた。三隻の輸送船は、その魚雷攻撃によって、物資と補充兵を満載したまま藻屑と消えた。「春雷」は反撃することもできず、みずからも機関部に損傷を負って、よたよたと逃げまどっている。

たしかに馬淵のいうように、それは充分すぎるほどの恥辱だった。

口調の端に憎悪すら滲ませて、馬淵はさらにいった。

「プライドを持つことは大切だが、それに拘るのあまり、恥の上塗りをするのは愚かだ。初指揮という点を思慮すれば、敵潜の奇襲を避けられなかったことも、すこしく同情の余地はある。しかし、その後の対応はまるでなっていない。彼がいま考えなければならぬのは、この以上の被害の拡大をくいとめるということだ」

馬淵の舌鋒は鋭い。しかも、彼の意見は正論でもあり、その反論の余地のない正論をもって鉅で断ち切るように遠藤艦長の行動を斬罪していく。おそらくそれは多数の兵士の生命を駒にして作戦を策定する参謀として培われてきた資質によるものなのだろうが、それにしても、いまここに遠藤中佐がいて容赦ないこの批判の矢に晒されたら、いたたまれずに舌を噛みきって死んでしまうかもしれない。諏訪は、まだ見たこともない遠藤という青年艦長に、かすかな同情さえ覚えた。

たぶん狩野もおなじ気持ちだったのだろう、からだをいれかえて檣垣艦長に潜望鏡を譲りながら、

「もつ、そのへんでいいじゃありませんか」

と、苦い調子でいった。

「どうやら、われわれは間に合ったようですから、最悪の事態は避けられるでしょう」

さすがに馬淵は鼻白んだ表情で俯いて、

「いや……、すこしいすぎたかもしれないが――」

潜望鏡から眼を離して、檣垣がなにか短くいった。それを待っていたように、伊二二六七はわずかに艦首を傾けて潜航した。だが、深度はさほどおおきくはなく、すぐにまた艦勢は水平にもどった。

それでもまだ、脚を踏ん張り壁に背中をはりつけるようにしたまま、諏訪は訊いた。

「それで――、「春雷」はまだ無事なですか」

中原がこちらをふりかえって微笑した。

「敵潜があんなふう上浮上しているのですから、沈んではいけないでしょう。あの敵はここで、こちらに「春雷」が近づいてくるのを待っているのですよ」

「待っているって……」

不思議そうに眼を細めた諏訪に、馬淵がいった。

「ここで確実に「春雷」をしとめるために、待ち構えているのだよ」

敵潜は三乃至四の戦闘艦隊を組んで、輸送船団を襲撃した。ほとんど瞬時に三隻の大型輸送船を沈没せしめたところからみても、日本とおなじように三艦体制を組んでいると考えるのが妥当だろう。それ以上の勢力があれば、「春雷」も輸送船と同様の運命を辿っていたはずだ。

彼らの目的は、あくまでも輸送船にある。

日本海軍は艦隊決戦を用兵の基本に潜水艦の建造をすすめた。しかしアメリカは、当時潜水艦建造技術や用兵において世界の最高水準にあったドイツの例に倣って——ドイツ海軍の主力であった小型潜水艦UボートⅦ型（総排水量七百トン）は、攻撃目標を大西洋上の商船、輸送船のみに限定し、第二次大戦を通じて三千隻近い目標を沈めて、英国経済を破綻寸前にまで追いやった。このUボートⅦ型はドイツ独特の合理精神に貫かれ、各地でつくった部品を最終的に造船所に集めて組みあげるといふ大量生産システムによって建造され、大戦中実に六百五十隻が戦線に投下された——、大量生産と通商破壊に徹した。

アメリカ海軍の主軸となったガトー級潜水艦は、性能面でも技術面でもさほどめあたらしいものではなく、どこどいつて特徴のないきわめて平均的な潜水艦である。速力、耐水深度などの基本スペックを比較しても、Uボートに優るところはひとつもない。ソナーや潜望鏡の解像度といった装備技術についても、やはりUボートにおおきく遅れをとっていた。

しかし、それが太平洋において、巨大な脅威となつて日本軍にのしかかった。

いうまでもなくアメリカ得意の質より量優先のマス・プロダクト・システムによる、兵器の大量投入である。アメリカは豊富な国力にものをいわせて、潜水艦にかぎらず航空戦闘機や戦闘車両、さらには歩兵の装備に至るまでこの大量生産、大量投入システムをおすすめ、量において日本軍を圧倒していった。

それが、国家総力戦というものだ。

致命的なまでに生産力に劣る日本は、それに技術でもって対抗しようとした。

量で及ばなければ、一艦一艦の質を高めることで、その欠陥を埋めあわせようとした。日本海軍の潜水艦用兵の基本となった邀撃漸減戦略である。それは要するに、潜水艦にきわめて高い航海性能と攻撃能力をあたえることによつて、戦艦、空母といった敵大型戦闘艦船に先制奇襲をかけ、その勢力を漸次減らしつつ主力決戦にもちこむというものであった。

その思想にのつとつて技術開発に注力した結果、すでに開戦前の時点において日本の潜水艦技術はドイツと並び世界最高レベルに達していた。なかでも魚雷に関する技術では、日本はドイツを凌駕していた。

だがこれは、つまるところ机上の空論にすぎず、実際の戦いがはじまってみれば日本はアメリカの物量攻勢の前になすすべもなく追いつてられた。

苦心のあげくひねりだされた潜水艦の先制奇襲にはじまる邀撃漸減戦略も、初期予想どおりの成果をもたらしたとはとてもいえなかった。厳しくいえば、現在に至るも伊号潜水艦による空母「ヨークタウン」あるいは重巡洋艦「インディアナポリス」の撃沈が、たぶんの感傷をまじえて語りつづけられるのも、それが数少ない例外であるからだろう。

さらにこの思考は、逆の意味で日本の潜水艦を縛りつづけた。

潜水艦の攻撃能力や航行性能を高めることは、すなわち艦の大型化を意味した。くわえて、機関や装備の製造技術が高度になればなるほど、その生産に時間がかかった。

もともと潜水艦は高度技術の集積であり、その建造には莫大な費用——一トンあたりの建造費を比較すると、潜水艦は戦艦のほぼ四倍の費用が必要になるとされる——と時間がかかる。艦の大型化と高性能化は、その支出と時間をさらに倍加させた。

そして日本は開戦後も技術改良をすすめ、つぎつぎに新型艦をつくりだした。物資と製造拠点の絶対的不足と矛盾するかたちでそうした多様化をすすめたため、日本はついにUボートⅦ型やガトー級に匹敵する主軸艦を持つことができなかつた。

ドイツは第一次大戦によつて潜水艦用兵を学んだ。潜水艦の特質は、通商破壊においてもっともよく発揮される。その学習経験が、Uボートを産んだ。

アメリカもまた、その教科書を踏襲した。

日本海軍だけがその流れに逆行し、潜水艦による主力艦攻撃に固執して艦の大型多様化、少数精鋭の途を歩んだ——大戦中日本は、巡潜型だけで七種、海大型で五種にのぼる潜水艦を建造している。なかには、竣工したものの実用性に問題があり、実戦への投入が見送られたものもある。たとえば、伊一二〇一型は米軍の航空機攻撃に対応するために、水中二〇ノットという空前の高速性能を実現すべく設計され、計三隻が建造された。だが、懸命の技術開発によつて水中速度は一九ノットと目標に近い数字を達成したが、

機関の故障があいつぎ、また高速潜航時に艦体の安定をたもつことが著しく困難でもあるため、実戦参加することなく廃棄された。もっというなら、終戦ぎりぎりの段階において、有名な潜水空母伊一四〇〇型が三隻建造されている。これは敵本土や拠点基地に潜航接近し、搭載した攻撃機により奇襲をくわえるという、状況を踏まえれば妄想にひとしい戦略実現化のために設計された全長一二二メートル、水上排水量三千五百トンの超大型潜水艦だった。航空機三機を搭載させる潜水空母という世界に例のない構想を実現させた技術力は特筆されるべきだろうが、これもまた実戦ではなんの戦果もあげることなく終戦に至っている。こうして続々と誕みだされた哀れな奇形児たちは、乏しい資源を浪費させる効果しかもたらさなかった――。

そのあげく、アメリカの物量攻勢に呑みこまれ、ほとんど戦果をあげることなく虚しく終戦を迎えた大戦を通じて、連合国側は二千八百隻の商船を失ったが、そのうち日本の潜水艦によって破壊されたものは、わずかに百七十五隻にすぎなかった――しかも、日本潜水艦が沈めた船は小型船舶が多く、損失総トン数で比較すると、Uボートのその百分の一を遙かにしたまわっている――。逆に日本軍は、太平洋ならびにインド洋で、千五百の艦船を連合国――主としてアメリカ――潜水艦の攻撃によって喪失した。

個々の技術は評価されるべきだろうが、それをまとめあげて使うための根本思想が決定的に誤っていた。そういつても、酷ではなからう。

日本は、歴史からなにも学ばなかった。

ともあれ、敵潜は輸送船に的を絞って、その目的を完全に達成した。

「駆逐艦「春雷」は、彼らにとってみれば、輸送船のおまけのようなものだ」
と、馬淵はいった。

「駆逐艦の反撃をまともにくらつては、危険だ。ついでに撃沈できればよし、さもなければさっさと戦場を離脱する。おおかた、その程度の考えだっただろう。それで、逃げ腰で攻撃をくわえた。ところがその魚雷が、「春雷」の操艦技術の拙さのせいとはいわんが、命中した。「春雷」は機関部に損傷をうけて、がくりと脚がおちた。速力と回転性能を失った駆逐艦は、もう怖くもなんともない。そこで、やつらにも欲がでた。そんなところだ」

諏訪は訊いた。

「それならなぜ、ここまで攻撃を待ったのですか」

「おそらくいま「春雷」は、左右から見え隠れする二隻の潜水艦の追撃をうけている。反転して攻撃する力は、もうない。よたよたとその追尾から逃げるのでせいっぱいだ。二隻の敵潜は、挟みこむようにして「春雷」を追いながら、ここへ誘導しているのだ」

「だから、なんでそんな……」

もどかしそうにいった諏訪を、馬淵は苦笑して遮って、

「おそらく、その二隻は、輸送船攻撃で魚雷を撃ち尽くしてしまっているのだ。だから、まだ魚雷を残しているあとの一隻を洋上航海でここへ先回りさせた。遊んでいやがるんだ。いや……、訓練といったほうが正確だろうな」

「訓練――」

と、鸚鵡返しにいった諏訪に、馬淵は短く説明した。

三艦による戦闘艦隊が組まれるとき、その艦長は通常ヴェテランふたりに経験の浅い新人ひとりというかたちになる。ふたりのヴェテランが新人を補佐し、実戦による経験を積ませることで教育するのだ。

馬淵はそれから、

「ヴェテランたちは新人がもつとも安全かつ確実にしとめられる位置まで、「春雷」を誘導しているんだ。新人はここへ先行して、「春雷」がくるのを待ち受けていれればいい。そうやって、経験を積ませようとしているんだ。やつらは、こちらがすぐに救援体制をとれないことを知っている。舐めているんだ」と、吐き捨てるようにいった。

たしかに、緊急打電をうけとった伊一二六七がすぐさま進路を変更しなければ、「春雷」は待ち構える敵潜の餌食にならざるを得なかっただろう。最後の力をふり搾るようにしてもがいている「春雷」に、狙いますまして放たれる魚雷を避ける敏捷性はもはやない。彼女はまともにもその魚雷に横腹をえぐりぬかれ、ふたつ折りになって海底に沈んでいくだろう。

しかし、いまや遅しとはやりたちながら「春雷」の到着を待つ敵潜の背後には、伊一二六七があった。敵はまだ、その存在に気づいていない。

伊一二六七は潜航したまま、ゆっくりと彼との距離を縮めている。

それがきつと、若きなのだろう。

ほんのすこしソナー手が周囲に神経を配っていれば、背後から忍びよってくる伊一二六七の蹠音を捉えられたかもしれない。そうなれば、状況は変わっていた。

だが、幸運の女神は、彼に微笑みかけてはくれなかった。

敵潜の指揮をとる艦長の意識は、霞がかった前方の海面に顕われてくるだろう。「春雷」の姿に集中してしまっている。あるいはそれは、彼にとつてはじめての獲物なのかもしれない。猛りたつ彼のその昂奮が、乗員たちにも伝播していたのだろう。誰もが、固唾を呑んでそのときを待っていた。乗員たちの鼓動が重なりあつて、艦内で脹れあがつた。

戦場における、微妙な、しかしすべてを決める一瞬が音もなくすぎさつた。

伊一二六七の司令室で方位計を見つめていた武藤大尉が、こちらをふりかえってちいさくうなずいた。伊一二六七は、その直線進路上に敵潜を捕捉した。だが、檜垣は表情も変えず、腕を組んでそこにじつと佇んだままだ。

敵潜の艦長は、デッキであらためて双眼鏡を構えなおした。

勾配の急な山道を全速で駆けがったあとのように、苦しげに背を曲げてぜいぜいと息を切らしながらによろめいている標的に、充分狙いをさだめて魚雷を叩きこむ。そんな状況を想定した訓練は、たぶんどの国でもおこなわれてはいない。

それは、あまりにも簡単な、ひとつの作業だつた。

はずす懸念は、一パーセントもない。

乾いた喉を唾で湿らせながら、彼はそう確信しているはずだ。

たとえどんな状況であれ、駆逐艦を沈めることは、輝かしい戦果である。「春雷」の遠藤艦長とおなじように、もしかしたらそれは、彼にとつてもはじめての実戦指揮だつたのかもしれない。初の戦闘で、駆逐艦を撃沈する――。すぐ、そこにある栄光を見据えて、彼の眼はぎらぎらと燃えあがつている。

たったひとつの要素さえなければ、まちがいなく彼は数分後にはその栄光の味をみずからたしかめることができただろう。

視界は、悪い。

黒い雲が垂れこめ、海は暗い。横殴りに吹きつける風は、強さを増していた。

しかし、司令塔のデッキで身じろぎもせず、双眼鏡を構える彼の眼は、空と海とのあわいにぼつりとあらわれたちいさな影を見逃しはしなかった。

すかさず彼は潜航を命じ、肩をなみうたせてひとつ深呼吸してから艦内に走りこんだ。

同時に、伊一二六七の艦首が、かすかに上昇した。

諏訪は後方に脚を滑らせ、壁に背中をぶつけた。

檜垣の意思に気づいたのだろう、馬淵が驚くような顔でほつと溜息を漏らした。

檜垣は潜航をはじめた敵潜を、斜め後方から攻撃しようとしていた。

標的発見にともなう敵潜の潜航は、当然の行動だつた。水面ぎりぎりに沈み、艦勢を整えて標的を確認し、魚雷を水平発射する。的中率のもっとも高い攻撃方法である。手漕ぎのボートにも劣る「春雷」の速度を考えれば、はずすほうが難しい。

いっぽう檜垣は、その敵潜を魚雷の仰角発射によって攻撃しようとしている。

下方運動する敵潜を、さらに斜め下から魚雷が襲う。標的として潜水艦はきわめてちいさい。しかも、両者の間隔はまだかなりある。

戦術的にいえば、この状況での魚雷の仰角発射はあまり得策ではない。

物理原則からいっても、魚雷は発射と同時に重力の影響でごくかすかではあるが下降していく。水平発射に比べて仰角発射の場合は、よりおおきく複雑にこの影響をうける。また、発射深度と目標到達深度が異なるため、水圧や海流偏差の計算がきわめて難しい。

しかも、伊一二六七はメイン・タンクから排水し艦首をもたげた刹那から、浮力にひきずられて上昇している。

目標はちいさく、距離も決して短くはなかった。

この状況下でいつくかの絡みあう要素を瞬時に計算し、ピン・ポイントで発射指令をくだすことは神業に近い。しかし、敵はすでに「春雷」を捕捉し、攻撃にむかつて動きはじめている。時間のロスは許されなかった。

「春雷」を救うには、賭けるしかなかった。

もはや、いささかの逡巡もできない。

己の判断と、乗員の技術に対する絶対的な自信——。それが、檜垣をささえていた。檜垣はしかし、いつもとかわらぬ穏やかな口調で、その命令を下した。こともなげないいかただった。

諏訪は、潜望鏡を挟んでむかいあう檜垣と狩野を凝視したまま、呼吸をとめた。そのとき、発射位置の調整だろう、敵潜がまたわずかに深度を下げた。

若い艦長は潜望鏡をみつめていた。円形の視界のなかに、「春雷」の艦影がある。クロス・ヘアの中心点に、それを捉えた。ほとんど静止しているかのように見えた。

僚艦に追われるまま、「春雷」が完全に横をむくのを、彼は待った。

じきに、そのときがきた。ゆっくりと「春雷」が動いた。彼は唇の端から、ちろりと舌尖をのぞかせた。勝利はいまや、その掌のなかにあった。

発射命令を下すために、胸を張った。

けれども、彼がその命令を伝えおえるより速く、ソナー手が蒼白の顔でこちらをふりかえった。

「後方より魚雷接近——」

泣いているような叫びが、彼の耳を貫く。

ヘッド・セットの奥から、尖りたつような金属音がこぼれる。

海を裂いた二発の魚雷は行儀よくならんだまま、ガトー級潜水艦の艦底にまっすぐ吹こまれ、炸裂した。ずしりとした鈍い振動に、艦長は潜望鏡にすがりついた。なにが起こったのか、それを確認する余裕すら、おそらく彼にはあたえられなかった。

絶望の味を噛みしめるだけのわずかな時間も、彼にはなかつただろう。

振動は海をつたわって伊一二六七にも届いた。

その揺れで諏訪は、すべてが終わったことを知った。

「お見事……」

むしろあきれたように、馬淵がつぶやいた。

諏訪はからだを丸め、肺に溜まった息を吐き出した。頼りない口笛のようななかつた音が、かすかにした。これが、潜水艦の戦いというもののなのだろうか。

銃声ひとつ響くわけではなく、兵士たちの悲鳴も聴こえてはこない。飛び散る火花もなく、血の匂いも漂ってはいない。

それでも、墨色の海のむこうで潜水艦がひとつ消滅し、六十名の生命がそれとともに海に溶けた。それは、事実だった。彼がただ茫然とつっ立っているうちに、すべてが静寂と闇のなかではじまり、そして終わった。

どす黒い恐怖が、胸いっぱいに拡がった。

掌が、ねばっこい汗でじっとり濡れている。膝が、細かく震えていた。

これが海底での戦いであるとしたら、ガトー級潜水艦に起こった悲劇がいつなんどき彼にふりかからなるともかぎらない。敵の姿は、どこにも見えない。たぶん敵潜の乗員たちは、魚雷の牙が艦壁を食い破るそのときまで、伊一二六七の存在に気づかなかつただろう。敵がすぐ背後にまで接近しているなんて、夢にも思っていなかったはずなのだ。

しかし、彼らはその一秒の何分の一かの短い時間のうちに、五体をばらばらに切り刻まれて、無惨な死を遂げなければならなかった。

それとおなじことが、いまこのときに諏訪の身に起こっても、すこしも不思議ではない。

すぐその海に、敵潜が息を殺してじっと隠れているかもしれないのだ。敵潜の魚雷発射孔は、むろんこちらにむけられている。

そこから、死が躍りかかる——。

喉許にまでこみあげてくる嘔吐感に堪えきれず、諏訪は口を抑えて司令室を駆けだした。

二、三分ほどして、彼は口のあたりに酸っぱい臭いをこびりつかせてままとどってきた。なにごともしなかつたように、檜垣と狩野はなにごとかを低い声で話しあっている。

「だいたいどうぶですか」

さすがに心配そうに、中原がいった。

「さ、さや……」

舌がもつれた。

「もう、平気です。落ち着きました」

と、諏訪はやっとそれだけ応えた。

馬淵が苦笑したまま、こちらをむいて、

「たしかに、豊かな想像力という点では、きみは充分に記者としての資質を備えているようだ。だが、あの姿はいささか滑稽だったな」

と、皮肉るようにいった。

彼は諏訪の気分を、すっかり見通しているらしい。

「戦闘は終わった。残りの敵は、逃げた」

瀕死の駆逐艦「春雷」をからかうように追っていた二隻の敵ガトー級潜水艦は、僚艦の撃沈を察知すると即座に左右に大きく展開していっさんに逃走した。馬淵が指摘したように、彼らは輸送船攻撃で搭載魚雷を撃ち尽くしてしまっていたのだろう。

魚雷がなければ、潜水艦は裸にひとしい——伊一二六七にせよ、敵のガトー級潜水艦にせよいちおう単装砲や機銃を装備しているが、そんなものはいざとなれば虚仮脅かし以上の役には立たない。実際、構造上からみれば、無用というばかりではなく、船体の円滑な運動を妨げる邪魔物でさえあった。それがわかっていながら重火器が搭載されたのは、魚雷ばかりではなんとなく心許ないという兵士の不安と、戦闘艦船である以上銃砲を装備しなければならないという杓子定規な設計思想によるものだった——。敵潜が慌てふためいて逃げだしたのも、当然だった。

しかし、檜垣はそれを追わなかった。

こちらとしても、残りの魚雷はすくない。また、なにより「春雷」の安全を確保することが先決だった。

馬淵も、檜垣艦長のその判断には異論がないようだった。

「機関部の状態にもよるが、見たかぎりではなんとか至近基地まで航行できそうだな」

ようやく檜垣は表情を緩めて、

「遠藤君はまだこれからの若者だ。いろいろ批判すべきところはあるだろうが、なるべく穏便にすませておいてほしい」

そう、馬淵にいった。

馬淵の報告如何によつては、「春雷」の遠藤艦長はそうとう厳しい処分をうけなければならなくなる。参謀として、馬淵はその権限を握っているし、さきほど彼は遠藤の無能ぶりを強く非難していた。

しかし、ただでさえ「春雷」は護衛すべき輸送船団を喪い、敵潜を沈めることもできなかったのだ。

失態はあきらかだが、そのうえ馬淵が彼の胸にある憤りを糊塗することなく正確に具申すれば、おそらく遠藤中佐は二度と乗艦勤務につけなくなる。彼の昇進も、必然的にここで終わるだろう。

檜垣は、それをいつているのだ。

馬淵は檜垣をみつめかえしたが、結局なにもいわずに、軽くうなずいた。

檜垣は満足そうに微笑むと、

「こちらも厄介な報告が残っているのですね」

と、困ったように頭を掻いた。

「ああ……」

馬淵も笑った。

「魚雷本数のことですか」

諏訪は知らなかったが、海軍の最高司令部は潜水艦の用兵に関して、さまざまな規制をさだめていた。もちろん、その多くはこの国にもあるような必要かつ欠かすべからざるルールだが、なかにはみずからの愚かさを天下に示すような信じられぬ制約もあった。

そのひとつが、目標とする艦船の種類によつて、使用する魚雷の本数を決める対艦魚雷制限である。つまりそれは、相手が商船や駆逐艦なら一本、巡洋艦なら三本と発射する魚雷の本数をあらかじめさだめ、それ以上の使用を禁止するという指示だった——左右六本の全斉射が認められるのは、戦艦と空母に限定されていた——。

子供でもわかるが、これほどくだらない規制もない。

たとえば、最初の一本が駆逐艦を捉えたとする。それがもし損害はあたえたものの致命傷にはならなかった場合、日本の潜水艦は次の攻撃を加えることが許されない。もう一撃で沈められることがわかっていても、みすみす指をくわえていなければならないのだ。

あまりにばかげたことだが、これに違反すれば、艦長が難詰され責任を問われた。

檜垣ほどの若むすようなヴェテランになれば、そんな不合理な規制など歯牙にもかかけぬ度胸があったが、

若い士官たちは上層部の定めたルールを金科玉条のごとく遵守した。また、そういう者たちが高く評価され、艦長へと抜擢された。結果として、戦局が不利になればなるほど、艦長の質も低下していった。

終戦後、この規定を知ったアメリカ海軍の士官たちは、ある者は哄笑し、ある者はその制約下で戦わなければならなかった日本潜水艦の艦長に同情したという。

敵から憐れまれるだけの意味しかない規定をこしらえ、それを守る者のみが昇進していく。そんな奇妙なシステムが、ある時期以降の日本海軍を支配していた。

馬淵はいった。

「そもそも、適当に処理しておきましょう。なにせ、緊急事態でしたから」

「よろしく、お願いします」

丁寧な、檜垣は頭を下げた。

狩野はぐいと顎をひき、不快げな顔をあちらにそむけた。彼もまた、そんな規制など鼻紙ほどの価値もないと思っっているにちがいない。そんな狩野の眼には、馬淵もそうした世にもお粗末な規定をつくった白痴たちのひとりとしか映らないのだろう。

ゆっくりと頭をあげると、檜垣は、

「浮上」

と、簡潔にそれだけを命じた。

伊二二六七は水面を泡だたせ、海を割ってその姿を顕わした。

意外なほど近くに、駆逐艦「春雷」がいた。

操舵の安定を失っているらしく、酔っぱらったようにあぶなかく蛇行している。伊二二六七は「春雷」を誘導すべく、その後方をおおきく迂回して左舷側にむかった。千鳥足の「春雷」との接触を避けるために、檜垣はたつぷりと間隔をとった。

ちよつとした事故が、そのとき起こった。

本来なら「春雷」は面舵をとって、伊二二六七の航路を開けるべきであった。

しかし、「春雷」はそうしなかった。できなかつたのかもしれない。彼女はいったん左側に艦首をむけ、慌ててそれを右にもどそうとした。男を誘う金髪の美女のように、彼女はそこで尻を振ったが、勢いにひきずられてもともとおぼつかぬ脚をさらに乱した。

予想だにつかぬ行動だった。

ふたつの艦船の航路が、きわどく交錯した。

咄嗟に全速前進を命じた檜垣のおかげでどうにか衝突は免れたが、ぎりぎりのところで舷側が接触した。金属がこすれあつて、悲鳴のような音をたてた。火花が飛んだ。

大事には至らなかつたが、ちいさな伊二二六七の艦体は煽られたように揺れた。諏訪はしたたかに頭を壁にぶつけ、額に赤黒い瘤をつくった。

馬淵はいまじげに舌うちをくれた。

機関長の井関大尉が、大声で怒鳴りながら司令室に駆けこんできた。子細に眺めれば、きつと頭からたちのぼっている湯気が見えただろう。

「なにをやっているやがるんだ、あの馬鹿は」

井関はわめくようにいった。

「機関部になにか損傷は——」

こみあげてくる怒りを堪えているのだろう、ことさらに冷ややかな声で狩野が訊いた。

「いや、たいしたことはありません。排気パイプがちよつとずれた程度だから、問題はないでしょう」

井関はそういつてから、げんなりした顔で中原につぶやいた。

「むこうは旨が操縦しているのか。せつかく敵をやっつけてやったというのに、救けた味方に沈められていては世話はない」

中原は俯いて、懸命に笑いを噛み殺した。

むこうから狩野が、睨みつけるような視線をこちらに投げかけている。

右舷からの浸水によって傾きかけた「春雷」をともなつて、伊一二六七はクエゼリン基地に到着した。予定より、まる一日遅れていた。

魚雷攻撃によつてうけた「春雷」機関部の損傷は案外にたいしたものではなかったが——それを聴くと井関大尉はこれみよがしに顔をしかめて、太い溜息を吐いた。つまりは、慌てふためいた「春雷」のあの遁走劇は、やはり操艦技術の未熟によるものだった——、なんといつても浸水の影響があり、完全復旧には十日程度の時間が必要だった。

基地司令部はミドウェイ戦直後のこの段階で、すでに敵潜水艦が付近海域にまで侵出してきたことに、強烈な衝撃を覚えているようだった。

しかし、ミドウェイ敗戦については、数日を経て冷静さをとりもどす余裕もうまれたのだろう、

「いかに帝国海軍でも、百戦百勝というわけにはいかんさ」

と、先任参謀の三宅少佐は、存外に落ち着いた口調でいった。

三宅は背の低い小柄な男で、鼠に似た顔をしている。

「だが、心配するな。空母四隻の犠牲はたしかに痛い、また我がほうが優勢であることに変わりはない」
忙しく眼を瞬かせて、ことさらに力強く、三宅はそっくりきつた。

この時点において、帝国海軍はまだ六隻の空母（軽空母含）を保有している。対するにアメリカ側の所有空母は三分の三隻でしかない。それを考えれば、日本側が依然として有利であることはまちがいない。

三宅はそういつて、胸を張った。

事実、そののち八月にガダルカナル島の攻防をめぐるおこなわれた二度にわたるソロモン海海戦——アメリカ側の呼称では「ザボ島沖海戦」ならびに「東部ソロモン海戦」——、さらには十月の南太平洋海戦——同「サンタ・クルーズ沖海戦」で、帝国海軍は互角以上の戦いを展開している。この南太平洋海戦で、アメリカは空母「ホーネット」を喪つたうえに「エンタープライズ」も大破し、一時的とはいえ太平洋上で作戦行動可能な空母が皆無になるという事態に陥った。

もっとも、そこから先を記しておけば、米海軍の所有空母なしという状況は、そう長くはつづかなかつた。その年の暮れには、排水量二万七千トン、搭載機百の大型空母「エセックス」をはじめ六隻の空母が竣工し、すぐさま戦線に投入されている。このエセックス級空母は太平洋戦争後半の、アメリカ海軍の主力艦となり終戦までの二年半で十七隻が建造された。

新造空母が、およそ二ヶ月に一隻のペースで前線へ送りだされたのだ。

いつぼう日本は、その間にわずか四隻の空母を竣工させたにすぎない。

水粥を啜る貧乏人がせいっぱい見栄を張つて、世界一の大成金に消耗戦を挑むと、こういう哀れなざまになる。

むろんこの段階ではまだ、しがみつくだけの希望は残っている。

三宅はさらにいった。

「現実には、ミドウェイでは敗けたが、北方アリューシャン方面の作戦では、わが軍は大勝利をおさめている」
そのとおりだった。ミドウェイと平行して実施されたアリューシャン作戦でアッツ、キスカ両島の上陸占領に成功している。このふたつの島は、いずれもアメリカの領土だった。開戦以降日本ははじめてアメリカの領土に侵出し、そこを奪いとつた。

アメリカにとつても、敵に領土の侵略を許したのは、その百七十年余の歴史のなかではじめて——そして、最後の——のことだった。

「むこうさんにしても、これは大変な屈辱だ」

と、三宅は乱杭歯を剥きだして、誇らしげに笑つた。

しかし、その三宅にしても、敵の至近海域侵出の事実には、すくなくからぬ動揺を隠しきれなかった。

敵の反攻準備は、予想よりも遙かに早い速度で進んでいるらしい。伊一二六七は、「春雷」の回復を待っていられなかった。

わずかに十二時間の休息——その時間は、「春雷」との接触で傷ついた装甲の応急処置と物資の補給に費やされた——があたりえられただけで、檜垣には南方軍司令から新しい命令がたえられた。

初期目的のラバウルではなく、南方ナウル基地への転進命令だった。

敵の本格反攻に備えて、ラバウルは拠点基地として大規模な決戦部隊が結集する予定になっており、その港にはこれ以上の艦船をうけいれる余地がないという理由だった。それは要するに、これまでずっと孤艦行動をつづけてきた伊一二六七に、軍はなにほどの期待も抱いていないことだった——もちろん、敵の反攻がギルバート諸島を飛び石つたいに北進するかたちで展開される可能性は多分にあり、それに対応するための戦力拡充という意味もあつたが——。

ナウルは赤道南方約五五キロ、クエゼリンからは真南におよそ一千キロ。ミクロネシア東南端に位置する周囲一九キロ、面積二一平方キロの小島である——今日では、経済的にはオーストラリアに依存しているものの、一九六八年に独立を果たし、人口八千を擁する世界最小の共和国として知られている——。もちろん、基地の規模はラバウルほどおおきくはない。

馬淵参謀とは、クエゼリンで訣れた。

「三宅君は、ずいふんと威勢のいいことをいつていたな」

と、馬淵はいささか曇った表情でいった。曖昧な立場で先任参謀の三宅とこれからつきあつていかなければならないことが、彼を憂鬱にさせているのだろう。

「現状だけで判断すれば、たしかに彼のいうとおりかもしれないが……。わたしにはとても、あそこまでの樂觀はできない。アメリカだつていまごろは必死になって空母の生産を進めているだろう。それが、工場からつぎつぎに戦場に送りだされてみる、現在の優位なんてひと吹きでけし飛ぶ」

「なんだか馬淵さんは、潜水艦暮らしで妙に悲觀的になりましたね。あの湿った空気がわるかつたのかな」
諷刺はいった。

「アリュウシャン作戦で、敵の領土を占領したのはほんとうでしょう。これは、すごいことじゃありませんか」

諷刺だつて、日本国民である。この快挙は、素直に嬉しい。

「そうかな……」

だが、馬淵は頸を傾げて吐息を漏らした。

「アリュウシャン作戦はもともとミドウェイの牽制として企画されたものだ。アツツ、キスカにはたいした戦略価値もないし、敵もそれを知っているからこそ防備も手薄だった。ミドウェイでは負けたが、アリュウシャンでは成功だったといわれても、それは本家の火事と分家の婚礼がいつしよになったようなもので、手放しては喜べん」

戦略上とりたてて価値のないアツツ、キスカの奪還は、その後アメリカにとつてプライドを賭けた戦いになった。日本もまた米國領土占領の事実拘泥し、さしたる意味もないその小島を握りしめて離そうとしなかった。その攻撃はきわめて苛烈なものになり、アツツ島守備隊は全員が玉砕した。

別れ際、彼はまっすぐに腕をのぼして、諷刺に握手を求めた。

「とにかく、お互い、これからは辛い日々になるだろう。しかし、泣き言はいつておれん」

と、馬淵は諷刺の掌を強く握り、

「戦争が終わつたら、どこかで逢おう」

そういつてから頬をすこし歪めて、

「そのときには、思う存分タバコを喫おう」

と、笑った。

馬淵とは、それきりになった。

ちなみに言い添えておけば、馬淵はその後も南方を転戦したが、昭和一九年末に本土に戻り、参謀大佐として終戦を四国の丸亀で迎えた。戦後彼は親が持っていた田舎の土地を処分し、関西でちいさな貿易会社を興した。会社はその後朝鮮動乱の特需景気に乗って、業容を飛躍的に拡大させた。四十年代の半ば、彼はみずから働きかけてその会社——業績は依然昇り調子にあつたが——を大手の総合商事会社に吸収合併させた。

その際の自社株の売却で、馬淵は莫大な資産を築いた。それから間もなく、オイル・ショックによる未

曾有の不況が日本に襲いかかったことを考えると、彼の先見力は高く評価されるだろう。そして彼はそれからなお十数年生き、昭和五十七年の春、臍臓ガンで死んだ。

戦時の想い出について、彼は幾たびか尋ねられたが、そのつど微笑をかえすだけでなにも語ろうとしなかつたという。

伊一二六七の目的地変更によって、必然的に諏訪の行く先もかわった。

輸送機に便乗するなりして本来の目的地であるラバウルにむかうにしても、まずナウルまでは伊一二六七でむかわざるを得ない。ケゼリンの指揮官は、報道班員のひとりぐらい、身の振り方は勝手にしろという態度だった。

「いつそのまま、われわれと行動をともしたらどうです」

と、ナウルにむかう艦内で、中原がいった。

「潜水艦暮らしも、これでけっこう面白いでしょう。戦闘も、いちおう経験したし……。終戦になったら、その体験談を本にして出版したらいい」

「そんなときは、おれのことをせいぜいよく書いてくれよ。長谷川一夫や上原謙とまではいわんが、白哲瘦身の美男子だとかなんとか」

と、井関がまぜかえして、

「まちがっても、鮪坊主とか入道とか書いたら、承知しないぞ」

ぎろりと眼を剥いて、中原を睨みつけた。

それもいかもしれない——と、諏訪は思った。

出版云々はともかく、彼はこの男たちに奇妙な魅力を感じていた。

敵との遭遇が懸念されたが、ナウルまではなにごともなくすぎた。

しかし、伊一二六七が基地で歓迎されたとはいいきれなかつた。

兵士たちはみな、どこからかやってきた古ぼけた潜水艦に、さしたる関心を示さなかつた。彼らは敵の上陸攻撃に備える体制づくりで、それぞれではなかつた。

「こんなものですよ、どこでも」

と、自嘲的な笑いとともに、中原はいった。

「普通の兵から見たら、好きこのんで潜水艦なんかに乗っているやつは、やはりどこかおかしい奇人変人の類なんですよ」

複数の専門学校において再教育をうけるために、潜水艦乗員の年齢が高くなることはすでに述べた。それにつれて、彼らは一般の兵士とはちがひ、最初の勤務についた段階である程度のところまで階級をあげている。

しかし、だからといって彼らは、海軍におけるエリートでも憧れの対象でも決してなかつた。

それどころか、兵士たちはある意味で潜水艦勤務を惧れ、嫌悪していた。

昇進という点でみても、出発点ではわずかなリードがあつても、その後の潜水艦乗員の出世はそれぞれが専門職であるだけに、きわめて遅かつた。いわんや艦長候補ともなると、乗艦しての実践勤務と陸での専門教育を幾度かくりかえさなければならなかつた。他の艦船の艦長は特別な経歴を必要としなかつたが、潜水艦の場合だけはその過程をきちんと踏まなければ、絶対に艦長になれなかつた。

そのうえ、潜水艦勤務は、肉体的にも精神的にもきわめて厳しい。

航海時には密閉された狭い空間にとじこめられ、満足に風呂にもはいれない。食事は栄養優先で、全員平等。ほかの艦船に比べて、非衛生で不自由な生活を強いられる。

しかも、事故でも起これば、乗員はほぼ全員が死亡する——潜水艦が開発された当座は、日本でもその種の事故が多発し、それが暗い記憶となつて残っていた——。

それでいて、昇進という見返りがさほど期待できないのだから、あえて潜水艦乗務を希望する者などほとんどいなかつた。中原たちが変人視されるのも、無理からぬところだつた。

だから、中原たちも一般の兵士とは進んで接触をもとうとはしなかつた。

彼らはつねに、仲間どおしでひとかたまりになつて行動した。

とりあえず、伊一二六七に任務はない。

ナウルに着いた乗員たちに、束の間の休息のときが訪れていた。

植草大尉はさつそく何本もの一升瓶を調達し、居室にとじこもつたまま出てこなくなつた。井関は酒保から山ほどの饅頭や羊羹を買ひ込んできた。彼はきつと、餡に酔う珍しい体質なのだろう。机のうえに饅

頭や羊羹を高々と積みあげ、中原や諏訪に相伴をほとんど力づくで無理強いした。二つ三つはどうにかつきあったが、それ以上は胸が焼けてどうにもならなかった。そこで断るうものなら、井関の目つきが変わってくる。

なんとも閉口して井関が便所にたった隙に植草の部屋へ逃げだすと、そこには狩野少佐がいた。中原が絶望的な顔で、ちいさく呻いた。

むかいあったふたりは、肴もなくただ茶碗についだ酒だけを、黙りこくったまま水のように呑みつづけていた。唾然としてその光景を眺めていたが、五分もすると息が詰まってきた。

「ここにいると、しまいには殺されますよ」

と、中原が耳許で囁いた。

ふたりは足音を忍ばせて、部屋をぬけだした。

そんな日々がつづいた。

どこかで戦争がおこなわれていることを、忘れてしまいそうだった。

そんなある日、どこかから見つけたふたつのグローヴを脇に抱えて、諏訪をキャッチ・ボールに誘った。

「野球は好きですか」

基地のはずれにある野原で、汚れたボールを投げながら、中原が訊いた。

ずしりと重みを感じる速球だった。きれもしい。

諏訪は掌にかすかな痛みを覚えた。

グローヴは革製だが、どうやら兵士のでづくりらしい。クッションがわりに綿が詰めてあるのだが、それがひとつどころにかたまってしまうと、受け方によってはボールの衝撃がまともに掌につたわる。

「これでも、学生時代はショート・ストップで一番を打っていたんです」

と、顔をしかめて諏訪はいった。

「もちろん、レギュラーでしたよ」

嘘ではない。神宮など夢の、弱い学校だったが、それでも一年の秋の新人リーグで三割二部を打ったこともある。

部員のレベルが低かったこともあり、二年の春からはレギュラーに抜擢された。だが、張り切りすぎたせいか、その夏の合宿練習で肩を壊し、それからは打率も二割五分がせいぜいで控えにまわることも多くなった。ついでにいつてしまえば、その合宿ではじめておんなのからだを知った。眩しいような、懐かしい記憶だ。

諏訪の返球を受けて、中原のグローヴが小気味いい音をたてて鳴った。

「へえ……。さすがに、いい球投げますね」

感心したように、中原はいった。

しかし、スピードは中原のほうがあろう。これだけの球を抛るピッチャーは、学生時代の対戦相手のなかにも、そうはいなかった。

弱小だった彼の学校にいれば、中原はまちがいなくエースになっていたはずだ。

「でも、大学で野球やっていたなんて、羨ましいな」

子供のようなあどけない顔に、中原はなった。

諏訪は訊いた。

「あなたも、経験があるんですか」

「わたしは、中学までです」

と、中原はいった。

「なにしろ頑固親父の眼が光っていましたから、野球なんてやらしてはもらえませんでした。もっぱら柔道やら剣道ばかりで」

「もったいないな、つづけていたら六大学のエースにもなれた球ですよ」

「お世辞としても、嬉しいですね」

ほんとうに嬉しそうに、中原は白い歯をこぼして笑った。

「誰にもいわなかった内緒の話ですがね、わたしも早稲田か明治にいつて、野球をやりたいかっただけですよ。神宮のマウンドに、立って見たかったなあ。親父がいなかったら、職業野球の選手になっていたかもしれない。沢村やスタルヒンと投げあうなんてね」

中原はそういうと、おおきくふりかぶってひととき強い球を投げてきた。

じいん、掌が痺れた。

馬淵が歴史家になりたかったように、中原にも見果てぬ夢があったのだ。戦争は容赦なく、そんなちっぽけな夢をひとつひとつ押し潰していく。

それならおれは、いったいどんな夢があったのだろう……。負けじと速球を返して、諏訪は思った。

子供のころ、将来なにになるかなんて、一度だって考えたことがなかったような気がする。ただ漠然と、学校を卒て父親のあとを継ぐことになるのだろう。そんなふうには、思っていなかった。

そのまま漫然と時間をすごし、はつきりした目標もなく東京の大学へいった。

さしたる努力もせず、学力相応の学校を選んだ。四年という歳月を、ひとりで東京で暮らしてみたかった。つきつめれば、それだけの理由で――。

己で決断を下したこともない、なんとも中途半端な人生だった。そんな気がする。

大学でも、とりたてたなにを学んだわけでもない。野球部にはいったのも、友人――国粹主義に傾倒していた彼は、その後陸軍士官になり、いまま大陸で戦っている――に誘われたからだ。部員もすくなく、練習もさほどきつくなかった。だから、つづけられた。

卒業して新聞社にはいったのも、別段ジャーナリズムに関心があったからではない。そのまま父の会社にはいって、油まみれの工員たちの監視をするつもりになれなかったからだ。あの程度の成績で新聞社に入社できたのも、もちろん彼の努力のせいではない。

そこでもひがな一日、椅子に坐って将棋や囲碁の棋譜をぼんやり眺めていた。

中途半端な人生――。父があんなふうにならなければ、あんな事件が起こらなければ、きっといまでもそれはつづいていただろう。

なにひとつ、自分で決めてこなかったつけが、いまこんなふうにしてまわってきている。いや……、いまこの状況だって、自分で選んだわけではない。まわりにいる誰かが悩み、お膳立てしてくれたものだ。

そう思うと、どうにも情けない苦笑が頬に浮かぶ。

中原の声がした。

顔をあげた諏訪は反射的にグローヴをかざし、鋭く回転しながらまっすぐこちらにむかつてくるボールをとめた。

乾いた音をたてて、グローヴが鳴った。

「そういえば、わたしの中学時代の友人で、明治の野球部にはいった男がいましたよ」

と、中原はいった。

「それは、たいしたものだ」

諏訪は、うつすらと額に汗を滲ませている。

「高校時代には甲子園で準々決勝まで進み、本格派の右腕としてけっこう期待されて明治へいったのですが……。やっぱり脇を痛めて、結局は芽が生まれませんでしたね」

ボールがすこしそれ、中原はからだを捻って受けうめなければならなかった。

「それでも、六大学で野球をやるのが彼の夢だったから、夢を実現したことになるのでしょうかね」

「甲子園から、六大学か……」

諏訪は、息をはずませていった。

「野球少年の最高の夢ですからね。たとえ、成功しなくても、そこまでいけば充分ですよ。それも、からだを壊してやめたのなら、あきらめもつく」

「そうでしょうね」

と、中原がうなずいた。

「その後学校を中退して海軍にはいり、パイロットになったって聞いたけど、どこかで逢ってみたいものです。わたしなんてスタートを切る前に挫折してしまっただから」

「海軍士官になったのを挫折だなんて、そんな言葉を井関さんや狩野さんに聴かれたら、只ではすみませんよ」

「あなただから、いつているんですよ」

中原はいかにも愉しそうに笑った。

六月の空はぬけるように青く、雲ひとつなかった。遮るものもなく、まっすぐに照りつける陽ざしは強

い。

「ふたりのあいだを、幾たびか白いボールがそうやって往復した。さすがに中原の顔にも、汗の粒が光っている。」

「ねえ、知っていますか。アメリカではいまでも盛んにプロの野球試合が開催されて、人気を集めているんですよ。ヤンキースなんて、いまでも強いらしい」

それでも、球速はすこしも衰えない。球筋も、安定している。

いくら国民的娯楽といっても、現在でもメジャー・リーグの試合がきちんとおこなわれているとは、諏訪も知らなかった。日本でいえば、相撲がそれにあたるのだろうか、本場所はせいぜい年に二回。全国各地に本拠を持つ十数チームが、それぞれ年間百試合以上を戦うメジャー・リーグとはまるでスケールがちがう。

しかし、それも有り得ないことではなさそうだった。

この戦時下においても、ハリウッドは大衆向けの娯楽映画を量産している——戦後日本で公開された「カサブランカ」や「ランダム・ハーヴェスト（心の旅路）」は、ちょうどミドウェイ海戦で戦局が転じたこの年に制作されている——ことを、諏訪は知っていた。そのあたりの事情を紹介した記事が、祖国を追われる契機になったのだから、簡単に忘れることはできない。

暗い戦時下だからこそ、国民に娯楽をあたえることが必要だとアメリカは考えるのだろう。

逆に日本はそうした娯楽を不要不急なものと捉えて、徹底的に弾圧した。映画の制作本数は極端に制限され、野球も敵性スポーツとして睨まれている。ばかげたことだが、ストライクあるはいボールといった基本用語さえ、使用を禁止する動きがあるらしい。

国民性のちがいというより、これが豊かさの差というものなのだろう。日本はあまりに貧しい。乏しい力のすべてを一滴残らずそそぎこまなければ、戦争をつづけられないのだ。娯楽にまわす余力など、どこにもない。

そんなことを考えると、ひどく惨めな気分になる。

だが、中原はそんな感傷とは無縁だった。

「やっぱり大リーグは野球の頂点ですからね。一度は、見ておきたいな」

彼は単純に羨ましがっていた。

どうやって調べているのか、アメリカ野球の現状にも詳しくかった。

真珠湾奇襲によって太平洋戦争がはじまった去年のワールド・シリーズは、ヤンキースとドジャースというともにニューヨークにフランチャイズを置くチームのあいだで戦われ、四勝一敗でヤンキースが勝った——ワールド・シリーズは当然開戦前に終わっていたが、その種の情報はほとんど日本にはいつてこなかった——。今年もやはり、ヤンキースが強そうだ。ルースやゲーリックはもういないが、ボストンのジミー・フォックスは顕在だったし、ヤンキースにもジョー・デイマジオというすごい新人——ヤンキー・クリッパー——があらわれて、ニューヨークのファンを熱狂させている。ほかにもテッド・ウイリアムズとかスタン・ミュージアルといった新しい時代のスターがうまれている。憑かれたように、中原はそんなことを話しつつづけた。

どのくらいそうやって球を投げあっていたのだろうか。そろそろ一時間近くになるはずだ。

日頃の鍛えかたのちがいだろう、諏訪の表情には疲労の色が濃い。

疲れが蓄積すると、かつて関節を壊した右肩の筋肉がこわばってくる。どうしても肩を庇って手投げになった。ボールに妙な回転がかかり、球跡が上下左右にふれはじめた。

暴投になりかねない球を、中原はあちこちに俊敏に走ってよく止めた。

どこからか、笑い声と野次が聴こえてくる。

遠巻きに集まってふたりのキャッチ・ボールを見ていた基地の兵士たちの声だった。

四、五人の若い兵士が、芝に腰を降ろしてこちらを眺めている。

「そろそろピッチャー、焼けてるぞ」

諏訪のほうを指さして、遠慮なく囁きたてる。

あまりいい気分ではないが、一目瞭然の事実だけに、諏訪も反論のしようがない。これが実際のゲームなら四死球の連発で、渋い顔の監督がベンチから駆けだしてくるころだ。

「そろそろ、お終いにしましょうか」

にこにこしながら、中原がこえてくるかけてくる。

「いや、まだまだ」

意地だけでそう応えて、腕をいっぱい振った。それでも無意識に肩を庇ったせいだろう、ボールの縫い目に指先がひっかかった。速度はあったが、球はおおきく上方にずれた。

跳びあがれば捕れない球ではなかったが、

「あっ」

と、中原は短くいったきり、そこを動かなかった。

グローヴを持った左腕は、胸のあたりで止まったままだ。ボールは棒立ちになった中原の頭上を駆け抜けていった。

訝しげに、諏訪はうしろをふりかえった。

中原の意識を奪ったなにかが、そこにあるはずだった。しかし、そこにはやはり三人の兵士がいるだけだった。彼らは、芝のうえの兵士たちの集団からもさらに離れて、笑いもせずはこちらをぼんやりと見ていた。

そして、つまらなそうに背中をむけ、むこうに歩きはじめた。

どこかにむかう途中、不細工なキャッチ・ボールをちよっとたちどまって見物したところだろう。たしかに、いくら退屈でも、長く見ていられるようなしろものではない。

諏訪はもう一度からだをまわし、中原のほうにむきなおった。

中原は頸を傾け、なにか考えこむように眉をしかめていた。

ボールは、遙か彼方の野原をころころと転がっている。

ふいに、兵士たちの笑い声がやんだ。

ひとりの男が腰を屈めて、足許に転がってきたボールを無雑作に拾いあげた。

狩野少佐だった。

兵士たちはそれに気づくと、互いに肱でつきあつてたちあがった。

彼の全身にまとわりついた凍りつくような雰囲気のせいだろう、兵士たちもどうやら狩野が苦手であるらしかった。とりたててなにかがあったわけではないが、狩野は基地の兵士たちから敬遠され、避けられていた。この男は、なかなか他人に好かれな

むろん狩野のほうでも、好意を持たれようとは、すこし思ってもいなかった。そのひともなげな態度が、

また周囲の反感を増幅させる。

だから彼は、無用の摩擦を避けるためにも、部屋にとじこもって植草とも酒に浸っている。さすがに、その酒にも飽きたのだろう。

「くだらない遊びで喜んでいるあたりは、まだまだ餓鬼だな」

狩野は掌のうえで、二、三度ボールをはずませた。

中原はやつとそちらをふりかえって、さきほどのことなど忘れてしまったかのように、いきおくよくグローヴを振った。

狩野はボールを握りなおし、腕をふりかぶった。腰を決め、片脚を跳ねあげた。

どこにも無理もない、流れるようなフォームだった。

唸るような剛速球に、思わず中原はさしだしたグローヴをひっこめた。

諏訪は慌ててグローヴを構えた。拡げたグローヴにおさまる寸前、ボールは空気を軋ませるようにして鋭く曲がり、ほとんど垂直に落下した。

まさに、懸河のドロップというやつだった。

からだを投げだし、倒れこむようにして、諏訪はきわどくボールを抑えた。

狩野少佐は、母親というものの顔を知らずに育った。

彼は島根県の奥深い山間部にあるちいさな神社の宮司の息子として生まれた。父親がちょうど四十の年齢ではじめてさずかった、ずいぶん遅い子供だった。母親は造り酒屋の箱入り娘でたいそう綺麗なひとだ

つたというが、もともとあまり丈夫ではなく、彼を産み落とすと、それが負担になったのか新しい生命とひきかえるようにして死んだ。

それ以来、祖母が母親がわりとなって、彼を育てあげた。

父親は酒好きで、いつも冗談をいっている愉快な男だった。草深い田舎で神主といえ、村長や医者とならぶ名士だが、彼は決して尊大ぶることもなく、あけっぴろげな性格で集落のひとびとからも好かれていた。

息子のかわりに妻を喪わなければならなかった彼のもとには、幾度か再婚話もちこまれたが、そのたびに笑って頸を振った。継母と息子というなにかと面倒な関係のなかで、苦勞するのが厭だったのだろう。狩野は、そう思う。

父親は息子を溺愛した。徹底して甘やかしたが、しかしこと教育についてはほとんど関心を持たなかった。後添えこそもらわなかったが、彼も男ざかりの年齢である。三里ほど離れた町に若い妾を囲っており、週に一、二度はかならずそちらに泊まった。

ときには、狩野をそこに連れて行くこともあった。

商売あがりなだけに母親とはまるでちがう派手な女だったが、彼をととても可愛がつてくれ、見たこともない料理を幾品もならべてくれた。

父親は晩酌を愉しみながら、彼を膝のうえに抱きかかえ、髭だらけの頬をこすりつけた。

そんなとき彼は決まって、

「坊主だの神主だのなんて商売は、結局は詐欺師とおなじだ。嘘を飯の種にして、他人を騙して生きている」と、くりかえしいった。

「おまえも大人になったらわかるだろうが、ほんとうにくだらな商売だ。厭だと思ったら、無理して継ぐことはないんだ。楽な仕事だから、やりたいやつはいくらもいる。おまえのような立派な男が、こんな田舎で腐っていくのはもつたない」

父親は旨そうな料理を前に眼を輝かせている幼い狩野の耳に、飽きもせずそう語りつづけた。当時の彼に理解できるはずはなかったが、なぜだかその言葉はいまも耳の奥に残っている。

そんな父親が彼に教えたことは、ただひとつしかなかった。

剣術——撃剣と、父親は古めかしい表現を使った——だった。

狩野の家には、父祖相伝の剣術があった。神主みずから木刀をもって教えていたのだが、祖父のころまでは境内の端に板敷きの粗末な道場が残っていたという。むろん近隣の百姓相手の喧嘩憲法で、神明剛破流といういかにも虚仮脅かしの名称がついていたが、それでも時勢のせいだろう、幕末のころにはかなり盛つたらしい。

しかし時代があらたまって、剣術が精神主義とスポーツの衣装をまもって剣道となり、正式に学校教育に採用されるようになったことで、完全に息の根を止められた。都会からきた剣道師範は、狩野家伝来の神明流を一瞥のもとに「下品」「卑劣」と罵倒した。

人殺しの技術に品も卑怯もあつたものではないが、もともと酔狂な百姓相手の道場である。権威を背負つた教師から、まさに一刀両断に否定されたそんな流儀をわざわざ習おうとする者はどこにもいなかった。

なにしろ、わざと逆脚に構えて左脇を狙つたり、罅迫り合いでもつれた際、からだを開いて柄頭を敵の鼻柱をうちつける技とか、相手の足の甲を踏み砕く術とかが秘伝としてつたわる剣術である。とにかく喧嘩で勝つための技術だから、「下品」「卑劣」とまともに批判されれば返す言葉がない。一気に衰えた。

狩野が物心ついたころには、道場も残つてはいなかったけれども、どこかに未練があつたのか、祖父は父親にだけ密かにその秘伝を教えていた。父親はそれをまた、狩野につたえた。

そのときだけは、父親は熱心で、厳しい教師になった。

狩野に容赦なく父親に打ち据えられたが、無性にそのことが愉快だった。

暇があると、ふたりは犬がじゃれあうようにして木刀を振るつた——のちに狩野は松江の中学で剣道を習つたが、父から教えられた秘伝を使うと、面白いように相手が倒れた。四段の免状を持つ教師でさえ、狩野の竹刀をもてあましたあげくに鼻梁を柄頭の一撃で砕かれ、血まみれになつてのたうちまわつた――。

そんな父親だから、教育はもっぱら祖母の役割だった。

驚くべきことだが、江戸時代の産まれの祖母は、どこで学んだものかほとんど不自由なく英語の読み書

き——さすがに話すことだけではできなかったが——ができた。彼女は最初に、狩野にアルファベットを教えこんだ。教材に原書——そのなかにディケンズの小説があったことを憶えている——を使い、彼女は世界の広さと歴史を狩野に教えた——狩野が成長してからわかったことだが、地方の素封家の娘だった祖母は松江の女学校に進み、そこで療養にきていた京都の医大生と知りあって熱烈な恋愛に陥り、親の反対を無視して突然駆けおちしたことがあったのだという。三年後に医大生は胸の疾患で死に、ひとり故郷にもどってきた彼女は、厄介払いをされるように多額の持参金つきで、田舎の神官であった祖父のもとに嫁いだ。あるいは、彼女の人生はその三年間で燃焼し尽くしてしまっていたのかもしれない。いまになってみると、そんなふうにも狩野は想う。彼女はすべてを諦めながらも、きつと自分を幸福にしてくれなかった故郷を意識の底で怨み、好意も持てぬ偏屈な男と田舎で暮らさなければならぬことを憎悪していたのだろう。複雑に屈折した想いを抱えて、彼女は父親と孫を育てたのだ。彼女はあきらかに、狩野がその田舎を捨てることを望んでいた——。

狩野はそんなふうにして育てられた。

まわりの子供たちと遊ぶ機会は、あまりなかったが、それでも満足だった。

父親との剣術稽古は愉しかったし、巧みな祖母の話はわくわくするほど面白かった。

おかげで狩野は小学校にあがるころには、かなりの水準で英語を理解することかできたし、代数や幾何についてもごく初期の理論を学んでいた。ただ、彼はそのことを周囲の子供や大人たちに隠していた。父親や祖母からそうしてろといわれたわけではないが、なんとなくそのほうがいいように感じられたからだ。しかし、子供たちは彼がすこしちがっていることを、敏感に悟っていた。狩野はしだいに仲間たちから遠ざけられていった。

孤独ではなかったが、すこしも辛くはなかった。

愚かな子供たちといっしょになって泥まみれで遊ぶよりも、祖母の話を聴いていたほうが充実していたからだ。

そんな奇妙な環境が、小学校を卒る直前までつづいた。

その年の暮れ猖獗をきわめたスペイン風邪にかかって、父親と祖母があいついで死亡した。狩野は松江の親戚にひきとられ、中学にはいった。

その親類は、ごくありきたりな平凡な家庭だった。

狩野はなにひとつ不自由なく家族同様に扱われたが、普通であることが彼には耐えられなかった。だから彼は、卒業を待ちかねたように兵学校を志願した。

親類はこぞって反対したが、海軍にはいけば祖母が語っていた世界をこの眼で見ることができると、つきあげてくるその想いを抑えることはできなかった。

兵学校での成績は抜群のものだった。海軍にはいっても、潜水艦に載るつもりはまったくなかった。兵学校では、卒業を控えた若い士官たちは、将来の配置希望を問われる。その瞬間まで、潜水艦勤務を希望する気は、これっぽっちもなかった。

通常、兵学校の最優秀生徒は乗艦勤務であれば、戦艦であろうと空母であろうと、ほぼ希望通りの部署に配置される。そのレヴェルの生徒で、あえて苛酷な潜水艦勤務を望むものはまずいなかった。必要人員を確保できず、軍はやむを得ず強制的に潜水学校への入学者をふりあてなければならなかった。その場合も、成績優秀者が選択されることはほとんどなかった。それが、あたりまえだった。

狩野はその風潮にふと反発を感じた。些細なことだったが、それが動機になった。

それだけのことで、狩野は潜水艦勤務を希望した。

級友たちは、奇妙な生き物を見るような視線を、狩野に浴びせかけた。

どうやら、損な性格をもって、おれはうまれおちたらしい——。

基地からすこし離れた小高い丘に腰を降ろして、狩野は苦笑した。

決して潜水艦勤務に就いたことを後悔しているわけではないが、人生を左右する岐路で下した決断の理由としては、おもいかえしてみてもいささか軽率すぎるようだ。

祖母や父親と暮らした十余年で、知らずしらずのうちにおかしな方角に性格がねじまがってしまったのだろうか。

もちろん、いまさらどうなることでもない。

ひとつ吐息をつくくと、狩野はゆっくりと空を見あげた。

降るような満天の星空だった。

故郷の空も、やはりこんなふうに星に満ちていた。

だが、気候のちがいだらう、その空はずっと高く、ひやかだつた。南方のこの島では、夜さえも柔らかない。

聲音がした。

狩野はそちらをふりかえつた。

檜垣艦長だつた。

檜垣はなにもいわず、狩野のとなりの叢に坐つた。

そういえば、昨夜から檜垣の姿を見かけていなかった。

「いい空だね」

と、檜垣はいつた。

狩野は訊いた。

「どこかにいつておられたのですか」

「いや……」

檜垣は低くいつた。

「遠藤中佐が本土帰還の途中、わざわざここに立ち寄ってくれたのでね——」

伊一二六七に救われた駆逐艦「春雷」の遠藤艦長がナウルに来ているとは知らなかった。

「艦長失格で、本土へ送還ということですか」

たとえ馬淵が約束どおり沈黙をまもってしてくれたとしても、駆逐艦には副官もいれば航海士官もいる。誰かの口から、「春雷」のあの無様な行動が伝われば、それもしかたなからうと、狩野は思った。

「そつてはないよ」

ゆつたりとした口調で、檜垣は否定した。

「思ったより「春雷」の損傷がおおきいらしく、人手も足りないのです、修理には一月近くかかるという。その間、遠藤中佐を遊ばせておくわけにはいかんということだろう。本土にもどつて、彼は新たな艦の指揮をとることになるだろうだ」

あきれたように、狩野は頸を振つた。

「馬淵参謀がいつていましたが、たしかに遠藤中佐は司令部に強力な後援者を持っているようですね」

「若いうちは、とにかく失敗を惧れず経験を積むことだよ」

檜垣は庇うように、

「これからの戦争は、彼やきみたちの世代が中心となつてこななければならないのだ。基礎はしっかりしているのだから、あとは経験を重ねれば、彼もいい艦長になる」

「それで、遠藤中佐は救助の礼で立ち寄つたのですか」

「ところがね……、余計な真似をするなど、叱られたよ」

と、檜垣は苦笑いして、赤茶けた髭を撫でた。

「どういふことですか」

「遠藤君の考えではね、追跡してくる二隻の敵潜がすでに魚雷を撃ち尽くしていることはわかつていた。むろん、残りの一隻が待ち伏せしていることも承知だつた、というのだ。敵潜三隻をすべて攻撃圏内に捉えたところで、逆襲に転じて一挙に撃沈する腹つもりだつたそうなのだ。作戦としては、妥当だろうね」

檜垣はおもしろそうにいつた。

そんなことが到底不可能であつたことは、狩野にもわかつている。

たしかに、「春雷」を追尾していた二隻の敵潜は、攻撃手段を持っていなかった。しかし、同時に「春雷」にはそれを迎え撃つための脚がなかった。潜航する標的を機雷攻撃するには、まず敵の直上水域に艦を移動させなければならない。操舵の自由を失い、速度も極端に低下していた「春雷」に、それができるはずはない。

檜垣はいつた。

「じつとその機会を窺っていたところに、われわれが到着し、敵を攻撃してしまつた。そのせいで、みすみす撃沈可能なあとの二隻を逃がしてしまつた。そういつてね、ひどく怒つていたよ」

「艦長は——」

狩野の顔色がすこし蒼ざめた。

「艦長は、黙つてその屁理屈を聴いておられたのですか」

もうすこし伊二六七の到着が遅れていれば、疑いなく「春雷」は魚雷に横腹をえぐりかれ、敵潜の餌食になっていた。なにより檜垣が、そのことをいちばん知っている。

檜垣は髭を撫でまわしながら、

「昂奮しきっていたからね、あんなところでへたに反論すれば、却って火に油をそそぐことになるじゃないか。ああいうときは、じっと頭を下げて黙っているのだ。そのうち、むこうも疲れてくる」

「しかし……、詭弁というより、戯言でしょう、それは——」

狩野は憤然とした表情でいった。

「救援を感謝するならわかりますが、逆に怒りだすというのは……」

「遠藤中佐はね、よりによってわたしに救われたことが我慢ならなかったのだよ」

檜垣はそういつてから傍らの草を抜き、

「彼にしてみれば、わたしは憎むべき兄上の仇だからね」

「え……」

ちぎった草を指先で弄びながら、

「遠藤君の兄は、わたしと兵学校の同期なのだよ。遠藤康夫といって、わたしなどより遥かに優秀だった。柔道が得意でね、豪快な男だった」

と、檜垣はつぶやくようにいった。

「ですが……、仇というのは、穏やかではありませんが——」

「結果として、わたしが彼を殺してしまったようなものだから、遠藤君がそんなふう考えたとしても無理はないさ」

「殺したというのは……」

「砲撃訓練中の暴発事故だったのだ」

つきつめていえば、それは信管の確認を怠った指導教官の責任だった。

「砲塔のまわりに三人の兵がおり、ふたりが即死した。暴発の瞬間に彼がからだでわたしを庇ってくれたおかげで、わたしだけがただひとり、ほとんど無傷で助かった」

「不可抗力の事故であつたのなら、なにも仇だのなんだのと——」

「わたしが砲弾の確認を忘れたのだ……。もちろん、その後で指導教官による最終点検があつたのだが、わたしもその教官も、何度もくりかえした訓練だけに、作業に慣れきつてしまつていたのだろう」

と、檜垣は狩野を遮った。

「しかし、わたしが確認を忘れなければ、事故は起きなかった。教官は忙しい。われわれの班だけに神経を集中しているわけにはいかなかった」

檜垣は正直にその事実のみを申告し、その証言をもとに報告書が作成された。檜垣があえて曖昧にぼかしたために教官の責任は問われず、結局は偶発事故として処理された。しかし、処罰こそうけなかったが、それは檜垣の経歴にとつて拭いきれぬおおきな汚点になった。

卒業時の成績にもかかわらず、潜水学校組に檜垣がふりわけられたのも、そのあたりの事情が絡んでいたのかもしれない。

「遠藤君はなにかの折りに、その報告書を見つけて読んだのだろう。彼は、わたしの不注意が兄上を死に追いやつた原因だと信じている。それはたしかに……。否定しようのない事実だからね」

檜垣はちいさく丸まった草の葉を、指で弾きとばした。

「訓練時の不可避の事故は、いくつものミスが重なりあつて生ずるものです。誰かひとりにその責任を特定することはできません」

狩野は声を荒らげた。

「兄上の死は不幸な事実ですが、その責めを艦長ひとりに負わせるのは——」

「だがね……。遠藤君にしてみれば、兄上の事故に関して、どこかにはつきりとした憎しみの対象を求めなければ、我慢できなかつたのだらう。その気持ちも、理解できないこともない。わたしを恨むことで、兄上を喪つた哀しみが多少なりとも癒されるのなら、それはそれでいいではないか。わたしは、そう思つている」

「だからといって、今回の救出行動にまでそれを繋げるのは許せません」

「それも、いいさ」

と、檜垣は笑った。

「いずれは彼もわかってくる。はじめての護衛任務に失敗したうえに、自艦も攻撃をうけて動転してしまっていたのだ。そして、悪いことにわたしに危機を救われた。彼にとっても、不運が重なったのだ。素直に事実を認めるには、彼はまだ若すぎる」

天はしかし、遠藤に経験を積む自艦も攻撃あたえなかった。

彼はいったん本土にもどったが、予定されていた新駆逐艦への乗務指令は寸前になって取り消された。その艦の指揮は、急遽べつの人間に委ねられた。おそらくはミドウェイの敗戦をうけて指令部内での権力抗争が勃発し、強力な後援者も影響力を失ったのだろう。かわって遠藤には陸戦隊指揮の任務があたえられ、硫黄島に渡った。彼は二度と乗艦勤務につくことなく、そこで戦死した。

いつぼうクエゼリンでの修理を終えた駆逐艦「春雷」は第二艦隊に編入され、本隊との合流のためトラック島基地にむかったが、その途次敵潜水艦の攻撃をうけて沈没した。

今度は、誰も彼女をたすけてはくれなかった。

もちろん、そんな運命を狩野が予知できるはずもない。

狩野は怒りをこめた眼で檜垣を睨みつけ、

「とてもわたしは、艦長のように寛容な気持ちにはなれませんね」

「年齢をとるとね、他人の過ちを責めるより許すほうがずっと気分がいいということがわかってくるのだよ」

と、檜垣はおおきく背伸びして、

「それより、われわれものんびりところとしてはいられなくなった」

「任務ですか」

遠藤に対する感情は曇ったまま晴れそうにないが、それに拘っている余裕はなかった。

「ああ……」

檜垣はうなずいて、

「簡単な物資輸送だがな……」

「そういつて、なぜか口ごもった。」

「どこです、目的地は」

「ギルバート諸島の南端にある、グリワフーというちいさな島だ。周囲七キロたらずというから、岩礁とでもいったほうがいいかもしれん」

「知りませんね」

ギルバート諸島ならば、ここからほぼ真東に約五百キロたらず。二日で充分往復できる距離だ。

そこに、二百名程度の守備隊が配置されている。

「そこへ糧秣と物資を届ける」

檜垣は短くいった。

員数外の旧式潜水艦には、この程度の任務しかまわってこない。

おそらく聴いたこともないそのちっぽけな島も、戦略的にはたいして重要な拠点ではないのだろう。狩野は不快げに顔をしかめた。

そんな狩野の顔色を読んだように、

「たしかに、戦略上はとるにたらぬ場所だ。島の大半が急な傾斜地で、飛行場も設営できない。近隣の基地とも離れて、ひとつだけぽつんと東に突出したかたちになっている。どうせ勢いに乗って、守備隊を進駐させてしまったのだろう」

と、檜垣は説明した。

現在、そのあたりの島々はキリバス共和国（一九七九年独立。人口五万六千、首都はタワラ島のバイリキ）の領有下にある。

キリバスは赤道を挟んでおよそ五百万平方キロにわたる海域に散在する三十あまりの島嶼ならびに環礁からなりたっており——国土の面積合計は八百八十平方キロ——、その中心をなすがギルバート諸島である。ギルバート諸島は発見者であるイギリス人のギルバートに因んで命名されたが、それが転訛して現在の国名キリバスになった。

グリワフーはそのギルバート諸島の東南端に位置する小島である。

グリワフー島を俯瞰すると、ちょうど勾玉のようなかたちに見える。

島のほとんどが堅い岩塊と森林でなりたっており、西側と北側はきりたつ崖になっている。勾玉のくび

れた部分にあたる南東側の入り江の海岸にのみ、かろうじていくばくかの平らかな土地があった。守備隊はその土地にへばりつくようにして暮らしている。

ほとんど垂直に海に落ちるような崖になっている北、および西側には艦船の接岸は不可能だった。

守備隊への補給には島の南側から迂回して入り江にはいりこむしかないが、そのあたりの海域は暗礁が多く、大型船舶の接近は困難だ。したがって――、

「われわれが行くしかないということだ」

檜垣は狩野を見つめていった。

「おおかたの状況は、把握できます」

と、狩野は顎の先端を指で抓むようにして、

「それにしても、そんな場所にえらく手間をかけて守備隊を上陸させたものですね」

「それ以上は、作戦批判になりかねないね。それなりの理由があったということだろう」

いかにもつまらなそうに、檜垣はいった。

「ただ、補給については、ひとつ厄介な問題がある。このところグリワフーの周辺で、しばしば敵の哨戒機が発見されている」

「敵の狙いは、ギルバート諸島でしょうか」

狩野の表情が厳しくひきしまった。

「タワラ、マキンと北上してくるつもりなのかもしれません」

「その可能性も決して薄くはないだろうね。あるいは……、真の目的地を隠すための牽制行動かもしれないが――」

檜垣はうなずいた。

「いずれにせよ、いま先手は敵が握っている。こちらは、護る番だ」

「ですが……、かりに敵がギルバート諸島攻略を計画しているとしても、グリワフーが上陸目標にされることは、まずないと思われます」

地形的に、味方でさえ守備隊の上陸に難渋した場所である。戦略上の価値もきわめて乏しく、そんなところに敵がすくなくならぬ犠牲を覚悟して、強引に大規模な上陸作戦を展開するとは、とても考えられない。

しかも、グリワフーは山の頂上が、ぼかりと海上に浮きだしたようなものである。

島の大部分は険しい山岳地帯が占めており、空爆や艦砲による砲撃も効果はさほど期待できない。とすれば、敵はこの島を無視して通過する。

艦隊で海域を封鎖さえすれば、グリワフーの守備隊は近隣基地との連絡、補給を絶たれて餓死する。敵は、それを知っているはずだ。

檜垣は両腕を組んで、

「たしかにむごつても、そんな無駄な作戦はおこなわないだろうね」

戦略的にいえば、グリワフーは兵士ひとりの生命ともひきあわない。無血占領ができたとしても――守備隊がそれを許すはずはなかつたが――、銃弾の一発、ガソリンの一滴でも消費した分がそのまま損失になる。

そのうえ、島に残った占領部隊は、その後の作戦展開に使用できない。

要するに、このちっばけな島を力づくで奪うことは容易でも、それは重い足枷をみずから求めることにひとしかつた。

敵にとって、もっとも効果的で効果的な戦術は、この島の存在そのものを忘れてしまうことだった。

「敵の目的がギルバート諸島攻略にあるとしたら、守備隊は気の毒なことになるね」

と、檜垣はせつなげにつぶやいた。

日本側にしても、それはおなじことだった。

敵の本格攻勢が開始されれば、タワラやマキンの拠点はその防戦でいっぱい状態になる。ぼつんと遠く離れた守備隊の面倒をみる余力など、どこにもない。

このナウル基地にしても、とるにたらぬ微少な守備隊のために、敵艦隊が待ち構えている海域に貴重な艦船を賭けて補給物資を送るような愚行は避けるだろう。

日本側が最初の一撃で敵を撃破し、海の彼方へ押しもどすことができればまだしも――それが実現するには、なんらかの奇蹟が必要だった――、戦いが長期化すれば――または、負ければ――、グリワフー守備隊は敵からも味方からも見捨てられた棄兵になる。

檜垣はいった。

「上陸戦となれば、どうしても戦いは長びく。だから、この機会にできるかぎり多くの物資を届けておいてやりたい」

「行きましよう」

と、狩野もうなずいた。

「詰めこめるだけの物資を積んで——」

「わたしも、そうしたいと思っっている」

「それで、出発は——」

「明深夜にしたい」

と、檜垣はいった。

「夜中に通航すれば、多少の時間調整で到着も深夜にできる。敵の哨戒機が島のまわりを動きまわっているとすれば、駆逐艦隊も周辺にまで出てきているかもしれない。島の地形を見れば、補給には潜水艦が最適だということが一眼でわかる」

「もしかしたら、敵はそれを知ったうえで、グリフワフをこちらの潜水艦を誘いだすための罠にする気なのかもしれません」

守備隊に物資を確実に渡すためには、どうしても島の東側にある入り江深くにはいりこむ必要がある。入り江に突入し、できるかぎり浜辺に接近しなければならぬ。

ところがそこで、その入り江の口を封じられてしまえば、こちらは袋の鼠である。

入り江の水深は浅く岩礁が多いため、潜航して移動するのは難しい。出口を塞がれて立ち往生しているところを、航空機の攻撃をうけてはひとたまりもない。

「だから、行動は夜間にしたい。夜の闇が、こちらの味方になってくれる」

「どうも……、それしかなさそうですね」

狩野はなにかを考えるように、かたほうの掌を頬にあてて、

「量が嵩むとなると、物資のうけわたしにはどうしても三十分程度は必要です」

「それが、ぎりぎりというところだな。敵が近くにいますれば、それ以上は待つてくれないだろう。ただ……」

檜垣はそこで言葉を切ると、顔をしかめて視線をそらせた。

「もうひとつ、面倒な問題がある」

「なんです、それは——」

「犬だ」

檜垣は吐き捨てるように、

「物資を届け、かわりに犬を一匹ひきとってこなければならぬ」

「犬ですって」

狩野はほとんど反射的に、呻くようにいった。

3

そういつてから、狩野はすぐに戸惑った顔になって、

「それはいったい、どんな犬なのです」

「普通の軍用犬だよ。シェパードらしい」

その軍用犬は、以前この基地で飼われていた。軍用としては不向きなほどにひどく人懐こい性格で、基地の兵士たちからも可愛がられていたという。

とりわけ砲兵隊司令官の片岡少将のお気にいりで、彼はいつもその犬を傍らに侍らせていたそうだ。片岡は九州の出身で、ずんぐりむっくりしたからだつきをしている。犬を脚許に坐らせ、引き紐を持って、西郷さんを気取っていたようだ——ただし、彼は人間的には粗暴な男で、人使いも荒く、自分の意志を通すために暴力に頼ることを躊躇しなかった。舐めるように犬を溺愛するいっぽうで、兵士たちを怒鳴りちらし、些細なことで殴りつけた。そうするほかに、將軍としての威厳をたもつ方法を知らぬ男だった。だ

から、兵士たちの評判は最悪だった――。

四ヶ月ほど前に片岡はラバウル基地に転属し、それとおなじころに犬は守備隊とともにグリワフーに渡った。島には野生化した豚がおり、それが畑を荒らすので、対策として犬が必要だったのだ。

片岡將軍はラバウルに移ってからも早速犬を飼った。よほどの犬好きであるらしい。

兵士に噛みかかったりするような獰猛な犬だったが、片岡には不思議とよく懐いた。人間の心はまるで理解できなくても、犬の気分はよくわかるのかもしれない。

ところが、この犬がつい先日、なにか悪い物でも喰ったのか、急死した。

「すぐに代わりの犬を探させたが、おなじシェパードの軍用犬でも、どこかに違いがあるのだろうか、なかなか気に入る犬が見つからない。そこで將軍が、思い出したのが――」

「グリワフーの犬ということですか」

うんざりした表情で、狩野はいった。

「補給物資をわたし、その犬をうけとってこいというわけですね」

「そういうことだ」

やりきれぬように、檜垣も溜息をついた。

「話が逆なのだよ、つまりは……。あんな辺鄙な孤島で犬を見殺しにするのは可哀想だと、將軍がいいだした。それが、きっかけになった」

片岡は、直接命令を下したわけではない。

しかし、將軍の言葉はそれとおなじだった。彼の周囲にいる副官たちは、気難し屋の將軍の歓心を買うためにだけ努力している。副官は將軍の気持ちや付度して、その益体もない望みを具体化する文書を作成した。

さすがに、犬一匹のために潜水艦を動かすことは、彼らにもできなかった。

それで、守備隊への物資補給という、どこからも文句のつけようのない理由が捻りだされた。そして、もうひとつの目的が、さりげなくそこにつけくわえられた。

狩野はあからさまに顔をしかめ、

「犬ころ一匹の生命のほうが、二百人の人間に優先するわけですか」

「軍旗という一枚の布きれのために、ひとつの部隊が全滅したこともある」

と、檜垣はいった。

人間の生命は、汚れた布きれほどの価値もない。戦争にかかわるあらゆるもののなかで、いちばん安いのが人間の生命なのだろう。

二百余の人間より一匹の犬のほうが重いのも、当然なのかもしれない。

檜垣はつづけた。

「しかし、理由はともかく、グリワフーの守備隊が喉から手がでるほど糧秣や医療物資を欲しがっているのは事実だ。だからわたしは、ひきうけた。帰りに、面倒な荷物が増えてしまったが……」

「犬なんて縛りあげて、便所の隅にでも閉じこめておきましょう」

狩野はいまいまげにそういつてから、

「ああ……、荷物といえば、例の報道班員ですが――」

と、つけくわえた。

「報道班員……、諏訪君のことかね」

「はい――。彼が、もうすこしわれわれと行動をともしたいといいたしましてね」

「ほう」

と、檜垣は微笑をこぼして、

「珍しいことをいう子だな。窮屈な潜水艦暮らしなど、民間人は嫌うものだが」

「兵たちからも、好かれてはいませんがね……」

すこし寂しげな顔になって、狩野はいった。

「たしかに、妙な男です。しかし、けっこう潜水艦生活にむいていることはたしかでしょう。長時間潜航がつづく、訓練をうけていない民間人は、多少なりともからだや精神に変調をきたすものですが、彼にはそれがありませんでしたから。それに、中原ともうまくつきあっているようですし――」

「ラバウルのほうはいいのかね」

と、檜垣が訊いた。報道班員である諏訪の本来の目的地は、ラバウル基地だ。本来の目的地から遠く離

れてこんなところでうろろろしては、今後、彼の立場がまずいものになるのではないか。檜垣は、それを心配している。

「かまわんでしょう」

狩野はあっさりといった。

「もともと、報道班員というのも、日本から緊急避難するための口実だったのでしょう。軍のほうだって、彼がどこにいようと、たいして気にしてもいいはずですよ。ラバウルへの到着が多少遅れても、問題はないうでしよう」

「短い任務だ。ひとりぐらい乗員が増えたところで、どうということはないが——。彼は、戦闘の可能性があることを知っているのだろうか」

「それは、承知しています」

「それならいいがね。中原君にとつても、彼はいい話し相手になっているようだし……」

「入道さんたちにしても、格好の退屈しのぎになっているようです。これまでは、中原ひとりしか相手がいなかったわけですから。中原は仲間が増えて喜んでいきますよ」

「ずいぶんと脅されたり、からかわれたりしているらしいね」

と、檜垣は頬の髭を掻きながら、ちいさく声に出して笑った。

「井関君はそうとうに気難しい男だが、どうやらあの若者は気にいられたようだ」

「彼にしてみれば迷惑かもしれませんが……」

狩野も苦笑した。

「入道さんにせよ、中原にせよ、彼と話すことが、いい気分転換になっていることは事実です。馬淵参謀のような客は困りますが、彼ならだいじょうぶでしょう」

潜水艦はそれ自体が、ひとつの精密機械である。その機械のなかでは、乗員たちはすべて部品として寸分の狂いもない行動を要求された。たったひとつのちっぼけな要素がそこにくわっただけで、部品の動きが円滑を欠いてしまうこともあるのだ。

部品のそうしたごく微妙な誤作動も、精密機械である潜水艦にとっては致命傷になりかねない。

実際、馬淵が乗りこんだ当座、艦内の雰囲気は妙にぎくしゃくしたものになった。

井関は怒りっぽくなったり、狩野ですらときに感情の起伏を抑えかねた。

そうした感情の波が、操縦ミスも繋がることもある。

しかし、諏訪に関しては、その懸念はなさそうだった。

「今回の任務については、敵との遭遇戦が起こる確率は、かなり高い。それを覚悟したうえで、彼自身が希望するのであれば、同行を許可しよう」

と、檜垣はいった。

「だが……、諏訪君の話が出たついでといつてはなんだが、中原君もそろそろ国に帰してやったほうがいかもしれんな」

「中原を、ですか」

狩野は訝しげに檜垣を見やった。

「彼は、よくやってくれています」

檜垣はわかっているというように、二、三度軽くうなずいて、

「それは、わたしも認める。主計を任せてみたが、充分にやっている」

「でしたら、なぜ——」

「中原君は、井関大尉の強い要請で、特例として強引にこちらにひきぬいた。だが、彼は将来、きみとおなじように艦長になっていく優秀な人材だ。実践での体験もたしかに大切だが、彼にはもっとしかるべき機関で学ぶことがある」

「いや、わたしはずっとこのまま……」

「そうはいかんよ」

と、おしかぶせるように檜垣はいった。

「わたしのような老害に、いつまでもくっついていていいことはない。きみや中原君には、未来がある。積極的に新しい理論や技術を学ぶべきだ。この艦にいては、その機会がない」

「しかし、国に戻れといつても、中原はおそらく承知しないでしょう」

通常潜水艦の艦長はじっくりと時間をかけ、一定のコースを辿って養成される。

ふつう潜水艦勤務を希望する士官——艦長としての適性が認められれば——は、少尉の二年目になってはじめて潜水艦に乗務する。その際、いちおう砲術長や通信長の職務があたえられるが、それはあくまで艦内だけの名称にすぎず、実際は潜水艦での生活を体験させるための措置だった。そして、その勤務をつづけ、大尉に昇進した段階で水雷学校にはいり、高等過程を学ぶ。

その後も、乗艦勤務と潜水学校での教育をくりかえし、潜水艦の作戦、運航に必要なすべての素養と技術や知識とを身につけたのち、古参大尉か少佐になってようやく小型の呂号潜水艦の指揮を委ねられる。それが、一般的な艦長育成コースだった。

中原のように、兵学校を卒でいきなり潜水艦勤務につくようなケースは稀だった。これは、檜垣がいうように、井関の要望をいれ、中原の父親を通じて上層部に働きかけた結果である。

「基礎訓練というならもう充分だし、乗艦実務の体験を積ませるのなら、こんな老朽艦ではなく新式の艦に載せてやるべきだ」

と、檜垣はいつて、両膝を抱えこむように坐りなおした。

狩野は哀しげな表情で、

「学校に何年も通うより、艦長とこいっしょしたほうがずっと勉強になると、わたしは思っています」

そう、視線を落として、つぶやくようにいつた。

「そういつてくれるのは嬉しいが、わたしは伊一二六七同様、時代遅れのポンコツだよ」

檜垣は顎をかすかにもたげ、夜空を見あげた。

「きれいな空だな。戦争をしていることなんて、忘れてしまっただ」

狩野も空を仰いで、溜息をついた。腕をいつぱいにのばせば掴みとれるようなところに、星が瞬いてい

る。

「ほんとうに……、忘れてしまえばいいのですが」

「厭なものだね。戦争なんて——。国のために戦つていふというのに……、わたしはときどき、なにか途轍もなくひどいこと……、たとえば強姦とか、老人から金を奪い取るとか、そんなことをしているような気分なる。日清戦争や日露戦争に従軍したひとたちも、こんな気持ちになったのかね」

「わたしはそんなこと、考えたこともありませんが……」

「きつと……、国家とか民族とか、そんなものがあるから、人間は戦争をするのだろうね。そんなもの、ほんとうに人間にとって必要なのだろうか」

「艦長は、ひどく難しい、応えることのできない質問をなさっています」

「質問なんかじゃないさ」

檜垣はぼそりといつた。

「ほんのひとりごとだ。人間ひとり、一年間に二石たらずの米があれば充分餓えずに生きていける。家族があつても、それくらいなら畑や田を耕すこともできるだろう。文明なんていらぬ。自分の脚で、歩いていけるところだけ移動する。狭い地面にじがみつくようにそつやつて五十年ぐらい生きて、病気になるたら死ぬ。そんないとながみ、人間本来の暮らしであるような気がする」

「原始の時代にも、国家だの民族だのという意識はなくとも、人間は争いあつていたはずですよ。きょう一日を生きたための食料や、より丈夫で美しい女をめぐつて——」

「そつだ」

檜垣は笑つた。

「人間というやつは、どうしようもなく野蛮な生き物だ」

ふたりの笑い声が重なりあつて、虚しく夜に融けた。

そこから二キロほど離れたあたりを歩いてた諏訪と中原の耳には、むろんその声はとどかない。

そこは、基地のはずれだった。西側はなだらかな斜面の丘陵になっている。半キロほどのその丘を越えてしまえば、基地の敷地ではなくなる。

さすがに、こんな時間にあたりを歩いている兵はいない。巡回監視班にでも見つかつてしまつと、厄介なことにもなにかねなかつた。

「あなたは、変なひとなんですな」

あきれたような、驚いたような調子で、中原は諏訪にいつた。

「もうすこしわれわれといっしょにいたいと、狩野さんに頼んだんですつて——」

「ええ」

ならんで歩きながら、諏訪はうなずいた。

中原に誘われるままに、ここまでついてきた。どこに行くつもりなのか、中原はなにも語らない。なにか大切なもののように、野球のボールを両掌で包みこむようにして、彼は歩いている。

昼間遊んでいた、あの薄汚れたボールだ。

「潜水艦暮らしが辛くないんですか。食事だって、ひどいものでしょう」

「正直いってあまり愉しくはありませんが、乗組員たちのほうに興味があつて」

「われわれのことですか」

中原が柔らかに笑った。

「わたしなんかは平凡な男ですが、鮪入道あたりは人間観察には最適でしょうね」

「あの羊羹攻撃だけは閉口ですが——」

「そういうことです」

わざとらしく、中原は強くうなずいた。

「でも、ラバウルに行けば、あなたの待遇ならさうとう楽ができるのに。われわれといたんでは、苦勞ばかりですよ。それに、今度の任務では、敵との遭遇戦があるかもしれない」

「それは、狩野さんにもいわれましたが、危険はわかっているつもりです」

「艦長は搭載魚雷を減らして、グリフワフーにとどける物資を増やすようです。できるかぎり敵との接触を避け、逃げまわる気なんでしょう。それでも、敵の駆逐艦が出てくると、面倒なことになります」

アメリカ軍駆逐艦の主力は、一九四二年から四四年にかけて百七十五隻——うち戦没は十九隻——が就役したフレッチャー級と、四〇年から四三年までに六十四隻——十二隻が戦没——が戦線に投下されたリヴァモア級（総排水量一六三〇トン）である。このどちらも、最高速度はゆうに三十五ノットを突破している。彼女たちに追われては、海上では二〇ノットがせいじっぱいの伊一二六七はとも逃げ切れない。

中原はいった。

「対アメリカに関して、日本海軍の基本戦術は、敵艦隊がフィリピン沖から北上してくることを想定して計画されています。そこを、こちらが待ち受けて艦隊決戦にもちこむというものです。艦隊の総力決戦は一度きりでやりなおしはできませんから、絶対に勝たなければなりません。そのために、決戦の前に、潜水艦攻撃によつて敵の戦力を一艦でも多く削ぐ。そうやって、有利な体勢をつくつて戦いを迎える——。これが、基本です」

「邀撃漸減作戦というやつですね」

「よくご存じですね。しっかりと植草さんに教育されましたね」

中原は汚れたボールを掌でこするようにして、

「ところが、敵がこの作戦をすでに察知しているとしたら……。ミドウェイでの結果をみても、敵はこちらの暗号をかかなりの程度まで解読しているのではないかと思われるふしもあります。そうだとすれば、むしろはまず、潜水艦を標的にしてくるでしょう」

「つまり……」

そこで脚をとめた諏訪は、中原にむきなおつて、

「グリフワフーの状況を敵も把握しているとしたら——」

島形からして、グリフワフーへの物資補給には潜水艦を使うしかない。山岳が多く気流もきわめて不安定なので、航空機では確実な物資投下は困難だった。

敵がそれに気づいているとしたら、彼らは当然グリフワフー周辺に罠を張って待ち構えているだろう。

中原は表情をひきしめていった。

「すくなくとも駆逐艦の二二三隻は、すぐ出動できる態勢をとっていると考えておいたほうがいいでしょう。囲まれてしまったら、どうしようもありません。もちろん、艦長のほうもそのへんはとくに承知でしょうが……」

「このまえ「春雷」を救ったようにはいかないというわけですか」

「敵の出方によつては、簡単にはいかなでしょうね。わたしたちは最初から艦長を信頼して運命を委ねていますが、あなたはちがう」

中原はいった言葉を切つて、唇を舐め、

「あなた自身の選択でわれわれとの同行を決断したのであれば、それは覚悟しておいてください。戦闘がはじまってしまえば、誰もあなたのことなどかまっていられなくなる」

「わかっています」

諏訪はいった。

「あなたがたの仕事は、戦うことです。その邪魔になるようなことはしません」
たしかに、諏訪は中原たちとは立場がちがう。彼はただの傍観者にすぎない。眼の前に銃をつきだされたとしても、撃ちかたさえ知らない。

闘いがはじまれば、彼はなんの役にもたたないのだ。

中原の言葉は、それをあらためて諏訪に確認させた。

中原はしかし、すぐに表情をまたやわらげて、

「なんだか、脅してしまっただけですね。ちょっと、鮎入道に影響されたかな」

そういうと、

「まあ、そんなに心配することはありませんよ。艦が動きだしてしまえば、あとはすべて艦長に任せて、お互いいつもどおり仲良くのんびりいきましょう。案外、なんにも起こらないかもしれません。戦争なんて、けっこうそういうものなんです」

すこし脚をはやめて歩きだした。

しばらくすると、いかにも急拵えの板張りの粗末な小屋の前に着いた。

扉の前でたちどまった中原は、

「無理矢理につきあってもらいましたが、ここが目的地です」

と、諏訪をふりかえった。

窓から明かりがこぼれている。宿舎に使われているのだろう。ひとの声が、扉の隙間から漏れてくる。

中原はゆつくりと扉をひき開けた。

二十畳ほどの広さがある、殺風景な部屋だった。部屋の隅に二段ベッドがいくつか置かれ、中央部におきな机があった。

机のまわりに、五人の兵士がいた。みな若い士官たちだ。上着を脱いでシャツ姿だが、どうやら全員パイロットであるらしい。

机のうえに、一升瓶が何本もならんでいた。酒盛りをしていたのだろう。しかし、男たちは騒ぐでもなく、ただ黙りこくって茶碗を口許に運んでいる。異様な雰囲気だった。瓶の一本が倒れ、そこから流れだした酒が、剥きだしの地面に滴り落ちていた。

アルコールの尖った臭いが、諏訪の鼻を刺す。

「なんだ、おまえたちは」

ひとりの兵士が茶碗を置くと、こちらを睨みつけた。そうとうに飲んでいたので、錆びついて、絡んでくるような口調だった。

「ここは、おまえたちがくるところじゃな」

いまにも、殴りかかってくるようないいかただった。諏訪は思わず数歩後じさった。

この男たちは、なにかにひどく怒っている。その感情を、酒で抑えこんでいるのだ。

危険だった。いま彼らは、沸々と煮えたぎったその感情を爆発させるきっかけを求めている。いきなり飛びこんできた得体の知れぬふたりの男は、充分にその引き金になるだろう。

だが、中原はなにも応えず、兵士たちのなかのひとりの男をじっと凝視していた。

なぜかその兵士は、中原の視線をそらすように俯いている。

昼間、ふたりのキャッチ・ボール遊びを、遠くで眺めていた兵士だった。

「草部だろ」

と、中原は搾りだすような声でいった。

男はゆつくりとからだを起こし、茶碗を机に投げだした。

「なんだ、知りあいか」

兵士のひとりが訊いた。そして、ふたりに興味をなくしてしまったように、乱暴なしぐさで一升瓶を引き寄せ、酒を茶碗に注いだ。茶碗から酒が溢れた。

「ああ……」

草部と呼ばれた兵士は、懶げにたちあがって、

「すこし、出てくる」

そういって、中原に顎をしゃくった。

草部は中原の背中を押すようにして、小屋を出た。諏訪は、慌ててそれにつづいた。ふたりは黙りこくったまま、あたりを歩きつづけた。話しはじめるのを、どちらも躊躇しているようだった。やがて、意を決したように、

「四年……、五年ぶりになるかな。昔のことなんて、すっかり忘れていたよ」

と、中原が低い声でいった。

「そんなになるかな」

パンツのポケットに両掌をつっこんだまま、草部はいった。

「おれが、明治をやめたときだったな」

「そうだ。あの晩は、坂城や武良たちも呼んで呑みあかした」

「愉しかったな」

「愉快だった。おまえは酔っぱらって、坂城とワルツを踊りだした」

「想い出したよ、なにかでおまえに叱られたような気がする」

「もう一年で卒業だったのだろう。あそこで中退するなんて、勿体ないじゃないか」

と、中原はいった。

草部は無精髭の陰ができた頬に、苦い笑いを刻み、

「どうせ、野球ではいった大学だ。肩を壊して野球ができなくなれば、大学に残っている意味はないさ。勉強なんて、おれにはむいていない。おまえはよく知っているだろう」

「やっぱり、パイロットになったのか」

「おまえは、親父さんの期待どおり、潜水艦乗りか」

「抵抗してみたくなくなったときもあったが、結局、おれにはほかの人生は選べなかった」

中原はどうしようもなかったというように、ちいさく頸を振った。

草部はいった。

「おまえこそ、野球をつづければよかったんだ。才能は、おれなんかよりずっとあった」

「冗談だろう。肩さえ壊さなければ、おまえは神宮のヒーローになっていた」

「とても、無理だったよ。必死でやったんだがな、おれたちの時代には絶対のエースがいた。なんとか追いつこうとしたんだが、到底かなわなかった」

「勢いこんで、とばしすぎたんだ。子供のころから、おまえはそういうところがあった」

「先のことまで計算してやっていけるような、甘い世界じゃなかった。そういうことさ」

草部は吐き捨てるようにいった。

「クエゼリンから潜水艦が着いたことは聴いていた。なんとなく、おまえが乗っているような気がした。昼間見たときは、嬉しかったよ。昔とフォームも変わっていない」

そこで中原はうしろをふりかえると、諏訪を手招きした。

「おかしなことで、友人になったんだ。なかなか、いい男だよ」

と、諏訪のことを紹介した。諏訪は草部に軽く会釈した。

草部はさして関心もなさそうだったが、報道班員と聴いたとき、かすかに表情が曇った。

「草部少尉です。ご覧のとおり、零戦に載っています」

そっぽをむいたままそういうと、草部はそこでたちどまって、足許の草をブーツの先で掘りかえた。

「おまえがいうのだから、ほんとうにいい男なんだろうな。おまえの友達は、愉快でいいやつばかりだった。そういう連中が、いつもおまえのまわりにいた」

「なかでも、おまえがいちばんの親友だったと、おれは思っている」

と、中原はいった。それからひとつ溜息をついて、

「知っていたのなら、尋ねてきてくれればよかったのに——。おれたちは明日、物資補給のためにグリフフーにむかう。物資の積み込みがはじまってしまつと、時間がとれない。だから遅くて悪かったが、こんな夜中に……」

「かまわんさ。どうせ、酒浸りになるよりやることもない」

肩をすくめるようにして、草部はいった。

「だがな……、おれたちは、逢わないほうがよかったのかもしれない。おれたちは、この基地の余計者だ」
「なにをいっているんだ。おまえは航空隊の——」

草部は中原の言葉を遮るように、諏訪をふりむいて、

「ミドウェイのこと聴きましたか」

いきなり、そう訊いた。

「ええ」

諏訪はとまどった顔でうなずいた。

「雲のうえのひとたちはいろいろというでしょうが、完全にやられました。惨敗です」

なんの感情も窺えぬ口調で、草部はいった。

「わたしたちは、沈んだ「蒼龍」に載っていたんですよ」

母艦は米機の攻撃によって沈没したが、彼らはかろうじて生き残った。

草部はいった。

「作戦に参加した空母は四隻とも沈められてしまいました。艦載機がすべてやられてしまったわけではない。われわれのように、運悪く生き延びてしまった者もいるのですよ」

「運悪く……」

と、中原が険しい表情でつぶやいた。

「ああ、不幸なことにな……。死ぬべきだったのだ」

舌うちをくれて、草部は足許の草を蹴りあげた。

「軍はわれわれの帰国を許さず、数名ずついくつかの基地にばらまいた。おれたちも、その一部なんだよ。おれたちはこの眼で、ミドウェイの敗戦を見ている。母艦が炎に包まれ、黒い煙を噴きあげて沈んでいくのを見てるんだ。国にもどって、その現実を誰かに話されては困ることなんだろう。おれたちは、ここで餓い殺しよ」

「ばかな……」

呻くように、中原はいった。

「これが現実なんだ。諏訪さんといったな——、あなたも報道班員ならわかるだろう。軍がミドウェイの敗戦を、そのまま国民につたえるはずはない。きっと、こちらの戦果だけをとりあげて派手に発表するだろう。惨めな敗北が、華々しい勝利のようにして国民につたえられるのだ。これが、この国のやりかただ。ジャーナリズムが軍の意向のままに操られ、事実を歪曲して国民につたえる。報道班員として、なにか反論がありますか」

諏訪は応えられなかった。草部の指摘は、疑いようもない真実だった。

諏訪がつとめていたような地方のちいさな新聞社でさえ、軍の強烈な干渉から無縁ではいられなかった。軍の意図は異なる報道は、それがどんなかたちであれ無条件に排斥された。その圧力はあまりにも強大で、逆らうすべもなかった。軍の束縛にがんじがらめに絡めとられたジャーナリズムは、もはや抵抗する意欲すら喪い、その御用機関になりさがっている。

いまや軍部による情報操作は、完璧いつてよかった。

ミドウェイの敗戦が国民にどのように発表されるか、諏訪には予測できた。

「新聞社のひとつやふたつ潰すことは、軍にとつては蠅を叩きおとすよりも簡単だ。あなたたちジャーナリストだって、飯を食って生きていかなければならないのだから、責めるつもりはありませんが……。しかし、そんな状況に、事実をはつきりと知っているわれわれの存在は邪魔なのです。要するに、軍はおれたちの始末に困惑しているわけだ」

「だからといって、しかし……」

中原は喉の奥でもつれたような声でいった。

「おまえたちは全力で闘ったのではないのか。その結果、負けたとしても……」

「命令なんだよ。いったん命令が下った以上、なにをいっても無駄なことさ」

己を憐れむように、草部は笑った。

「おれたちはこの基地のなかで、まわりから隔絶した立場に置かれている。基地の兵士は、誰もおれたちと口をきこうともしない。彼らは知っているのだ。おれたちが、生きながら葬られてしまった亡霊であることさ」

「それで……、どうなるんだ、これから」

中原が訊いた。

「おれにも、そんなことはわからない。いずれ、おれたちには新たな命令がたえられるだろう。最前線に送られ、そこで闘うことになる。そこで生き残れば、もっと闘いの烈しい戦場へ……。そのくりかえしが、

おそらく死ぬまでつづくだろう」

日本がこの戦争に勝利するか、あるいは真実を見てしまった彼らが、ほんものの英霊になって口を緘ぎしてしまふまで、その闘いはつづくだろう。

草部はあきらめきったようにいった。

「軍は、おれたちが死ぬことを望んでいる。おれたちは、もう二度と故郷にもどることもできない。そのときが訪れるまで、南方の戦線を転々とするんだ」

それが、あの部屋のなかに籠もっていたとす黒い彼らの怒りの正体だった。なにひとつ、彼らに落ち度はない。あたりまえのことだが、ミドウェイでの敗北は兵士個人の責任ではなかった。それなのに、いま彼らに期待されているのは、死だけだった。

軍は、全力を尽くして闘った優秀なヴェテラン・パイロットを厄介物扱いし、他人の眼から隠し、死地に追いやるうとしていた。それが、この国のやりかただった。

その命令を待つあいだ、酒に酔って思考を痺れさせてしまふよりほかに、彼らにながでできるだろう。「遭えて嬉しかったが、おれのことはもう忘れてくれ。そのほうがいい。いつまでも幽霊のことを憶えていたって、しかたあるまい」

ひどく平坦な、そして冷たい口調で草部はいった。

それからおもむろに諏訪にむきなおって、

「諏訪さん、あなたもそうだ。おれたちのことなんて、とっとと忘れてしまったほうがいい。つまらないことを考えると、あなた自身がとりかえしのつかぬ損をすることになる。あなたもこうして、真実の一端を見てしまったのだ。そのことは黙って、誰にも喋らないほうがいい。先輩からの忠告といふところだな」と、最後の部分は冗談めかしていった。

「草部——」

すがりつくような声で、中原はいった。

草部は穏やかな微笑を浮かべて、しばしのあいだ中原の顔を見つめた。

そして、いった。

「おれたちは親友だよ……。ほんとうのことをいうと、お袋のつきにおまえに逢っておきたかったんだ。これで、おれは満足だ。グリワフーといえは、最前線だ。近辺に敵も出沒しているらしい。気をつけるよ」それだけというと、深呼吸をするように背を伸ばし、踵を返した。

「草部」

宿舎にむかって歩きはじめた草部を、今度は叫ぶような声で中原が呼び止めた。

ふりかえった草部に、中原は両腕をおおきくふりかぶって、ボールを投げつけた。

それは、まっすぐに夜を貫き、胸の前で構えた草部の掌のなかで鳴った。

「ど真ん中のストライクだな」

表情も変えずに、草部がいった。

「あいかわらず、いい球だ。日本が勝ったら、もう一度どこかで野球をやろうな」

草部の姿が宿舎のなかに消えてしまふまで、中原はそこを動かなかった。

肩が、ちいさく震えていた。声を漏らすまいと、懸命に唇を噛みしめ、拳をしっかりと握ったまま、中原は啜り泣いている。

やりばのない憤りを堪えるために、諏訪は夜空を見あげた。

珍しいことに、狩野少佐が直接物資積み込みの指揮を執った。

もちろん檜垣の意を受けているのだろう、狩野は担当将官を遠慮なしに怒鳴りつけて、予定されていた武器弾薬を、急遽保存のきく糧秣や医薬品にとりかえさせた。

すこしでも多くの食料や生活必需品を、守備隊にとどけてやろうということだった。

生きていくためには、銃や砲弾はなんの役にも立ってくれない。

当然、担当将官は指令書をふりかざして抵抗したが、狩野は強引にそれを抑えこんだ。狂気に駆られた

ように狩野は将校の胸倉を掴みあげ、力づくで脅しつけた。

彼らを抑えこみ、混乱する現場をまとめるには、それしかやりかたのないことを、狩野は知っていた。それが必要であれば、彼はどれほど凶暴な人間でも、易々と演じることができた。

逆らったら、叩き殺されてしまうような勢いだっただ。

「あの顔ですからね、効果抜群ですよ。あれで睨みつけられたら、誰だって震えあがってしまいます。狩野さんは狡いから、ちゃんとそれを計算している」

と、遠くからそれを眺めながら、中原はにやにやと笑った。

「こんなときです、まともに手順を踏んでいたら、時間がいくらあっても足りません」

「あの士官に、同情してしまいますね。蒼さめて、まるでべそをかいているようだ」

関心するような、あきれたような顔で、諏訪はいった。

グリワフーにとどける物資の内容は、司令部によってあらかじめ定められ、書類化されている。それを、積み込みの寸前になって、大幅に変更しようというのだ。

若い担当士官は、あとでその処理と司令部への説明に苦慮することになるだろう。

「なに、食料なんて、この基地にはいくらでも剩っていますよ」

こともなげに、中原はいった。

「襟の星の数でいえば、あの士官は狩野さんの命令には従わざるを得ません。司令部だって、建前上彼を責めることはできないでしょう。だいいち、物資を載せた潜水艦が出航してしまえば、文句をいったって聴こえやしません。難しくいえば、既成事実の追認ということになるんです。つまりは、声がかくて、要領のいいほうが勝つ。軍隊という組織は、こういうものなんですよ」

「あなたもずいぶん、狩野さんから学びとっているようですね」

諏訪が皮肉めかしてそういうと、中原はわざとらしく誇らしげに胸を張って、

「生徒としては、かなりできのいいほうでしょうね」

昨夜のことなど、もうすっかり忘れてしまったかのように、頬を綻ばせた。

諏訪も、そのことには触れようとしない。

彼らの力ではどうすることもできない、あのじめついた話をむしかえしても、胸のあたりが重く、息苦しくなるだけのことだ。狩野の怒鳴り声と物資を運ぶ兵士たちのわめきとが交錯するこんな朝には、湿っぽい感傷は似合わない。

ただ、口にこそ出さないが、ふたりは知っていた。

彼らが物資補給を終えてナウルにもどってきたときには、草部たちがどこか遠くの基地へ転属させられてしまっているかもしれない——という、そのことを。

急な内容変更のために、物資の搬入にはけっこう時間がかかった。

伊一二六七の出航は、予定を数時間ずれて深夜になった。

艦が港を離れるとき、中原は甲板に立ってナウルの丘を眺めた。

闇があたりを覆い、なにも見えるはずはなかった。しかし、中原はそのまま動こうとしなかった。風が、巻いた。髪が乱れる。中原は、いまもたぶん草部たちが絶望の味のする酒で意識を爛れさせているだろう、その宿舎のあるあたりにじっと視線をむけていた。

訣れの言葉を、この風が、草部の耳まで運んでくれるかもしれないなかった。

グリワフーへは、まず針路をほぼ真東にとり、ギルバート諸島が視認できるあたりからおおきく南に迂回することになる。環礁の多い直線航路をとるよりも、そのほうが効率的だった。伊一二六七は洋上を平均一八ノットの速度で、東に進んだ。

目的地が近くなれば、敵機に発見される危険を避けるために、潜航しなければならぬ。より安全な夜間に、グリワフーの入り江に到達するためには、ここでできるかぎり距離を稼いでおかなければならぬかった。

どれほど走ったところだろうか、井関大尉が顔を黒い油で汚して、居室にもどってきた。

「どうしたのかね」

と、不審げに植草大尉が訊いた。

「あの駆逐艦にこすってから、換気ポンプのパイプがどうもおかしいんでね。いまのうちになんとかしておこうと思って」

井関は疲れきった表情でそういうと、ベッドに腰を降ろした。

排気パイプの故障は、「春雷」との接触事故によって起こったが、クエゼリン基地でいちおうの応急修理を施されているはずだった。

井関は不機嫌な声でいった。「あれじゃだめだよ。若い整備兵たちは、この老破艦の扱いかたを知らない。やっぱり、おれが面倒を見てやらないとね」

潜航時、潜水艦は大型の充電式硫酸電池によって推進力を得る。

そのため潜水艦は急速潜航に備えて、浮上時にはつねに電池の充電をおこなっていた。

電池を充電すると、電池そのものの温度が急激に上昇する。このとき、水素ガスとともに多量の硫酸蒸気が発生する。この硫酸蒸気は致死性の、きわめて危険なものだった。

したがって電池室はしっかりと密閉され、出入りする乗員には防毒マスクの着用が義務づけられていた——電池室内の壁面には高濃度の硫酸蒸気が附着しており、うっかりふれると強烈な火傷をひきおこすほどだったという——。この厄介な硫酸蒸気は換気機関によって艦外に排出されるが、それでも微量が居住区にこぼれだし、潜航時の環境を著しく損なった。

当然、排気パイプに不具合が生ずれば、蒸気の排出がうまくいかず、艦内に硫黄ガスが溢れだすことになる。

それを避けるために、井関は油まみれになって電池室で格闘していたのだろう。

植草がいった。

「これだけの旧式艦だからな、いろんなところがたがが出てくる」

「そついったものでもないさ」

井関は不服そうにいった。

「年増は年増なりに可愛がつてやれば、しっかりと働いてくれるものだ。若い女にはない味もある。要は、扱いかたひとつだよ」

グリワフーからの緊急打電を通信士がうけとったのは、ちょうどそんなときだった。

それは、基地近海上空に敵哨戒機の機影が認められたというものだった。

空は、そろそろ暮れかけている。伊一二六七は目的地におむけ、艦首を北に傾けたところだった。あとは潜航して時間を調節し、真夜中に入り江に突入する。

通常の牽制行動であれば、極度に視界が狭まる夜間の哨戒活動はおこなわれない。敵が、グリワフーへの潜水艦補給を察知した懸念があった。

電文は基地司令官である宮迫大佐の名でうたれており、補給を断念して、伊一二六七のナウル基地への帰還を要請していた。

檜垣は電文の内容をつたえるために、司令室に士官を集合させた。

ミドウェイのときとおなじように、諏訪は中原たちとともにそれに参加した。ミドウェイのときよりも、さらに檜垣や狩野の顔が緊張しているようだった。

檜垣に促されて電文を読みあげた狩野は、

「哨戒機の目的がわれわれだとすれば、対潜攻撃の駆逐艦が近くまで出てきていることも充分に考えられ
る」

と、士官たちをぐるりと見まわした。

むろん伊一二六七にとつて、敵駆逐艦との遭遇戦ははじめてのことである。

「グリワフーは、現状ではある程度物資に余裕もあり、無理に補給を敢行するよりもわれわれにもどつてくれとってきている」

と、檜垣はいった。

「しかし、いまあきらめてしまつては、つぎにいつ補給ができるか——」

檜垣はそれにつづく言葉を呑みこんだ。

グリワフーに拠る二百の兵士は、すでに司令部から見捨てられているといっている。

現在、司令部の思考は、敵の反撃に備えて防衛体制を強化拡充することに収斂している。戦略的価値のないにひとしいグリワフーの存在は、彼らの視野にない。

たしかに、二百とまとまれば戦力としても貴重なものだが、それを拠点基地の増援にあてるには、困難な輸送作業が必要になる。艦船も時間も、それに割くべき余裕はどこにもなかった。もともと、大型船舶の接岸できぬグリワフーのような小島まで占領し、守備隊を置いたことがまちがっているのだ。だが、い

まとなって繰り言をいっても、なにも意味はない。

厄介な足枷に拘るよりも、むしろはじめからその要素をなかったものと考える——。それが、司令部の結論だった。

誰からも黙殺されていたその島への補給が突然決定したのは、ラバウルにいるひとりの將軍の気まぐれによるものだった。慈しみ深い彼の動物愛護の精神と、副官たちの追従が重なって、伊一二六七は物資を満載してナウルを出港した。最前線でついそこまできている
飢餓への不安に耐えながら孤立した二百の兵士にあたえる食料は、あくまでの一匹の犬を受け取るそのつけたしにすぎなかった。檜垣は、それを知っている。

この機会を逃せば、二度とグリワフーへの補給はおこなわれない。

「行きましよう」

と、植草があっさりいった。

「犬つころと引き替えだろうとなんだらうと、肝腎なのは守備隊に食い物をとどけてやることでしょう。ここまで来てひきかえすのは、ちよつと業腹ですよ」

「そうですよ。せっかく狩野さんが担当士官を騙したり脅したりでまきあげた物資です」

井関の背後から、中原が顔をつきだしていった。

「このこ基地に持って帰ったんじゃ、狩野さんの名演技が報われない」

「子供は黙っている」

狩野は顔をしかめて、中原を叱りつけた。

檜垣が苦笑した。どこかで、今朝の港のありさまを見ていたのかもしれない。

「たしかに、狩野君の大活躍で確保できた物資だ。わたしも、守備隊にとどけてやりたい」

「だったら、迷うことはありませんよ」

しめくくるように、井関がいった。

「駆逐艦といつても、百も二百もぞろぞろでくるわけじゃない。せいぜい一、二艦でしょう。海は広いし、夜は暗い。われわれのほうが有利ですよ」

それが嘘であることは、諏訪にもわかっていた。

グリワフー島の湾口は、ひどく狭い。駆逐艦が二隻いれば、その湾口を封鎖することができるはずだ。入り江に突入したのちに湾口を閉められたら、文字どおり伊一二六七は袋の鼠になる。諏訪にかぎらず、そこにいあわせた誰もが、それを知っていた。

井関はそうやって、みずからを鼓舞している。

杜撰ないいかたになるのは、彼の性格によるものだ。

「諸君の反対がなければ、わたしもグリワフーに急ぎたい」

と、檜垣はうなずいて、

「ただし、物資の搬出作業に時間はかけられない。物資を渡したら、われわれは即座に入り江を離脱する。三十分かかる予定のものなら、それを五分でも三分でも縮めたい」

狭く、岩礁にかこまれて動きのとれない入り江のなかで立ち往生してしまったのでは、航空機から狙い撃ちされる。その状況に陥ることだけは、避けなければならなかった。そのためには可能なかぎり、物資の受け渡しにかかる時間を短縮しなければならない。敵駆逐艦によって湾口が封鎖される前に入り江から脱出する——。それこそが、伊一二六七が敵の包囲網をすりぬけて生き延びる、唯一の途だった。

「いつまでもありませんが……、それには守備隊側との連絡が必要になりますな」

いささか困ったような表情で、植草がいった。

物資の受渡には、一刻の遅滞も許されない。それには当然、渡す側と受ける側との、綿密な連携が欠かせない。

「こちらの正確な到着時間、むこうの準備態勢等、細かな点をしっかりとちあわせておかなければなりません。むこうも保有船艇を総動員してくるでしょうが、それだけに連絡に齟齬があつて円滑な行動がとれないと、余計な時間をくうことになります」

それを聴いて狩野は眉を顰めたが、植草にむかつて、

「こちらから電信をつつとなると、敵に位置を感知される危険があるな」

「問題はそこです」

植草はいった。

「もちろん、文面はぎりぎりまで短くして、一度きりの打電になりますが——、それでも、敵が暗号を解読しているとすると、われわれの到着時刻を教えることになりませう」

「賭だな」

狩野はかすれた声でいった。

檜垣は眼を閉じてなにかを考え込んでいたが、

「敵が聴いていても、かまわん。その旨、至急打電してください」と、静かにいった。

「荷物さえ無事に渡すことができれば、それでいいのです。ここでとやかく心配してみても、あとはなるようにしかありません。とにかく、物資を守備隊にとどけることが先決です」

それで、決まった。檜垣のいうとおり、あとは闘うも逃げるも、敵の出方次第だ。

狩野は檜垣にむきなおり満足そうに微笑むと、

「では、文面の考案をお願いする。内容についてはすべてあなたにお任せしますから、できしだい打ってください」

と、植草に命じた。

そして狩野は植草が足早に出ていくのを見送ると、こんどは諏訪と中原を指さして、

「物資搬出の手順は、中原、おまえが責任をもって決める。積み出しで混乱するようだったら、海に叩きこむぞ。諏訪君にも手伝ってもらおう。荷物はペンよりもすこし重い、きみの体力ならだいじょうぶだろう」

そう、がらりと口調を変えていった。

それから十分とたたぬうちに、グリワフー基地にむけて伊一二六七から電文が発信された。

グリワフー守備隊を率いる宮迫祐治大佐は、小柄でずんぐりと肥った男だった。

丸い縁の眼鏡を、ちいさく低い鼻のうえにちよこんと載せている。短く刈り込んだ髪には、白いものがめだつ。すでに五十を越えているが、本来ならこんな辺境の守備隊長をつとめるような人物ではなかった。

彼は、この時代の陸軍士官にありがちな誇大妄想を持ち合わせてはおらず、きわめて温厚な常識人だった。

数年前まで彼は、市ヶ谷の有能なスタッフだった。

将軍を望むような器ではなく、またその野望も持つてはいなかったが、実直な能吏タイプであたえられた仕事を過不足なくやり遂げる男だった。華々しい成果をあげることがなかったが、失敗もない。組織を維持する役人としては、貴重な存在だった。

その彼の人生が、二年前の五月にソ満国境において勃発したノモンハン事変の事後処理にかかわったことで、おおきく変わった。

宮迫の仕事は、ノモンハンでの敗因分析だった。

ノモンハン事件とは満州と外蒙古の国境紛争に絡み、一九三九年五月からおよそ五ヶ月にわたって両国国境のノモンハンを舞台につづいた日本とソ連軍およびモンゴル人民共和国軍とのあいだの大規模な軍事衝突をいう。あきらかにそのありようは紛れもない戦争だったが、日本側ではそれは事件あるいは事変と称している。その背景については詳しくは触れないが、共産主義国ソヴェトに対する日本の潜在的恐怖感が根底にあったことはまちがいない。それが限界を超えて膨れあがり、遂に暴発したといってもいい。

日本はこの機会に、ソヴェトを徹底的に叩き伏せ、北方の脅威をとりのぞこうとした。

かつて日本は、日露戦争において強国ロシアをうち破った。その記憶が日本をこの無謀ともいえる戦いに踏み切らせた。

七月一日、日本軍は戦車八十台、航空機百八十機をふくむ総兵力五万六千を投入して、ソ連軍に対する総攻撃を開始した。

戦いは、それから二ヶ月つづいた。

いや、戦いというより、それは一方的な虐殺にはかならなかった。

日露戦争の時代は遠い昔の追憶にすぎず、いまやソヴェト軍の装備は完全に近代化を遂げていた。彼らは、強力な装甲と砲をもった新型戦車を数百両動員し、日本軍を蹴散らした。

八月二十九日を期して、日本は外蒙古の主張する国境線から撤退した。

すでにその段階で、総兵力の三分の一を喪っていた。その以上の戦いをつづけることは、投下兵力の全

滅を意味していた。

敗北というも愚かな、完全なる壊滅だった。

それが、兵器の性能と数量とが優劣を左右する近代戦の怖ろしさだった。精神力では、戦車の分厚い装甲を射抜くことはできない。極端ないいかたをすれば、武器がより優秀で強力でさえあれば、たとえ欠伸をしながら撃った砲弾でも、こちらの戦車の装甲を易々と貫くことができた。ノモンハンの戦場では、それが実際に起こった。

宮迫はその敗因を正確に分析した。さして難しい作業ではなかった。闘いの主力となった戦車、重火器はいうにおよばず、兵士のもつ小銃に至るまで彼我の装備の性能差はあきらかだった。敗北の要因は、そこにあった。

だが、彼が作成した報告書は、上層部によつて廃棄された。

彼らは、火を見るよりあきらかなその事実を、認めようとしなかった。彼らは真実を正面からみつめることを拒否していた。もしその単純な事実を認めるのなら、物理的に日本はこれから先大国との戦争をおこない得ない。それは、あつてはならないことだった——現実には彼らはそれから二年も待たず、石器時代の兵器のままアメリカとの戦争をはじめた。彼らは失敗から学ぶことをしなかった——。報告書はさまざまな圧力によつてねじ曲げられ、改竄された結果、なんの価値もないものになった。

責任者である宮迫は、辺境の地へ左遷された。

彼にしてみれば、なにがなんだからなかっただろう。彼はいつものように、あたえられた任務を全力でこなしただけのことだった。それにもかかわらず、できあがった報告書は便所の落書きよりも無意味なものになり、追われるように祖国をさらなければならなかった。

昭和の一時期日本が持った恥知らずの嘘と欺瞞に満ちた歴史のなかで、真実を見てしまった人間の悲劇が、そこにもあった。

宮迫は伊一二六七からとどけられた電文を、もう一度読みかえした。

「海軍さんは、やはり来てくれるそうさ」

と、副官の永居中尉にいった。

「たすかります」

永居はほっとしたような表情になった。

敵の動きが気になって伊一二六七にはああいう電文を送ったものの、実際のところ守備隊の糧秣はそろそろそこにもあった尽きかけている。

この島は土地も痩せ、岩塊だらけで耕作には適していない。二百の兵士を養うにたる食料は、とても自給できなかつた。ないものづくしのなかで、なんとか知恵と工夫でやりくりしてきたが、その努力も限界に達していた。

糧秣が不足すれば、兵士の士気も衰えざるを得ない。

もともとこの島の守備隊は、さほどに優秀でない兵士ばかりで編成されていた。はっきりいってしまえば、どこの部隊でもあましたはみだし者たちが、ここに集められている。性格的に欠陥のある人間も多く、吹き溜まりのような部隊だった。彼らは、どこからもなにも期待されていない。また彼ら自身も、そのことを知っており、戦意はきわめて低かつた。それがいちおうの統制をたもっているのは、上官である宮迫や永居の人柄によるものだろう。

永居はいった。

「腹が減つてくると本性がでてくるのか、喧嘩沙汰も増えます」

「つまらぬことで、みんなに苦労させるね」

ほとんどうにすまなさそうに、宮迫はいった。

「補給が来てくれれば、しばらくは楽になるだろう。敵の反攻がはじまれば、こんな島、一撃でけしとんでしまう。それまでは、なるべく兵によけいなつらさを味わわせたくない。どうせみんな、国にはもどれない人間たちだ。この島を終の棲家と決めて、できるだけ愉しくやりたいものだね」

永居は乾いた声で笑った。

おそろくは、彼もどこかでメデュウサの眼を見てしまったのかもしれない。妖しい光を浴びて石くれになつてしまった瞬間に、軍人としての彼の生命は終わっている。

「われわれのために海軍さんまで犠牲にしてはすまないからね。わかっていると思うが、物資の授受にあまり時間はかけられない。準備態勢はしっかり整えてくれ」

「はい。船も全部使います」
と、永居はうなずいた。

「食料がくると知れば、兵たちも現金なものですよ。金槌だったはずのやつさえ、泳いで米俵を担いでくる気になっていきます」

「泳いでも這つてもいいから、すこしでも時間を短縮してほしいね」

「ナウルへの連絡はどうします。一、二機でも戦闘機を援護に出してもらえれば——」

「まず無理だろうがね。直援機がつくものなら、はじめから飛んでいる。潜水艦が来てくれるだけで充分だよ」

「そういうと宮迫はあらためて、電文紙に眼をやった。

「われわれのような者のために、あちこちに迷惑をかけてしまおうね」

「とにかく、連絡だけはしておきます。潜水艦の到着時刻を考えると、これ以上遅れては間に合わなくなりますから。しかし……、これも、あの犬のおかげということですか」

永居は頭を撫でまわして、

「吼えてばかりで野豚も捕れず、たいして役にたたなかつた犬ですが、二百人を飢えから解放してくれると思えば、感謝しなければなりませんね」

「しかしね……、その一匹の犬のために、敵との遭遇を覚悟して遠い孤島にまで出てきてくれるひとたちもいるのだよ」

宮迫は電文紙を丁寧に折り畳み、寂しそうな微笑を浮かべた。

けれども、狩野たちが懸念したように、その電文を受信したのはグリワフーの守備隊だけではなかつた。そこからまた百キロ以上離れた海に、米海軍の駆逐艦「マグダリン」と「レティモア」がいる。

どちらも、基準総排水量一千六百トンのリヴァモア級中型駆逐艦である。

彼女たちは二隻でコムビを組み、グリワフー近海を航海していた。むろんそれは、哨戒機と連携しての日本軍の眼をひきつけておくための牽制行動であつた。

米軍の目標がギルバート諸島にあるとはかぎらない。

上陸作戦を執行するには、日本軍の戦力をできるかぎり分散させておく必要があつた。彼女たちや哨戒機が動きまわれば、日本軍は手持ちの戦力を割いてギルバート諸島の防御を強化せざるを得ない。

「マグダリン」の通信士は伊一二六七の電信を傍受し、それをすぐに暗号解読器にかけた。

数分後に解読された電文は、艦長であるロジャー・ウイルスン中佐のもとにとどけられた。

ウイルスンはアイルランド系の顔をもつ、眼つきの鋭い男である。

「鮫狩りのはじまりだな」

手頸の時計を眺めながら、ウイルスンは薄い唇をほとんど動かさずにいった。

解読した電文から、伊一二六七がグリワフーの入り江に突入する時刻は二三・三〇とわかっている。距離を考えると、全速で航行しても敵を湾口で待ち構えるにはすこし無理があつた。どうしても夜間戦闘になる。そこでいったん敵を捉え損なうと、広い海に逃げられる不安があつた。

ウイルスンはだから、あえて伊一二六七を入り江に突入させ、僚艦の「レティモア」とともに左右から湾口を封鎖する作戦をとつた。

伊一二六七には物資補給という任務があり、封鎖態勢を敷くために十分な時間の余裕がうまれる。戦闘機の協力で湾内に敵を釘付けにしておくことができれば、さらに万全だろう。

このコムビのリーダー格であるウイルスン中佐は、その決定を「レティモア」の艦長マイクル・ドミル中佐につたえた。

二隻は平行にならび、夜の海を進みはじめた。

もちろん、伊一二六七はそれを知るよしもない。

哨戒機を避けるために伊一二六七は潜航し、最速の八・二ノットでグリワフーにむかっている。十一時三十分に着くためには、急がなければならぬ。

潜航してしばらくすると、諏訪は妙なことに気づいた。

いつもより艦内の空気が硫黄臭い。

「やはり、パイプの調子がすこしおかしいみたいですな」

物資の搬出計画をつくっていた中原も、それを感じたのだろう。

「速度をあげたせいもあるでしょうが、いつもよりずっときつい」

と、書類から顔をあげて、鼻をひくつかせた。

井関はいまも電池室に籠もりきりだ。

「入道さんも、あの環境のなかでよくがんばるものだ」

植草が感心するようになった。

防毒マスクを装着すると、それだけで呼吸がし辛くなる。その状態で、井関は巨体をおりたたむようにして狭い電池室にとじこもっているのだ。室内の湿気は一〇〇パーセントを超え、壁や床はあふれ出した硫酸蒸気でぬるぬるとしている。

植草は腕時計を読んで、

「あと二時間たらずの辛抱だ。それにしても、喉がおかしくなるな」

と、からだの痰をきるために、二、三度強く咳払いした。

そして伊一二六七は、予定どおり十一時二十分にグリフワフーの湾口で浮上した。

入り江にはいると、海はぐつと浅くなる。潜航したままでは、艦底をこすってしまう。しかも、岩礁が多い。伊一二六七は速度を緩め、入り江に突入した。

すこしでも操舵を誤ると、座礁の危険があった。

月明かりに頼るしかない有視界航行だが、檜垣は慎重かつ大胆に艦を進めていく。きつちり十分後に、伊一二六七は停止した。

すでにハッチも開き、中原の指示に従っていくつかの荷物が甲板に積まれている。兵士とともに、諏訪もそれを運んだ。けっして楽な作業ではなかったが、艦内の汚れた空気で痛めつけられた胸には、夜の風が心地よかった。驚いたことに、腕まくりした狩野までがそれにくわわっていた。撓められたバネがはじけるように、誰もが忙しく動きまわっている。

守備隊側の準備も、完全に整っていた。

ほとんどボートに近い小型の船が、ずらりとならんで海岸までつづいている。それはうけとった荷物をいっばいに積みあげると、すかさず船首を反転させて海岸にむかう。物資を浜辺に降ろすと、また船の列の最後尾につく。

その機械的な回転が、何度かくりかえされる。

だが運ぶべき物資は多く、人手で運ぶだけでは、時間を大幅に短縮することはできなかった。潜水艦の機密性と狭さとか、どうしてもこういう場合には障碍になる。

中原はもどかしげに幾度か腕時計に眼をやり、怒鳴るような声を兵士にかけた。

それでもなんとか、予定の三十分を切ってほぼ物資を搬出し終えた。

海上に残る空船も、すくなくなっている。

最後のボートに、宮迫大佐と永居中尉の姿があった。永居は、軍用犬のロープを握っている。艶やかな焦げ茶色のジャーマン・シェパードは、おとなしく踞っていた。

ボートに立った宮迫が、甲板上の檜垣にむかって敬礼した。

檜垣も微笑して敬礼をかえした。

そのときだった。

ボートのなかでシェパードがむくりとからだを起こし、ひと声吼えた。

ほとんど同時に、艦橋にいた武藤大尉が叫んだ。

「十時の方向に敵機」

ふたつの声が重なりあった。

犬が暴れ、ボートが揺れた。慌てて永居は片掌で縁を掴んでからだをささえ、もういっぽうの腕をよるめいた宮迫の腰にまわした。掌から、ロープが離れた。

次の瞬間、シェパードは躍るように暗い海にからだを投げた。

意外なことに、そこにいあわせた男たちのなかで、諏訪の反応がいちばん迅速だった。

シェパードがたてた波音がまだおさまらぬうちに、諏訪の靴が甲板を蹴っていた。

諏訪はぐんと海中に沈みこみ、両腕をいっばいに拡げておおきく水を掻いた。からだをくねらせて方向を変える。

海上に頭をつきだし、息を吸いこむと同時にシェパードの胴を片腕で抱えた。

シェパードがもがく。腕のなかで暴れた拍子に、諏訪の顎のあたりを鋭い牙が裂いた。

痛みは感じなかったが、そこが灼けるように熱い。しかし、諏訪は犬を離さない。

伊一二六七の甲板から数名の兵士が腕をのばし、諏訪のからだを捕まえた。

諏訪は彼らによって、犬もろともに甲板へひきずりあげられた。

兵士のひとりが強引に犬を抱きあげて、ハッチのほうに駆けてゆく。

諏訪は背中を波うたせて喘ぎ、咳ともに海水を吐き出した。牙で剔られた顎の傷は、かなり深い。ぼたぼたと音をたてるように垂れる血がシャツに染み、甲板に滴る。

諏訪はそこに跪いたまま、あたりを見わたした。

ゆっくりとではあるが、伊一二六七はすでに動きはじめている。

甲板に残った物資を、中原たちが海中に蹴り落としていた。

守備隊の兵士たちもボートを棄て、海岸にむかって泳いでいる。伊一二六七は海上に残った小型舟艇を艦首で噛み砕くようにして進む。

「急いでください」

兵士が心配そうに、諏訪の顔を覗きこんでいった。

「敵機が近づいています」

素晴らしい終えるより早く、彼らの上空をかすめるように黒いおおきな影が飛びぬけていった。小刻みな機銃音が、諏訪の耳に響く。

諏訪は咄嗟にからだを甲板に投げだした。両掌で頭をかかえこむようにして、きつく眼を閉じた。兵士が彼を庇うように、そのうえに被さった。

ウイルスン中佐の要請によって、急遽飛来したのだろう、双フロート式の小型艦載水上機だった。通常は偵察哨戒任務に使われるため爆装はしていないが、二〇ミリの機銃弾は人間のからだを布きれのように貫く。

水上機は上空を舞うように旋回し、ふたたびこちらに降下してくる。

さすがに機銃だけで潜水艦を沈めることはできない。二隻の駆逐艦が湾口を封鎖するまで、伊一二六七をそこに釘づけにしておくことが目的なのだろう。

伊一二六七も一二・七ミリ単装機銃で応戦するのだが、高速で接近してくる敵機を捉えることができない。逆に、岩礁との接触を避けるために、伊一二六七はぎりぎりまで速度を落としている。狙い撃ちする水上機の着弾は正確だった。

諏訪はたちあがるうとした。しかし、うえに被さった兵士が動いてくれない。

しかたなく諏訪は、兵士を腕ではらいのけるようにしてからだを起こした。上半身が温かくぬめついた液体で、ぐっしりと濡れていた。

ひどくなまぐさい臭いが鼻を衝く。

顎の傷から流れた彼の血液ではなさそうだった。

はらいのけられた兵士は、甲板に転がってびくりとも動かなかった。

頸からうえがなくなっていた。

肩のあたりから、血液が溢れだしている。諏訪は絶叫して、はじかれたようにたちあがった。死が、すぐそこにあつた。はじめて、それを実感した。

戦慄が、全身を貫いた。

どこにむかっているのか、わけもわからずに奔りだした。

足許で機銃弾が爆ぜた。諏訪は滑稽なダンスを踊るようなステップを踏んだ。

「たちどまるな」

機銃座から仁科中尉が怒鳴っている。

次の刹那、機銃弾を胸でうけとめた仁科のからだか煽られたようにのけぞった。ずるずると崩れるように銃座から滑りおちたとき、彼の生命はすでに天を駆け抜けていた。

頭のなかがかつと熱くなった。もう、なにも考えられなかった。

我をとりもどしたとき、諏訪は機銃座について発射桿を握りしめていた。銃は弾丸を吐きつづけている。銃身が跳ねあがり、強い反動を肩に感じた。

いつその撃ちかたを覚えたものか、諏訪自身にもわからなかった。

おそらくは、仁科の最期の姿が記憶に焼きつけていたのだろう。

水上機は攻撃を終え、上昇に転じていた。

一二・七ミリ機銃弾は光の筋を曳いて、まっすぐその機体に吸いこまれた。

一瞬、時間が止まった。
奇蹟が起こった。

水上機は上昇の途中で、ゆっくりと機体を傾けた。そして、焔に包みこまれた。
真紅の塊となった水上機はくるくると回転し、爆発した。

燃えた油が、あたりに降りそそぐ。

それでも諏訪は、機銃を撃ちつづけている。

銃弾はすでに尽き、乾いた金属音だけが虚しく夜に響いている。

誰かが肩先を掴んで揺さぶった。

「もういいんです。敵は、もういません」

中原だった。諏訪は茫然とその顔を見つめた。震えていた。

中原にひきずられるようにして、諏訪は銃座を降りた。ぎくしゃくとした、操り人形のようなぎこちない動きだった。

諏訪を抱きとめた中原の顔に、愕然とした表情がはつきりと浮かんでいる。

バケツいっぱい血を頭から浴びたように、諏訪の上半身は真っ赤に染まっていた。能面のように表情のない顔のなかで、眼だけがぎらぎらと輝いている。

放心したようになった諏訪を、中原は艦内に運びこんだ。

岩礁水域をぬけた伊一二六七は速度をあげ、かろうじて入り江からの脱出に成功した。

ほんのすこしでも遅れていたなら、アメリカ軍の二隻の駆逐艦が湾口を封鎖してしまっていただろう。だが、ちつぽけな偶然が、伊一二六七に味方した。

「マグダリン」と「レティモア」が湾口に到着したのは、伊一二六七がもつとも狭まった海域をすりぬけ、急速潜航を開始した直後だった。

一本のスパナが、そのきわどい交錯を可能にした原因だった。

それは、「マグダリン」の整備兵が不注意から推進機関の奥に落としてしまったものだった。スパナがからまったせいで動力シャフトのひとつが空回りし、速度ががっくりと落ちた。

エンジンを完全に停止してしまえば、スパナをとりのぞくことは簡単だった。

しかし、熱が冷めるのを待ってスパナをとりだし、またエンジンを再始動させるには、かなりの時間が必要になる。ウイルソン中佐には、その時間が惜しかった。

彼は「マグダリン」を低速のまま航行させ、なんとかスパナをシャフトのうしろからとりだそうとした。そのために、五十分近いロスが生じた。

大声で呪いの言葉を吐き散らしながらいまましいスパナを投げ捨てたウイルソンは、全速で湾口をめざしたが、間一髪のところであわなかった。

だが、すべてのつきが彼の掌から逃げだしてしまったわけでは、まだなかった。

「マグダリン」のソナー手は、潜航した伊一二六七の座標を的確に捉えていた。

視認こそできないが、ソナーで位置を捕捉しているかぎり攻撃に支障はない。

ウイルソンは先行する僚艦の「レティモア」に、伊一二六七を追跡させた。潜水艦と駆逐艦では、速度がちがいがすぎる。「レティモア」はあつさり、伊一二六七の頭上にその艦体を進めた。先手は駆逐艦が握っていた。敵潜を直下に捕捉することができれば、あとはもうなにも考える必要はなかった。決まり切った手順に従って、攻撃を開始すればいい。

「レティモア」の後部甲板から、ちいさなドラム缶タイプの機雷がつづけざまに投下された。

ほとんど逆立ちするようなかたちで、伊一二六七は急角度での潜航をつづけた。

あたりの水深は最大三〇メートル。機雷は深度二〇で、水圧を感じて爆発する。

ひとつが爆発すると、その衝撃によって周囲の爆雷の信管が炸裂する。爆発の連鎖が、いくつもの水柱を海上に噴きあげた。飛沫が「レティモア」の甲板を洗う。

海面が盛りあがり、生き物のようにならぬ。

この状況で敵に狙われた潜水艦に、反撃に転ずる猶予はなかった。

最大深度まで潜って、機雷の直撃を避けるよりなかった。それでも、機雷の連鎖爆発によるすさまじい衝撃波からは逃げようがない。できるかぎり間隔を稼いで、艦がうけとめる衝撃をやわらげるしかなかった。しかし、海はそのためにはあまりに浅い。

兵士たちは呼吸をとめた。船体の強度を信じて、堪えるしかなかった。

つきあがるような鈍い響きにつづいて、それは伊一二六七に襲いかかった。

嵐のなかの木の葉のように、伊一二六七は海中で激しく揺れた。

巨人の掌に捕まれ、攪拌されているようなものだった。しつかりととりつけてあるはずの備品があつてなくはずれ、床を転げまわった。電球が、悲鳴をあげるように破裂する。いくつかの機器が制御不能に陥った。その振動は、永遠につづくかと思われた。

鋼板がこすれあう音が、艦内に満ちる。

地獄がこの世にあるとするなら、いまがそうなのかもしれない。

しかし、絶望を感じとるだけの思考力すら、もう諏訪にはなかった。からだをちいさく縮めて彼は床にへたりこみ、なにかを口のなかでもごもごもつぶやきながら、ただ時間が通り過ぎてゆくのを待った。

機雷を投下し終えた「レティモア」は速度をあげてその海域から離れ、いれかわるようにして「マグダリン」が前進する。

そうやって二隻がつねに伊一二六七の前途を塞ぐように移動し、絶え間なく交互に機雷攻撃をくわえていく。それが、ウイルスンの作戦だった。

機雷が直撃しなくとも、強烈な衝撃波を浴びつづけければ、伊一二六七の船体は粉々に砕け散る。海中に潜む鯨を狩るには、それがもつとも安全で確実なやりかただった。

頼りなくよろめきながらも、伊一二六七は懸命にその衝撃に耐えた。

船体がぎしぎしと軋む。鋼板の継ぎ目からの浸水が勢いを増す。限界がすぐそこに近づいている。それは誰も眼にもあきらかだった。

狩野は唇を噛みしめて、そこに立ちつくしている。表情はなかった。その傍らで、なにかを覚悟するように、檜垣艦長は腕を組み静かに臉をどじあわせた。

しかも、艦内の空気に含まれる硫黄臭は、いっそう強くなっている。

あるいは機雷爆発の振動が、換気装置にさらなる打撃をあたえたのかもしれない。だが、井関は依然として電池室に籠もったきりだ。パイプから噴きだす高熱に硫酸蒸気に焼かれながら、彼は愛してやまぬこの性悪な老婆をなだめつづけているのだろう。

恐怖に怯えた犬の鳴き声が、どこかで聴こえた。

か細く哀しげなその声が、あたりに反響する。

そこに据ったまま、諏訪はゆっくりと顔をあげた。こびりついて乾いた血が、頬のあたりでびきりと割れた。犬はまだ、鳴きやんでいない。その声がまた、おおきくなった。それはさっきまでの恐怖に竦みあがった声とは、微妙にちがっていた。

誰も気づかぬうちに、静寂が唐突に訪れていた。

船体の揺れもおさまっている。

獣だけが、その本能で状況の変化を俊敏に感じとっていた。

駆逐艦の機雷攻撃がとまったのだ。あと一步のところまで追いつめておきながら、なぜここで敵が攻撃の手を突如として緩めたのか、それはわからなかった。

しかし、理由がなんであろうと、攻撃が止まったことは現実だった。反撃をおこなうならこのチャンスしかない。考えるよりも先に、闇雲であっても行動に移るときだった。

檜垣は組んでいた腕をほどき、伊一二六七に上昇を命じた。

敵がもし攻撃を再開すれば、もう逃げ場はどこにもない。

まちがいなく伊一二六七は触雷し、無数のこまかな鉄片となって海に融ける。

深度計の針が逆方向にぶれ、二〇の数字を越えた。兵士たちの祈りが天に通じたのか、やはり雷攻撃はない。潜望鏡がある。その先端が波を縫って、海上に突きだした。

視界はきわめて暗く、ときおり荒い波に洗われてぐにやりと歪む。けれども、円形の画面の中央に捉えた艦影は、見逃しようがない。

奇妙なことだが、駆逐艦はなにかに迷いあぐねて、そこにぼんやりと佇んでいるようだった。長い時間ではない。だが、その不思議な一瞬の空白が、攻守を逆転させた。

檜垣はおちついた口調で、魚雷の斉射を命令した。

狙いすました一撃だった。距離からいっても、はずすはずはない。

実際、左右四発の魚雷が一斉に発射されていれば、標的となった「マグダリン」は潜望鏡の視界から消えてしまっていただろう。だが、そうはならなかった。

運命を司る女神は、きつともうすこしこの闘いを愉しみたかったにちがいない。

彼女は勝敗を分かつ運不運の微妙なバランスを、うまく操っていた。

「マグダリン」にとつての幸運は、機雷の衝撃波のせいだろう、伊一二六七の前方左舷の魚雷発射筒が開かなかつたことだった。そのおかげで、伊一二六七の右舷から放たれた二発の魚雷のうち、「マグダリン」に命中したものは一発だけだった。

それも、魚雷を感知するや否やウィルスン中佐が全速前進を命じたため、急所をはずれ致命傷にはならなかつた。「マグダリン」はつんのめるように動きを止めたが、その姿は依然として洋上にある。

彼女にとつての幸運は、すなわち伊一二六七の不幸だった。

敵はまだ一艦残っている。魚雷をあらためて装填する時間はなかつた。

魚雷を放つたことで、こちらは敵に正確な位置を教えてしまっている。残つた敵艦は、それをめがけて急行しているだろう。

爆雷攻撃を避けるにはふたたび急潜航するしかなかったが、すでにがたついてあちこち罅だらけになつた艦体が、果たしてその負担に耐えられるかどうか。十分な潜航速度が得られなければ、降りかかつてくる爆雷をかわせない。いや、たとえそれをよきれたとしても、つづけて襲いくる衝撃波をはねかえすだけの余力がいまの船体に残っているとは思われなかつた。それならばいっそ、浮上して絶望的な砲撃戦を挑むか――。

さすがに檜垣も決断を下しかねた。

けれども、僚艦の「レティモア」はもちろん「マグダリン」の魚雷被弾に気づいたが、彼女もまたそこを動くことができなかつた。彼女は彼女で、厄介な問題を抱えこんでしまっていた。

一機の零戦の攻撃が、それだった。

それは食べ物まわりを飛ぶ蠅のように、彼女にまとわりついて離れなかつた。

零戦は巧みな操縦で「レティモア」の対空砲撃をすりぬけ、執拗な攻撃をくりかえした。

伊一二六七は、まだその味方の存在を知らない。

艦内の硫黄臭は、もはや耐え難いまでに濃度を高めていた。

兵士たちはからだを屈めて苦しげに咳きこみ、犬は吠えることもできずに弱々しく床に寝そべつた。

「電池室は、どうなっているのだ。パイプの修理は――」

と、狩野が汗に濡れた顔をしかめて、叫ぶようにいった。

「扉が開きません」

中原の悲痛な声が、通路のむこうからかえつてきた。

「井関さんが……、内側から閉めてしまつたようです」

「なに……」

唖れた声で、狩野が呻いた。

艦内空気の汚染をすこしでも抑えようとしたのか、井関は内部からドア・ハッチを降ろし、電池室を密閉してしまつたようだ。もちろん井関は、そのなかでパイプから漏れる硫酸蒸気をともに浴びつづけている。

「いかん」

檜垣が鋭くいった。

ここ至つてしまえば、もはや選択の余地はなかつた。

兵士たちはいまや窒息寸前の状態にある。これ以上潜航をつづけることは不可能だった。なにより、このままでは電池室の井関が死ぬ。

しかも、換気機能がまともに作動しないと、密閉された電池室の内部には、硫酸蒸気だけではなく水素ガスが溜まつていく。水素ガスは電池の加熱にもなつて発生する。電池によって推進力を得るかぎり、それを抑える手段はない。そして、水素ガスは空中濃度が六パーセントを越えると爆発する。

ここで電池室が嘖きとんでしまえば、浮上も潜航もない。それですべてが終わりだ。

檜垣は狩野を見やつて、

「浮上する」

と、それだけいった。

「狩野はなにかいいかけたが、黙つたまま静かにうなずいた。それしかなかった。ここで浮上すれば、左右両舷に敵をむかえることになる。」

たしかに、二隻の駆逐艦を相手にしての砲撃戦は、自殺行為である。

魚雷によって脚こそ止まったが、五基の一二・七センチ単装砲にくわえ二基の五三・三センチ魚雷四連装発射管を備えた「マグダリン」の攻撃力はまだすこしも失われていない。そして、おなじ力をもった敵がもう一艦いる。

こちらの武器は、一〇センチ高角砲がただ一基。蟻螂の斧といつていい。これで勝つことは、駱駝を針の穴にくぐらせるよりも、もつと難しいだろう。

それは、わかつている。けれども、それに賭けるしか生き延びる方法はなかった。

伊一二六七は海を割って浮上した。兵士たちが忙しく動きはじめる。命令されなくとも、彼らは己がなにをすべきかを知っていた。眼の前に死に神が両腕を拡げて招いているというのに、誰ひとりともどつたり、怯えたりする者はいない。

勝負の行方が最初から決まっていたとしても、彼らは闘わなければならなかった。たとえ髪の毛一本ほどの細ささえなくとも、そこに可能性があるかぎり、彼らはきつく閉まった扉をこじあけるために挑戦する。

結果など、誰も気にしていなかった。ただあたえられた職分に全力を尽くすために、彼らはそれぞれの方向にむかつて奔った。

冷たく、新鮮な空気が艦内に吹きこんでくる。

諏訪は墓場から甦ったような気分になった。徐々に、精気かもどつてきた。

檣垣たちは状況把握のために、艦橋へむかつていた。

壁にすがるようにして、諏訪はやつとたちあがった。脚がもつれた。

顔から、壁にぶつかった。顎の傷が裂け、血がこぼれる。

口のなかに、塩辛い味がひろがっていく。壁にもたれかかったまま、諏訪は深呼吸をくりかえした。

「友軍機です」

弾むような中原の声を、諏訪はその姿勢で聴いた。

そのときはじめて、檣垣たちは友軍の零戦が「レティモア」の上空を飛びまわって闘っていることを知った。

敵の攻撃がだしぬけに熄んだ理由も、それだった。

「レティモア」は零戦の攻撃に対応するだけでせいっぱいだった。視認距離にある伊一二六七に、砲塔をむける暇さえないようだった。間断のない機銃掃射が、「レティモア」の意識を根こそぎ奪い取っていた。零戦はひたすら機銃を撃ちつづけている。がむしゃらな攻撃だった。

それだけで駆逐艦を始末してしまおうとしているわけでは、むろんなかった。あきらかにその零戦は、伊一二六七が戦場を離脱するための時間をそうしてつくりだそうとしているようだ。だが、ただ急降下して銃を乱射する、そんな無謀な攻撃が、長くつづけくはずはない。

いっぽう、魚雷をうけた「マグダリン」のほうは、黒い煙をあげ、ほとんど止まっているように見える。

艦橋にでた狩野は、

「ナウルからの援軍が来てくれたのでしょうか」

と、すこし訝しげな口調で、檣垣に訊いた。

「いや……」

檣垣はおもむろに頸を振った。

「それなら、たった一機だけということはあるまい。それに……、あれではすぐに弾を撃ち尽くす」

「草部……」

と、中原がつぶやくようにいった。その声は、吹きぬける風にちぎりとられて檣垣たちの耳にはとどかない。

たしかに、その零戦の操縦席には、草部少尉の姿があった。

彼は伊一二六七を援護するために、単騎グリワフーに赴いたのだ。むろん、司令部の許可を得たものではない。

本来なら軍法会議ものの逸脱行為だが、ただくだらぬ面子をたもつただけに生きながら葬られたいまの彼はそんなものを懼れる立場にはなかった。

零戦はさらに二度、三度と、「レティモア」への攻撃をくりかえした。

パイロットが誰であろうと、それは伊一二六七にとって神がたえたもうた千載一遇のチャンスだった。零戦が稼ぎだしてくれる、その一分、一秒が貴重だった。

敵が足止めされているうちに全速で脱出をはかれば、あるいは夜の闇に覆われて逃げおおせるかもしれない。かすかな期待であることはたしかだが、真正面から駆逐艦に砲撃戦を挑むよりは、遙かに生きながらえる確率はおおきい。躊躇はしていられなかった。ブリッジに立った檜垣は「レティモア」上空を飛ぶ零戦にむかつて、姿勢をただして敬礼すると、すぐさま艦の反転を命じた。

中原は、うしろをふりかえった。
伊一二六七が動きはじめたことを認めたのだろう、零戦はこちらにむかつて訣れを告げるかのように、一度翼を上下に振った。

そして、「レティモア」の司令塔をめぐけて一直線に降下した。機銃はもう、火箭を吐くことはなかった。銃弾が尽きたのだろう。

それを待っていたかのように、「レティモア」の対空砲が激しさを増した。
夜空に炸裂する砲弾の煙のむこうで、眩しいほどの光が閃いた。「レティモア」の機銃弾が、零戦を片翼を付け根からもぎとっていった。

零戦が燃えあがった。炎の塊となったそれは、しかしすこしも勢いを弱めることなく、まっすぐに司令塔に激突した。

言葉にならない絶叫が、中原の口から迸った。

駆逐艦の圧倒的な速度を考えれば、伊一二六七への追撃を阻止するためには、それしかなかった。鈍い爆発音とともに、「レティモア」の司令塔から焔の柱が夜を焦がすように噴きあがった。誰からも強制されることなく、草部はみずからの意志でその死所を見つけたのだ。

中原は身じろぎもせず、眼をかつと見開いたままそちらを凝視していた。まるで、その光景を脳裡に焼きつけておこうとしているかのように、瞬きひとつしなかった。

伊一二六七はひたすら南にむかつて走りつづけた。

敵の追撃はなかった。沈みはしなかったが、二隻の敵駆逐艦はともに深手を負い、それ以上の戦闘行動ができる状態ではなくなっていた。

けれども、どうにか虎口を脱したものの、そのために伊一二六七が支払わなければならなかった代償は途方もなく重いものだった。

仁科中尉をはじめとする数人の乗員が倒れ、そのうえまったくの部外者である草部少尉までが伊一二六七を救うために愛機とともに海に散った。

そして、悲劇はそれだけではすまなかった。欲深い神は、それだけでは満足してくれなかったのだ。彼女は、容赦なく生贄を要求した。

その最後の代価として選ばれたのは、井関大尉の生命だった。

みずから閉ざした電池室の扉を、彼は生きてふたたび開けることはできなかった。

中原が強引にその扉をこじ開けたとき、井関は壁にもたれかかるようにして坐っていた。硫酸蒸気のせいでろう、防毒面の締め具が腐食し、顔からはずれている。その皮膚は、強烈な酸に焼けて、無惨なほどに爛れていた。中原が抱きあげたとき、井関の口からごぼりと音をたてて、血の塊が溢れだした。すでに、彼は息絶えていた。

換気装置の修理は完璧なまでに終わっていたが、そんなことはなんの慰めにもなってくれなかった。彼は生命とひきかえに、己の責任を全うした。到底、つりあいのとれた勘定ではなかった。伊一二六七は、かけがえのない部品をひとつ、永遠に喪ってしまったのだ。ついさっきまで井関がいたその場所に、ぽっかりとおおきな底無しの穴が開いた。それは、世界中のどんな人間をもつてしても、決して埋めることのできぬ深くて暗い空間だった。

重苦しい沈黙だけが、艦内を包みこんだ。

しかし、誰も涙は流さなかった。彼らの哀しみは、そんなものであらわすことができるほど薄っぺらなものではなかった。

ナウルへの帰途は、そのまま井関の通夜になった。長く、辛い旅だった。

なにも知らぬ獣だけが、元気をとりもどして吼えつづけていた。

「その犬を、どこかに連れていけ」

はつきりそれとわかるほどの怒りをこめて、檜垣がいった。彼は、はじめて兵士たちの前で、己の感情を剥きだしにしていた。

溶暗

1

あの戦争は、いったいなんだったのだろうか――。

天井の薄暗い電球を眺めながら、諏訪俊一は回想する。

日本は、負けた。

それも、尋常の負けようではなかった。徹底的に叩きのめされ、踏み躪られたあげくの、無条件降伏だった。民族として破滅の瀬戸際まで追いつめられ、そこでやっと白旗を掲げた。

あの戦争は、まる三年と八ヶ月あまりつづいた。

太平洋を舞台にアメリカと戦ったその歳月のなかで、日本がかるうじて互角かそれ以上の体勢をたもつていられたのは、せいぜい開戦から七、八ヶ月のあいだでしかない。それからさきの三年余を、日本は負けつづけた。

陸でも海でも日本は負けて、それでも戦いつづけた。

やはり、あのミドウェイが転機だった。戦争が終わって、こうやって冷静にその三年八ヶ月の歴史を眺めかえしてみると、それがあらためてはつきりと確認できる。

ミドウェイ海戦は開戦以来破竹の勢いの快進撃に酔っていた日本に冷水を浴びせかけ、アメリカにとっては起死回生の一撃になった。

あの段階でアメリカは、伊二六七の艦内で諏訪たちが予想していたよりも遙かに苦しい状況に立っていたのだ。

北アフリカ戦線では、ナチス・ドイツのロンメル将軍に率いられた戦車軍団がトブルクを攻略し、さらにクリミアのセバストポリスまでが陥落していた。敵に攻勢をささえかねて連合軍中軸のイギリス第八軍は、エジプトのアレクサンドリアまでおしもどされている。

これでもし、ロシアで足踏み状態になっているドイツ軍主力がコーカサスを突破してロンメル軍団と合流したら、ヨーロッパからアフリカに繋がる強固な枢軸側の戦線ができあがってしまう。そうなれば、戦局の逆転はますます困難になる。

いっぽう、日本軍は東アジアや中国大陸を席卷し、太平洋ではハワイにまで迫っていた。

この勢いをどこかで食い止めなければ、ロシアを貫いたドイツと日本が連携するような事態にもなりかねない。それはアメリカにとって、考えられ得る最悪の状況だった。

アフリカ、ヨーロッパ、アジアと三つの戦線がひとつに連なってしまえば、アメリカは世界を相手に戦わなければならない。

それだけは、避けなければならなかった。

そんなアメリカにとって、唯一希望の持てる戦場が太平洋だった。勢いに乗った日本は、あまりにも急激に戦線を拡張すぎている。戦力を分析してみても、日本は己の能力をおおきく超えた荷物を背中に担ぎこんでしまっていた。どこかで躓くようなことがあれば、日本はその荷物の重さに耐えかねて、押し潰されてしまうだろう。

躓くとすれば、それは日本の海軍力が低下したときだ。

太平洋において日本が広大な戦線を維持できているのは、抜群の海軍力があるからにはかならない。日本はその国力に比して、不相応なほどに強大な海軍力を保有している。それがあからこそ、太平洋を駆けめぐることができるのだ。

しかし同時にアメリカは、日本の生産力には限界があることを知っていた。

海軍力はたしかに優秀だが、それは彼らにとっての全財産でもある。いったんそれを消費してしまったら、日本にふたたび財産を築きあげる力はない。

もちろん、日本海軍もその限界を悟っていた。

もともと日本に、アメリカと長期の消耗戦を展開する国力はない。

その厳粛な事実は、艦船を失ってしまえばおしまいの海軍にとって、より切実な意味をもっていた。だからこそ、彼らは対米開戦をぎりぎりまで逡巡した。

陸軍の強硬な要求に抗しきれず、真珠湾奇襲によって対米戦に踏み切ったのちも、戦いの早期決着をめざした。

そのために彼らは、互角の戦力があるうちに主力決戦にもちこみ、真珠湾のような打撃をもう一度アメリカにあたえようとした。それによって、アメリカの戦意を挫こうというのである。

そして、ミドウェイ海戦はそういう情勢のもとで起こった。

日本はそこで負けた。

連合艦隊は主戦兵力の三分の二を喪った。

とりかえしのつかぬ損失だった。

その損失を埋めることは、日本には不可能だった。

逆に、その大勝によってアメリカは愁眉を開いた。ちいさな希望が、一挙におおきく膨らんだ。

日本海軍からその機動力をこつそりと奪いとったことで、占領地奪還のための上陸作戦が成功する確率がぐっと高まったのだ。

当初アメリカは、奪還作戦の第一の目標を、その年の五月に占領されたばかりのツラギ島に置いた。ツラギには、日本の水上機基地がある。ツラギをまず攻略し、ソロモン群島からニューギニアに進み、そしてこの方面の日本の最大拠点であるラバウルを攻める。これが、アメリカの基本戦略だった。

ミドウェイでの敗戦の衝撃がおおきすぎたのか、日本はアメリカの狙いを読みきれなかった。反撃は当然予想されたが、場所についても時期についても、日本は掴みきれなかった。いや、もしかしたら海軍統帥部はミドウェイの惨敗を正面からみつめることを懼れていたのかもしれない。

彼らの意識は、本能的に事実を認めることを拒絶し、結果をむしろ矮小化しようとしていた。

ミドウェイで負けたとはいえ、依然として日本は太平洋での絶対的な優位を保持している。すくなくとも、向こう数カ月、敵の反攻はあり得ない。彼らは、そう断言した。

しかし、せめて日本はそこで基本戦略の転換をはかり、戦力の再編も含めて拠点の防衛体制を整えなおすべきだった。だが、日本はそうしなかった。

日本の過剰なほどの自信——妄想といいかえることもできた——は、ミドウェイの敗戦にも揺るがなかった。

彼らはなおも、アメリカとオーストラリアの連絡を分断すべく従来から進めてきた南下作戦——ポートモレスビー攻略——に拘泥した。珊瑚海、ミドウェイの両海戦によって機動力を失った日本に、ポートモレスビー攻略は事実上不可能になったが、彼らはそれを認めようとせず、ソロモン群島に進出しつぎつぎに航空基地を建設した。

あくまでも、南下にこだわったのだ。

たしかに、アメリカとオーストラリアの分断は重要ではあったが、この時点の日本にとって最優先の戦略課題に置かなければならなかったかどうかは疑問だろう。

ツラギも、その目的で占領された。

ところが、ツラギは島の大半がジャングルに覆われ、滑走路を設置するだけの平坦地が確保できなかった。信じられないことに、日本軍は上陸してはじめてそれを知った。

だが、海軍力に頼れなくなった以上、南下作戦は航空戦力を中心とせざるを得ず、それにはどうしても陸上航空基地が必要だった。

日本はそこで、ツラギのさらに南に位置するひとつの島に着目する。

それが、ガダルカナル島だった。ちょうど、栃木県ほどの広さの島だった。

日本は急遽ガダルカナルに二千を越える海軍設営隊を上陸させ、人海戦術によって飛行場建設を進めた。機械ではなく、人間の力のみに頼った飛行場建設は困難をきわめた。ブルドーザーなどはなく、ひとが山を削り、地を平らかにし、石を運んだ。それがようやく完成しようとしていた。それは、ルンガ飛行場と名付けられた——現在はヘンダーソン飛行場——。

上陸目標としてツラギの調査をすすめていたアメリカは、むしろガダルカナルの飛行場を発見した。彼らは、ツラギに匹敵する——あるいは、それ以上の——魅力を、ガダルカナルに感じとった。

ソロモン諸島の攻略を考えれば、敵がわざわざ建設してくれたガダルカナルの飛行場は願ってもない足掛かりとなるはずだった。

その有り難いプレゼントを見逃すことはない。

ここで、米軍の攻撃主目標はツラギからガダルカナルに変更された。

兵力はかならずしも充分ではなく——当時、上陸作戦に動員できる兵力は一個師団程度のものであったという——、輸送船も不足していた。そのうえ、ガダルカナルへの上陸作戦を執行すれば、護衛航空機を搭載した空母を陸上航空基地の援護範囲の外側にまで移動させなければならぬ。しかも、その海域は日本の陸上航空基地の攻撃範囲内にある。

けれども、こうした悪条件にもかかわらず、アメリカの統合幕僚会議はガダルカナル上陸作戦を決定した。ミドウェイの敗北によって、日本は動揺している。

このチャンスを逃さず、太平洋の戦局を逆転させるための決定的な楔をうちこむには、なによりも迅速さが必要だった。躊躇して、日本に体勢をたてなおす猶予をあたえてはならなかった。

ルンガ飛行場が完成を間近に控えた八月七日、アメリカ機動部隊はイギリス、オーストラリアの艦船とともに連合艦隊を編成し、ツラギ、ガダルカナルの両島に迫った。

まずエンタープライズ、サラトガ、ワスプの三空母から飛び立った艦載機が襲いかかった。

日本側はこの攻撃を、まったく予期していなかった。

日本はアメリカがこの島をそれほど重要視しているとは思ってもいなかった。アメリカの攻撃があるとしても、それは半年以上も先のことだろうと予想していた。

したがって、そのときガダルカナルにあった兵力は、二千数百にすぎなかった。

設営隊の二千名を除けば、守備隊はわずか二百五十を数えるのみだった。

不意をつかれたうえに、これでは抵抗のしようもなかった。

航空機の攻撃につづく猛烈な艦砲射撃に、日本軍は壊滅同様の打撃をこうむり、一万を越す兵員による上陸作戦はほとんど無血状態で成功した。翌八日の払暁、あつけないほど簡単に、アメリカ軍はガダルカナルを占領し、飛行場を確保した——ツラギには六百の守備隊がいたが、彼らは米軍の猛爆撃と上陸した別働隊によって全滅させられていた——。

上陸の先陣となった海兵隊は、それが日本の仕掛けた罠ではないかと疑い、前進の速度を緩めたほどだった。

けれども、それは地獄のほんのはじまりにすぎなかった。

まるで予期していなかったツラギ、ガダルカナルへの攻撃を知った日本軍は狼狽した。

猛爆に晒されたツラギからの悲痛な連絡によって米軍の奇襲を知った日本軍は慌てて、およそ一千キロ離れたラバウル基地から、海軍戦闘機と爆撃機を発進させた。ツラギはもはや絶望かもしれないが、ガダルカナルを救う可能性はまだ残されている。作戦に参加した十八機の零戦にとって、それは航空史上最長の作戦行動になった。

しかし、アメリカ側はその襲撃を察知し、飛躍的に防御性能を高め——零戦は七・七ミリと二〇ミリの機銃を装備しているが、七・七ミリ弾では致命傷をあたえることができなかった。これでは、片腕を縛られたまま戦うようなものだった——、それによって増した自重を強力な大馬力エンジンでカヴァーした新型戦闘機グラマン・F四・ワイルドキャット六十機による迎撃体勢を組んで待ち構えていた。

零戦はよく闘ったが、劣勢は否めなかった。

一千キロを超える距離は、やはり長すぎた。これでは航続距離の長い零戦にとつても、ラバウルとガダルカナルの間を往復するのがせいっぱいだった。ガダルカナルの上空に到達しても、戦闘に割く時間はほとんどなかった。

援護の戦闘機がその状態では、ラバウルを発進した二十七機の双発爆撃機も敵に効果的な損害をあたえることができなかった。しかも、敵の新式対空砲はリーダー装置を組み入れて照準性能を飛躍的に高めていた。攻撃は二次——第二次攻撃は、零戦十五、一式陸攻二十三機による——にわたっておこなわれたが、いずれもアメリカの輸送船団に損傷をくわえることはできなかった。それどころか、そのうち二十三機の陸攻がワイルドキャットと対空放火の犠牲になった。

結局のところ、二波におよぶ航空攻撃の成果は、駆逐艦一隻中破、輸送船一隻大破という程度のものでしかなかった。

物資の揚陸は進められ、上陸作戦は予定より数時間の遅れをだしたが成功した。

航空機に遅れて、ラバウルにあった海軍第八艦隊（旗艦・重巡鳥海。司令長官・三川軍一中将）もガダルカナルにむけて出港した。これは、三川中将の独断によるものだった。

作戦には旗艦鳥海以下、第六戦隊の巡洋艦・青葉、加古、衣笠、古鷹ならびに第十六戦隊の軽巡・天龍、夕張、駆逐艦・夕凧が参加した。

三川中将は敵戦隊のなかに空母の存在を確認すると、航空機攻撃を避けるために夜間決戦を決断した。夜間戦闘は、日本海軍のお家芸でもあった。

いうまでもなくアメリカ側も、日本艦隊による夜襲をもっとも警戒しており、水陸両面で作戦の指揮を執る第六十二任務部隊のリッチモンド・ネリー・ターナー少将は、みずから三隻の重巡と駆逐艦三隻を率い、ガダルカナル北方の小島ザボ島沖に展開していた。

また、英軍クラッチレイ少将が指揮する重巡三、駆逐艦三の艦隊が、南方の警戒にあたっていた。

ガダルカナルにむかう途次、三川艦隊は哨戒中のB-17や潜水艦によって発見されたが、そのつど針路を変更し、巧みな操艦で敵に目的地を気取らせなかった。

アメリカ軍は、彼らがガダルカナルをめざしているなどとは、思ってもいなかった。

敵の油断のおかげで三川艦隊の夜襲は成功した。

第一次ソロモン海戦——アメリカ側呼称は、ザボ島沖海戦——が、それである。

例によって、いくつかの偶然と運、不運が、敵味方互いに微妙な作用をあたえ、海戦は日本側の一方的な勝利に終わった。ただし、戦術的に見た場合にかぎつての勝利だった。

三川艦隊は敵の混乱に乗じて、重巡四隻(キャンベラ、ヴィセンズ、アストリア、クインシー)撃沈、一隻(シカゴ)大破、駆逐艦二隻中破という圧倒的な損害をあたえた。ガダルカナルの南北に展開したアメリカ側の警戒艦隊は、ほぼ壊滅したといつていい。

対して日本側は、ラバウルへの帰途、敵潜水艦の雷撃によって重巡加古を失ったのみだった。

彼我のこのバランスだけから判断すれば、日本側の完勝だろう。

しかし、以降の戦局によりおおきな意味を持つ戦略面から見ると、かならずしもそうとばかりはいいきれない。

なぜなら、護衛艦隊を壊滅させておきながら、三川艦隊は敵の輸送船団を放置したままラバウルにひきかえしてしまったからだ。

艦隊の出撃が上陸作戦を阻止する目的であったのなら、まずなにをいっても輸送船団を撃破しなければならなかった。けれども、彼らはそうしなかった。

先の航空機による攻撃で肝腎の輸送船団がおおきく後退していたという不運はあったが、すでに戦闘力を持った護衛艦隊はその任務を果たしうる状態ではなくなっていたのだ。多少の犠牲は覚悟しても、無防備のまま奥に逃げた輸送船団を追撃、破壊すべきだった。

輸送船団は物資を満載し、三千を越える海兵隊員を積んでいた。

だが、敵の航空攻撃を危惧した三川中将は、それ以上の深追いをせず、艦隊をまとめてラバウルに帰った。結果として、輸送船に積み込まれていた物資はガダルカナル海岸に揚陸され、米軍は進撃の橋頭堡を確保した。もしここで輸送船団を撃破することができていたら、その後の地上戦の様相はおおきく変化していたかもしれない。だが、歴史に「もし」はあり得ない。

三川艦隊は十分な戦果に満足してラバウルにひきあげ、そのうちアメリカの輸送船団は物資と越える兵士の揚陸を完了した。

そして、ガダルカナルは占領された。

むろん、ガダルカナルへの上陸、占領という目的は達成したものの、ザボ島沖海戦における混乱と惨めな敗北は、アメリカ海軍に強い屈辱感をあたえた。公式の調査がおこなわれた結果、誰も処罰された者はいなかったが、南方部隊の指揮代行として重巡「シカゴ」に載っていたワード・D・ボード大佐は自責の念に嘖まれ、のちに自殺を遂げた。

ガダルカナルの占領は、ラバウルの司令部に衝撃をもたらした。その衝撃はすこぶる強烈なものだったが、その直後にはいった三川艦隊大勝利の報が、判断を狂わせた。

司令部は動揺したまま、ガダルカナル奪還作戦を計画する。

正確な情勢把握はおこなわれぬままだった。

こうしたとき、日本軍の将校には不思議な性癖がある。どうしてだか彼らはいつもきまって、敵の勢力を控えめに見積もるのだ。確固たる根拠があるわけではない。ただ、そうであってもらわなければ困るといふ、勝手な希望的観測だけがその背景にある。

三上艦隊の圧倒的な勝利が、彼らの判断に微妙な影響をあたえたことも事実だった。

海戦では、一方的に敵に殲滅させた。だから、敵の戦力はたいしたものではない。

司令部は、そう判断した。

最終的な決断を下す東京の軍令部でさえそうだった。

やはり、ザボ島沖海戦の勝利が、彼らの眼を曇らせていた。米軍がなぜガダルカナルなどに侵攻してきたのか——。彼らはまだ、そのほんとうの意味を掴みきれなかった。

だが、奪われたガダルカナルをそのままにしておくわけにもいかなかった。

海軍は大本営陸軍部に、非公式にガダルカナル島の掃討を要請する。

要請をうけた陸軍は作戦立案に際し、必要兵力を海軍に質問した。

そのとき海軍側は、現在のアメリカ軍にソロモン諸島を北上するような大規模な反攻作戦をおこなう能力はなく、ガダルカナル島に進駐した勢力も海兵二千にすぎない、とこたえている。

ガダルカナルに上陸したのは、せいぜい二千名程度の偵察隊だろう。

それが、彼らの認識だった。

米軍はこの作戦に、空母三隻、戦艦一隻、重巡五隻、駆逐艦十六隻からなる航空支援の後方艦隊を含め、百隻近い艦船を動員している。その目的が、ただか数千の偵察隊の上陸にあるはずはなかった。

ガダルカナル上空に航空機を飛ばしておきながら、司令部は米軍の艦船があたりの海を埋めているという事実を無視した。

彼らは正確な情報を入力する努力をおこたり、陸軍も海軍の推測に基づいて作戦を練りあげ、兵力六千によるガダルカナル奪還をラバウルに命じた。

その兵員は、五百の海軍特別陸戦隊、川口清健少将率いる支隊三千五百および一木清直大佐指揮の支隊二千によって構成された。まず、そのときグアムにあった一木支隊が、ガダルカナルにむけて派遣された——。彼らはミドウェイの攻略部隊だったが、海戦の敗北によってグアムに帰還していた——。

この戦いにおける最大の悲劇のひとつが、そうして幕を開けた。

伊一二六七は第一次ソロモン海戦に参加していない。そのとき彼らは、ナウル基地にいた。動くことができなかったのだ。

米軍がガダルカナル島に上陸したことを、諏訪はナウル基地の居室で中原から聴いた。

なんのための戦いだったのだろう——。

諏訪は折り曲げた片腕を額のあたりに載せて、溜息をついた。

2

伊一二六七は動けなかった。

グリワフーから半死半生の状態で喘ぎながら、ようやくとナウルに辿り着いた伊一二六七だったが、それが限界だったのだろう。

港にへたりこむようにして、それきり動けなくなった。

電池室の損傷は、予想以上にひどいものだった。

井関はそれをよく修理していたが、やはり肝腎の部品が欠如はどうしようもなく、あくまでも応急の措置を施したにすぎなかった。のちに電池室を調べたヴェテランの整備兵を驚かせたほどに、井関の処置はその状況のなかで万全を尽くしたものだだった。

それでも、その状態で数百キロの海路を無事に移動できたことは、まさに奇蹟といってよかった。もし途中で潜航あるいは急速充電をおこなっていたら、電池はたちまち負担に耐えかねて破裂していただろう。

そうなっていれば、いま伊一二六七の姿はナウルにない。

いまにも息絶えそうな彼女を、檜垣や狩野たちがなんとか宥め騙しながら、やっとのことここまで運んできたということだろう。

整備兵たちは電池室の状況を一瞥して、あからさまに顔を顰め、溜息をついた。

修復は容易なことではなさそうだった。

もちろんそれは檜垣の強硬な反対によって撤回されたが、一時は、艦の廃棄まで真剣に検討されたほどだった。

整備兵たちは最低二十日と、完全な修理にかかる日数を見積もった。掛け値のない、正直なところだった。檜垣としても、整備兵の手腕を信頼して、すべてを委ねるしかなかった。

伊一二六七を救うために、独断でただ一機基地を飛びたった草部少尉の抗命行為については、元氣よく

艦から降りたつたジャーマン・シエパードが待ち受けていた参謀に跳びついていった時点で、忘れられ、結局はいっさいが不問に付された。

たしかに、あそこで草部少尉が駆けつけてくれていなければ、幾名かの優秀な兵士の生命と引き替えにしても惜しくはないほどの価値を持つその犬は、艦とともに海の底に沈んでいただろう。そうして、草部はすくなくとも汚名を着せられたままの死を免れた。もつとも、草部にとってみれば、そんなことはどうでもいい問題であつたにちがいない。

犬一匹より安い生命だが、彼はみずからの意志でそれを燃焼し尽くしたのだ。

草部や井関の死について、中原は一言も触れようとしたなかつた。

それはきつと、言葉で表現できるようなものではなかつたのだろう。沈黙が、なにより雄弁に彼の深い哀しみをあらわしていた。

慰めてやることもできなかった。

諏訪もまた、黙ってそれを見つめているしかなかつた。

中原の辛さをやわらげてやる手段を、彼は知らなかつた。諏訪は彼の哀しみを、ほんとうに深奥な部分で理解することができない。これまでの歳月を、井関や草部と彼がどうやってつきあつてきたのか、それすら諏訪は知らないからだ。

諏訪は、ただの傍観者にすぎない。

そんな諏訪に、いったいなにをしてやることができるというのだろうか――。

すべては、時間の流れにあずけてしまふしかなかつた。

人間の生命が紙切れよりも薄いこの戦争で、死はありきたりの日常なのだ。

中原はその哀しみが癒されるよりはやく、新しい死に出逢うだろう。そして、いつかその日常に慣れていく。それが、戦争なのだ。

それは、諏訪もおなじだつた。

明日は、彼が中原の死を直視することになるかもしれない。

それとも、中原が彼の死を見ることになるのだろうか。死が日常である世界のなかでは、神経を麻痺させなければ、おそく生きていけないのだろうか。

諏訪たちは、そうして虚しい日々をナウル基地で過ごした。

あれほど饒舌だつた中原は、めつきり口数がすくなくなつた。諏訪との会話も、ほとんど内容のないあたりさわりのないものばかりになつた。

おかしなことに、植草の酒量も減つた。

「こんなときに呑む酒は、苦すぎる」

彼はそういつて、ただ寝転がつて時間を潰すだけだつた。

彼らはきつと、艦に乗り込んで海へと漕ぎだしたかつたにちがいない。

戦場で敵と闘うときのすさまじい緊張感が、いまの彼らには必要だつた。彼らは、なにもかも忘れて、ただひたすら闘いに集中できるときを、なにより求めていた。

だが、不幸なことに、それは彼らにはあたえられなかつた。

もつとも必要とするものを、もつとも必要なときに、彼らは得られなかつた。

伊一二六七は、動けなかつた。

整備兵たちも必死で働いてくれていたが、きわめて複雑な精密機械の修理だけに、なかなか時間を短縮することができなかつた。ときには、わずかに寸法がちがつただけで作動しなくなる部品をあらためて作りなおさなければならなかつた。幾度かの失敗のあとで、ようやくそれができあがると、今度は部品をとりつけるための特殊ボルトがない――。そんな具合で、作業は遅々として進まなかつた。

しかし、いくら苛立つてみたところで、修理については専門家である整備兵たちに任せてしまうよりなかつた。

「設営隊のなかから電気工事の経験者などをひきぬいて、整備班も懸命にやってくれています……、どうも潜水艦を修理した経験を持つ者がすくないので、作業が捗らないようです。まだ、しばらくはこのままでしょうね」

と、ナウルに帰還してから十日あまりすぎたころ、狩野とともに修理状況を見てきた中原が、諏訪にいつた。ある程度、気持ちの整理もついたので、中原の表情にすこしずつではあるが以前の明るさをもどってきている。昨日は突然ランニングに誘われて、二〇キロ近く走らされた。中原はそうやってぎりぎりま

でからだを痛めつけ、汗とともに哀しみを意識の底にこずんでいる搾りだしてしまおうとしているかのようだった。

そのおかげで昨夜はよく眠れたのだろう、声にも力強さが感じられた。

「しかし、いくら焦っても、われわれではどうしようもありませんからね。これが力仕事なら、いくらでも手伝えるのですが——」

「さっき狩野さんと逢ったが、あのひともひどく渋い表情をしていた」

と、傍らのベッドから植草がいった。

「そのことですがね……、修理のほかにも、厄介な問題があるんですよ」

中原はいった。

「ああ……」

植草はベッドに坐りなおして、

「乗員のことだろう」

「そうですね」

中原はうなずいた。

「絶対に乗員が不足しています」

グリワフー島沖の戦闘で、伊一二六七は井関大尉や仁科中尉をはじめとして、五名の兵士をうしなつた——そのなかには、諏訪を庇って死んだあの若い兵士も含まれる。諏訪は彼の顔をなんとか想い出そうとしたが、いまだに記憶が甦ってこない。そのことに、鈍い痛みを諏訪は感じていた——。そのほかに、七名の兵士が負傷した。彼らはまだ、病室を離れられない。敵機の機銃弾をうけて瀕死の重傷を負った者も二、三あり、快復までにはさうとうの時間がかかりそうだった。

もともと伊一二六七は、檜垣の判断により運輸上必要な最低限の乗員だけで、日本を出港した。

敵との遭遇など考えられぬ簡単な航海のはずだったし、長い物資輸送任務で疲れた経験の浅い若い乗員を休ませてやらなければならなかった。

ところが、ミドウェイでの予期せぬ敗戦によって、情勢ががらりと変化した。

伊一二六七はその乗員だけでグリワフーにむかったが、そこで十名を超える貴重な戦力を失った。

「残った乗員だけでは——」

と、植草は言葉を濁した。

「ちよつと難しいですね。艦長や狩野さんが、補充兵を集めるためにうえと折衝していますが、思わしくな
いようです」

「だろうね」

と、植草は吐息を漏らした。

当然のことだった。

潜水艦に乗り組むためには、専門の教育機関で特別な訓練をうけなければならない。そんな人材が、日本を遠く離れた南方の基地ですぐに見つかるわけはなかった。

植草は顔を歪めていった。

「ただでさえ潜水艦要員なんて、簡単には見つからない。そのうえ、われわれはクエゼリンからこのナウルまで員数外扱いにされてきたのだ。そんなわれわれのために司令部が、熱心に動いてくれるとは思えない」

「日本に残してきた乗員は……、彼らを呼んだら」

と、諏訪が訊いた。

「無理でしょう、それは」

中原は苦笑した。

「彼らのためだけに、飛行機を用意してくれるとは思えませんね、とても——。それにだいいち、もう彼らは日本にいないでしょう」

「どうどうですか」

「ミドウェイがありましたからね。司令部だって、いつまでも彼らを国で遊ばせてはおきませんよ。いまごろは、いくつかの潜水艦に分散して乗り組まされているでしょう。日本の誰かが、ナウルにぼつんと古ぼけた潜水艦が取り残されていることを想い出してくれるまで、まともな乗員補充はおこなわれないでしょう」

「じゃあ、修理が終わっても、動けないではありませんか。われわれは、ずっとこのままナウル基地に足止めされるわけですか」

諏訪は思わず声を尖らせていた。

「われわれ……」

その言葉を捉えて、植草は笑った。

「なんだかきみは、ほんとうに乗員のひとりになってしまったようだな」

「いや……」

諏訪は口ごもった。

植草の表情が変わっていた。

彼はもう、笑ってはいない。

「だが、きみはすでに報道班員として、十分な経験を積んだはずだろう。潜水艦暮らしはもちろん、魚雷攻撃も、敵との戦闘も体験した。それどころか、実際に機銃で敵機を撃墜し、われわれを救ってくれた。これ以上、きみはなにを望むのだ。わかっているだろうが、潜水艦での生活は愉快なものでも、昂奮に満ちたものでもない。そろそろきみも、自分本来の途にもどる時期ではないのか。報道班員としてその眼でもつと戦いを見たいのなら、戦艦なり空母なりに乗り組むべきだ」

「いや、わたしは……」

「植草さん、彼はそんな——」

と、とりなすようにいった中原を片掌で制して、

「誤解しないでほしい。わたしは彼を怒っているのでも、責めているのでもない。逆に、わたしは彼に心から感謝しているよ。生命を救ってくれたことではない、彼の人柄のおかげでわれわれの単調で退屈な生活は微妙に変化した。中原君はいうまでもないが、井関君や狩野さんまでが、すこしずつ明るくなった。ほんのすこしかもしれないが、井関を喪った哀しみも、彼がいることでやわらいたことも事実だ。だが……、潜水艦乗りは長生きできない。職業軍人であるわれわれは覚悟のうえだが、きみはちがう。きみは、軍人でさえないのだ。そんなきみが、危険な潜水艦暮らしをつづけることはない」

植草は静かな口調でいった。

諏訪はうなだれてその言葉を聴いていた。植草のいうとおりなのかもしれない。諏訪は、彼のいうように兵士ですらないのだ。伊一二六七のなかでただひとり、いるべき場所をあたえられていない人間だった。

その余計者の彼を救うために、現実にはひとりの乗員が生命を投げだしていた。

諏訪は、中途半端な己の立場をあらためて思い知った。

「そんなことをいったら、彼が気の毒じゃないですか」

抗議するように、中原は唇を尖らせた。

植草はいった。

「諏訪君は、利口なひとだ。彼自身にも、もうわかっていると思う。職業軍人であるわれわれにとって、戦いで死ぬことはごくあたりまえの商売の一部だ。しかし、ジャーナリストである彼は、できうるかぎり己の職務を貫くべきだ。戦いで死ぬのは、彼の役割ではない。生きて、すべてをその眼で見つめ、後世のひとびとに語り継ぐことが彼の任務なのだ。このくだらない戦争がどうしてはじまり、どんなかたちで終わるのか、それを凝視し、真実をつたえるのだ。そのためには、簡単に死んではいけない」

諏訪は、顔をあげることができなかった。

「わたしは……、わたしはあなたが考えておられるような人間ではありません。報道班員として徴用されたことについても——」

それは、彼みずからの決断によるものではなかった。まわりのひとたちが敷いてくれた線路のうえを、ただだにも考えずに歩いてきただけのことだった。

「噂で聴いただけだが、きみは徴兵を逃れるために報道班員となって日本を離れたということだ。それがほんとうであるとすれば、わたしはきみの選択を羨ましく思う。こんな戦争で死ぬことはない。わたしや中原君は、プロフェッショナルとして軍人を選んでしまったのだから、しかたがない。この戦争の本質がどうであれ、プロとして職責を全うするためにそれが必要であれば、死ぬべきときには死ぬ。けれども、きみは生き延びるべきだ」

そして植草は、やりきれぬ表情でつぶやいた。

「このくそつたれな戦争で死ぬなんて、ほんとうに腹立たしいほど愚かなことなのだ。井関も、仁科も馬鹿だ」

「植草さん」

中原が唸るようにいった。

「いいから、黙って聴け」

植草は鋭い声で、叱りつけるようにいった。

「井関や仁科は、いったいなんのために死んだのだ。彼らだけではない。開戦以来、何万、何十万の日本人が死んだ。彼らは、なんのために死ななければならなかったのか——。家族や、愛する者を護るためか。そんなものは、汚れた現実を綺麗事にするための詭弁だ、まやかしたよ。つきつめてしまえば、彼らは日本という国家を護るために死んだのだ。ならば、国家とはなにか。それは結局、軍事としても政治家としても凡庸な東条とそのまわりのひと握りの人間たちがつくりあげた狂った体制のことだ。軍人だけが威張りちらし、ありとあらゆる自由を束縛し、弾圧するのが、いまの日本という国家だ。科学的に立証された真実さえ否定して、御伽噺のような神話を事実として子供に教育し、まともな判断力も持てぬ歪んだ人間を育てあげていく。そんないまの日本を護るために死ぬことに、なんの価値がある。この戦いは、はじめから日本が敗しなければならぬ戦争なのだ。まかりまちがって、日本が勝つようなことがあったら、世界は破滅する。きみは生きて、日本がどんなに惨めに敗北するか。それを見届けるのだ。そして、新しく甦った日本が二度とふたたびこんな愚行をくりかえさぬように、自分の眼に刻みつけた真実をつたえるのだ」

「そこまでほとんど一気に話し尽くした植草は、
「いや……、ちよっと昂奮してしまったな」

と、恥ずかしげに頬をすこし朱奔らせて、

「井関君や仁科君のことで、いささか混乱してしまったのかもしれない。しかし、わたしは嘘をいったつもりはない。井関にせよ、仁科にせよ、中原やわたしも、プロの軍人だ。だから戦争の本質の善悪とは関係なく、ただ職務に忠実であるだけだ。それで死ぬことにすこしの躊躇もないし、哀しんでもらったり褒めてもらおうなどとも思っていない。けれども、きみには生きて、生きて、生きぬいてほしい。そして、おれや中原、死んだ井関や仁科のことを、ときには想い出してくれ」

そう、声をおとしていった。

「……そうですね」

と、中原は諏訪にむきなおって、溜息を吐いた。

「艦を降りて、ラバウルに行くことを考える時期なのかもしれませんね。あなたがいなくなると寂しくなるけれど、いつまでもいつしよにはいられない」

諏訪はなにも応えられず、静かに中原たちを見返すばかりだった。

そんなことがあつてさらに数日を経たころ、諏訪は中原の口から、アメリカ軍のガダルカナル島上陸の報せを聴かされた。

中原の顔色は沈んでいた。

「こんな早く、敵がソロモンに襲いかかってくるとは、司令部も考えていなかったようですね。完全に、不意を衝かれたかたちです」

「グリフワフの件をみても、敵の反撃態勢の整備が意外に迅速に進んでいることはわかったはずだ。あんなところまで哨戒機を飛ばしてくるのだ。あれがわれわれに対する牽制だとしたら、敵は別の方向で大規模な反攻作戦を計画している——」

と、植草はいった。

「その程度のことは、考えておくべきだったな。どうも、うえのほうのやつらは、現場の報告を軽視して、すべてを机の前で頭だけで考えようとする」

中原は軽くうなずきかえして、説明をつづけた。

「すぐさまラバウルから三川中将の戦闘艦隊が出撃して、敵の主力を叩いたようです。ただ、敵の上陸を完全に阻止することはできませんでした。ガダルカナルはいまや敵に占領された状態にあり、陸軍の掃討部隊がグアムから派遣されました」

「こちらの戦力は、どのくらいなのだ」

植草が訝しそうに顔を顰めて訊いた。

「とりあえず、一木支隊のなかから九百名程度が、第一陣として出撃するようです」
中原はいった。

「輸送には駆逐艦が動員されたそうです。もうグアムを出発したでしょう」

「駆逐艦——」

意外そうに、植草は頸を傾げた。

一木支隊の先陣九百名は、駆逐艦に分乗してガダルカナル島にむかった。

輸送船は使われなかった。輸送船では脚が遅すぎて、途中敵の航空機攻撃をうける懸念があった。空から襲われたのでは、ひとたまりもない。

そのために、兵士を運ぶために高速の駆逐艦が使用された。しかし、駆逐艦は航空機を避けるには適しているが、大量の物資を積み込むことができない。一木支隊はしたがって、戦車などの重火器を持たず、一週間分の糧秣を携帯したのみだった。

先に述べたが、海軍の推測を陸軍司令部は精査もせずに、鵜呑みにした。

ガダルカナルに上陸した敵部隊の勢力は、せいぜい二千内外と彼らは判断していた。屈強な陸軍の精銳なら、その半分であっさり敵を海に追い落とししてしまうだろう。

陸軍も海軍も、まだその程度にしか事態を捉えてはいなかった。

しかし、現実には一万五千を超える兵力が、ガダルカナルを占領していたのだ。

もちろん、全速でガダルカナルをめざす一木支隊は、そのことを知るよしもない。

「しかし、ガダルカナルは遠いな……。ラバウルからの航空機援護も、期待できない」

と、なにか不安げに、植草はひとりごちるようだった。

「ですから、トラックの機動部隊が支援にむかうそうです。すでにトラックには近藤（信竹）中将の第二艦隊と南雲（忠一）中将の第三艦隊が進出していますし、そのうえ山本司令官自身がトラックにむかっているという情報もあります」

と、中原は勢いこんでいった。

「それから、これが肝腎な話なのですが、どうやらわれわれも出撃するらしいですよ」

「ほう……。修理のほうは、そろそろ終わるころだろうが、乗員の補充はどうなる」

「それが、あと二隻潜水艦が、明日にもナウル基地に到着するそうなんです」

中原は眼を輝かせて、

「どちらも、新型の海大七型ということです。それが檜垣艦長指揮下で戦隊を組み、機動部隊のガダルカナル突入を支援する陽動作戦をおこなうということです」

「すると、その二隻から乗員をすこしずつ削って、こちらにまわすというわけだな」

納得するように、植草はいった。

「いったいどんな作戦かは知らんが、ちょっと面白そうなことになりそうだな」

「ねえ、どうです」

と、中原が嬉しそうな表情を、諏訪のほうにふりむけた。

「もうラバウルへの転籍希望を出してしまっただんですか」

「いいえ」

諏訪は頸を振った。転籍希望を提出すれば、それきり中原たちと訣れなければならない。そのことが、どうしてだか意識に蟠って、まだ転籍を願っている気になれなかった。

「こんな状態ですから、まだ出しかねています」

「それはよかった」

中原は笑った。

「それなら、最後にもうひと作戦、われわれにつきあいませんか。機動部隊の支援作戦ですから、ガダルカナルへむかう敵輸送船団の攻撃というところでしょう。当然、駆逐艦の警護艦隊はつくでしょうが、檜垣艦長に任せておけば心配ありません。今度は、こちらが先手をとって奇襲攻撃をおこなうわけですからね、グリワフーのようなことにはなりませんよ。ラバウルに行く前に、もう一度われわれの活躍を眼に焼きつけておいてもいいんじゃないやありませんか。あなたはまだ、潜水艦本来の戦闘を見ていないんですから」

そういつて、中原は同意を求めるように植草を見た。

「もう一度だけ、諏訪さんを同行してもいいですよ」

「たしかに、今回は、正式な戦闘艦隊を組んでの作戦だから――。報道班員としても、経験しておいてもいいだろうが……」

植草は中原の勢いに気圧されたように、曖昧にそういつて言葉を濁した。

それを予期していたように、中原は声を弾ませた。

「実はね、植草さんも賛成しているって、もう狩野さんにつたえてしまったんです」

「どうやら、もうすこし中原たちといっしょにいられることになりそうだった」

諏訪はなにやらほっとしたような顔で、ふたりを交互に見やった。中原は単純に頬を綻ばせていたが、植草のほうはどうしてだかどこか晴れやらぬ曇った表情だった。

そのころ狩野は、おおきな机を挟んで檜垣とむかいあっていた。生ぬるいビールをふたつのグラスに注ぎわけて、いっぽうを檜垣のほうへ押しやった。

「やっと、動くことができそうですね」

と、ちいさく縁の欠けたグラスを、口許に運ぶ。

檜垣はビールに手をのぼそうとしない。溢れあがった泡が、グラスをつたわって机を濡らす。檜垣は瞼のあたりを、掌の腹でこすって、

「乗員の数だけは、なんとかなるだろうがね……」

「どんな人間がきても、井関君の穴は埋められませんが……、それで我慢するしかないでしょう。どんな任務でも、こんなところで燻っているよりは、ずっとましですよ」

檜垣はゆっくりとグラスを持ちあげ、

「あの報道班員が、また同行するそうだね」

「彼は、けっこう貴重な戦力ですよ。グリワフーでも、われわれを救ってくれましたからね。わけのわからぬ補充兵よりは、よほど頼りになりますよ」

「彼自身が希望するなら、それもかまわないが、もしかしたら、今度の作戦はちょっときついものになるかもしれないよ」

ひと口啜っただけのグラスを、檜垣は机に置いた。

狩野はみずからのグラスにビールをつぎたして、

「どうも、ナウルから南下して、ガダルカナルにむかう敵の輸送船団を待ち受け、攻撃することになりそうです……」

「司令部の報告が正しければ、任務それ自体はそう難しいものでもないだろうが……」

と、檜垣は赤茶けた顎髭を、指で撫でまわすようにしながら、

「ガ島の敵戦力が、果たして司令部の予測どおりのものなのかどうか……。敵は作戦にあれだけの大艦隊を展開したのだからね、偵察部隊だけの上陸だけで終わったとは思われない」

「三川艦隊の夜襲で、泡を喰らって逃げたとも考えられますが」

「三上艦隊は輸送船を沈めていない。そこに搭載されていた物資や兵員は、どうなったのだろう。予想以上の戦力が上陸しているとしたら、とんでもないことになる」

檜垣はこわばった表情で、髭を撫でつづけている。

3

檜垣や植草が抱いた漠然たる不安は、すぐに現実のものとなった。

ガダルカナル島は、日本人兵士の血を際限なく吸いとる巨大なポンプと化した。

一木支隊九百名は、八月十八日深夜、ガダルカナル島東部に上陸を開始した。翌十九日には、増援部隊を載せた輸送船団がラバウルを出港していたが、彼らはおそらく逸りきっていたのだろう、その到着を待つことなく単独で米軍への攻撃に踏みきった。

進撃した一木支隊は、まず小規模な斥候隊を派遣したが、それは米軍の待ち伏せをうけてあっけなく全滅した。その情報は、すぐに後方に控えた支隊本部につたわった。ここで彼らはいったん態勢を整え、状況の把握にとめるべきだった。

しかし、彼らはそうしなかった。

おそらくは、斥候隊が敵と接触したことで、その後につづく奇襲攻撃を見破られてしまうことを危惧したのだろう。一木支隊は無謀にも、その夜、総攻撃を執行した。

彼らは、上陸兵力は二千名程度という情報を信じきっていた。

みずからの眼で、事実を確認することをしようとしなかった。

彼らは、己の手で悲劇をその胸元にまで招きよせた。

ゆうに十倍を越える敵は、彼らの夜襲をすでに察知し、万全の態勢をとって待ち構えていた。彼らは、おおきく口を開けた罨のなかに、呐喊しながら駆けこんだ。

八月二十日深更、一木支隊は海岸沿いに進出し、敵陣に突入する。その陣容も、敵の兵力も彼らは知らなかった。

米軍の陣地の前衛には分厚いコンクリートで固められたトーチカがならんでいた。

そこから突きだした機銃が唸りをあげ、遮るものもなくまっすぐに進撃してくる日本兵をかたはしから薙ぎ倒していった。銃弾を避けるすべも、抵抗のしようもない日本軍にとって、もはやそれは、戦いではなかった。

そして夜が明けるのを待って、トーチカの背後から戦車があらわれた。

かろうじて機銃掃射をのがれた日本兵は、つぎつぎにそのキャタピラに踏み砕かれていった。戦車の装甲を貫くための武器を、日本軍は持ってさえないなかった。

そうして一木隊九百名は壊滅し、指揮官である一木大佐は絶望だけを背負ってみずから生命を絶った。

また、完成したばかりのヘンダーソン飛行場に三十機からなる米軍の航空戦隊が配備された——これによって、アメリカ軍はその後のソロモン海域の制空権争いで優位に立った——。

一木支隊全滅の事実は、ラバウルの司令部を愕然とさせた。

しかし、この時点でもなお、頑迷な日本側はガダルカナルのアメリカ軍勢力は数千という判断を変えようとしなかった。一木支隊の壊滅は、増援の到着を待たず独断で攻撃をおこなった拙劣な戦闘指揮によるものと考えた。

たしかに、一木支隊の単独突撃は無謀ではあったが、豊富な戦車や重火器を装備した一万数千の敵に、裸同然のわずか九百で立ちむかっていたのである。どのような作戦をとろうと、結果はおなじだったろう。連合艦隊司令部は、ガダルカナル上陸をめざす増援部隊を援護するために、ソロモン北方海域に進出していた南雲忠一中将指揮下の第三艦隊と近藤竹一中将指揮下の第二艦隊を派遣した。その戦力は、空母三——翔鶴、瑞鶴、龍驤——、戦艦三——比叡、霧島、陸奥——、重巡九、軽巡三、駆逐艦三十一という巨大なものだった。

むろんアメリカ軍も、F・J・フレッチャー中将指揮下の第六十一任務部隊——空母三（サラトガ、エンタープライズ、ワスプ）、戦艦一（ノースカロライナ）、重巡五、軽巡一、駆逐艦十六——を、日本軍の上陸阻止のために展開した。これにくわえるに、アメリカ側にはヘンダーソン飛行場の航空隊があり、彼我の戦力はほぼ互角といってよかった。

敵の発見は、日本側のほうが若干早かった。

まだ一木支隊がガダルカナルで闘っている時点で、日本の哨戒艇が敵の機動部隊を発見している。

それによって伊一・二・六・七にあたえられた命令も、急遽変更された。

檜垣につたえられたそれは、ナウルに到着した二隻の新型潜水艦を率いてサン・クリストバル島後方へ進出し、米軍機動部隊を背後から奇襲攻撃せよというものだった。

「馬鹿な……」

命令をうけとったとき、狩野は低く呻いた。

例によって文面には勇ましい言葉がつらなっているが、実現の可能性がきわめて稀薄な作戦であることは、読み返すまでもなく理解できた。

すぐさまナウルを出港したとしても、敵艦隊との距離とこちらの速度を考えれば、彼らが日本の機動部隊に先行して目標海域に到達することは非常に困難である。よほどに無理な航海をしなければ、こちらが着く前に敵味方両艦隊が接触し、戦闘がはじまってしまう。その混乱のなかで、敵のうしろにまわりこむことなど、できるはずはない。

だいいち、敵は潜水艦の奇襲をもっとも警戒している。

南に直進し、さらにサン・クリストバルをめざす。海図のうえに線をひくことは簡単だが、大規模艦隊が展開している状況下で、そんなアクロバティックな離れ業が成功するわけもない。周辺の警戒にあたっている高速駆逐艦にみつかれば、それで万事休すである。

「すでに、ガダルカナルの飛行場は敵の手にあります。眼と鼻の先のような間隔に、敵機がいる状態で、こんな無茶を奇襲ができるわけはありません」

「しかしね……、命令は下ってしまったのだよ」

表情のない顔でそういった檜垣は、薄い電信紙を掌のなかで握り潰し、

「あの報道班員は、同乗させぬほうがいいのではないか。予定されていた単純な輸送部隊攻撃とは、状況がまったくちがう。民間人の彼まで、危険に曝すことはあるまい」

「いまさらやめろといっても、肯きはしませんよ」

と、吐き捨てるように、狩野はいった。

「同行を許可したら、躍りあがるように喜んでいましたから」

「しよがない坊やだね」

檜垣は苦笑した。

「本人がその覚悟でいるなら、やむを得ない。しかし……、そうなると思われるのは、どうあっても生きて還つてこなければならなくなったね」

檜垣はそれから、指揮下にはいる二隻の潜水艦の艦長を呼び、手短かに命令内容を説明した。

そして伊一二七六は、僚艦二隻から数名ずつの乗員を転乗させて最低運航要員を確保すると、南にむかってナウルを出港した。

二隻の海大七型潜水艦——伊一九二、伊一八八——の艦長は、いずれも若い中佐だった。どちらも優秀な成績で海兵を卒業したが、潜水艦勤務を希望する者が同期生のなかにすくないことを憂慮し、あえてそれを望んだ者たちだった。

対米戦が現実味を帯びて語られるようになったころから、彼らのようにみずからの出世は度外視して、通常ならば敬遠されがちな潜水艦勤務を選択する士官が増えてきている。太平洋が主戦場になるのなら、潜水艦がそこできわめて重要な兵器になることを、彼らは知っていた。

軍は当然、彼らのような士官の出現を歓迎した。

彼らははじめから艦長候補として扱われ、規定のコースを辿って純粹培養された。

ふたりとも呂号艦での勤務を終えたばかりで、大型艦の指揮をとるのははじめてだった。兵員もみな、彼らとおなじように若かった。士気は旺盛だったが、実戦での経験は皆無にひとしい。

彼らの顔を一瞥した瞬間、狩野の胸になんとも表現しがたい苦いものがじわりと沸きあがった。不吉な予感というやつなのかもしれない。

もとより、狩野はそんなことを意識する男ではない。

だが、このときばかりはその味が妙に残り、ちくちくと神経に触った。

海大七型は、第一番艦——伊一七六。終戦までにこの海大七型は十数隻建造されたが、いずれも戦戦した——が昨年夏に完成したばかりの新型艦であった。

全長は一〇五・五メートル。全幅八・二五メートル。排水量は水上一六三〇トン、水中二六〇二トン。旧式な海大五型の伊一二六七より、すこしおおきい。

八千馬力の強力なエンジンを搭載しており——海大五型は六千馬力——、海上を最高二三・一ノットで走行する——ただし、潜航時速度は八・〇ノットで、こちらはわずかに海大五型のほうが速い——。

それまで船尾にもあった魚雷発射管を廃し、艦首にのみ六門の五三センチ発射管を集中装備している。またこの艦から、魚雷発射時の水泡噴出を抑える画期的な無気泡発射技術がとりいれられていた。

しかし、性能の異なるふたつのタイプの艦を組みあわせて戦隊を編成したことが、彼らの航海にすくなからぬ障害をもたらした。日本海軍の設計陣は新技術の開発や改良につとめ、つぎつぎに新型潜水艦の建造を進めたが、多種多様な艦種の併存が結果として複数艦編成による有効な潜水艦活用を阻害してしまつたことは否めない。

この場合も、そうだった。

編隊行動をとる以上、海上ではもつとも脚の遅い歩調をあわせて進まなければならなかった。

逆に、潜水時にあつては、伊一二六七のほうが先行するはずだったが、幾晩も徹夜をつづけた整備兵たちの懸命の努力や工夫——損傷のひどい一二・七ミリ機銃を強引にとりはずして、負担を軽減させた——も、遂に電池室の能力を一〇〇パーセントとりもどすことはできなかったようだ。潜航速度が七・二ノットを超すと、途端に艦内の硫酸蒸気濃度が急激に上昇した。七・五ノットに近づくと、その濃度はとても耐えられぬほどに高まった。

そのために、伊一二六七は潜航速度を七・二ノット近辺に緩めざるを得なかった。

つねに動きの鈍い伊一二六七を睨んで、速度を加減しながら進まなければならぬ、そのことが若いふたりの艦長を苛立たせた。しかも、編隊の指揮権はその足手まといな伊一二六七の檜垣が握っている。

いっぽう伊一二六七の内部でも、ヴェテランの兵士と新たに補充された若い兵士とのあいだに、さまざまな局面で摩擦が生じた。

ヴェテラン兵士たちは、かならずしも教科書どおりに動かない。

彼らは長い経験で、みずからがもつとも働きやすい環境をつくりあげていた。若い兵士たちは、そのやりかたに戸惑った。

以前なら、一度で充分だった命令伝達も、二度、三度とおなじ内容をくりかえさなければ、うまく相手につたわらなかつた。

つい、ヴェテランたちの声が荒々しくなる。

若い補充兵は困惑し、軋轢はますます膨れあがっていく。

机にむかって、ほんの心覚えのような日記を、ちいさな手帳に書いていた諏訪にむかって、

「どうも、うまくありませんね。いつもの航海とはちがう」

と、居室にもどってきた中原がつぶやくようにいった。

「なんだか、艦内の空気がぎくしゃくしている」

諏訪は手帳を懐にしまって、中原をふりかえった。

「古い連中は乱暴だから――。決して、悪気じゃないのでしょうか」

「あんなふうには頭ごなしに怒鳴りつけられたら、誰だっておもしろくありませんよ」

「おまえもはじめは、井関入道に叱りつけられて、ベッドでべそをかいていたものな」

と、植草がからかうようにいった。

「ちがいますよ。わたしは、毛布をかぶって、鮎坊主への復讐計画を練っていたんです。もとも、それもついに実現できませんでしたけど……」

そういつてから中原は、諏訪のほうを覗きこむようにして、

「なにを書いていたんですか。小説のアイデアですか」

「冗談ではありませんよ」

諏訪は苦笑した。

「とてもわたしに、そんな才能はありませんから――」

しかし中原は、そうと決めつけたように、

「わたしはどうせのらくろぐらいしか読まないんで、どんなふうにかかれてもいいですけど、ああ見えても鮎坊主は意外に読書家で、難しい漢字もよく知っていましたから、あまり正直に描写すると怒られますよ。いくらなんでも上原謙は無理だけど、せいぜいうまく一流スター程度の役どころに書いてあげることですね」

諏訪は笑いながら、頸を振った。

この男たちとも、もうすぐ訣れなければならない。

いつかこの戦争が終わるとしても、また彼らとどこかで再会できるなどとは考えられなかった。しかし、彼らのことは、きつと死ぬまで記憶から離れないだろう。

その彼らの言葉や行動を、諏訪はナウル到着のころから折に触れてその手帳に記録している。将来それをどうするあても、それどころかひとつの記事にまとめあげる自信もなかった。だが、なぜだかそうして書きとめておきたかった。

手帳とともに、記憶を司る脳の裏にも、鉛筆で刻みつけておきたかったのかもしれない。

「井関さんのことはともかく、あなたのほうは大変な嘘つきとして小説に登場するかもしれませんよ」

と、諏訪は反撃した。

「どうしてですか」

不服そうな顔で、中原が訊いた。

「植草さんに聴きましたよ。漫画しか読まないなんていつて、実は難解な哲学書からヴァン・ダインの探偵小説まで、驚くほどの読書量だそうじゃないですか」

「ひどい誤解だな」

中原はわざとらしく頭を両掌で抱えこんで、

「あれは、意味も正確には知らない癖に鮎坊主がやたらと難解な言葉を使って自慢したがるから、あのひとには理解できないような本を並べて、ぎゃふんと凹ましてやっただけなんですよ。あの本はみんな、狩野さんの私物をちよつと拝借したんです」

明日が訪れることさえ信じてはいないのに、この男たちは底抜けに明るい。

この時間がいつまでもつづいてくれることを、諏訪は祈りたい気分だった。

しかし、誰にも時の流れをとめることはできない。

彼らにも、そして諏訪のうえにも、たぶん明日は訪れてくるだろう。だが、その次の日をここに居合わせた全員が迎えられるかどうか――。

誰も、その確信はない。

どこかで歯車が錆びついてしまっているような軋みをあげながら、それでも三隻の潜水艦は戦場を求めて走りつづけた。

けれども、彼らは間に合わなかった。

いや、正確には目標とする海域にまで、到達することができなかった。

予期したとおり、敵の警戒網は小魚一匹すら見逃しにはしておかぬほどの緻密で嚴重なものだった。あるいは、暗号が完全に解読されていたのかもしれない。彼らは潜水艦による奇襲攻撃をあらかじめ予知し、万全の警戒網を敷いて待ち構えていた。

敵は、ガダルカナルにむかった主力艦隊の周囲に、数隻からなる駆逐艦隊をいくつか配備していた。しかも、潜水艦に背後を衝かれることを懼れて、主力艦隊後方も警備は、もつとも嚴重なものだった。

お互いが敵の存在に気づいたのは、ほぼ同時だった。

四隻からなる駆逐艦隊だった。その中央にあって、戦隊の指揮をとっているのはグリワフーで遭遇した「マグダリン」だ。

伊一二六七の魚雷をうけた傷も、いまやまったく快復している。

「マグダリン」の司令室で、ウイルスン中佐はめらめらと音をたてるように燃えさかる復讐心を、どうにも宥めかねていた。

絶対的に有利な状況で展開したはずのグリワフーでの戦闘で、彼はなかばやけくそのような敵潜水艦の魚雷攻撃を避けきれず、掌中におさめかけていた勝利をとりおとした。その屈辱感を抱えて生きることが、どうにも我慢ならなかった。

それだけではない。

突如としてどこから飛来した零戦の狂ったようなスウサイド・ダイヴによって、僚艦の「レティモア」——彼女はまだ、ドックで傷を癒している——は司令塔を破壊され、艦長のドミル中佐はいまも病院のベッドから起きあがれぬほどの重傷を負った。

その僚艦の苦闘を——そして、友人であるドミルの悲痛な叫びを——、脚を失った「マグダリン」のブリッジで、ウイルスンは指をくわえたまま眺めていなければならなかったのだ。

彼は、雪辱の機械を探し求め、ガダルカナルに赴く第六十一任務艦隊の警護をみずから志願した。

敵は、まちがいなく海中深く潜んで、艦隊に襲いかかってくる。

彼には、その確信があった。

そして彼はチームを率いて、敵がナウル方面からやってくると思えば、もつとも危険だと思われる艦隊後方北東の警備についた。

予測は的中した。

ソナー手から敵潜発見の報告をうけたとき、彼は押し潰さんばかりの力で、双眼鏡を握りしめた。しかも、獲物は三隻だという。ウイルスンは勢いよく床を踏み鳴らした。

プライドにかけても、失敗をくりかえすことは許されなかった。

より確実を期すために、ウイルスンは僚艦を左右に展開するとともに、近距離にあった味方の駆逐艦戦隊に援護を要請した。

これで、総計八隻の駆逐艦が、敵の潜む海域を丸くきりとりるように包囲することになる。

逃すはずはなかった。

その敵のなかに、グリワフーで遭遇したあの潜水艦が混じっていてくれるかどうか——。それは、ウイルスンにもわからなかった。

しかし、そこまで主に幸運を望むのは、強欲というものだろう。

ウイルスンは、己の心を諫めた。

あの敵がよいようにまいいと、どちらでもいいことだ。これは、グリワフーで味わった恥辱を三倍にして返してやるチャンスなのだ。

いずれにしても、黄色い猿の顔なんて、見分けがつかない。

おなじころ、檣垣はすこしの躊躇いもなく、戦隊の全艦反転を決断した。

いまのところ、敵は正面にあってすこしずつ横に散っている四隻だけだ。しかし、それだけではない。檣垣の勘が、それを教えていた。

正面の敵はむしろ速度を落とし、わずかずつこちらとの距離を拡げながら、左右に進んでいる。あきらかに、こちらを誘っているのだ。

敵が攻撃をしかけてくるつもりなら、潜水艦と駆逐艦の速度差を生かして、まっしぐらにこちらの頭上を抑えこもうとしてくるはずだ。だが、彼らはそうしなかった。

まるで、こちらが魚雷射程内にまで移動するのを、待っていてくれるようだった。彼らがまだこちらの

姿に感づいていないということは、到底考えられなかった。アメリカ軍の索敵機能は、こちらよりも遙かに優秀で、かつ範囲も広い。

檜垣が敵の存在を感じたということは、とりもなおさずむこうもこちらに気づいたということだ。奇襲攻撃は、成功しない。そう檜垣は判断した。

雷撃をくわえるために前進すれば、敵は後退していくだろう。敵は、こちらのリーチをぎりぎりのところで見切っている。これでは、いくらパンチをくりだしてみても、むこうは俊敏にそれをかわしてしまうだろう。

敵の手招きによって接近するのは、あまりにも危険だった。まちがいなく、敵には別働隊がある。

それがこちらの背後を抑えてしまうまでの時間を、正面の敵はみずからを囷にして稼ぎだそうとしている。

猶予はなかった。ここで反転が遅れば、敵の包囲網のなかに閉じこめられて身動きがとれなくなる。そこまで瞬時に計算した檜垣は、わずかに先行する二隻の僚艦に反転を命じた。

ともかく、未熟な彼らを安全海域まで全速で逃がさなければならぬ。そのための殿軍を、伊一二六七がつとめる。それが、檜垣の結論だった。

しかし、彼はみずからの味方に裏切られた。

針路反転、全速前進を命じられた二隻の海大七型は、それに従おうとしなかった。彼らには、檜垣の思考が理解できなかった。それほど若く、血気に逸っていた。

命令とは逆に、二隻の僚艦が正面の敵にむかって速度を速めたことを知った檜垣の表情が歪んだ。状況を細かく説明してやるような時間はなかった。やむなく彼は、おなじ命令を再度くりかえした。

だが、それはさきほどおなじように、虚しく黙殺された。眼前の敵を諦めて、尻尾をまるめてひきかえすほど若者たちは臆病ではなかった。彼らは、いざという瞬間になって怯んだ檜垣の柔弱さをあきれ、軽蔑した。ほんのすこし近づけば、敵駆逐艦を雷撃射程に捉えることができるのだ。

なぜ、この状態でむぎむぎとひきかえさなければならぬのか。彼らには、まるで理解できなかった。彼らは老いた檜垣の慎重さを嘲り、前進をつづけた。

だが、それは愚かさの同意語にすぎなかった。もう、どうにもならなかった。

しかたなく、伊一二六七は彼らのあとを追った。

敵の仕掛けた罠のなかに、我から勇んで頭を突っ込んでいった彼らを救うことは、もはや不可能かもしれない。しかし、ただ一艦だけ逃げるわけにもいかなかった。

それからの戦闘は、ウイルスン中佐の思惑どおりに進展した。敵を十分にひきつけたところで、彼は全艦に全速散開を指示した。

二隻の潜水艦は慌てて方向を転じようとしたが、速度の差がありすぎた。それが罠だと気づいたとき、すでに彼らの頭上には無数の爆雷が降り注いでいた。

後退して逃げようにも、その隙間さえ見つからなかった。

彼らの後方には、新たな敵駆逐艦が待ち受けている。二重の網が彼らを閉ざして、離さなかった。ふたりの若い艦長は、潜望鏡にすがりついたまま立ち尽くした。

潜航を命ずる暇もなかった。はじめは、伊一八八の司令塔に、爆雷が接触した。

それにつづいて、ほとんど間をおかず、ゆらゆらと落ちてきた爆雷が、伊一九二の前部甲板で炸裂した。伊一二六七は、彼らに近づくこともできなかった。

伊一二六七もまた、後方から追撃してきた駆逐艦の爆雷攻撃を浴びていた。限界深度まで急潜航して、その衝撃波を避けるだけでせいっぱいだった。それでも強烈な衝撃が容赦なく襲いかかり、伊一二六七は激しく揺れた。

檜垣にも、どうすることもできなかった。

艦体は上下左右に揺さぶられ、立っていることもできなかった。狩野でさえ、床に膝をついてからだをささえなければならなかった。諏訪は壁の手摺にしがみついていたが、汗に濡れた掌が滑った。そのとき、

艦体がふたたび降下にうつり、急角度で傾いた。誰かともつれあうようにして、諏訪は床に転がった。太股のあたりに、なにかがのしかかった。灼けるような痛みを感じた。彼のからだの下で、中原がなにか叫んでいた。

諏訪の右太股に、深々と金属片が突き当たっていた。衝撃に耐えかねて装甲鋼板が裂け、その一片がナイフのように諏訪の脚を貫いたのだ。全身を走り抜ける激痛に、諏訪は意識を喪った。

そのころ「マグダリン」のブリッジで、ウイルスン中佐は勝利の歓喜を噛みしめていた。最初の攻撃で、「マグダリン」のソナー手は二隻の敵潜が爆雷の直撃をうけて粉々になったことを確認した。残る一隻も、海底深く沈んだのか、スクリュウ音は聴こえない。しばらくのあいだ「マグダリン」はそこを動かなかった。

それから、どれほどの時間が経過したか。しかし、ソナー手はなんの音も捉えられなかった。

敵艦が消えた水域をウイルスンの指示によって数隻の駆逐艦が交互に横断し、ありたけの爆雷を投下した。ぐるりを丹念に索敵したが、二重に敷いた包囲網を敵が突破していないことは確実だ。まちがいに、敵はまだこの水域深く息を鎮めている。

ウイルスンは新たな指示を下した。さらに数艦がまた波のおさまらぬ海に爆雷をばら撒いた。最後には「マグダリン」みずからがその水域をジグザグに移動し、とどめの爆雷攻撃をくわえた。

敵が長時間つづいたその猛攻撃に耐え抜くことができるとは、とても思われなかった。爆雷の破裂深度は、艦ごとに調整してある。

衝撃波はきわめて広範囲に拡がり、上下移動だけでそれを避けることはできない。たとえ限界以上に潜航して爆雷の直撃を避けたのだとしても、深海の水圧から逃れることはできない。上昇しようと、降下しようと、彼らの運命はおなじなのだ。

それでもウイルスンは、慎重を期してなおも待った。海がまた、静けさをとりもどした。

ソナー手はヘッドセットをはずして頸を振った。周囲の全艦からも、つぎつぎに敵影を認めずという連絡がかえってきた。

おそらくは、海の重さがその始末をつけてたのだろう。ようやくウイルスンは、そう判断した。これでやっと、あの屈辱を、三倍にして叩きかえすことができたのだ。病院のドミルにも、胸を張って報告できる。それはきつと、彼の苦しみをやわらげてくれるだろう。

アイルランド人を相手にまわして喧嘩するときは、気をつけたほうがいい。もし先に手を出してしまったのなら、とつとそこを逃げだして、生命のあるかぎり必死に走りつづけることだ。ふりかえったり、立ち止まったりしてはいけない。彼らは、絶対に諦めないのだ。あたえられた痛みを、何倍にもしてお返しするまでは、絶対に――。

その戦果に満足したウイルスンは、艦隊をまとめ第六十一任務部隊を追ってガダルカナルをめざした。

誰かが、遠くで彼の名を呼んでいる。

その声はおかしなエコーがかかったように、頼りなく揺れて耳に響いた。瞼が糊付けでもされてしまったかのように、動かなかった。

なんとか眼をこじ開けようとした。

低く呻いた。からだを振らせた。なにかが全身にまとわりついて、手足の自由がきかない。名前を呼ぶ声が、しだいにおおきくなった。

うつすらと、眼を開いた。乳白色の光が溢れる。

覆い被さるようにして、誰かが顔を覗きこんでいる。

その像が二重、三重にかすれて見えた。視界が、ぼやけている。

眼を細めた。射しこむ光に、眼の奥が痛む。ゆっくりと、焦点があつてきた。

「ああ、気がついたようですね」

中原だった。

嬉しそうな顔をしている。

「いたい、なにを喜んでいるのだろう。」

「動かないほうがいいですよ」

中原の掌が、軽く形のあたりをおさえている。

「なにが、あったのだろう。思考がまとまらない。」

夢を見ているのだろうか。いや……、そうではなさそうだ。からだに感じるこの重みは、現実のものだった。起きあがろうとした。しかし、無理だった。

ひどく酔っぱらったあとみたいなのに、からだの芯が抜けてしまっただけのことをきいてくれない。ふわふわと宙空を漂っているような気分がした。

「まだ、鎮静薬が効いているはずですから」

と、中原はいった。

「ここは、どこなのだろう。どうして、おれは寝ているのだろう。記憶に霞がかかっている。もう一度、呻いた。喉が、ひりつくように渴いている。」

なにかいおうとしたが、言葉にならなかった。

喉の渴きを訴えるように、かろうじて持ちあげた指でそのあたりをさししめした。

「もうすこしの辛抱だよ」

中原のうしろで、誰かがいった。

植草の声だった。

中原の肩越しに、こちらを見おろしている。

「嚙下機能が回復すれば、水を飲むこともできる」

「どうしたのですか」

と、掠れた声で、諏訪はやっとそれだけいった。

「あなた……、駆逐艦の爆雷攻撃で、重傷を負ったんですよ。覚えていないのですか」

心配そうに眉根に皺を寄せて、中原がいった。

「ああ……」

唸るように、諏訪はいった。

すこしずつ記憶が甦ってくる。伊一二六七は僚艦二隻をともなつて、ガダルカナルへむかう敵機動部隊を背後から奇襲の攻撃するためにナウルを出港した。

しかし、目標海域に到達する前に敵駆逐戦隊と遭遇し、爆雷攻撃をうけた。

衝撃波を喰らって、艦がひどく揺れた。

突然、逆立ちするような格好で、急降下がはじまった。

「想い出しましたか」

ほっとしたように頬を緩めて、中原はいった。

「あなたは、わたしの生命の恩人ですよ。あなたが庇ってくれなければ、わたしはあの金属片で頸を切断されていたところですよ」

金属片――。

そうだ。バランスを失って床に倒れ、誰かともつれあうようにして転がった。それが、中原だったのか。そう……、あれは、たしかに中原だった。彼のからだの下で、中原が絶叫したのだ。そこまでは、はっきりと憶えている。

それから――。上体を起こした中原は蒼白の顔で、なにかを睨みつけていた。

その視線の先に、おかしな角度に折れ曲がった諏訪の右脚があった。床に投げだされた右脚は捻れ、膝のところまで外側に直角に曲がっていた。鋭く尖った黒いものが、太股につきささっていた。長さ三〇センチほどの、鈍く光る三角形の金属片だった。

それを見た瞬間、眼の前がふっと暗くなった。

「鋼板があんなふうに歪んで裂けるなんて、はじめて知りましたよ」

中原はいった。

「グリワフーのときといい、あなたにはほんとうに救けられてばかりでしたね」

「どうやら諏訪は、病室のベッドに寝かされているようだった。」

諏訪は枕のうえで、ゆっくりと頸を左右に傾けた。

まわりの板壁が、すべて白く塗られている。そのときはじめて、強い消毒液の臭いを鼻に感じた。部屋には、諏訪のベッドがひとつ置かれているだけだった。

個室らしい。

ふつう前線基地の病院で個室に收容されるのは、そうとうの重病者だけだ。自分の身になにが起こったのか、諏訪の胸に不安がこみあげてくる。

あれから、諏訪は一週間近く、高熱にうかされて眠りつづけてきたという。

中原たちは、毎日決まった時刻にこうして諏訪を見舞いにきてくれていたようだ。

「しかし……、わたしはあなたに救われましたが、あなたをこんなひどい目に遭わせてしまった。こんなことになるとは、思いませんでした」

じっとこちらを見つめたまま、哀しげな口調で中原はいった。

「無理にあなたを同行させるのではなかった。植草さんのいったように——」

「そうじゃない。そうじゃないんです」

搾りだすようにして、諏訪は中原を遮った。

「あれは、ただの偶然ですよ。それに、作戦への帯同は、わたし自身が選択したことです」

そこまで喋ると、息苦しくなつて咳きこんだ。

中原がなにかたしかめるように、うしろの植草をふりかえった。

ちいさく、植草がうなずいた。

中原はベッド脇の机に置かれたガラスの吸い飲みをとりあげ、諏訪の口許に運んだ。白湯さましだろう、なまぬるい水が口いっぱいには拡がった。

かすかに、甘い味がした。

全身のあらゆる細胞ひとつひとつに、その水分が沁みわたっていくようだった。

生き返つたような気がした。

「われわれは……、救かつたのですね」

すこし楽になつた喉で、そうたしかめるように訊いた。

「ええ……。こうしてあなたは、生きているじゃありませんか」

机に吸い飲みをもどしながら、中原はうなずいた。

「われわれだけは戦死者もなく、なんとかナウルまでもどつてくることができましたが……。でも……。あとの二艦は……。艦長以下、全員が戦死しました」

「そうですか……。まだ、若いひとたちだったのに」

と、諏訪は吐息をついた。

「われわれも、きわどいところだったんだ。あのままだったら、あと五分もつたかどうか」

中原の背後で、植草がいった。

あのとき伊一六七は限界深度まで急潜航して、そこで機関を停止した。重力によって、ごくわずかず艦体が沈んでいく。装甲が悲鳴をあげた。

それでも、檜垣は動かなかった。

敵の爆雷攻撃は執拗に、ひと呼吸する間もなくつづけられた。

すでに限界深度を超えていたが、強い衝撃波は容赦なく艦を揺さぶった。

我慢比べだった。膨れた血管が避けて鮮血を噴きだし、肺臓が破裂したとしても、動くわけにはいかなかった。檜垣は腕を組み、眼を閉じて、ゆつたりと壁にもたれかかっていた。理論上の計算を越えた艦の強靱さを信じて、ただじっと待つしかなかった。

そして、伊一六七は勝った。

「ちょうどそのころ、ガダルカナル島東沖で海戦がはじまったのです」と、中原はいった。

八月二十四日から二十五日にかけておこなわれた所謂第二次ソロモン海戦——アメリカ側はより正確に東部ソロモン海戦と呼ぶ——は、空母「龍驤」——彼女は、輸送船団護衛のために、本隊を離れて南下していた——から発進した零戦十五および九七式艦攻六機によるヘンダーソン飛行場攻撃にはじまった。

その攻撃隊が飛びたつとほぼ同時に、空母「エンタープライズ」の哨戒機が「龍驤」を発見した。

第六十一任務部隊のフレッチャー中将は、すかさず空母「サラトガ」から攻撃編隊を発進させた。三十機にのぼる急降下爆撃機と八機の雷撃機が、「龍驤」に襲いかかった。艦攻の援護に十五機の零戦がガダルカナルにむかつたため、そのとき「龍驤」に残る戦闘機はわずか九機にすぎなかった。

これでは、圧倒的多数の敵の攻撃を防ぎきれない。

四発の爆弾と一本の魚雷が、「龍驤」に命中した。

「龍驤」は大火災を起こし、大量の浸水によっておおきく傾いた。

基準排水量八千トンの小型空母「龍驤」は、ワシントン軍縮条約やロンドン軍縮条約で決定した艦船保有制限のあおりをうけ、建造中に数度の設計変更を施された。その結果、格納庫のうえにさらに一段格納庫を増設するなど、竣工したときには著しくバランスを欠いた復元性に乏しい船型になっていた。屋上屋を重ねたような「龍驤」は、船体強度の面でも根本的な問題を抱えていた。

その「龍驤」に、打撃からたちなおる力はなかった。

しだいに傾斜を深めた「龍驤」は、およそ四時間後に水没した。

もちろん、日本軍主力の第三艦隊も、索敵機によって敵機動部隊を発見した。

司令官南雲中将はただちに零戦十機、九九式艦爆二十七機からなる攻撃隊を「翔鶴」から発進させた。それにつづいて一時間後には、「瑞鶴」から第二次攻撃隊（零戦九、九九式艦爆二十七）が敵艦隊めざして飛びたつた。

第一次攻撃隊は敵戦闘機の迎撃をうけながらも、空母「エンタープライズ」に三発の爆弾を投下して、これを中破させた。しかし、「龍驤」と対照的に抜群の強度をもつ船体構造の「エンタープライズ」は弾薬庫の爆発による火災にも耐え、その後戦場を離脱している。

第一次攻撃隊は零戦三、九九艦爆十七を失ったが、それとひきかえに得た戦果はそれだけだった。

第二次攻撃隊は敵を発見できぬまま、「瑞鶴」に帰還した。

また、北方からまわりこんでガダルカナルにむかった日本軍の増援部隊——田中頼三少将指揮——は、ヘンダーソン飛行場から飛来した急降下爆撃機の攻撃をうけ、駆逐艦「睦月」が撃沈された——ほかに水上機母艦「千歳」、軽巡「神通」が中破。「神通」は田中中将が乗る、第二水雷戦隊の旗艦だった——。

結果として、この第二次ソロモン海戦で、日本は空母「龍驤」ならびに駆逐艦「睦月」、そして一隻の輸送船（金龍丸）を喪い、水上機母艦「千歳」、軽巡「神通」が中破した。航空機の損失も、六十機を超えた。対してアメリカ側は、空母「エンタープライズ」の中破のみ。航空機の損害も二十機程度、日本側の三分の一にすぎなかった。

どうみても、日本側の敗北だった。なにより、ここでもまた日本海軍は貴重な空母と航空機、ヴェテラン・パイロットを失った。そのうえ日本側は、肝腎の目的でもあつたガダルカナルへの増援輸送にも失敗した。中原は海戦の結果を簡潔にまとめて、諏訪につたえた。

「戦闘開始を知った敵は、艦隊をまとめてガダルカナルにむかいました。そのおかげで、われわれも救われました。まったく……、水圧で潰される寸前でした」

「海戦は、こちらの負けですね」

と、声をひそめて、囁くように諏訪はいった。

「損失を比較すれば、そういうことになるだろうな」

植草がベッドの隣の椅子に腰を降ろして、

「それより、制空権をむこうに奪われたことが痛い。ラバウルの航空隊も連日攻撃を敢行しているが、結果は思わしくない。これで、ガダルカナルへの増援輸送がいつそう難しくなった。これからは、夜間に駆逐艦ですこしずつ兵員を運ぶしかないだろう」

ガダルカナルの制空権を巡る闘いは、果てしない消耗戦になった。

ラバウルからは連日のように攻撃隊が発進したが、アメリカ側の技術開発と新戦法の導入により、すでにいつときのような零戦の絶対的優位は崩れ去っていた。たとえ互角に戦ったとしても、それは日本側の敗北にひとしかった。

とつくに生産力の限界に達していた日本には、失った航空機を回復することができなかった。それに対して、米軍は損害をうわまわる増援をおくりだしてくる。

彼我の戦力差は、拡がるいつぼうだった。

しかし、この段階に至ってもなお、東京の大本営はガダルカナル奪還を楽観視していた。上陸軍以上の兵力をガダルカナルに結集することさえできれば、攻略は容易であると考えていたのだ。

彼らは、米軍上陸戦力は数千という固定観念からぬけられなかった。たいして戦略価値もない島に、敵が大量の人員をおくりこんでくるはずはない。彼らはまだ、そう考えていた。

開戦以降、日本は南太平洋の島々に兵員を上陸させ、占領してきた。

その場合も、上陸作戦は多くて千単位、ほとんどが百名単位の兵員によっておこなわれた。敵も、おな

じであるはずだった。

彼らは、ものごとを量る定規しを、たったひとりきりしか持っていなかった。

自分に都合のよい物差しで、すべてを測量した。

現場と、遠く離れた東京との温度差もまた、拡大するばかりだった。

そのため、駆逐艦による兵員の夜間輸送が考案された。

あらかじめガダルカナルをとりまくように潜水艦を展開しておき、夜陰に乗じて駆逐艦を突入させ、停泊中の米軍艦隊を攻撃し、増援兵員を上陸させるという作戦だった——定期便のごとく夜ごとによつてくるこの駆逐艦隊を、米軍は「東京特急——エクスプレス——」と呼んだ——。そうやって、すこしずつ兵員をガダルカナルに集め、——数千の敵を掃討するに——充分な戦力がたまったところで、決戦にもちこむ。「われわれにも、トラックへの転進命令がでています」

と、中原はいった。

「いよいよ、お訣れですね」

諏訪は、まっすぐに中原を見あげて、

「すっかりお世話になってしまいました」

「お互いね」

にこりと、中原は皓い歯をこぼした。

「あなたという友人と巡り逢うことができ、ほんとうによかった」

「たぶんきみは、日本に帰ることになるだろう。もう、戦場にもどることもないだろう。のんびりと故郷で養生して、いい記事を書いてくれ」

諏訪の視線から顔をそらせて、植草はいった。

「そんなに……、わたしは悪いのですか」

諏訪は訊いた。鉛の棒でも吞まされたように、全身がひどく重く、怠い。しかし、それは薬のせいだろう。ほかに、どこも痛みはない。

伊一二六七のなかで、金属片に貫かれた右脚も——。

そこにあるはずなのに、右脚の感覚がまったくなかった。

思わず諏訪は、からだを起こそうとした。のしかかるようにして肩を抑えている中原の掌をはらいのけることができなかった。力がいらないかった。

「どういふことなのです、わたしの脚は……」

「やむを得なかった」

俯いたまま、植草はいった。

「金属片の傷も深く、動脈が切断されていたが……、それより、膝関節のほうがずっと問題だった。わたしや、この医者の手には負えなかった」

「重なって倒れこんだときに、わたしがうえから覆い被さったようになっちゃった。それが、いけなかったのです」

諏訪の眼を真正面からまっすぐに見据えたまま、中原はいった。

「あなたをこんなふうにしてしまったのは、わたしの責任です」

「いや……」

諏訪は弱々しく頸を振った。

「あれは、不可抗力です。誰の責任でもない……」

そのとおりで。伊一二六七は爆雷を避けるために、ほとんど真つ逆様になって急降下した。姿勢を維持できるような角度ではなかった。誰もが床に投げだされ、狭い室内をあちこちにぶつかりながらボールのように転げまわった。

右脚を太股のあたりから失うことになったのは、誰のせいでもない。

植草はいった。

「詳しいことは、この医者が説明してくれるだろうが、膝関節が砕けてしまっていて、そのうえ二カ所で骨折があり、筋肉もずたずたに断裂していた。切断するしかなかったのだ」

「わかっています。それしか、選択肢がなかったということでしょう」

「なんとかならんかと、いろいろがんばってはみたのだが……。きみの生命を救うためには、いくら検討してもそれ以外に方策はなかった」

「それだけで充分です」

短い溜息とともに、中原はいった。

「全力を尽くしていただいたことに、感謝しています」

「そういわれるとかえって辛い。わたしは無能な医者だ」

植草は赤くなって、うなだれた。

「ただ、この医者もたいしたことはない。基地に辿り着いたとき、きみはひどい発熱による衰弱で、かなり危うい状態だった。だから処置を急がなかった理由はわかるが、それにしても乱暴な手術だった。おそらく、鎮痛剤が切れる今夜あたりから猛烈に痛むだろう」

諏訪はなんとか笑おうとしたが、できなかった。頬が痙攣したようにひきつって、泣きだしそうな顔になった。

「脅さないでください。生命をとりとめただけで、満足しなければ——」

「いや、脅すわけではないが、きみの今後を考えても、あの手術では不完全だ。だから、一刻も早く帰国させるよう、狩野さんや艦長に働きかけてもらっている。国の、まともな病院で再手術をうけるのだ」

植草は真剣なおももちになって、

「切断面の肉を削りとり、骨もすこし切断する。そうして、周囲の皮膚で傷を包みこむのだ。きみにとっては厳しい手術になるが、しかし、そうしておけば、義足の装着も容易になるし、これからの生活の快適性という意味でも、まったくちがってくる。このままでは、帰ってから日々の生活に苦勞する。それにだいいいち、こんな施設では感染症を起こしかねない」

「艦長と狩野さんに任せておけば心配ありませんよ」

諏訪を抑えつけていた掌を離して、中原はいった。

「あのひとたちは、本気で動きまわっています。いざとなったら、海軍大臣を脅迫するぐらいやりかねないひとたちですから、安心していただくことです」

「そうだ。きみはこれから、何十年も生きていかなければならない」

と、声を励ますようにして、植草がいった。

「立場こそ報道班員かもしれないが、きみは敵との戦闘で数十名の味方を救って名誉の負傷をおった英雄だ。実際のところ、狩野さんあたり、きみのために勲章のふたつみつつもらってやるのだといって息巻いていたほどだ。国に帰っても、誰に遠慮することもない。胸を張って、おおいに威張って暮らすことだな」

「勲章はいららないな……」

と、やっと諏訪はかすかに笑うことができた。

「伊一・二六七に戦死者はなかったということですが、わたしのほかに負傷者は——」

「ああ……、四、五名がやはり、転倒やら機器に衝突したりで骨折した」

「どうしてだが、植草はそこでなにかいい難そうに顔を歪めたが、

「まあ、いずれはわかることだろうから、いま話しておくが……、このことはあくまで内密にしておいて欲しいが、実は、死者が一名あった。補充として、伊一・一八八から移ってきた若い兵がひとり死んだ」

「しかし、戦死者はないと……」

「おそらく書類上は、戦死として処理されることになるでしょう」

中原が植草の言葉をひきとるようにして、

「彼は、爆雷攻撃を回避しているとき……、精神に異常をきたして——」

「きみが意識を喪った直後、われわれは海底ぎりぎりのところで機関をとめて静止した。限界深度は超えていたが、爆雷を避けるにはそれしかなかった」

今度は、植草がつづけた。

「いつ水圧で潰されても不思議ではない状況だったが、あの攻撃を逃げるにはそれに賭けるしかなかったのだ。ところが、爆雷攻撃が途切れても、敵はなかなかあの海域から離れていつてはくれなかった。われわれはじっと縮こまって、息をひそめているしかなかった。音をたてれば、即座にソナーに感知される。電池室から漏れる硫酸蒸気で、艦内は窒息寸前だったが、咳ひとつすることもできん。まったく……、生き地獄とはあのことだった。彼は、その緊張に耐えきれなかったのだ」

その兵士は司令室で深度計算を担当していたが——植草から名前を聴かされても、諏訪は兵士の顔を記憶から探りあてることができなかった。ただ、いつもとはちがって、がっしりとした体格の大柄な若い兵が、機器の前に坐っていたことだけは憶えている。やはり、乗り組んだばかりの伊一・二六七ではなにかと勝手がちがったのだろう、武藤大尉やまわりの古参兵からたびたび叱りつけられていた——、突然、意味のない言葉を大声でわめき散らしながら暴れだした。ボールのような金属工具で、あたりの壁を力まかせに叩

きだしたという。

「それまでも古い兵とのあいだにいろいろと摩擦があつて、不満が鬱積していたのかもしれない。それにあの緊張がくわつて、一気に爆発したのだろう」

まわりをとりかこんだ敵駆逐艦のソナー手が、ヘッドセットに神経を集中しているときに、ドラムのように壁を叩きまわられたのでは堪ったものではない。

植草や中原は、慌てて男に跳びかかった。

「ところがその男、草相撲の小結だか関脇だかを張っていたようで、おれや中原ではとっても太刀打ちできない。武藤さんはあれで柔道三段だが、やつこさんに頬脣をしたたか殴りつけられて眼をまわす始末だ。完全に狂っていた。きつとそのせいだろうが、異常な力を発揮していた。馬鹿力とは、まさにあのことだ」

「ほんとうに……、無茶苦茶な暴れようでした」

と、男の拳を喰らつた痛みを想い出したのか、中原は顎のあたりを撫でた。

「それで、どうしたのですか」

諏訪は訊いた。男がそのまま暴れつづけていたら、伊一二六七も無事ではすまなかつたはずだ。最近アメリカ軍は、対潜攻撃用に開発された新型のソナーの配備を進めている。その性能は、きわめて高い。指向さえ正確なら、艦体を叩く工具の音は数十メートルの間隔があつても、まちがいなく捉えられる。

「しかたなく、最後は狩野さんが躍りかかつて……」

植草は口ごもつた。

それ以上尋ねる気にはなれなかつた。

いつまでも、男を暴れさせておくわけにはいかなかった。それは、伊一二六七そのものの自殺行為にほかならない。

その音をソナーに感知されれば終わりだ。

敵が攻撃を再開しても、もはやこちらは前進も後退もできない。いわんや、上昇すればたちまち爆雷と接触するだろうし、降下しても水圧に押し潰されるだけだった。

逃げ場はどこにもない。

奇蹟を信じてそこにとどまつたとしても、十分ともたずに窒息する。

男をおさえつけてしまうことが困難なら、ほかに選択の余地はなかつた。

狂気に操られたひとりの兵のために、八十を超える乗員すべてを道連れにするわけにはいかないのだ。いったん決断してしまえば、だれも狩野をとめることはできない。

最初から、狩野が彼を殺してしまうつもりだったのかどうか。それは、諏訪にも判断がつかない。あるいは空手なり柔道なりの手で、失神させてしまう気だったのかもしれない。

だが、結果として男は生命を失つた。

そして、伊一二六七は死神の腕をすりぬけ、かろうじて窮地を脱した。

「艦長や狩野さんには、部下全員に対しての責任がある」

植草はいった。

諏訪にだつて、そのことはよく理解できた。

たったひとりの狂人のために、残りの部下全員の生命を危険に曝すわけにはいかない。そんなとき、狩野は決して躊躇しない男だった。

「そのことは、忘れてしまったほうがいいですよ」

中原はゆつくりとたちあがつた。

「もつと話していただきたいけれど、出港の準備もありますから……」

「出発はいつ——」

「明早朝です」

「そんなに早く」

「きょうは、このまま徹夜になりそうです」

そういつて中原は、諏訪のほうに右腕をのばした。

その掌を、包みこむように諏訪は両掌で握つた。中原も、強く握りかえしてきた。

「もう、お逢いする機会もないでしょう。お元気で」

諏訪の掌を握つたまま、中原はいった。見開いたままの眼に、涙がいっぱい溜まっている。

「戦争が終わつたら、ふたりでのんびり温泉にでも行きましょう」

「芸者をあげてね」

と、諏訪も湿った声でいった。泣きだしたくなるのを、懸命に泳いでいた。この男たちとの訣れに、じめついた涙は似合わない。なぜだか、そんな気がした。だから、諏訪は耐えていた。握りあつたふたりの掌が、こまかく震えている。

植草もたちあがつて、中原の肩を優しく抱えた。それが合図になったように、中原は掌を離した。

「看護婦に話しておくから、眠剤をもらうといい。すこしは、ましだろう」と、植草はいった。

ふたりはならんでドアの前まで歩いたが、そこで植草がふりかえった。

「温泉には、おれもつれていってもいいよ」

「ええ」

諏訪はうなずいた。

植草は笑った。

「艦長と狩野さんも呼ぼう。彼らに、勘定のほうは任せておけばいい」「つぎに逢うときは、日本ですね」

中原が微笑みかけた。

訣れの挨拶はなかった。そんなもの、誰も必要だとは思っていなかった。

引き戸が閉まり、廊下を歩くふたりの蹀音が遠ざかっていく。

歩きながらふたりは、なにやら声高に話しあっていた。

「草津か箱根がいいんじゃないですか、やっぱり温泉といえは」と、中原の声だ。

植草の声が応える。

「いや、そんなありきたりなところじゃつまらん。もっと辺鄙な山奥の静かな——」

「そんなところでは、綺麗な芸者を呼べんでしょう」

どうやらふたりは、温泉旅行の計画を語りあっているらしい。

戦争が終わったたら、諏訪と行く約束の温泉旅行だ。もちろんふたりとも、そんな日がいつかやってくるは、これっぽっちも信じてはいない。しかし、ふたりはその幻の計画を練りあげることに熱中している。

どこへ行くことで、ふたりの話はまとまるのだろうか。わたしはそれがどこであるかと、喜んでついていく。ふたりの声は、もう聴こえなくなった。

諏訪はシーツをひきあげ、頭からすっぽりとかぶった。

看護婦のくれた睡眠剤で、数時間眠ったらしい。

燃えるような脚の熱さで、諏訪は眼醒めた。全身が、ぐっしりと汗で濡れていた。痛みというより、ただひたすらに切断された脚が熱い。

そのうえで、まるでコークスが燃えさかっているようだ。

諏訪は呻いて、机の吸い飲みに掌をのぼした。しかし、それより早く、誰かがそれを持ちあげ、諏訪の口許に近づけてくれた。

「狩野だった。」

「痛むか」

「いいえ……。でも、燃えているみたいです」

「医師を呼んでやろうか。麻酔を注射してくれるだろう」

「いや、我慢できます」

「そうか。麻薬はあまり使わぬほうが、治りもはやいそうだからな」

狩野のくれた吸い飲みの水は、氷が混じって冷えていた。

「辛くなったら、いつでもいってくれ。医師を呼ぶ」

狩野は吸い飲みを丁寧付近で拭い、机に置いた。いつ眼醒めるか知れぬ諏訪のために、狩野は冷やした水を用意して待っていてくれたのだろうか。

諏訪はいった。

「明日出港と聴きました」

「厳密には、もう今日だな。あと、四時間ほどで出発だ」

狩野は壁に掛かった丸い時計を見て、

「きみとも、もう逢えなくなるな。また、退屈な生活になる」

「最後まで、迷惑のかけどおしでした」

「とんでもない。きみには幾度も救けられた。檜垣さんも見舞いにきたがっていたのだが、どうしても時間がとれなかった。こんなことになってしまつて済まないが、日本に帰つたらすっかり養生してくれということだった。だが、こんなことで挫けるきみでもあるまい」

「それは、買い被りというものです。でも……、生命とひきかえにしたと思えば——」
喘ぎながら、諏訪はいった。

「はじめは厄介な荷物だと思つたが、きみはほんとうにいいやつだった。乾燥したわれわれの暮らしに、潤いのようなものをあたえてくれた。きみのおかげで、井関や中原も本来彼らが持つていた明るさをとりもどした。すっかり年寄り臭くなつていた植草さんまで、つまらぬ冗談をいいだした。いっしょにいられて、愉しかったよ」

椅子のなかで窮屈そうに脚を組んだ狩野は、膝のあたりに掌を重ねて、

「きみは明後日、輸送機でいったんクエゼリンに運ばれ、そこで飛行機を乗り換えて日本にむかうことになる。あちこちあたつてみたが、日本にもどるにはこれがいちばん早い。むこうでは、京都大学の病院がひきうけてくれる。これでお訣れだが、艦長もわたしも、きみには心から感謝している。それを、いつておきたかった」

上体を傾け、諏訪を覗きこんだ。

「植草さんや中原さんにも、おなじようなことをいわれましたよ」

諏訪は恥ずかしそうに苦笑した。

「あついらといっしょに、温泉に行く約束をしたそうだな。わたしや檜垣さんも誘われた。喜んでつきあうが、ただし、払いは割り勘にしてもらいたいな。きみたちの芸者代までもたされてはたまらん」

「計画ができあがつたら、かならず連絡します」

諏訪がそういうと、狩野はすこし哀しげな吐息をついて、

「それで——、感謝の気持ちというわけでもないが、勝手なようだが、きみの今後の生活について、多少協力させてもらった。きみには、海軍から感状と報奨金が出る」

「そんな——」

哑然とした表情に、諏訪はなった。

「遠慮することはない。きみには、堂々とそれをもらう権利がある。莫大な金額ということはないが、それでも都心の一等地に一軒買える程度の額は出る。それで、商売でもするといい。脚一本の代償としては安すぎるかもしれないが、それしかできなかった」

檜垣と狩野が、それを喧嘩腰で軍とかけあつたのだという。

さすがに司令部は返答を渋つたが、檜垣はラバウルの片岡少将を動かした。彼の溺愛するシェパードの生命の恩人が、右脚を失わなければならなくなった。それを放つておくつもりなのか——と、檜垣は電話口でほとんど片岡を恫喝したそうだ。

植草がいうとおり、まさしく檜垣と狩野は軍を脅迫したのだ。

「わたしのために、そんな……」

驚きとあきれがない混ざつた口調で、諏訪はいった。

「そんなことをして、あなたたちの立場が——」

「そんな斟酌は無用だな。わたしも檜垣さんも、いまさら將軍たちに好かれようとは思っていない。遠慮なく、われわれの気持ちをうけとつてくれ。といつても、実際にはこちらの懐が痛んだわけではないが」

「もうしわけありません」

諏訪がそういうと、照れているのか、狩野は困つたような顔で頭を掻き、

「だが、芸者代だけは絶対に厭だぞ。そつちは、檜垣さんを騙せ」

と、ことさらぶつきらぼうな調子でいった。

「そうです」

諏訪はシートで顔を隠し、震えた声でいった。

狩野はわずか三ヶ月にもみたぬ日々をともにすごしただけの諏訪のために、軍という組織に平然と喧嘩をしかけていく。そのいっぼうで、たとえ狂つたとはいえ、諏訪とおなじ年頃の兵士の頸をすこしの逡巡もなくへし折ることができる。

おそらく彼は、どちらのことも、顔色ひとつかえずやつてのけるのだろう。

狩野は、そういう男だった。

そして、諏訪がその行為を素直に喜ぶと、子供のように照れてわざとらしく不機嫌なふりをする。どんなに努力しても、すくなくとも役者にだけはなれない男なのだ。

「とにかく、それだけを話しておきたかった」

狩野はいつもの無表情にもどつて、たちあがった。

それから、姿勢をぴんとただと、右腕を静かにかざし諏訪に敬礼した。

諏訪は言葉を失ったまま、部屋を出ていく狩野の背中を見つめていた。

喉までこみあげていた、死なないでくれという言葉は、ついに声にできなかった。

5

ガダルカナルの戦場は、日本軍にはてしない流血を要求した。

駆逐艦による「東京特急」はつづき、攻撃の主力となる川口支隊（川口清健少将指揮）は九月七日、ガダルカナル島への上陸、結集を完了する。彼らは、十二日夜と十三日夜の二度にわたって、アメリカ軍陣地に攻撃を敢行した。

闇を利用して陣地に接近し、突入後一斉に発砲する。

日本軍お家芸の夜襲、肉弾戦法だった。

しかし、それもアメリカ軍の圧倒的な火力の前には虚しかった。

強力な重火器の集中砲撃が、彼らの突撃を阻止した。

この攻撃に参加した日本軍川口支隊の兵力は、およそ六千。そのうち一〇パーセントを超える六百五十名が戦死し、五百人が負傷した。夜襲は、成功しなかった。アメリカ軍陣地の奪取に頓挫した彼らは、上陸地点へと撤退する。

だが、彼らの闘いはそれだけでは終わらなかった。

彼らはみずからの生存のために闘わなければならなかった。

それは敵との戦いよりも、さらに残虐で苛烈なものになった。

糧秣の欠乏である。

駆逐艦隊に警備された輸送船団による連夜の輸送は、すでにアメリカ側から「トウキョウ・エクスプレス」と名づけられていたように、完璧に敵に察知されていた。しかも、輸送部隊は潜水艦をとまっております。その夜間奇襲によりアメリカ軍の艦船にもすくなくならぬ犠牲が生じた——空母「ワスプ」は潜水艦「イー一九」の雷撃によって撃沈させられた——。

当然のことだが、アメリカ側の警戒は日増しに厳しくなっていた。

日本側にとつては、やはりガダルカナル周辺の制空権を奪われたことが致命傷になった。

アメリカ軍はガダルカナルに飛行場を持ち、その戦力は増強されつつづけていた。

防御力をほとんど持たぬ日本の輸送船は、ヘンダーソン飛行場を出撃した戦闘機の餌食になった。その結果、物資の輸送は高速駆逐艦に頼らざるを得なくなった。

駆逐艦では大量の物資は運搬できない。

その駆逐艦さえ航空機攻撃に曝されて、ガダルカナルに接近することが難しくなった。

ガダルカナルに残った川口支隊は、十分な補給を確保することができなくなった。

糧秣の不足は、智恵や精神力で補えるものではない。

一日に配給される食糧が半減し、三分の一になった。飢えは確実に兵士たちを消耗させていく。

ぎりぎりまで島に近づいた駆逐艦が、ドラム缶に詰めた食料を流していくのだが、よほどの幸運に恵まれぬかぎり、それは海岸までとどかなかった。

ついに、まともな食料が尽き、川口支隊の兵士たちは飢餓地獄に陥った。

ここに至って、ようやく大本営もガダルカナル奪還の容易ならざることを悟った。

千名単位の戦力ではどうにもならない。確実にガダルカナルをとりもどすためには、数万人の兵員を投入する必要がある。

陸海軍は醜悪な責任の擦りあいを展開したあげく、結局二個師団の増援を決定した。

駆逐艦輸送に拍車がかけられ、日本軍は二個師団および作戦統括の第十七軍司令部——司令官・百武晴吉中将——をガダルカナルに上陸させた。日本軍の総兵力は、二万数千に膨れあがった。

これは、アメリカ側の兵力と、ほぼ匹敵するものだった。

その支援のために重巡三、駆逐艦三からなる第六戦隊（五藤存知少将指揮）が派遣されたが、ノーマン・スコット少将指揮の米巡洋艦部隊（重巡二、軽巡二、駆逐艦五）とサボ島沖で遭遇、戦闘を展開した——サボ島沖海戦、アメリカ側呼称はエスベランズ岬沖海戦——。

米軍はこの戦闘ではじめて艦隊砲撃戦にもレーダーを活用し、夜間戦闘の不利を克服して日本軍は重巡「衣笠」の奮戦によってかろうじて全滅を免れたものの、重巡「古鷹」、駆逐艦「吹雪」が沈没、五藤少将も戦死するという大損害をこうむった。新兵器レーダーを駆使した米軍の前に、もはや日本海軍伝統の夜戦も通用しなかった。

ガダルカナルに結集した二万余の日本軍は、数度にわたって米軍陣地に攻撃をくわえたが、そのつど重火器をならべた厚い防御壁におしもどされて、さしたる効果をあげることはできなかった。

日本軍は上陸直後にヘンダーソン飛行場からの航空攻撃を受け、揚陸した重火器や弾薬、さらに糧秣の大半を焼かれてしまっていた。

彼らは敵と同時に、迫りくる飢餓への恐怖や跳梁をきわめるマリア熱とも闘わなければならなかった。物資の補給がおぼつかない以上、勝負をはやく決めてしまわなければならなかった。時間が、もうひとつの強大な敵だった。

焦燥感に背中を圧されるように、上陸軍は満足な武器もないままに総攻撃を決定する。

大本営はそのために、大規模な海上支援を決定した。

十月下旬には、予定されていた陸軍上陸部隊の総攻撃にあわせ、連合艦隊は空母四、戦艦四、重巡八、軽巡二、駆逐艦二十二という大戦力をソロモン海域に派遣した。これが二十六日に米軍機動部隊と遭遇、戦闘を開始した。南太平洋海戦——米側呼称・サンタクルーズ沖海戦——である。

これは、事実上、日本海軍最後の勝利となった。

日本軍は一隻の艦船も失うことなく、敵の空母「ホーネット」と駆逐艦「ポーター」を撃沈し、さらに空母「エンタープライズ」、戦艦「サウスダコタ」などを中破させた。前述したように、太平洋戦線で行動可能なアメリカ海軍の空母は、この段階で一隻もなくなった——ただし、その状態は長くはつづかず、わずか二ヶ月後には六隻の新造大型空母が戦場に投入された——。

しかし、勝ったといっても、日本側もこの海戦で百を超える攻撃機を失っていた。それとともに多くのヴェラン・パイロットが海に散った。また、目標であったヘンダーソン飛行場の破壊も、迎撃機と対空砲火に阻まれて失敗した。海戦の勝利も、つまるところ陸上にある上陸部隊を援助するまでには至らなかった。多量の飛行機とパイロットをなくした日本軍は、それ以降、ソロモン海域の制空権を争う資格を喪失した。日本とアメリカの国力、生産力の格差を考慮すれば、引き分けはむろん、六分四分程度の勝ちでは勝ちなならない。そういうことだった。ロシアにおけるバルティック艦隊との日本海海戦のように、こちらがほぼ無傷で敵を全滅させるような圧倒的勝利を得て、はじめて勝ちといえる。だが、航空機の発達によって戦争のありようがまったく変化してしまったいま、そんなかたちの勝利は——真珠湾のごとき、ルール無視の完全な奇襲ならともかく——現実として不可能だったのだ——ところが、戦争末期のぎりぎりの状況に至ってもなお、戦争指導部のなかには日本海海戦の再現を前提に、アメリカとの艦隊決戦の作戦計画を立案していた参謀がすくなくなかったという。その程度の間人が、日本の戦争を率いていた——。

ともかくも、海ではいちおう勝ったが、陸での闘いはそうはいかなかった。

重火器に対して、空きっ腹を抱えたうえに猖獗をきわめるマリア熱に斃された状態の肉弾突撃ではどうしようもなかった。上陸軍の総攻撃は、惨めな失敗に終わった。

日本側が決定的な勝利を掴むためには、やはり敵とおなじ強力な火砲の装備が不可欠だった。それ以前に、飢餓と跳梁する熱病から、兵士を救ってやらなければならなかった。

それにはなによりも、大量の物資と増援兵士をガダルカナルへ運ばなければならぬ。

駆逐艦十一の護衛艦隊（田中頼三少将指揮）と十一隻の輸送船からなる大型の輸送船団が編成された。輸送船は陸軍の増援兵と物資を満載していた。一隻の輸送船を一隻の駆逐艦で警護するということ、燃料不足に悩んでいた日本軍——海軍は「大和」、「長門」、「陸奥」、「金剛」、「榛名」の五戦艦をトラックに集結させたものの、結局は燃料の不足を理由に戦線に投入しなかった——としては、思いきった作戦だった。

海軍はその輸送艦隊の支援のために、戦艦「比叟」、「霧島」の二艦を中軸とする挺身攻撃隊——阿部弘毅中将指揮——と、近藤信竹中将指揮下の第二艦隊（旗艦、戦艦「霧島」）を出撃させた。

彼らはそれぞれ、アメリカ軍の迎撃艦隊と衝突した。

まず十一月十二日には、挺身攻撃隊がダニエル・J・キャラガン少将率いる支援部隊——重巡二、軽巡一、

駆逐艦六——と戦闘に陥った。アメリカ側の支援艦隊はこの戦闘でほぼ壊滅し、キャラガン少将も戦死を遂げるが、日本側も戦艦「比叡」と駆逐艦二隻を失った。

海戦の結果だけをみれば、痛み分けというところだが、挺身攻撃隊は肝腎の目的である飛行場砲撃——従来、戦艦の陸上基地への艦砲攻撃は、用兵上の禁忌とされてきた。しかし、連合艦隊は十月中旬に、そのタブウを破って戦艦「金剛」、「榛名」による米軍基地への艦砲攻撃を決行、飛行場をすたすたに破壊して、ごく短い期間ではあったがその機能を停止させたことがあった。挺身攻撃隊や第二艦隊の出撃は、その再現を狙ったものだった——を果たせず、帰還を余儀なくされた。

つづく十四日には、第二艦隊がウイリス・A・リー少将指揮の第六十四任務艦隊——戦艦二（ワシントン、サウスダコタ）、駆逐艦四——と接触した。

戦闘は翌十五日未明までつづいたが、ここで日本側は戦艦「霧島」を敵の確なリーダー射撃によって沈められた。アメリカ側に沈んだ艦船はなかった。

この二度にわたる海戦を、第三次ソロモン海戦と呼ぶ——アメリカ側の呼称は、ガダルカナル沖海戦——。

この結果、日本側は戦艦二、重巡二、駆逐艦三を失った。

アメリカ側の損害は、軽巡二、駆逐艦七にとどまった。

総合すれば日本側の敗北とみるしかないが、艦船の損失はともかく、なよりの痛手となったのは、やはり飛行場への砲撃ができなかったことだった。

そのため、輸送船団は猛烈な空襲をうけることとなった。護衛艦隊も空からの攻撃は避けようもなく、たちまちのうちに七隻の輸送船が撃沈した。

五回にわたって執拗にくりかえされた空襲を、どうにか生き延びた四隻の輸送船はみずから海岸に乗りあげて揚陸を強行しようとしたが、敵機は容赦せずそこにも襲いかかった。航空機による攻撃と基地からの砲撃の前には、彼らはまったくの無力だった。

餓えた兵士たちへの物資の輸送は、そうして失敗した。

その後も日本軍はガダルカナル奪回を諦めず、幾度か物資、兵員の輸送を敢行するが、いずれも効果をあげることができなかった。

制海、制空の両権を失った日本にとって、ガダルカナルを巡る戦いは実質的には第三次ソロモン海戦の敗北で終わっていた。

アメリカ軍の増強はその間もつづき、すでにガダルカナル占領軍の規模は、二個師団を投下した日本軍よりもおおきなものになっていた——最終的に、アメリカ陸戦部隊の兵力は五万を越えた——。

武器、弾薬に乏しい日本軍にその反撃をささえきる能力はなく、彼らはしだいに追いつめられていった。そのうえに、飢餓とマラリアが重くのしかかった。

糧秣も医薬品もあたえられなかった彼らには、アメリカ兵の銃弾よりも飢えと熱病のほうが、遙かに怖ろしい敵になった。その年が暮れようとしていたころ、ガダルカナルでは毎日百名以上の兵士が飢餓と熱病のために死んでいかなければならなかったという。これはもはや、戦争ではない。

その年の大晦日、ついに大本営は御前会議においてガダルカナルからの撤退を決定する。遅すぎた決断だった。

ガダルカナルからの撤退は翌二月四日の深夜をもって完了するが、投下された三万二千の日本兵のうち二万一千名がガダルカナルで死んだ——うち、戦死者はせいぜい五千程度とされている——。

アメリカ側は五万の兵員を投入、戦死者は千六百、負傷者四千。

この数字が、そこでくりひろげられた戦いのありさまを明白に物語っている。

ミドウェイのときとおなじように、軍事政府はこの惨敗を国民に隠した。

日本という国家は、すでに頭脳の部分から腐りはじめていた。

ミドウェイにつづくガダルカナルの敗北で、戦局は完全に転換した。

方向を変えてうねりはじめた歴史の流れを、日本にとめることはできなかった。

それからの日本は負けつづけ、それでも発狂したように戦いつづけ、また負けた。

そして、アメリカが開発した悪夢のような大量虐殺兵器が、皮肉なことに日本をようやく民族としての破滅の瀬戸際から救ってくれた。原爆はたしかに、瞬時にして数十万の民間人の生命を蒸発させたが、それがなければまちががなく日本という国家と日本人という民族が地球のうえから消滅してしまっていたらろう。

逆にいうなら、それだけの犠牲をつきつけられなければ眼が醒めぬまでに、日本は狂いきっていた。諏訪俊一は、そうした経緯を戦後になつてはじめて知った。

彼はそれまでの二年半余の歳月を、情報から隔絶された世界で暮らした。

戦争が終結するまで、彼はずっとハワイの日本人捕虜キャンプに収容されていたのだ。

狩野たちが準備しておいてくれたとおり、彼は伊一二六七の出撃の翌日、輸送機に載せられてナウルを飛びたち、クエゼリンにむかった。

しかし、途中で激しい雷雨に見舞われた輸送機は、嵐を避けるためにさんざん迷走したあげく、計器の故障でギルバート諸島東沖の海上に不時着した。不時着というより、ほとんど墜落だった。雷に直撃されて計器類が乱れ、しまいにはどちらにむかって飛んでいるのか、まったくわからなくなっていた。だから、着水点の正確な位置も、把握しきれていなかった。

乗員三名と諏訪だけが奇跡的に生命をとりとめ、ゴムボートで沈みはじめた機体から脱出した。それから三日ほど、ボートは海上をあてどなく漂いつづけた。

無線機や食料はもちろん、水さえ機から持ち出すことはできなかった。

嵐は嘘のように去って、赤道の太陽が容赦なくボートのなかの彼らに照りつけた。その三日を、彼らは釣り上げた魚を食ってかろうじて生きのびてきたが、それも限界に近かった。

ときおり獲れるちっぽけな魚では、男たちの飢えを満たすことはできなかったし、渴きが彼らの神経をいつそうささくられたせた。

不時着時の衝撃で、脚の傷が破れた諏訪は、わずかながらも出血しつづけ、衰弱しきっていた。

三人の兵士にとって、動きのとれぬ諏訪の存在は、邪魔以外のなにものでもなかった。

諏訪は魚を釣ることもできず、ただ寝そべって苦痛に呻いているばかりだった。それでも兵士たちは、やっと吊りげた獲物を、彼にわけてやらなければならなかった。

彼がいなければ、生き延びるチャンスはそれだけおおきくなる。

兵士たちがそう考えたのも、あたりまえのことだった。

諏訪の呻き声が睡眠の妨げになっていたことも、兵士たちの理性を薄める要員になった。

兵士たちのひとりが、ほとんど意識を失っている諏訪の頸に掌をかけたとき、突然海が割れ波を白く砕いて潜水艦が浮上した。米軍の潜水艦だった。

諏訪たちは潜水艦に収容され、ハワイへ運ばれた。

諏訪はきわめて危険な状態だったが、彼にとつての幸運は、そのままホノルルの病院に搬送され、そこでアメリカの最新の医療技術による治療を施されたことだった。彼は九死に一生を得て、右脚の再手術をうけた。

それから彼はあたえられた義足の訓練をうけたのち、キャンプに収容され、そこで終戦までの日々を過ごした。

キャンプでの生活は決して快適なものではなかったが、さほどに辛くもなかった。

報道班員であることと、多少英語ができたことで、彼は米軍の通訳のような仕事に就き、なにかにつけほかの捕虜たちよりはいくらかましな環境で暮らすことができた。

そして、終戦の年の十一月、彼は故郷にもどった。

そのころには、すっかり義足の扱いにも慣れていた。

新聞社の村上社長と武田編集長——彼は、専務に昇格していた——が、彼を迎えてくれた。

愕いたことに、狩野の約束どおり、海軍は彼に莫大な報奨金を支払ってくれていた。その金は、村上が預かり、管理してくれていた。

母親と叔父が終戦間際の空襲によって焼夷弾に焼かれて死んだことを、村上から聴かされた。どうとう感慨はわかかなかったが、彼らの死により、父親の遺産——わずかだが叔父のそれも——がそっくり諏訪のものになった——海軍の報奨金とその遺産で、諏訪は戦後も経済改革もどうにか乗りきることができた——。

なんだか、双六であちこちを賽の目まかせに転々とさせられたあげく、ふりだしにまたもどった気がした。山室退役将軍は、昭和十九年の夏に病死していた。

脳溢血だったという。自宅の応接室で面談中、ソファに倒れてそれきりになったそうだ。おそらくあの老人は、戦局を憂え、絶望を抱えこんだまま憤然として死んだのだろう。

どういいうわけか、遺言によって、諏訪にあのステッキがあたえられた。

片脚の不自由な諏訪にとつて、それは有り難い贈り物になった。

伊一二六七の行方は、ついにわからなかった。

もちろん、諏訪も入手できるかぎりの記録や資料を懸命に調べあげたが、第三次ソロモン海戦の陽動作

戦に参加し、そこで消息を絶つたただけしか判明しなかった。沈没したとは、どこにも書かれていなかった。ただ、伊一二六七は南の海に消えた。

諏訪にわかったのは、それだけだった。彼らの死を、まだ諏訪は信じていない。

彼らは、プロの戦士たちなのだ。たとえ負けるとわかっていても、彼らはみずからの職責に全力を尽くすことだけを貫いて闘いつづけていた。思想も主義も、戦争の善悪さえ、彼らには関係がなかった。

ただ、あたえられた責任を果たすという、その狭苦しい空間にだけ、あえて己が棲み暮らす天地を限定して、彼らは闘いつづけたのだ。そんなプロが、簡単に死ぬはずがない。

諏訪は、信じている。

いつか、中原や植草が、笑いながら彼を温泉旅行に誘いに来てくれることを――。

ふたりのうしろでは、きつと狩野や檜垣がすこし照れ臭そうな顔で俯いているだろう。

その日は、まちがいなくやってくる。

諏訪はベッドのうえで、もう一度溜息をついた。

あの戦争は、なんだったのだろう――。

永遠に応えない質問を、あらためて己に投げかけた。

冬の風が、窓ガラスを振るわせて拭きけていく。

あのグリワフーの入り江で、彼の身替わりのようにして死んだ若い兵士の顔を、諏訪はまだ想い出せない。